

ネオ・ボンゴレ I 世も
異世界から来るように
すよ？

妖刀終焉

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

虹の代理戦争からしばらくして平和？な日々を送っていたツナにある手紙が届く。その手紙は異世界への招待状だった。

目次

YES!ウサギが呼びました

箱庭来る! | 1

ノーネーム来る! | 17

白夜又来る! | 28

昔話来る! | 48

対決と再会来る! | 64

ペルセウス来る! | 78

ギフトゲーム来る! | 92

X BURNER来る! | 106

あら、魔王襲来のお知らせ?

火龍誕生祭来る! | 117

生命の炎と造物主の決闘来る!

129

ハーメルンの笛吹き来る! | 143

ツナの本質来る! | 156

黒死蝶来る! | 169

太陽と大空来る! | 182

ボンゴレサイド来る! | 198

そう・・・巨龍召喚

収穫祭来る! | 206

アンダーウッド来る! | 221

巨人来る! | 233

フェイス・レス来る! | 245

十三番目の太陽を撃て

巨龍来る! | 256

砕かれた星座来る！

268

激しき雷電来る！

280

十三番目の太陽来る！

293

四人の勇者来る！

305

短編集

322

降臨、蒼海の覇者

ひとときの休息来る！

335

蛟劉来る！

350

ヒツポカンプの騎手来る！

363

覆海大聖来る！

375

問題児たちが並盛に行くそうですよ？

問題児たちが並盛を観光するようです

よ？

389

正体不明と孤高の浮雲が激突するそう

ですよ？

403

初日が終わりを告げるそうですよ？

418

問題児たちが雨と嵐の話聞くそうで

すよ？

430

問題児たちが未知と遭遇するそうです

よ？

443

YES！ウサギが呼びました

箱庭来る！

虹の代理戦争からしばらくして少年、沢田綱吉ことツナはまた仲間達や家庭教師のリボンとともにハチャメチャな日々を過ごしていた。ただでさえハチャメチャな日々がシモンファミリーが並中に来たことでさらにその規模が広まっている。

「っ、疲れた〜」

「相変わらずなさげねえぞ。そんなことでネオボンゴレイ世になれると思ってるのか？」

「だからマフィアになんかならないって何回言わせ……イテッ！」

ツナは家に帰るなり玄関にへたり込む。そしてその横を歩いていた赤ん坊、リボンはツナの疲れきった顔を軽く蹴飛ばした。今日も日がなりボンの妙な特訓につき合わされ、友人の獄寺隼人や山本武、それにシモンの古里炎真が付き合いそれを風紀委員の雲雀恭弥や肅清委員の鈴木アードルハイトに目をつけられるといった一連の騒動が起こつて、本日も帰りが遅くなった。

この少年は少し前まで見た目人畜無害で何をやってもダメなごく普通の中学生だつ

た。しかし突然現れたその赤ん坊によつて格式ある大マファイアであるボンゴレファミリーのボス候補であることを告げられて立派なボンゴレX世デーヂモになるように育て上げると宣言されてしまったのだ。彼もそれを頑なに拒み続け、やつとりボーンを諦めさせることができたかと思えば今度は名前を変えてネオ・ボンゴレイ世になるようにと九代目の許可をもらい、戻つてきてしまったのだった。

ツナは自分の部屋に行く途中に牛の格好をしたアホそうな子ども、ランボと中華服を着た子ども、イーピンが喧嘩しているのを止めてまた疲れる。部屋のベッドに大の字に寝転がった。リボーンは座り込んで自分の銃の手入れをしている。

『ツつくーん！ ぐはんできたわよー！』

「はーいー！」

下から彼の母沢田奈々の声がドア越しに響く。しかしツナは疲れきつていて今は眠りたかった。

「先行つてるぞ」

「わかった……」

そう言つてリボーンは小さい身体で器用にドアを開けて出て行つた。

ツナはダルそうに上体を起こすと部屋を見回す。小さなハンモック（リボーン用）といい立てかけられた銃（リボーンの私物）といい約3分の1は自分の部屋をリボーンに

侵食されてることを再確認して溜息をついた。そして次に目についた手紙。

「何だろ？ 母さんがおいてったのかな？」

今時珍しいキャンドルの蠟で止められている手紙で、表にも裏にも差出人の名前さえ書かれていない。誰かのいたずらだと思いついて捨てようとしたが、以前炎真の手紙に気がつかなかつたせいでシモンファミリーの暴走が起つたことを思い出し、慌てて開封した（そのことは事件の後炎真に聞いて謝つた）。もしこの場にリボンがいたら「少しは警戒しやがれダメツナ」と蹴りを入れてられてもおかしくない。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能を試すことを望むならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの“箱庭”に來られたし』……何だこれ？ 炎真君じゃないよな……かといって九代目でもないだろうし」

あとでリボンにでも聞いてみようと思つた瞬間に辺り一面にまばゆい光が立ち込め、次の瞬間にはツナは自分の持つていた鞆ごと部屋から消えていた。



「んな————！！？」

透き通るように青い大空の下を空中落下していることに気がついたツナは絶叫し恐

怖のあまり涙を流す。彼は基本へたれだ。ジェットコースターやフリーフォールのような絶叫マシンは自分から乗ろうとしないしバンジージャンプなんてもつてのほか。

「ひいひいひいひいひい!!」

周りには他にも誰かいる気がしたがそんなことに構っていられなかった。とにかく怖い。未来に言った時さえ急に空中に放りだされはしなかったし。しかし棺桶の中からのスタートはそれはそれで薄気味悪さがあった。

いつまでも紐なしバンジーが続くわけでもなくツナは真下にあつた湖に不時着する。普通なら水面に激突してバラバラになつて死ぬだろうが、それは幾重にもある緩衝材のような薄い水膜ために防がれた。

他三人は問題ないだろうが、ツナにはここで新しい問題が発生した。彼は泳げないのだ。

「お、溺れる! 死ぬ! 死んじゃう!」

あつぷあつぷとパニックになつた状態でめちやくちやに手足をバタつかせて必死で溺れまいと水面から口を出す。それを同じく溺れていた猫を引つ張りあげている飼主の少女がその様子を不思議そうに観察していた。

助けてやれよ。

「足……つ……つ……」

「えっ!? ……あつ」

手を出そうとしなかった理由はそれらしい。

湖は思ったほど深くなく、ツナの身長でも十分足がついた。

(は、恥ずかしー……!!)

ツナの顔は羞恥心で真っ赤になっている。初対面の女の子(しかも普通に可愛い)相手に情けない格好を見せたことがその恥ずかしさを一層強くしている。

「し、信じられないわ!まさか問答無用で引きずり込んだ挙句に、空に放り出すなんて!」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

ツナや先程の少女以外にも空中落下していた人物がいたようだった。長髪でどこか高飛車そうな少女と金髪で学ランを着た所謂不良っぽさのある少年。二人は今の状況に悪態をついている。

(金髪の人は初めて会ったところの獄寺くんに似てるな。それとあの女の子は……ちよつとビアンキっぽい。それでさっき助けてくれた子はクロームみたいかな?)

ツナは近くにいる状況を同じくする少年少女を自分の知り合いに当てはめてみた。

「うわ、制服がびしょびしょだよ……」

「ホントよ! この服お気に入りだったのに!」

全員服を絞って水を出す。火がないから乾くのに時間がかかりそうだ。

(死ぬ気の炎で服乾かないかな? ……そうだ! バッグの中身!)

中の教科書類はほとんど学校に置いてきているのが幸いして思いのほかダメージは少なかった。リボーンに肌身離さず持つとけと言われていた死ぬ気丸、X^{イクス}グロープ、ヘッドホン、コンタクトディスプレイも濡れているが問題はなさそうだ。そもそもスパナは水中戦も考慮してつくっているから防水機能もついていて当たり前なのだが、そのことを確認してツナは安堵する。首にかかっているリングもあるからとりあえず戦闘面での心配はなさそうだ。

「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が?」
「そうだけど、まずは『オマエ』って呼び方を訂正して。私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて」

ツナが鞆を漁っていたら、いつの間にか自己紹介の方向に話が進んでいる。

「それで、その猫を抱きかかえている貴方は?」

「……春日部耀。以下同文」

(春日部さんっていうんだ。後でお礼言っておこう)

「そう。よろしく春日部さん。それで野蛮で凶暴そうなのその貴方は?」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蠻で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

とりあえずこの逆廻十六夜という少年と久遠飛鳥という少女の相性は悪そうだというのをツナは理解した。

「それで、そのナヨナヨして平凡そうなその貴方は？」

「いきなりえらい言われようだー……え、えつと沢田綱吉です」

（綱吉……徳川の將軍と同じ名前ね。……名前負けしてるわね）

（なかなかさけなさそうなツラしてんな。何か隠してんのか？）

（ツナ缶……そういえばここに猫の餌つてあるかな？）

他三人のツナの評価はえらく低かった。うち一人は他のこと考えている始末。それもその筈、彼は今までみんなからダメツナと渾名をつけられている程のダメツナぶりなのだから。

「で、呼び出されたいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だと招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

「ええ、そうよね。何の説明もないままでは動きようがないもの」

（オレはとりあえず帰りたいんですけど……！　　というか何でこの人たち全然動じ

てないの!?)

ツナは帰って寝たかった。奈々や父親の家光にも何も言わずにここへ来てしまったし、友人達もツナがいなくなったことを知れば必死になって探すだろう。しかしこの二人を前にして下手なことは言えない。もう一人も我関せず状態でビビリなツナでは積極的に話そうという気になかなかない。

そしてこの手の妙な現象に多く遭遇してある程度耐性のあるツナはともかくこの三人の冷静さはツナから見ても異常だった。未来に連れてこられた京子やハルでさえ終始不安だらけであつたし。

「——仕方ねえな。こうなつたらそこに隠れているやつにでも話を聞くか?」

(え? あつ!!)

突然の十六夜の発言にツナは戸惑つた。そして彼の超直感が働き、この場にもう一人何者かが隠れていることを察知する。

「なんだ? 貴方も気づいてたの?」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだったんだぜ? そつちの二人も気づいてたんだろ?」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「気がついたのはついさつきだけどあそこに……」

ツナが指を差した先の草陰からウサギの耳がはみ出しているのが一瞬だけ見えた。「や、やだなあ、そんな怖い顔で見られると——」

「ようし、出てこないんじゃないや仕方がねえ」

物陰に隠れていたウサミミをつけている女性がおずおずと出てこようとした瞬間、逆廻十六夜が明らかに普通ではない脚力で跳躍した。そして女性のすぐ近くの地面が彼の跳び蹴りよつて思いつきり抉れる。

「マジで————!!?」

「なにあれ?」

「コスプレ?」

（ツツコむとこそつち!?)

ツナ以外の女二人はただの跳び蹴りで地面を抉ったことよりウサミミをつけた女性が見れたことに注目している。

「違います、黒ウサギはコスプレなどでは——!?!」

黒ウサギと名乗った少女が抗弁しようとするも十六夜がまたも人並み外れた威力の蹴りをお見舞いし、それをバック転で回避する。どちらも超人レベルの技の応酬だ。

そこに春日部耀が加わり猫のような動きで辺りをピョンピョン跳びまわる黒ウサギを追跡。この中では一番まともそうかと思いきやこの子も充分異常だった。

(そういえばラル・ミルチにいきなり襲われた時のことを思い出すな)

あの時は何もわからずいきなり襲撃されて、その後現状を知ったのだった。

——と、そんな感じでツナが現実逃避していると久遠飛鳥にも動きがあった。

「鳥たちよ、彼女の動きを封じなさい!」

彼女の命令に従うかのように無数の鳥たちが黒ウサギを取り囲み動くのを阻止。その誠実さはまるで死ぬ気の炎を注入された匣ボックスアニマルのようであった。跳んでいた黒ウサギはいつまでも滞空していることはできずに地面に尻餅をついた。

そしてツナを除く三人にあえなく囲まれてしまう。

(あの人なら元の世界に帰る方法知って……るといいな)



「——あ、あり得ないのですよ、学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに間違いないのデス」

「いいからさっさと話せ」

(鬼がいる! この人たち鬼畜過ぎだろ——!)

黒ウサギはツナ以外の三人に寄ってたかつて虐められている。ウサギ耳を引っ張ら

れて半泣き状態の黒ウサギ。それでも何とか気を取り直したのか咳払いをして手を広げ高らかに宣言した。

「ようこそ、”箱庭の世界”へ！我々は貴方がたにギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと思ひまして、この世界にご招待いたしました！」

(ギフトゲーム？ 『チヨイス』みたいなものかな？)

ツナは白蘭と7・^{トウリニセツテ}を賭けて戦ったゲームのことを真つ先に思い浮かべた。

「ギフトゲーム？」

「そうです！ 既にお気づきかもしれませんが、貴方がたは皆、普通の人間ではありませんせんー！」

(それオレも含まれてんの!?)

ツナ自身は自分を人外扱いされることには心外であるが、すでに人外レベルの相手に何度も一対一で戦い、勝ち残っているので普段はダメでも死ぬ気になればツナの戦闘力も充分人外レベルだったりするのだ。

「皆様の持つその特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその恩恵を駆使して、あるいは賭けて競いあうゲームのこと。この箱庭の世界はその為のステージとして造られたものなのですよ！」

（恩恵ってことはみんな何かの才能とか能力を持つてるんだ。才能……才能……アレ？何か悲しくなってきたー……）

彼は悲しいほどに何かをすることへの才能がないことに思い当たる。今までのことは全て自分が死ぬ気にならなければできなかったことばかり。

「恩恵——つまり自分の力を賭けなければいけないの？」

ツナが落ち込んでいる間にも飛鳥が黒ウサギへと質問をする。黒ウサギの言ったことが本当であれば飛鳥の能力は「おそらく『生き物を操る能力』といったところだろうか。残りの二人は身体能力が優れているくらいでまだ不明瞭な点が多い。

「そうとは限りません。ゲームのチップは様々です。ギフト、金品、土地、利権、名譽、人間。賭けるチップの価値が高ければ高いほど、得られる賞品の価値も高くなるというものです。ですが当然、賞品を手に入れるためには、主催者^{ホスト}の提示した条件をクリアし、ゲームに勝利しなければなりません」

「……」主催者^{ホスト}、つて何？」

今度は耀が黒ウサギへと質問した。

ここでツナは帰る方法を聞きだすチャンスをもた一度逃してしまったことに今更気がついた。

「様々ですね。暇を持って余した修羅神仏から、商店街のご主人まで。それに合わせて

ゲームのレベルも、命懸けの凶悪、難解なものから福引き的なもので、多種多様に揃っているのをごいいますよ！」

ツナはとりあえず説明が全部終わってからも遅くはないと自分に慰めの言葉をかけて気を取り直した。

「話を聞いただけではわからないことも多いでしょう、なのでここで簡単なゲームをしませんか？」

（あれ？）

てつきり「他に何か質問はございませんか？」と聞いてくれるものだと思って待っていたらおかしな方向に話が進んでいる。

「この世界にはコミュニティというものが存在します」

どこからともなく取り出したトランプをシャッフルしながらも、黒ウサギは説明を続ける。

「この世界の住人は必ずどこかのコミュニティに所属しなければなりません。いえ、所属しなければ生きていくことさえ困難と言っても過言ではないのです！」

力説する黒ウサギがパチンと指を鳴らすと、宙に突然カードテーブルが現れ、ドサリと地面に着地する。

「みなさんを黒ウサギの所属するコミュニティに入れてさしあげても構わないのです

が、ギフトゲームに勝てないような人材では困るのです。ええ、まったく本当に困るのです、むしろお荷物・邪魔者・足手まといなのです!」

この言葉にツナは内心グサツときたと同時に歓喜した。別に自分がここにいる必要はないのだと、別に帰ってくれても構わないのだから。

「あ、じゃあ元の世界に帰してください!」

「え、!?!」

ツナの挙手と同時に放った帰宅願望の言葉に黒ウサギはフリーズした。

(え、ちよ! 計算外です。ここでいきなり怖気づく方がこの問題児の中にいらつしやるとは! 一応強いギフト持ちたちに手紙を出したからあの方もかなり強い……答です。あんまりそうは見えませんが。でもここで帰してしまつたら黒ウサギの計画がパーに……うーん)

変な声を出してしまった以外は平静を装っている黒ウサギも内心は冷や汗だらだらで心臓がバクバクなっている。ギフト持ちのほとんどはプライド高そうなやつら多いから煽っておけば乗ってくるだろうと考えていたから帰る気満々のツナのことは予想外であった。

「仕方ありません。この方についてはちよつと予定を変更して)ちよつとこつちへ」

「あ、」

黒ウサギはツナの手を引いて他三人から少し離れる。

「あのー?」

「あ、はい聞こえてますよ! そうですか、帰りたいたいんですか。でもせつかくここまで来たのですから少し遊んでから帰るっていうのもいいんじゃないでしょうか?」

「え? でもさつき足手まといになるからいらないつて……」

「またまたご謙遜を! ここに着たつてことはそれだけ実力があるつてことじゃないですか!」

黒ウサギは作戦変更しおだてて引き止めることにした。しかしそれが反つてツナの不信感を煽る。そしてツナも黒ウサギがツナたちを帰したくないのだとなんとなく理解した。

「あのー。もしかしてオレたちをここに呼んだのには何か理由があるんじゃない?」

「いや……それはその……」

「話してみてくださいませんか? もしかしたらオレでも力になれるかもしれないし」

チキンだけでも大がつく程のお人好し。そして全てを包み込む大空である彼は目の前で困っている人は見捨てられないのだ。さつきまでのオドオドした態度が一変して真剣な表情で黒ウサギを見つめている。

そんなツナの表情に気圧されたのか、黒ウサギは彼にならと全てを打ち明けたのだつ

ノーネーム来る！

黒ウサギかの口から伝えられた事実。それは自分が所属しているコミュニティを助けて欲しいとのこと。

以前の彼女のコミュニティは東区画でも最大手のコミュニティだったが、3年前に敗北したことでコミュニティを存続させるのに必要な人もコミュニティの名も旗も奪われ”ノーネーム”となつてしまった。

「それでオレたちを」

「はい、貴方がやるきになつた辺りで全てを話して協力してもらおうかと思つたのですが……」

彼女も永遠に皆を騙し続けるつもりはなかつたらしい。そもそもノーネームに所属する以上騙し続けることなど不可能なのだから。

「えっと、ずつといなきやいけないわけじゃないんだよね？」

「はいっ！ それは勿論です」

「ならずつとは無理だけど、オレも力を貸すよ」

「本当ですか!?!」

ツナの言葉に黒ウサギはペアつと笑顔になりツナの手を握る。ツナは恥ずかしくなり顔を背けた。黒ウサギは可愛くてスタイルもよく直視できなかつた。

「皆にもこのことは説明したほうがいいんじゃないかな」

「ですが……いえ、そうですね。力を貸してもらうのですから騙すのはよくありませんよね」

とツナの意見もあり、黒ウサギは考えた末に残りの三人にも事情を話そうとしたのだが……

「もう一人いませんでしたっけ？ ちょっとと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から『俺問題児』ってオーラを放っている殿方が」

そう、いつの間にやら逆廻十六夜の姿が忽然と消えているのだ。

「ああ、十六夜君のこと？ 彼なら「ちょっと世界の果てを見てくるぜ！」と言って駆け出していったわ。あっちの方に」

と飛鳥があっさりと言差すのは上空4000メートルから見えた断崖絶壁。遠すぎて先が見えない。

「な、なんで止めてくれなかつたんですか!」

「止めてくれるなよ」と言われたもの」

「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかつたのですか!?!」

「黒ウサギには言うなよ」と言われたから」

「嘘です、絶対嘘です！ 実は面倒くさかっただけでしよう皆さん！」

「うん」

（チームワーク力皆無だこの人たち!! いやある意味チームワーク発揮しているけど）

黒ウサギはツナはともかく残り三人が信用できるか怪しくなってきた。自分から一歩歩み寄ろうとした傍から既に問題が起こつたし。

（ああできれば捕まえて”箱庭の貴族”と謳われたこのウサギを馬鹿にしたことを骨の髄まで後悔させたいですけど残り二人も勝手な行動をとる可能性があります。かといつてツナさんに見張らせておくのも不安が残りますし）

黒ウサギは負のオーラを纏いながらブツブツと呪詛のそんな言葉を呟いている。そして黒ウサギはツナの人柄は信用しても統率力までは期待していなかった様子。

「じゃあ黒ウサギはここで二人を見てて、オレが向こうを見てくるから」

その言葉に黒ウサギは驚愕し、残り二人は感心した。

「向こうにある”世界の果て”にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣がいて人間では到底勝てないような」

「大丈夫……」

ツナは手袋をはめ、ケースから丸薬、死ぬ気丸を取り出して飲んだ。

「すぐに戻ってくる」

ツナの額にオレンジ色の炎が灯り両手についた手袋は一瞬光ったと思えば金属が埋め込まれたグローブへと変化している。さっきまでのおっとりした顔つきもキリっとしてまるで別人だ。

(え、誰?)

(綺麗な炎)

(……すごいです)

この場にいる皆が驚いているが一番驚いているのは黒ウサギだ。

「沢田さん……なんですよね?」

「ああ、行ってくる」

グローブに炎が灯り、それがジェット噴射のように吹き出してもものすごいスピードで飛んで行ってしまった。

「空……飛びましたよね?」

「うん」

「何者なんでしょう?」

「さあ?」

ツナの豹変振りと彼の能力キョウトの一端を見た彼女たちは啞然としてツナの飛んでいった

空を見上げるばかりであった。



ツナが空を飛んでいると前方で間欠泉のごとく水しぶきが上がっている。まさかと思つてそこへ行つてみるとこれ幸いにと逆廻十六夜がいた。

炎の轟音に気がついた十六夜がツナの方を向く。

「…………お前、沢田か？」

「ああ、お前を連れ戻しにきた」

「へえー、それがお前のギフトつてやつか？」

「さあな」

(性格変わりすぎだろ!! 二重人格か?)

死ぬ気モードでもハイパー死ぬ気モードでも本質が変わるわけではないから二重人格というのは少し違う。

「早く帰るぞ、黒ウサギが待ってる」

「ちよーつと待つてくれ。このギフトゲームが終わつたらな……」

『まだ…………まだ試練は終わっていないぞ、小僧共オ!』

水の中から怒り狂った巨大な蛇が出てきた。全身が白く首の辺りに縄が巻きついて
いる異様な装飾が施してある。角も生えていて龍に見えなくもない。

「……あれは何だ？」

「なんか偉そうに『試練を選べ』とかなんとかか、上から目線で素敵なこと言ってくれたか
らよ。俺を試せるのか試させてもらったのさ。結果は、まあ残念なヤツだったけどな」

彼はどうやらこの蛇に気まぐれで喧嘩を売ったらしい。その上蛇を怒らせるほど痛
めつけていると見える。

「手助けはいるか？」

「いらねえ。お前の実力も見てみたいけどお楽しみはまた今度だ。それに……」

『貴様……付け上がるなよ人間風情が！ 我がこの程度のことです倒れるものか!!』

蛇の唸りに応えて蛇神の周囲の水が数百トンほど巻き上げられ、それが独立した生
物のように竜巻の形を取る。怒りのあまり人間風情とやたらに本気を出してきたようだ。

「これは俺が売って、奴が買った喧嘩だ。勝手に手え出したらお前から潰すぞ」

ニヤリと笑ってそう答える。ツナもそれを理解し一歩引いた。

『心意気は買ってやる。それに免じ、この一撃を凌げば貴様の勝利を認めてやる』

「寝言は寝て言え。決闘は勝者が決まって終わるんじゃない。敗者を決めて終わるんだ

よ」

『フン——その戯言が貴様の最期だ!』

竜巻はどんどん肥大化していき周囲を破壊しながら十六夜へと襲いかかる。不用意に身体を近づけようものなら確実に身体がバラバラになつてしまふだろう。

「——ハッ————しゃらくせえ!」

しかし彼にしてみれば大した事はなかったらしい。襲いかかってきた竜巻をそれを上回る拳の一撃で消し去ってしまったのだ。

そのまま十六夜が蛇の顔に一撃を見舞い、水面に倒れこむ。十六夜の初めてのギフトゲームは彼の完全勝利となった。

「何て出鱈目な……」

「黒ウサギ?」

ツナが振り返ると髪がピンク色に変わっているがそこに黒ウサギがいた。待っていると云つてた筈だが、残り二人はどうしたのだろうか。

「あの二人は速攻でコミュニティに送つてきました。今はジン坊ちゃん……ああ、コミュニティのリーダーの方なんですけど、その人に任せています。で、何で水神が気絶してるんですか?」

「十六夜が倒した。オレが証人だ」

「マジでございますか!? 二人がかりならまだしも十六夜さん一人で!」

「ああ」

あの蛇はどうやらかなり強い神で普通なら人間では倒せないレベルだったのだろう。だから黒ウサギはあれほど驚いている。

ツナは白蘭の使役している龍の方が厄介そうだったと心の片隅で思った。

「……ま、まあそれはともかく! ゲームに勝利した以上そちらの水神様からギフトを頂くとしましょう!」

「あ?」

十六夜も黒ウサギが来ていたことに気がついたようだ。

ツナは戦いが終わったことで死ぬ気モードを解く。

(やっぱ変わりすぎだろ(です)!!)

二人は死ぬ気モードのツナと普段のツナの落差を見てやはり衝撃を受けた。

「なにせ水神様本人を倒しましたからね。きつとすごいギフトを頂きますよー!」

黒ウサギは水神との交渉の末に『水樹の苗』という木の苗を手に入れていた。水源を確保できたとしても喜んでいいる。ノーネームになってしまい水の確保すらも難しくなってしまったのだろう。

ギフトを手に入れて浮かれている黒ウサギに十六夜は『何故自分たちを呼んだのか』

という疑問をぶつける。十六夜もツナが帰りたいたって慌てている黒ウサギを見て黒ウサギのコミユニティが切羽詰っているというのをなんとなく予想していたようだ。

黒ウサギは十六夜にもツナと同じことを説明。利用しようとしてきたことと怒るかと思いきや意外にも十六夜はコミユニティ復興の話に乗ってきた。

「沢田さんの言ったとおり、誠意を伝えれば協力してくれるんですね」

十六夜が協力するのは誠意が伝わったというのとは少し違うが。

「いや、オレはまだ何もしてないし。それと『ツナ』って呼んでくれない？ 元の世界でも皆からそう呼ばれてたからなんかむず痒いんだ。逆廻君も」

「へー、友達いんのか」

「いるよー」

その後三人は黒ウサギのガイドで世界の果てを少し（十六夜があっちへふらふらこっちへふらふらしたから厳密には少しじゃない）観光しながら東区画の都市へと向かった。



結論から言うと、残り二人も借りてきた猫のように大人しくしているわけがなかつ

た。二人とも十六夜に負けず劣らずの問題児だということを再確認できただけでも良かったのかも知れない。

「フオ、”フォレス・ガロ”とゲームをするー！? 何でそんなことになってるんですか!?”

「腹が立ったから後先考えずに喧嘩を売った。反省も後悔もしていない」

(犯罪者より性質悪い言い訳だー！?!! しかも反省しないの!?)

無表情で弁解をした二人を黒ウサギは何処からか取り出したハリセンで叩く。

黒ウサギが十六夜とツナを迎えに行っている間に”フォレス・ガロ”というコミュニティのリーダーに絡まれてそのまま喧嘩になり、飛鳥がギフトゲームで決着をつけようと提案してしまっただけらしい。

契約書類には『参加者が勝利した場合、主催者は参加者の言及する全ての罪を認め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミュニティを解散する』とある。つまり負けたらノーネームはなくなってしまうのだ。

(いきなり大ピンチなんですけどー！?!!)

ツナは黒ウサギのことがだんだん不憫に思えてきた。コミュニティ以外の意味で。

黒ウサギはフウ太と同じか少し年上くらいの少年と話している。彼がノーネームのリーダーであるジン・ラッセルだ。

「僕もガルドを逃がしたくないと思っている。彼のような悪人は野放しにしちゃいけない」

(まだ子どもなのにすごいな)

彼は幼いながらもそれなりの貫禄を持っている。ユニもジツリヨネロファミリーをあの年齢でまとめているが、やはりカリスマと信頼がなければ難しいのだろう。

「はあく……。仕方ない人達です。まあいいです。腹立たしいのは黒ウサギも同じですし。」フォレス・ガロ”程度なら十六夜さんかつナさんのどちらか一人いれば楽勝でしょう」

「何言ってるんだよ。俺は参加しねえよ」

十六夜には彼なりの美学というものがあるらしい。自分が売った、もしくは買った喧嘩には手を出させないし、他人が売った、もしくは買った喧嘩に手を出すつもりはないらしい。

「わかつてるじゃない。沢田、貴方も当然、不参加決定よ」

「勝手に決められたー！ー!?」

「ああもう、好きにしてください」

黒ウサギは半分やけくそでそれを許可した。彼女の胃に穴が空く日は近いかもしれない。

白夜又来る!

”サウザンドアイズ?”」

「YES。”サウザンドアイズ”は特殊な”瞳”のギフトを持つ者達の群体コミュニティ。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸いこの近くに支店がありますし」

「ギフトを鑑定すると何かメリットがあるのか?」

「自分の力の正しい形を把握していた方が、引き出せる力はより大きくなります。皆さんも自分の力の出所は気になるでしょう?」

同意を求める黒ウサギに、十六夜・飛鳥・耀の三人は複雑な表情で返し、自分の能力について嫌というほど知っているツナは軽く頷いた。それくらいのことであれば大きな戦いの前の修行でよくやっていたからツナにとっては慣れっことも言える。

問題児+ α と黒ウサギの一行は各々のギフトを鑑定すべく町並みを歩く。中世ヨーロッパのような町並みを黒ウサギを除いた全員が興味深そうに眺めていた。

周りに舞っている桜のような花びらを見て飛鳥が呟いた何気ない一言から皆が全員違う時間軸、もしくは違う世界からここへ来たことを黒ウサギに説明された。

(白蘭がこの世界にいませんように白蘭がこの世界にいませんように白蘭がこの世界にいませんように！)

ツナがパラレルワールドという単語を真つ先に聞いて思い浮かんだかつての敵。彼は自分の能力、『パラレルワールドの自分と記憶と情報を共有する』でほとんどのパラレルワールドを征服してしまったのだ。そして仕方がなかったとはいえずツナが初めて殺しをしてしまった相手でもある。虹の代理戦争で共闘はしたものの苦手なことに変わりはしない。

説明もそこそこにして黒ウサギは振り返る。目先にあるのは歴史のありそうな和風の建物。かかっている紫色の旗には互いが向かい合う二人の女神像が記されている。

店の前では、看板を下げる割烹着の女性店員の姿があつて、黒ウサギは慌ててストツプを、

「まっ」

「待った無しです御客様。うちは時間外営業はやっていません」

(取り付くしまもねー！)

ストツプをかける前にピシヤリと断られてしまう。黒ウサギが店員を悔しそうに睨みつけて飛鳥も文句を言い放った。

しかし二人がギャーギャー騒ごうごうとも店員は動じることはない。

「なるほど、”箱庭の貴族”であるウサギのお客様を無下にするのは失礼ですね。中で入店許可を伺いますので、コミュニケーションの名前をよろしいでしょうか?」

「……………」

一転して言葉に詰まる黒ウサギ。しかし十六夜は何の躊躇いもなく名乗る。

「俺たちは”ノーネーム”ってコミュニケーションなんだが」

(黒ウサギが渋ってたのにあつさり名乗った……!!)

十六夜はノーネームの威光の無さを知ってかし知らずかあつさりと名乗ってしまった。黒ウサギはだから名乗りを渋っていたのだというのに。黒ウサギから詳しい説明は無かったものの、弱小であったシモンファミリーが他のマフィアから受けていた扱いを思い出してなんとなく理解はしていた。

「ほほう。ではどこの”ノーネーム”様でしょう。よかったら旗印を確認させていただきます。いてもよろしいでしょうか」

十六夜たちは知る由もなかったが”サウザンドアイズ”の商店は”ノーネーム”の入店を断っている。

全員の視線が黒ウサギに集中する。

彼女は心の底から悔しそうな顔をして、小声で呟いた。

「その……………あの……………私たちに、旗はありま……いいいいやほおおおお!久しぶりだ黒ウサ

「ギイイイ！」きやあー！

店の中から爆走してきた着物風の服をした真っ白い髪の少女に勢いよく抱きつかれて黒ウサギは少女もろとも道の向こうにある浅い水路まで吹き飛び、ボチャン、と転がり落ちた。

「ちよ、ちよつと大丈夫?!」

ツナは慌てて黒ウサギに声をかける。

フライングボディーアタックで黒ウサギを強襲した白い髪の幼い少女は、黒ウサギの胸に顔を埋めてなすり付けていた。

「し、白夜叉様!? どうして貴女がこんな下層に!」

この少女は白夜叉というらしい。

「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからに決まっておるだろに! フフ、フホホフホホ! やっぱりウサギは触り心地が違うのう! ほれ、ここが良いかここが良いか!」

見た目女の子だが中身はエロ親父だった。

「し、白夜叉様! ちよ、ちよつと離れてください! とうかツナさんしかこないってどういうことですか!」

「ほ、ほら離れて!」

ツナは白夜叉を引き剥がそうとするがなかなか力が強い。

「むむむ、私と黒ウサギの至福の時間を邪魔するとは一体何処のどいつ……」

「だから離れてくださいって……白夜叉様?」

白夜叉はツナの顔を見た途端、まるで時間が止まったかのようにツナを見つめている。

「あの一、白夜叉様?」

「えっと、オレがどうかしましたか?」

「……はっ! ああいや何でもない。……そんなこと、ある筈ないだろうに」

最後の小さく付け加えた寂しそうな言葉はツナに聞き取ることとはできなかつた。

一連の流れの中で呆気にと取られていた飛鳥は、思い出したように白夜叉と呼ばれていた少女に話しかけた。

「貴女はこの店の人?」

「おお、そうだと。この“サウザンドアイズ”の幹部様で白夜叉さまだよご令嬢。仕事の依頼ならおんしのその年齢のわりに発育がいい胸をワンタッチ生揉みで引き受けるぞ」

「オーナー。それでは売り上げが伸びません。ボスが怒ります」

どこまでも冷静な声で女性店員が釘を刺す。

注意するのならセクハラの方だろうとツナは心の中でツッコんだ。この世界の住人も問題児達と同じでどこかズレている者が多い。もしかしたら黒ウサギのような常識人は貴重なのかもしれない。



女性店員の批判もあつたが白夜叉が責任を負うと豪語して5人は店へと通される。

「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」

通された白夜叉の部屋は香のような物が焚かれており、風と共に五人の鼻をくすぐる。刀や掛け軸、そして花が飾ってありこれでもかというほど和が詰め込まれている部屋だ。

個室と言うにはやや広い和室の上座に腰を下ろした白夜叉は、大きく背伸びをしてから五人に向き直った。

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の外門、三三四五外門に本拠を構える”サウザンドアイズ”幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニケーションが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやっている器の大きな美少女と認識しておいてくれ」

「はいはい、お世話になっております本当に」

投げ遣りな言葉で受け流す黒ウサギ。貴重なコネクションなのだからもう少し大切にすべきだろう。

その隣で耀が小首を傾げて問う。

「その外門、って何?」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心に近く、同時に強力な力を持つ者達が住んでいるのです。箱庭の都市は上層から下層まで七つの支配層に分かれており、それに伴ってそれぞれを区切る門には数字が与えられています。ちなみに、白夜又様がおっしゃった三三四五外門などの四桁の外門ともなれば、名のある修羅神仏が割拠する人外魔境と言っても過言ではありません」

「おんしも、恩人に対して言うな」

(行きたくねー!!!)

ツナも協力するとは言ったが人外魔境に行くのは流石に御免だ。

黒ウサギはわかりやすいように紙に上空から見た箱庭の略図を描いた。

それはまるでバームクーヘンだと皆が頷きあい。見も蓋も無い感想に黒ウサギはガクリと肩を落とす。それに対して白夜又はバームクーヘンという例えに面白おかしく笑っている。

「ふふ、うまいこと例えるが、私はバームクーヘンに一票だ。その例えなら今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番皮の薄い部分にあたるな。更に説明するなら、東西南北の四つの区切りの東側にあたり、外門のすぐ外は“世界の果て”と向かい合う場所になる。あそこはコミユニティに属してはいないものの、強力なギフトを持ったもの達が住んでおるぞ——その水樹の持ち主などな」

白夜叉は薄く笑って黒ウサギの持つ水樹の苗に視線を向ける。白夜叉が指すのはトリトニスの滝を棲みかにしていた、十六夜が素手で叩きのめした蛇神のことだろう。

「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか？」

「知り合いも何も、あれに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だがの」
小さな胸を張り、カカと豪快に笑う白夜叉。

「神格……要は神様の資格ってことですか？」

「ちよつと違うが、まあ大体そんなモンじゃな。そういう種を最高のランクに体を変化させるギフト——蛇に神格を与えれば巨躯の蛇神に。鬼に神格を与えれば天地を揺るがす鬼神と化す。更に神格を持つことで他のギフトも強化されるといったカンジだな」

「へー」

ツナの疑問に白夜叉はあつさりと答える。

「あの蛇に神格を与えたつてことは、オマエはあの蛇より強いのか?」

「ふふん、当然だ。私は東側の”階層支配者”^{フロアマスター}だぞ。この東側の四桁以下にあるコミュニケーションでは並ぶ者がいない、最強の主権者だからの」

”最強の主権者”——その言葉に、十六夜・飛鳥・耀の三人は一斉に瞳を輝かせた。ツナは嫌な予感しかしない。超直感を使わずともそれが理解できる。

(この三人白夜又さんに喧嘩売る気満々だー！ー！ー！)

ツナの予感は当たっていた。三人は白夜又相手に闘争心むき出しの目で睨む。白夜又もそれに気がついたようで高笑いをした。

「抜け目ない童達だ。依頼しておきながら、私にギフトゲームで挑むと?」

「え? ちょ、ちよつと御三人様!」

慌てた黒ウサギを白夜又は右手で制する。ツナはこの三人を止めない、というより止めるのは最初から無理だと判断して諦めた。

「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている」

「ノリがいいわね。そういうのは好きよ」

「ふふ、そうか。おんしはどうする?」

白夜又だけでなく全員の目がツナへと集中する。特に黒ウサギにとってツナは最後の砦だけに縋るような目で見ている。

「じゃ、じゃあ見学だけで」

「……なんじゃ、つまらん」

白夜又はツナの実力も測りたかったのか宛が外れたようだ。そして黒ウサギは少しほっとしているもののツナが参加しないだけで何一つ状況は好転していない。

「そうそう、ゲームの前に確認しておく事がある」

「なんだ？」

白夜又は着物の裾から“サウザンドアイズ”の旗印——向かい合う双女神の紋が入ったカードを取り出し、表情を壮絶な笑みに変えて一言、

「おんしらが望むのは”挑戦”か——もしくは、”決闘”か？」



刹那、五人の視界は意味を無くし、脳裏を様々な情景が過ぎる。黄金色の穂波が揺れる草原、白い地平線を覗く丘、森林の湖畔。様々に世界が流転し、五人が投げ出されたのは、白い雪原と湖畔——そして、水平に太陽が廻る世界だった。

(すげい……)

チヨイスの際に使われた死ぬ気の炎の転送装置とも違う、もつとオカルティックなも

のだろう。その場にいる誰もが言葉を失った。

「今一度名乗りなおし、問おうかの。私は『白き夜の魔王』——太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが望むのは、試練への挑戦か？ それとも対等な決闘か？」

格が違う。ツナが真つ先に抱いた感想がそれだ。白夜叉からはチェッカーフェイスと対峙したときと同じくらいの威圧感を感じ取った。そしてそれは喧嘩を売ろうとした三人も身にしみて感じているかもしれない。

(決闘とか言ったら全力で止めよう)

これほど大きなフィールドを自分が持つゲーム盤の一つと言いつつ、そんな相手といきなり戦おうとするほど他三人も無鉄砲ではなかったらしく、そうそうに降参した。

——試されてやると、十六夜のその口調からは全く屈服した態度が見受けられない。今はその時ではないということだろう。他二人も苦虫を噛み潰した顔で悔しげに降参した。

ツナと黒ウサギは心底ホツとした。ギフトゲームは『挑戦』という形で落ち着きそうだ。

ホツとしていたら彼方に見える山脈から甲高い叫び声が聞こえた。その鳥とも獣とも思える叫び声に逸早く反応したのは動物の声を聞くことができる耀だった。

「何、今の鳴き声。初めて聞いた」

「ふむ……あやつか。おんしら四人を試すには打って付けかもしれない」

白夜叉が手招きするとそれに応じてソレはやって来る。

鷲の頭と翼に獅子の身体を持った伝説上の生物、グリフォンだ。体長はざっと5メートルはある。

「グリフォン……うそ、本物?!」

「フン、如何にも。あやつこそ鳥の王にして獣の王。」力知恵勇気の全てを備えたギフトゲームを代表する獣だ」

匣アニマルにも真6弔花の恐竜、デイナーノ天馬、白蘭の龍といたがグリフォンはいなかった。

白夜叉が双女神の紋が入ったカードを取り出す。すると虚空から「主催者権限」のみ許された輝く羊皮紙が現れる。

白夜叉は白い指を奔らせて羊皮紙に記述する。

四人は羊皮紙を覗き込んだ。そこに記されているクリア条件は『グリフォンの背に跨り、湖畔を一舞う。クリア方法、グリフォンに“力知恵勇気”のどれかで認められること』

先程の白夜叉の言葉の真意はこれにあった。

そのゲームに逸早く立候補したのは耀だった。彼女の瞳はグリフォンを羨望の眼差

しで見つめている。乗ってみたいのだろう。

「にや……にや、にやー（お、お嬢……大丈夫か？　なんや獅子の旦那より遥かに怖そうやしデカイけど）」

「大丈夫、問題ない」

さらっと死亡フラグを立てた耀の瞳は真っ直ぐにグリフォンに向いている。

宝物を見つけた子どもみたいな目をしている彼女をみて十六夜と飛鳥は苦笑をもらす。

二人と対称に心配性なツナはやはり不安を拭えない。

「春日部さん、あんまり無理しないでね」

「大丈夫だよ」

耀にも何か策があるのかもしれない。

「あ、そうだ」

ツナは自分が着ている並中のベストを脱いで耀に手渡した。ちなみにこれは普通に売っているものではなくレオンの糸でつくられたもので死ぬ気の炎だけでなく耐熱、耐寒にも優れている。ちなみにリボンが勝手に取り替えたのでツナはこれがレオン製だということを知らない。

「良かったらこれ着てって」

「え、いいの?」

「いや、いいから渡したいんだけど……それと助けてくれたお礼もしたかつたし」

ツナは断固として譲らない。そもそも耀の格好ではこの空間だと辛いというものもある。白夜叉もベスト一枚貸すことにいちやもんをつけるほど度量の狭くはないので何も言つてこない。

最終的には耀の方が折れてツナのベストを着ることになった。

「ありがと、行つてきます」

そして春日部耀の初めてのギフトゲームが始まった。



結果だけを言えば春日部耀は見事グリフォンに認められ、湖畔を舞うことに成功した。一度グリフォンに振り落とされたのを見てツナは冷や汗をかいたが、彼女はそのまま下に落下せず、風を纏つて空に浮くことでゲームを続行。そしてその勇気をグリフォンは認めたのだ。

耀は戻ってくるなりツナに着ていたベストを返した。

「ありがとうツナ。これ、暖かった」

「うん、役に立ってよかったよ」

そしてツナはベストに何も変化が無いことに気がついた。普通なら寒さで服がカチコチになってもおかしくない筈。

(これレオンが作った服だー！ー！！ リボーンのやつ勝手に入れ変えたな!!)

今の今まで気づけなかったツナにも問題がないとはいえない。

「いやはや大したものだ。このゲームはおんしの勝利だの。………とところで、おんしの持つギフトだが。それは先天性か？」

「違う。父さんに貰った木彫りのおかげで話せるようになった」

「木彫り？」

耀は頷きながら丸い木彫りのペンダントを取り出し、白夜叉に渡す。白夜叉は渡された手の平大の木彫りを見つめて、急に顔を顰めた。

ツナたちもペンダントを覗き込む。形状は中心の空白を目指して幾何学線が延びるというもの。

(………なんだろこれ?)

何か意味はあるそうだが持ち主である耀はよく覚えていないらしい。ツナも数学………というより教科ほぼ全般ダメなのでさっぱりだ。

「材質は楠の神木……? 神格は残っていないようですが………この中心を目指す幾何学

線……そして中心に円状の空白……もしかしてお父様の知り合いには生物学者がおられるのでは？」

「うん。私の母さんがそうだった」

「生物学者ってことは、やっぱりこの図形は系統樹を表しているのか白夜叉？」

「おそらくの……ならこの図形はこうで……この円形が収束するのは……いや、これは……これは、凄い！ 本当に凄いぞ娘!! 本当に人造ならばおんしの父は神代の大天才だ！ まさか人の手で独自の系統樹を完成させ、しかもギフトとして確立させてしまうとは！ これは正真正銘^{ゲノム・ムックリ}生命の目録」と称して過言ない名品だ！」

白夜叉が何やら熱弁しているが全くわからない。とりあえずツナはこの話に混ざるのを諦めた。リボンなら何か知ってるかもしれないがここにいない人物のことを考えてもしょうがない。

白夜叉はこのペンダントを買い取ろうとしたが耀に拒否されてしよんぼりとしてしまふ。

「で、これはどんな力を持ったギフトなんだ？」

十六夜に問われ、白夜叉は気を取り戻すが、首を捻った。

「それは分からん。今分かつとるのは異種族と会話できるのと、友になった種から特有のギフトを貰えるということぐらいだ。これ以上詳しく知りたいのなら店の鑑定士に

頼むしかない。それも上層に住む者でなければ鑑定は不可能だろう」

「え？白夜叉様でも鑑定できないのですか今日は鑑定をお願いしたかったですけど」
黒ウサギの要求にゲツ、と気まずそうな顔になる白夜叉。

「よ、よりにもよってギフト鑑定か。専門外どころか無関係もいところなのだがの」
ゲームの褒章として依頼を無償で引き受けるつもりだったのだろう。

「ペンダントといや沢田も首にぶら下げてるよな」

とふと思いつ出したように十六夜がツナをみる。その視線の先にあるのは大空のリン
バージョン・イクス。
グVer.X。

「ふむ、ならそれもまとめて鑑定してやろう」

「いや、いいです」

「何、ここまできて遠慮するでない。」主催者として、星霊の端くれとして、試練をクリアしたおんしらには、恩恵を与えねばならん。ちよいと贅沢な代物だが、コミュニケーション復興の前払いとしては丁度良かろう」

「

白夜叉は何を思ったか急にやる気になった。

白夜叉がパンパンと拍手を打つ。すると十六夜・飛鳥・耀の三人の眼前に光り輝くカードが現れる。カードにはそれぞれの名前と、身体に宿るギフトを表すネームが記さ

れていた。

コバルトブルーのカードに逆巻十六夜・ギフトネーム”コード・アンノウン 正体不明”

ワインレッドのカードに久遠飛鳥・ギフトネーム”威光”

パールエメラルドのカードに春日部耀・ギフトネーム”ゲ生命の目録”、ノム・ツリ、ノノーフォー

マー”

「あの……オレは？」

そう、ツナにだけ何も無い。

「何を言っておる。試練をクリアしたものに恩恵を渡したんじゃないやから見学していたお主には無いぞ」

「そんな……!!?!」

「ちよ、それは流石に酷いのでは？」

黒ウサギが白夜叉に抗弁する。

「冗談を真に受けるでない。ただ単に手持ちがそれしかなかったただけじゃ。とかいじり甲斐のあるやつじゃの」

「び、びつくりしたー」

白夜叉流ジョークだったらしい。ツナからすればたまったものではないレベルのジョークだった

カードの名前はギフトカード。アイテムタイプのギフトも仕舞うことができる素敵アイテムのようだ。実際十六夜が水樹の苗を仕舞ったりして遊んでいる。

「そのギフトカードは、正式名称を”ラプラスの紙片”、即ち全知の一端だ。そこに刻まれるギフトネームとはおんしらの魂と繋がった”恩恵”の名称。鑑定は出来ずともそれを見れば大体のギフトの正体が分かるというもの」

そう、だから十六夜のような正体不明というものは非常に珍しいのだ。



皆は帰されたがツナはギフトカードをもらうために白夜又の部屋に残った。

「ホレ」

「え?」

白夜又が手を叩くとツナの掌にオレンジ色のギフトカードあった。ツナの顔はあつげにとられている。

「手持ち無かったんじゃないの!?!」

「それも嘘じゃ。ちと確かめたいことがあつての。それを見せて欲しい」

白夜又が指すのはツナのリング。

「……あげないし売らないですよ？」

もしリングをなくしたことがリボンに知られた日には殺されてもおかしくない気がする。それにボンゴレギアを失うことはボンゴレファミリーだけの問題じゃない。ツナの世界の存亡にも関係してしまう。

「安心せい、ちよつと見せて欲しいだけじゃ」

ツナは首のチェーンからリングを外して白夜叉に見せる。ナッツとガントレットがあしらわれた長めの指輪。綺麗な丸い青色の石の上には『VONGOLA』の文字が×の字に交差している。

白夜叉はリングのつくりを様々な角度から見ている。耀の時のように興奮しておらず静かにじっくりと観察している。

そして中央の青い石の部分で目線が止まった。

「……おい、小僧。これを何処で手に入れた？」

その質問にどう答えればいいか迷って口を噤む。

「答えられんか……なら質問を変えよう。」 ジョット という男に心当たりはあるか？」

昔話来る!

ツナは白夜叉の言葉に驚きを隠せなかつた。

それもその筈。ジョットとはボンゴレ一世フリーモの本名であり、この異世界とは全く無縁の人間だからだ。

「な、なんで白夜叉さんがボンゴレ一世フリーモのこと知ってるの!?!」

ツナの言葉に一瞬怪訝な表情で頭を捻る。そして思い当たる節があつたのか昔を懐かしむようにツナへ語り出した。

「ボンゴレ一世フリーモ? ボンゴレ……ボンゴレ……。そういえばやつは元の世界でボンゴレとかいう組織のボスをやっていたとか言っていたな」

間違いない。白夜叉は初代ボンゴレのことを知っている。

「もう一つ質問させてもらうぞ。お前とジョットはどんな関係だ?」
「えと……確かオレの先祖らしいです」

白夜叉はツナの返答に目を丸くした後、口元を緩めて心底嬉しそうに笑い出す。

「そうかそうか! あやつ結婚しておったのか!」

「いやあの……」

白夜叉は嬉しくなり口が軽くなったのかペラペラと語り出す。

「やつ、ジョットとは古い……まあ古いといっても精々数百年前だが、この”サウザンドアイズ”とともに戦った仲間であり、友人だった」

それでもボンゴレの歴史を考えれば充分古いとツナは思った。

「成程、道理で少し懐かしい感じがおんしから漂ってくる筈だ。それにそのリング、形は変わっていても石は変わっておらんからピンときたよ。よくよく見れば顔も……いや思ったほど似てないか」

「どっちなんですか!？」

白夜叉はガビーンな顔をしているツナをみてケラケラ笑っている。

「ということはそのリングは継承したのか。して？ おんしで何代目だ？」

「いや、皆にも言ってるけどオレマフィアにはなりませんって!」

ツナが戦うのはいつだって仲間のため。それがボスとして最も理想的なあり方であることをツナはまだ気がついていない。

そして白夜叉はこの世界に来たジョットのことを語り出した。

「ふと突然この”箱庭”に来てな。行き倒れているのを私が拾ってきた」

「そんなペット拾ったみたいなきっかけなの!？」

「まあそう言うな。別に恩返しなぞ期待してなかったが、その恩に報いようと”サウザ

「ンドアイズ」に所属したあやつはその実力と手腕で次々にギフトゲームをクリアし数年で幹部にまで上り詰めた。そして元の世界に帰る際に今まで得たギフトのほとんどを「サウザンドアイズ」に謙譲することを条件に脱退して元の世界へと帰っていった」

「そんなことが……」

これは何という数奇な運命なのだろう。初代が来た異世界に十代目であるツナが来るなどと。

ツナがこの世界へ来たのは本当にただの偶然だったのだろうか。

「ジヨットが持ち帰ったのはマントと手ガントレット甲のたつた二つだけだった」

「それってもしかして」

「む？ 何か心当たりでもあったか？」

ツナはナッツの形態変化であるI世カンビオフォルマのマントとI世マントレットのガントレットのことを思

い出す。ボンゴレボックスの形態変化は初代ファミリーが使っていた武器を現していた。

あの二つの起源は「箱庭」で手に入れたものだったのだ。

「そういえばそのリングはどう使うのだ？ それについてはジヨットは何も話してくれなかったが……」

当時はリングに炎を灯す技術などなかったから当然だ。

「ああ、これは……」

ツナはいつもやっているようにリングに死ぬ気の炎を灯す。死ぬ気の炎は人間の生体エネルギーを圧縮し視認できるようにしたもの。

それは人によって大きさや質が異なる。そして一番大事なのは『覚悟』だ。

死ぬ気の炎が灯つたと同時に彼の相棒であるナッツも起きたようだ。

炎の蠶をした小さなライオンがツナの肩へ乗る。

「ガウ？」

「あ、ごめんナッツ。起こしちゃった？」

「ほお……」

白夜又は感嘆してリングから発するオレンジ色の炎に目を奪われる。ツナの死ぬ気の炎の属性は他の6属性と比べると希少な『大空の炎』。そして相棒は天空^{レオネ・デイ・チエーリ}ライオンシリーズをボンゴレと入江正一が共同で改造してつくられたナッツ。

観察し、実際に手で触れてみたりと興味心身だ。

大空属性のボックスアニマルは持ち主の性格に影響されやすいのでツナと同じく臆病な性格になっているから初めて見る白夜又は少し怯えていた。

「ふむ、触れてもそれほど熱くはないな。やつも使っていたオレンジ色の炎と同じものか……。それにリングから出てきたこの小動物は普通の生物ではないの。……ふむふ

む、ここまで生物を再現できる者はここにもそうはおらんぞ、一体何者じゃ?」

耀の生命ゲノムツリの目録を観察している時と同じくらいの興奮で白夜又は分析を続ける。

ツナは皆を待たしているからそろそろ行かないといけないのだが。

「あの、そろそろ行かないと」

「おおつ、長々と話して済まなかつたな。また今度じっくり見させてもらおうとしよう。

……おつと」

ツナは白夜又の部屋を出ようとすると白夜又に待ったをかけられた。

「綱吉、おんしさえ良ければ、サウザンドアイズ”に来んか? 他の三人には振られて

しまったが、おんしはどうだ?」

”ノーネーム”であるが故の大きなハンデ。そして名と旗を取り戻すために”魔王

”と戦うこと。その道は茨の藪だ。

「……誘ってくれるのは嬉しいけど、ごめん。黒ウサギや皆と約束したから」

ツナは白夜又に笑いかけるとそのまま店を後にした。

一人残った部屋で白夜又はカカと笑う。

「弱き者を背にして強き者に立ち向かう……おんしと同じだな、ジョット。おんしは死んでもその意思は受け継がれておるぞ……」



ツナは先に帰っていた4人と合流。

そして門の先にあるもの、彼らが見たものと同じものを見た。

それは一言で言うのなら廃墟。木造の建物らしきものは見る影もない。ツナは残骸を手にしてみるもそれは簡単に音を立てて崩れ去る。

黒ウサギは“魔王”に負けたのは三年前と言っていた。つまりこの何百年も放置されて風化したような町はたった三年前に引き起こされた現象なのだ。

「そんな……酷すぎる」

彼は怒っている。

らしくないことだとわかっていても憤りを隠すことができなかった。

「……魔王とのゲームはそれほど未知の戦いだだったのでごさいます。彼らがこの土地を取り上げなかったのは魔王としての力の誇示と、一種の見せしめでしょう。彼らは力を持つ人間が現れると遊ぶ心でゲームを挑み、二度と逆らえないよう屈服させます。僅かに残った仲間達もみんな心を折られ……コミュニティから、箱庭から去って行きました」

飛鳥や耀はこの光景を見てとても複雑そうな顔をしている。しかし十六夜はこの状

況を逆に楽しんでいた。

皆はそれぞれの思いを胸に決意を新たにするのであった。

落ち着いた後に4人は黒ウサギを追いかけて廃墟を抜けて徐々に外観が整った家が立ち並ぶ場所に出てきた。

そこではこの居住区で遅く生きている子ども達が黒ウサギに群がっている。子ども達に”ノーネーム”の救世主だと紹介されてツナは照れくさい気分だった。

「さて、自己紹介も終わりましたし！それでは水樹を植えましょう！黒ウサギが台座に根を張らせるので、十六夜さんのギフトカードから出してくれますか？」

「あいよ」

十六夜はギフトカードから水樹の苗を取り出して黒ウサギへと渡す。

ここの貯水池も昔はギフトのお陰で水で満たされていたらしいが、そのギフトさえも”魔王”に取り上げられてしまい長い間使われていなかったそうだ。

水樹の苗が手に入ったことで子ども達が掃除をしてくれていたらしくすぐにも使えるようになるだろう。

「では、行きますよー♪」

黒ウサギが貯水池の中心にある柱に苗を置くと、そこから大量の水が溢れ出した。水は激流となり、瞬く間に貯水池を、そこから伸びる水路を満たしていく。

十六夜がもたらした水樹が、”ノーネーム”の新たな水源となった瞬間であった。

「これが水樹の力……!」

「凄……!」

「へえ、大したもんだ」

「うわあ……」

全く水気のなかった水路や貯水池があつという間に水で一杯になる様子を見ていて
壮観だ。これで水を態々ギフトゲームで獲得する手間も省けて他のことに余力を回す
ことができるだろうとジンも喜んでいた。

「小さな一歩だけど大きな一歩だよ」

「ツナさん?」

ツナは何気なく呟いただけだが隣にいたジンには聞こえていたようだ。

急に恥ずかしくなつて「何でもない」と言つてお茶を濁した。



子ども達も寝静まりツナも疲れていたので少し早めに寝ようとした矢先に爆音がし
て慌てて飛び起きた。

「何!? 何!?」

爆音がしたのは子ども達の眠る別館からだ。

ツナは「フォレス・ガロ」が子どもを攫つては殺していたという話を飛鳥から聞いていたのもしやと思い、急いで駆けつける。

しかしたどり着いた先で見たのは怪しい格好をした男達に頭を下げられている十六夜とジンの姿だった。

「恥を忍んで頼む! ガルドのコミュニティ、”フォレス・ガロ”を完膚なきまでに叩き潰してほしい!!」

「嫌だね」

男達の懇願をあつさりとは却下する十六夜。

「ちよ、ちよつとこれどういう状況なの?」

十六夜が言うにはこの侵入者達は「フォレス・ガロ」に人質をとられて無理やり言うことを聞かせていたそうだ。

(でも、人質はもう……)

「その人質な、もうこの世にいねえから。はいこの話題終了」

「……………なっ」

「十六夜君(さん)!!」

「気を使えつてか？ 冗談きついぞてめえら」

咎めるツナとジンだが、十六夜の返答はどこまでも冷たい。

「殺された人質を攫ってきたのは誰だ？ 他でもないコイツらだろうが」

そう、殺された人質を攫ってきたのはこの男達。自業自得と言ってしまえばそれまで

だが、許せないのはそんな非道を行った”フォレス・ガロ”だ。

「で、では本当に人質は……？」

「……はい。ガルドは人質を攫ったその日に……殺していたそうです」

「そ、そんな……！」

その場で項垂れる一同。彼らの心中は察するに余り有る。そんな彼らを見て十六夜は——あろうことが、ニヤリと笑った。

「おまえらの気持ちはよくわかった！」

冷徹だったのが一転して楽しそうに、まるで新しい悪戯を思いついたような笑顔で侵入者の肩を叩く十六夜。

「ガルドが、そして奴の背後にいる”魔王”が憎いだろ？ 安心しろ、おまえらの仇はコ

イツが取ってくれる！」

と、ジンの肩を抱き寄せ、

「このジンⅡラッセルが、全ての魔王を倒すためのコミユニティを作ってくれる!」
 「なっ!」

侵入者+ジンが一齐に驚愕する。

何故だか、コミユニティの討伐目標が『名と旗印を奪った魔王』から『魔王全て』にすり替えられようとしていた。

「魔王を倒すためのコミユニティ……? そ、それはいったい?」

「言葉通りさ。俺たちは魔王の脅威にさらされたコミユニティを守る。守られたコミユニティは口を揃えてこう言ってくれ。”押し売り・勧誘・魔王関係お断り。まずはジンⅡラッセルの元に問い合わせください”」

「じよ、」

冗談でしょう! と言いたかったのである。ジンの口はあえなく塞がれる。

ツナも反論しようとしたが何かを思いついて踏みとどまる。

(もしかして十六夜君にも何か考えがあるのかな……?)

快樂主義者だが彼とて非人道的な行為を許容する外道ではない。つまりこの状況を何かに利用しようとしているのだ。

「ガルドを倒した後の心配もしなくていいぞ! なぜなら、俺達のジンⅡラッセルが魔王を倒すために立ち上がったのだから!」

「おお……！」

十六夜の言葉に希望を見たのか、顔を輝かせる侵入者一同。この中にコイツの企みに気がついている者はいない。

「さあ、コミュニティに帰るんだ！　そして仲間と言いつらせ！　俺たちのジン＝ラッセルが”魔王”を倒してくれると！」

「わ、わかった！　明日は頑張ってくれ、ジン坊ちゃん！」

「ま……待つ……！」

最後までジンの口は塞がれたまま、侵入者一同は走り去ってしまうのだった。



三人が来たのは本拠の最上階・大広間。

十六夜を引きずってきたジンは、堪りかねて大声で叫んだ。

「どういふつもりですか!?!」

「言ったとおりだぜ？」　魔王”にお困りの方、ジン＝ラッセルまでご連絡ください”

——キャッチフレーズはこんなところか？」

「ジン君落ち着いて！」

「これが落ち着いていられますか! 魔王の力はあの土地を見て理解できたでしょう!? 僕らの仇敵だけでも脅威なのに、魔王を倒すためのコミユニティなんて馬鹿げた宣誓が流布されたら、他の魔王にまで……!」

「そうだな、あんな面白そうな力を持った連中がゾロゾロと押し寄せてくる。ワクワクするじゃねえか」

長椅子に座って踏ん反り返っている十六夜はどこまでも強気だ。

「ツナさんも黙ってないで何とか言っちゃってやってください! 面白そうだからって理由であんなことを……」

「ジン君、それは違うよ」

「ツナさん……?」

ジンもまさかツナが十六夜を擁護するとは思わなかったのか困惑している。

「多分十六夜君はこのコミユニティに足りないものを手っ取り早く集めようとしてるんだと思う」

「へえ、そこまで見抜いてたか」

十六夜はツナの見通しの良さに軽く驚いていた。

「コミユニティに……足りないもの?」

それは知名度であり、仲間であり、目標だ。

「俺たちには名前も旗印も無い。コミュニケーションを象徴出来る物が何一つないわけだ」
名前が無ければ宣伝ができない。宣伝ができなければ人は集まらない。人が集まらなければコミュニケーションは大きくなれない。コミュニケーションが大きくなれば――
魔王には勝てない。

「コイツはとんでもないハンデだ。それを抱えたまま、お前は先代を超えなきゃならぬ
いんだぜ?」

「先代を……超える……!?!」

その言葉に慄くジンは、まるで頭を金槌で叩かれたような顔をしていた。

それは彼が魔王から奪われた全てを取り戻すためには絶対に必要なことで、しかし目を逸らし続けていた現実だ。

だからこそ、十六夜はジンの名前を売り込んだ。

だからこそ、わかりやすくインパクトのある”打倒魔王”を掲げた。

そしてその御旗は同じく”打倒魔王”を心に秘めた者達を呼び寄せることだろう。
”魔王”の被害者はこの”ノーネーム”だけではないのだから。

「今のコミュニケーションに足りないのは人材だ。俺並みとは贅沢言わないが、せめて俺の足元並みの奴らは欲しい。そういう奴らなら、どっかに消えちまった昔のお仲間よりは役に立つだろうぜ」

十六夜の策は筋が通っていて面白半分で考えていることではないというのは分かる。しかしリスキーであることに変わりはない。それを踏まえてジンは条件を出した。

「この件、受ける代わりに一つだけ条件があります。今度開かれる”サウザントアイズ”のゲームに、その昔の仲間が出品されるんです」

「へえ? そいつを取り戻せって?」

「そうです。それも只の仲間じゃない。彼女は元・魔王なんです」

ジンの言葉に十六夜の瞳が光る。

つまりこの”ノーネーム”は以前”魔王”を倒して隷属させていた。そしてその”魔王”を現在隷属させているコミュニティを倒せば仲間は戻ってくる上にコミュニティの名も一気に上がる。

十六夜が断る理由がない。

「それと心配を掛けたくないので、黒ウサギにはまだ内密に」

「あいよ」

「(良かった。もう大丈夫そう) オレは先に寝てるね」

ツナはさつき寝かけていたことを思い出すと急に眠気が襲ってくるのでさつきと大広間を出て行った。

その後十六夜はジンに負けたらコミュニティ脱退宣言をしてまたジンを悩ますこと

になったことをツナはまだ知らない。

対決と再会来る!

飛鳥、耀、黒ウサギ、ジンが”フォレス・ガロ”とのギフトゲームへと赴いている間、ツナと十六夜は居住区で留守番をしていた。

飛鳥や耀たちにも自分達が売った喧嘩くらい自分達で片をつけたいのだろう。十六夜は元よりツナの助成も受け入れはしなかった。

十六夜は十六夜でふざけてるのか本気なのか”フォレス・ガロ”に負ければ”ノーム”を去るとまで言い出してツナの心配を煽る。

「ああ、大丈夫かな? 皆怪我とかしてないかな?」

(うつせえ……)

ツナはさつきからこの調子、十六夜もそろそろツナのうわ言に聞き飽きてきた頃だ。

「お前が心配したって結果が変わるわけじゃねえだろ」

「でも、今はそれくらいしかできないし」

十六夜は頭をガシガシと搔いて溜息をつく。

そして後に何かを思いついたようにニヤリと笑って言い放った。

「じゃあよ、ゲームが終わるまで俺達もゲームをしねえか?」

ツナの額にオレンジ色の炎が宿り、毛糸の手袋はXグローブへと変化する。

「良いねえ良いねえ! そうこなくっちゃあなあ! ——あ?」

目の前にいた筈のツナを十六夜は見失う。慌てて周囲を見回すも、視認することができな
きない。

(何処行きやがった!?)

後ろの空気の揺らぎで十六夜は急いで振り返る。ツナは既に後ろへ回り込み手刀で十六夜の首を狙っている。

(いきなり俺の意識を狩りにくる気か?! しゃらくせえ!!)

十六夜は間一髪、上体を逸らすことでツナの手刀を回避。そのまま思いつきり仰け反ってサマーソルトキックでカウンターを入れにかかる。

(かわされた!?! なら)

ツナは十六夜の上がった片足を蹴って上に飛び、両手の炎の勢いを利用して飛び蹴りを見舞う。

「くっそー!」

十六夜はとっさに両腕を交差してツナの飛び蹴りを防いだ。しかし勢いを殺しきれなかつたのか少し後退した。

一瞬でこの攻防を行った二人は距離をとる。

「つてえ、やるじゃねえか」

「できることなら最初の一撃で決めたかったが……」

「たった一撃でやられるほど俺もヤワじゃねえんだ、よ！」

次に仕掛けたのは十六夜、全力で駆けて拳を握り相手を殴る。単純であるが故に強力な一撃をツナへぶつけようとした。

ツナは当然上に飛んでそれをかわす。だが十六夜はこれくらい先読みしている。ツナや耀のように飛ぶことはできないが、跳躍力には自信があるのだ。ツナと同じ高さまで跳び一撃を見舞う。

「さっきのお返しだ！」

「グッ」

とつきに後ろに飛んで威力を殺すことには成功したものの、これで痛み分けとなった。

パワーであれば十六夜が、スピードであれば僅かだがツナが勝っている。

「ナッツ！」

「ガウツ！」

ツナの掛け声とともに彼の相棒がその姿を現した。

「へえ……」

「ナッツ、カンビオ・フォルマ形態変化」

十六夜が感心していると、ナッツの目つきが変化し、ツナのXグローブと合体。Xグローブを覆う手ガントレット甲となった。

「おいおい、そういうのがあるんなら最初から出してくれよ」

あれにまだ上がある。それを理解した十六夜はさらに自分の感情が昂ぶるのを感じた。

「十六夜に勝つにはこれしかないと思っただからだ」

「なくんだ。てめえも結構負けず嫌いじゃねえかよ」

十六夜は獰猛な笑みを浮かべている。真の格闘家は一撃交し合っただけで実力を知ることが出来る等と誰が言ったか知らないが、あの応酬でツナは自分の好敵手足りうる男だと今認めたのだ。

対照的にツナはいつもの冷静な顔を崩さない。

相手が殴れば自分はガード、そしてカウンターを狙いにいく技術は関係のないステゴ口が始まる。攻防は互いに譲らず、互いに攻撃がまともに入った回数無し。一発でもまとも当たればたちまちアウトだからだ。

二人の拳がぶつかり合い、距離をとった。

辺りに静寂が行き渡る。

次に動いたのは二人同時だった。

「オラア!!」

「ビックバン・アクセル!!」

しかしこの二人の激突は、

「そのままですッ!!」

「!?!」

急いで戻ってきた黒ウサギの介入によつて幕を閉じた。



「お二人とも、何か言いたいことは？」

「暇つぶしで戦つてた」

「十六夜君に無理やり」

二人は黒ウサギに説教を受けている。十六夜は明後日の方向を見ながら聞き流して
いて全く反省の色が見られない。

隣ではジンが冷や汗を垂らしながら苦笑いをしていた。この二人が本気でぶつかり
合つて次のギフトゲームに支障が出たかもしれないと思うと正直笑えなかった。

「はあ、ツナさんもツナさんです。少しくらい大人しくしててください」

「と、ところでギフトゲームはどうなったの!？」

「……今、露骨に話を逸らしましたね？」

” フォレス・ガロ ” との戦いはガルドが鬼化していたせいで予想より苦戦を強いられ
たが飛鳥が ” 白銀の十字剣 ” を巧みに扱い、見事勝利を勝ち取った。しかし、ガルドと
の戦いの際に耀が負傷。今は治療用のギフトで傷を癒している。

「おっと、忘れかけていたぜ。おい、御チビ。作戦の成功の為に奴らの旗印を探しに行くぞ」

「は、はい！」

「あ、ちよー！ 話はまだ終わってませんよ!!」

十六夜は ” フォレス・ガロ ” が収集していた旗印全てを回収し、傘下であったコミュニ
ニティの者達にジン直々に返還させる。衆人は未だ頭がついて行けていないのか呆然
としていたが、旗印が返つてくると分かると我先にとジンの前に一斉に雪崩れ込んでき
た。ジンは潰されそうになるが、十六夜の一喝であつという間に列ができて返還もス
ムーズに行われる。

” ノーネーム ” はこの多くのコミュニティに大きな借りをつくったのである。

「そういえば昔の仲間が景品に出されるギフトゲームはどうなった?」

その後、十六夜、ツナ、黒ウサギは本拠地へと戻ってギフトゲームの詳細を聞こうと黒ウサギに尋ねると、二人がそのゲームに出ることに歓喜したが、一転して泣きそうな顔になった。

ツナが訳を聞くと、そのゲームが延期になるらしい。何でもギフトゲームに出される筈の商品に買い手がついたとかで中止になる可能性もあるようだ。

「どうにかならないの?」

「どうにもならないでしょう。どうやら巨額の買い手が付いてしまったそうですから」

「チツ。所詮は売買組織ってことかよ。エンターテイナーとしちや五流もいいところだ。」サウザンドアイズ”は巨大なコミュニティじゃなかったのか? プライドはねえのかよ」

「仕方がないですよ。」サウザンドアイズ”は群体コミュニティです。白夜叉様のような直轄の幹部が半分、傘下のコミュニティの幹部が半分です。今回の主催は”サウザンドアイズ”の傘下コミュニティの幹部、”ペルセウス”。双女神の看板に傷が付く事も気にならないほどのお金やギフトを得れば、ゲームの撤回ぐらいやるでしょう」

達観しているように話す黒ウサギだが、顔はくやしさに歪んでいる。当然だ、自分の仲間を取り戻すチャンスがやっと巡ってきたのにこんな形でそれが潰されてしまったのだから。

「まあ、次回を期待するか。ところでその仲間つてのはどんな奴なんだ?」

「そうですね……一言でいえば、スーパープラチナブロードの超美人です。指を通すと絹糸みたいに肌触りが良くて、湯浴みの時に濡れた髪が星の光でキラキラするのです」

「へえ、女の人人なんだ」

「そういうはまだ」元・魔王「だということ位しか聞いてなかったとツナは思い出す。

「それはもうとつても美人で素敵なお方ですよ! 名前はレティシア様、その美貌に加えて思慮深く、黒ウサギより先輩でとても可愛がってくれました。近くに居るのならせめて一度お話ししたかったのですけど……」

「おや、嬉しい事を言ってくれるじゃないか」

窓の方からこの場にいない第三者の声がして、一同は一斉にそちらを振り向く。そこにはコンコンとガラスを叩きながらにこやかに笑う金髪の少女が浮いていた。

「レ、レティシア様!」

「様はよせ。今の私は他人に所有される身分。」箱庭の貴族「ともあろうものが、モノに敬意を払ってでは笑われるぞ」

我に返った黒ウサギが慌てて窓の錠を開けると、金髪の少女は部屋の中へと入っている。どうやらこの少女が件のレティシアらしい。金髪にリボン結び、紅いレザージャケットに拘束具を彷彿させるロングスカートを着た少女はどう見ても黒ウサギが先輩

と呼ぶには幼く見える。

ツナと年齢もそう変わらないのではないだろうか？

「あ、すぐにお茶を淹れるので少々お待ちください！」

久しぶりに憧れの先輩に会えたことへの喜びか、黒ウサギは小躍りしながらで茶室に向かった。そんな黒ウサギを見送りながら、二人は視線をレティシアと呼ばれる少女に移す。

「元・魔王” っていう位だからビアンキみたいな破天荒な人を想像してたけど結構落ち着いている人だな」

「どうした二人共？ 私の顔に何か付いているのか？」

十六夜はツナを指差した。

「こいつがアంతに惚れたんだとよ」

「そんなこと一言も言っていないよ!!」

「あれ、そうだったか？ 昨日そんな夢を見た気がしたんだ」

「夢の話——?!？」

二人のやり取りにレティシアは上品そうに哄笑する。面白おかしそうに笑う姿も絵になる少女だ。

「ふふ、なるほど。君達が十六夜と……あのジョットの子孫か、白夜叉の話通り面白い二

人だ」

「ジョット?」

その言葉に十六夜は首を傾げる。十六夜はそのことを知らないのだ。

「誰だ、そのジョットっていうのは」

「? 聞いていないのか、そいつは数百年前に”沢田綱吉 サウザンドアイズ”の幹部をやつていた男の子孫だぞ」

「そ、それ本当ですか!?!」

紅茶のティーセットを持ってきた黒ウサギが帰ってきた。予想外の話聞いたためかドアの開け方が少し乱暴になつてしまったようだ。

「ちよ、ちよつと何で話しちやうんですか!?!」

「……秘密だったのか? 白夜又はそんなこと言っていないが」

「すいませんレティシア様ツナさん、そのことについて詳しくお聞きしたいんですが」

「俺も興味あるぜその話」

黒ウサギと十六夜に詰め寄られ、ツナは仕方なく自分がマフィアのボス候補であることは内緒にしつつ自分の祖先がこの世界と縁があつたことを白夜叉に教えられたことを説明した。

話を聞きながらお茶を入れていた黒ウサギが口を開く。

「大空のジョット……伝説の存在かと思つてましたが、まさか実在したなんて。しかもその子孫がツナさんだったなんて」

初代ボンゴレは一体どれだけの功績を建てたのか、ツナは本気で知りたくなつてきた。十六夜は十六夜でこの事実を今後どう利用していくかを考えている様子。

(もういいや、どうにでもなれ)

ツナは色々諦めてきた。

「そういえば、レティシア様はどうしてここへ？」

「いや……用というほどものではない。新生“ノーネーム”の実力がどれほどか見に来た。ジンに合わせる顔がないのは結果として仲間を傷付けてしまったからだよ」

レティシアはカツプに口をつける。

「今回、私が黒ウサギに会いに来たのはコミュニティを解散するように説得しに来たのだ。コミュニティの再建など……それがどれだけ茨の道なのかお前が分かっていないとは思えなかつたからな」

凶星なのか黒ウサギが黙り込む。

つまりは警告だ。

「そしてようやくお前達と接触するチャンスを得た時……看過出来ぬ話を耳にした」

「それが俺達……つてことか？」

今まで黙っていた十六夜が言い当てる。レティシアはそれに頷いて返す。

「そこで私は一つ試してみたくなった。その新人達がコミュニケーションを救えるだけの力を秘めているのかどうかを」

「結果は？」

黒ウサギが真剣な眼差しで問いかける。レティシアは苦笑しながら微笑する。

「ガルドで当て馬にしたのだが、あの二人ははまだまだ青い果実で判断に困る。……そちらの二人に関しては参加してもいらないから分からないが」

ツナの方もジョットの子孫という評価だけでは実力には繋がらない。

「ならよ、試してみねえか？」

「……………何？」

「実に簡単な話だ。その身で、その力で試せばいい———どうだい、元・魔王様？」

スッと立ち上がる十六夜。その意図に気付いたレティシアは一瞬哑然とするが、先程より弾けるような笑い声を上げる。涙目になりながらも立ち上がる。

「ふふ……なるほど。それは思いつかなんだ。実に分かりやすい。下手な策を弄さず、初めからそうしていればよかったなあ」

（この人も結構戦闘狂だったー！！）

「ちよ、ちよつと御二人様？」

「ゲームのルールはどうする？」

「どうせ力試しだ手間暇をかける必要もない。双方が共に一撃ずつ撃ち合い、そして受け合う」

「地に足を着けて立っていたものの勝ち。いいね、シンプルイズベストって奴？」

二人は笑みを交わし窓から中庭へ同時に飛び出した。

ペルセウス来る!

互いにランスを一打投擲して、受け手は止められねば敗北という単純なゲーム。レティシアはそれで十六夜とツナの實力を測るつもりのようなのだ。

レティシアは空を飛び、ランスを構える。

放たれた槍は瞬く間に摩擦で熱を帯び、一直線へと十六夜に向かって落下していく。その流星の如く大気を揺らしながら放たれた槍の先端を前に十六夜は牙を剥いて笑い、「カッ——しゃらくせえ!」

十六夜は槍の先端を殴りつけた。槍はあっさりとは破壊されてそれは散弾となりレティシアに襲いかかる。彼女も硬直してしまい、このままでは当たってしまう。これが直撃したらただでは済まない。

「危ない!!」

ツナは死ぬ気モードになって大急ぎでレティシアを抱きかかえ、安全な所まで避難させた。レティシアは決闘を邪魔されたことにたいして不満の声を上げる。

「な、何をする!?!」

「良かった……」

「……レティシア様、ちょっと失礼します」

同じくレティシアを助けようとしてた黒ウサギは確認したいことがあるのかレティシアのギフトカードを掠め取る。記されてあったのは「ロード・オブ・ヴァンパイア純潔の吸血鬼」と武器が幾つかのみ。

「……やっぱり、ギフトネームが変わっている。鬼種は残っているものの、神格が残っていない」

「ハッ。どうりで齒ごたえが無いわけだ。他人に所有されたらギフトまで奪われるのかよ」

十六夜は隠す素振りも見せずに舌打ちをする。彼からすれば期待はずれもいいところかもしれない。しかし、彼の言う通り商品とするのであればあまり強くあられては困るからギフトを没収するというのはいええることなのかもしれない。

それについては黒ウサギが否定した。

「いいえ……魔王がコミュニケーションから奪ったのは人材であってギフトではありません。武器などの顕現しているギフトと違い、”恩恵”とは様々な神仏や精霊から受けた奇跡、云わば魂の一部。隷属させた相手から合意なしにギフトを奪う事は出来ません」

ということ、レティシアが自分からギフトを差し出したという事になる。その本人であるレティシアは二人の視線を受けて苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながら

目を逸らす。黒ウサギも苦い表情でレティシアに問いかける。

「レティシア様は鬼種の純血と神格の両方を備えていたため”魔王”と自称するほどの力を持てたはず。今の貴女はかつての十分の一にも満ちません。どうしてこんなことに……！」

「……それは」

レティシアはそこから二の句を告げることができない。言いたくない事情があるのか、そのまま口を閉ざしてしまった。話にならないと十六夜は頭を掻きながら鬱陶しうに提案する。

「まあ、あれだ。話があるならとりあえず屋敷に戻ろうぜ」

十六夜の提案に皆は頷く、黒ウサギとレティシアはとても沈んだ表情だ。

ツナは立ち上がりうとして顔を上げると、褐色の光が目飛び込んできた。

「何だ……？」

「あの光……ゴーゴンの威光!？」

レティシアがハツとして叫ぶ。その光の直線状にいたのはツナだった。それに気づいたレティシアは渾身の力でツナをできるだけ遠くに突き飛ばす。

「レティシア（様）!？」

褐色の光線を一身に受けたレティシアは瞬間に石像となって横たわり、ピクリとも

動かなくなってしまう。ツナと黒ウサギが悲鳴を上げた。すると光が差し込んだ方角から、翼の生えた靴を装着した騎士風の男達が押し寄せてきた。

「いたぞー！ 吸血鬼は石化させた！ すぐに捕獲しろー！」

先程の褐色の光線はこの男達の仕業のようだ。コミユニティ“ペルセウス”、今現在レティシアを所有している“サウザンドアイズ”傘下のコミユニティ。光線の正体はリーダーと思われる男が手に持った“ゴーゴンの首”だろう。

“ペルセウス”は石像となったレティシアを回収しようとするが、それをツナは見過ごせない。起き上がって運ぼうとしていた男にタックルを喰らわせる。そして彼女を背にして立ちほだかった。

「貴様!? 邪魔をするな！」

「この人をどうするつもりだ!!」

「これより、箱庭の外へと売却するのだ」

「箱庭の外ですって!？」

黒ウサギはこの場を見逃す気にはなれなかった。それもその筈、レティシアを始めとしたヴァンパイア——”箱庭の騎士”は箱庭の特別な加護のお陰で太陽を浴びても灰にならないのである。そんな彼女が箱庭の外に連れ出されるということは彼女の自由は奪われることになる。

黒ウサギは抗議するも、”ノーネーム”であるが故に発言権は弱い。しかし、”ノーネーム”での敷地内どこまで勝手なことをされては黙っているわけにはいかない。

「こ、この……！…これだけ無遠慮に無礼を働いておきながら、非礼を詫びる一言もないのですか!？ それでよく双女神の旗を掲げていられるものですね、貴方達は!!」

激昂する黒ウサギだが”ペルセウス”の騎士達は鼻で笑った。

「ふん。こんな下層に本拠を構えるコミユニティに礼を尽くしては、それこそ我らの旗に傷が付くわ。身の程を知れ”名無し”が」

「なっ……なんですって……!!」

黒ウサギから堪忍袋が爆発した音がした。レティシアの扱いやコミユニティを侮辱する行動と発言の数々に、黒ウサギの沸点は一気に振りきれたのだ。怒りに震える黒ウサギを見下す騎士達はその姿に再度鼻で笑う。

彼女の沸点は既に限界を迎えていた。

「いでよー…”インドラの槍!!」

それは金色をした三叉の槍。同じ三叉の槍でも六道骸が使っているものとは形状が違う。帝釈天が使っていたとされる雷の槍で別名をヴァジュラともいう。

黒ウサギはいつもの弄られキャラの汚名を雪ぐかのごとく勇猛果敢に黄金の槍で狼藉者どもを蹴散らそうと槍を投げようとした……が、十六夜に邪魔されて、拳句の果て

に逃げられた。あの一撃は流石にやばいと判断したこと、不可視のギフトを使つても超ハイスピードツナの隙をつくことができなかつたことが合わかり回収には失敗したもよう。

「ああ、おいたわしやレティシア様」

「元に戻す方法とかないの？」

石化したままのレティシアを見て黒ウサギは涙を流す。奪われずには済んだものの、彼女を元に戻す方法がない。”ゴーゴンの首”というくらいだから元に戻すにはおそらく”メドウーサの涙”が必要なのだろう。勿論”ノーネーム”にそんなものある筈がない。それに”ペルセウス”がこのまま黙つて引き下がるわけがない。

「なら、こつちから乗り込むとしようぜ」

この意見には皆賛成だつた。その場でギフトゲームになる可能性も考慮して治療中の耀と万が一のために本拠地に残ると言つたジンを除いて全員で”サウザンドアイズ” 二一〇五三八〇外門支店を目指すのだった。



一行は”サウザンドアイズ” 二一〇五三八〇外門支店へと到着、店内へと通されて中庭を抜けて離れの家屋に黒ウサギ達が向かう。中で迎えた男、ルイオスは黒ウサギを見

て盛大に声を上げた。

「うわお、ウサギじゃん！ うわー実物初めて見た！噂には聞いていたけど本当に東側にウサギがいるなんて思わなかった！ つーかミニスカにガーターソックスなんてエロいなあ」

ルイオスは黒ウサギを「ペルセウス」に来るようにと勧誘している。黒ウサギはこんな言葉に耳を貸すことはない。

「——先に断っておくけどこの美脚は私達の物よ」

「そうですそうです！黒ウサギの脚は、って違いますよ飛鳥さん!!」

「そうだぜお嬢様。この美脚は既に俺のものだ」

「十六夜君も何言ってるの!!?」

「よかろう、ならば黒ウサギの脚を言い値で買おう!!」

「売・り・ま・せ・ん」

「ツツコミが追いつかねー!!」

ボケ三人にツツコミ二人は流星にきついものがある。それに黒ウサギは胸の方がゲブンゲブン。

肝心のルイオスは完全に置いてけぼりを食らっている。「ノーネーム」＋白夜叉のやり取りを唾然と見つめて、黒ウサギがボケ組をハリセンで叩いた辺りで唐突に笑い出

した。

「あつはははははは！ え、何？ ”ノーネーム” っていう芸人コミュニティなの君ら。もしそうならまとめて”ペルセウス” に来てってマジで。道楽には好きだけ金をかけるのが性分だからね。生涯面倒見るよ？ 勿論、その美脚は僕のベットで毎夜毎晩好きだけ開かせてもらおうけど」

「お断りでございます。黒ウサギは礼節を知らぬ殿方に肌を見せるつもりはありません」

ルイオスのセクハラ極まりない言葉に対して黒ウサギはとりつくしまもなく拒否をする。

「二てつきり見せ付けるために着てるのかと思った」

これにはツナも擁護するつもりはなかった。ミニスカートにガーターソックスとか身持ちの硬い人のする格好ではない。

「ち、違いますよ皆さん！これは白夜叉様が開催するゲームの審判をさせてもらう時、この格好を常備すれば賃金を三割増しにすると言われて嫌々……」

（白夜叉さん何やってんのー？）

一方で白夜叉と十六夜の間には変態同志の奇妙な友情が芽生えていた。話が全然先に進まず黒ウサギは泣く。

そして話し合いは再会する。ルイオスが求めてきたのはレティシアの引渡しだ。それに対して黒ウサギは本拠地で“ペルセウス”のメンバーが行った暴挙についての謝罪、もといゲームでの決着を申し出る。

「いやだね。逃げ出した商品を捕まえに行っただけだし、そもそも名無し風情の敷地内に仮に僕達が入ったとして、それがどうしたって感じだけどね」

ルイオスは黒ウサギの申し出を全面的に却下、拳句の果てにレティシアが同じコミュニケーションの同志だったこともあり結託しているのではないかと言いつつ始末。

「大体さ、”ペルセウス”が君達に勝つて一体何の得があるっていうのかな？ 君達が見合つた貴重なギフトでも持つてれば話は別だけど。それともあの吸血鬼と黒ウサギを交換でもするかい？ 黒ウサギが”ペルセウス”に来るっているのなら、あんな女渡してあげてもいいよ。あの貧相な体系はどうも僕の好みじゃないんだよな」

ルイオスの提案に黒ウサギは僅かに顔を叛ける。自分とレティシアの交換。その条件は彼女にとって即座に拒否できるものではなかった。

「月の兎つてのは自己犠牲が本望なんだから。それなら、僕の提案を断る理由は」
「黙りなさい」

ツナもそうだが、このやり取りに一番苛立ちを覚えたのは同じ女である飛鳥だ。彼女の一言でガルドの時と動揺にルイオスの口は塞がれる。

「貴方の言葉は聞くに堪えないわ。そのまま黙って地面に頭をついてなさい」
「っ……! おい女、そんなものが通じるのは、格下相手だけだっ!」

しかし、そこまでだった。ガルドの時とは違い、ルイオスは「威光」による拘束を跳ね除け鎌のように湾曲した剣を飛鳥に振りかざす。不死の怪物であるゴーゴンの首を斬りおとしたとされる「ハルペー」だ。

「なっ!？」

その剣を人差し指で止めた十六夜。それに驚いて思わず後ろに退がるルイオス。互いに一触即発の空気になってしまった。

「いい加減にせんか戯け共! 話し合いで解決できぬなら放り出すぞ」

白夜叉の一喝によって互いは攻撃の手を収める。

ルイオスは悪態をつきながらその場に座った。

「……レティシアさんに見合った貴重なギフトがあれば、ギフトゲームを受けてくれるんですよね」

「ツナさん」

沈んでいた黒ウサギはツナの方を振り向く、ツナの目は真っ直ぐルイオスを見ていた。

「言っただけど、それが何?」

ツナは大空のリングを着けている方の手を差し出し言い放った。

「ならオレのギフトを、このリングを賭けます!」

「ツナさん!」

「なっ、やめんか綱吉!」

このリングが何なのか知っている黒ウサギと白夜又はツナを止めようとする。

「ふ〜ん?」

ルイオスは鼻で笑って断ろうかと思つたが、白夜又の焦りようを見て、ツナのリングに興味を示す。軽い鑑定だけでも損はなさそうだ。

(彫金は……見事だ。それにこんな石見たことないな……好事家に高値で売れそうだ)

ツナのリングを見てニヤリと笑う。予想以上の品だ。レテイシアとは比べ物にならない価格で売れるかもしれない。

「いいよ、やってあげるよギフトゲーム」

「ほ、ホントですか!」

「ただしこちらが勝った暁には黒ウサギも貰おうか。それとゲーム内容もこっちで決めさせて貰うよ」

ルイオスが提示した条件は「ノーネーム」側の更なるベットとルールの決定。飛鳥や黒ウサギはこれに対して怒りをみせる。

「何よそれ!？」

「それではあまりにも!!」

「おっと恐い恐い、勿論こちらも景品を増やさせて貰うよ」

ルイオスはギフトカードから透明な液体の入った小瓶を取り出す。

「これ何だか分かる?」メドウーサの涙だよ、吸血鬼を元に戻すのに必要だろう?」

ルイオスの言うことも最もだ。石像だけでもまま渡されても元に戻す方法がないのでは話しにならないのだ。

「こつちとしてもかなり譲歩してる方なだけどね」

ルイオスはムカつくが、この条件を飲む他がない。ツナも断腸の思いでリングを賭けの対象とし、チャンスをつくった。それを十六夜や黒ウサギは無駄にすることはできない。飛鳥はツナのリングがどんなものか知らないので戸惑っている。

”ノーネーム”はこの条件を承諾、ゲームは一週間後に”ペルセウス”が指定した内容で行われることになった。



ルイオスが浮き足立って帰って行った後、”ノーネーム”はその場に残された。

「このバカ者!! ……と言いたるところだが、あの局面では仕方ないか」

「あはは……」

本当はもっといい方法があったのだが、と白夜又は言おうとしたが無粋なので止めた。あの時のツナの目には確かな覚悟を見た。

黒ウサギはきつかけをつくってくれたツナに頭を下げて感謝する。

「あの、ありがとうございます。私達のために」

「ううん、オレが勝手にやったことだし。それにレティシアさんには助けて貰ったから」

ツナはただレティシアに恩を返したかっただけだ。

「よし、そうと決まればさっそく準備に取り掛かるか」

十六夜からすれば初めてのチーム戦に腕がなる。狙いは当然ルイオスだ。

「要は勝てばいいのよね」

飛鳥も自分の“威光”が破られたことに屈辱を感じている。“ペルセウス”に一泡吹かせなければ気が済まないようだ。

「……私は審判しかできませんけど、精一杯サポートさせていただきます」

つまり十六夜、飛鳥、ツナ、耀（それまでに治れば）、そしてリーダーのジンで“ペルセウス”と戦うことになる。向こうも当然数の差を生かしたゲームを用意することだろう。

しかし、黒ウサギは不思議と負ける気がしなかった。
”ペルセウス”とのギフトゲームまで後一週間。 5

ギフトゲーム来る!

ツナ達の目の前にあるのは白い石造りの宮殿。今回のギフトゲームの舞台である白亜の宮殿だ。

ルールはゲームマスターであるルイオスを倒すことだが、ホスト側、つまりルイオスを除く“ペルセウス”のメンバーに姿を見られずにルイオスのいる最奥へと到着しなければルイオスの挑戦資格を失ってしまうというもの。

「つまり、ペルセウスを暗殺しろってことか?」

ペルセウスがメドウーサを睡眠中に暗殺したという伝説がある。立場は逆になるが、今回のゲームはそれを元に行っているのだろう。しかしルイオスも馬鹿ではない。戦いの最中に眠るなんてことはまずないだろう。

「誰かが困らなうて敵を引き付けないと難しいな」

この人数ならルイオスまでたどり着いた頃には二人残っていればいい方かもしれない。おまけに敵は不可視のギフト”ハデスの兜”を持っている。

「なら、機動力のあるオレが困になるよ」

メローネ基地へ潜入した時のことを思い出す。あの時はラル・ミルチが負傷して、代

わりに自分自身が囷となり、スパナがチューニングした高性能のモスカと戦ったのだ。

「いや、沢田の”超直感”と春日部の動物染みた五感は不可視の敵を撃破するために必要だ」

十六夜は作戦を立てるために前もってツナのギフトについて聞いていた。ツナと耀はこの戦いで大きな武器となる。ツナはオレンジ色の炎が目立つのはこの戦いで欠点だが、それは逆にツナに注目が集まりやすくなるということでもある。最初から囷として扱うのは得策ではない。

「それじゃあ消去法で囷は私ということかしら？」

「悪いなお嬢様。俺も譲ってやりたいのは山々だけど、勝負は勝たないと意味が無い。あの野郎の相手はどう考えても俺が適している」

少し不満そう声を漏らす飛鳥。だが、名前負けのルイオスであるが腐つても”ペルセウス”のリーダーであるのは変わりない。事実、飛鳥の”威光”はルイオスに破られてしまっている。それに今回、飛鳥は水樹を持参してきている。それを最大限に發揮するならば不特定多数を相手にする方がいい。飛鳥であればその能力を十二分に發揮できることだろう。それは飛鳥自身も分かっているはずなんだが不満なのは不満らしい。

「……まあいいわ、今回は譲ってあげる。ただし負けたら承知しないから」

飛鳥の言葉に飄々と肩を竦める十六夜。これで方向性は決まった。十六夜とジン

優先的にルイオスの元へ行かせるために他三人がサポートをすることになる。

しかし、黒ウサギはやや神妙な表情を浮かべながら不安を口にする。

「残念ですが、必ず勝てるとは限りません。油断しているうちに倒せねば、非常に厳しい戦いになると思います」

「……あの無能、それほどまで強いのか?」

「いえ、ルイオスさんご自身の力はさほど」

黒ウサギも案外毒舌だった。

問題なのはルイオスが隷属させている“元・魔王”。本来なら“ゴーゴンの生首”は戦神に献上しているのだから“ペルセウス”が持っている筈がない。なのに石化のギフトがあるのは、

「奴ら”ペルセウス”は星座として招かれたと推測できる。ならさしずめ、奴の首にぶら下がっているのは、アルゴルの悪魔つてところか?」

十六夜はこのことに既に気がついていた。ツナ達は首を傾げているが、黒ウサギは十六夜が自力で答えに辿り着いたことに驚愕している。十六夜は案外頭脳派だったようだ。



「そういえばよ、お前がつけてるそのヘッドホンは俺の真似か？」

「違うよー！」

飛鳥が水樹で暴れている間に他4名は宮殿内へと潜入に成功した。飛鳥がかなりの敵を引き付けてくれているお陰か、内部に残った敵はそれ程多くない。十六夜は先ほど耀が倒した敵から”ハデスの兜”のレプリカを奪って姿が見えない状態で、ジンは近くにあった木箱に身を隠している。

今はツナと耀の二人で来る敵を迎え撃ち、ギフトを奪う作戦に出ている。

「ははっ」

「何笑ってるの?」

ツナのつい口からでた笑いに耀は疑問を持つ。

「いや、こういう風に皆で戦うって久しぶりでさ」

最後に戦ったのは虹の代理戦争で復讐者ヴァインディチェのチームとの総力戦。今までの敵と力を合わせた戦いはツナにとっての大きな成長に繋がった。

「……皆で、か」

彼女は少し遠い目をしている。ツナには彼女が何を見ているかは分からない。でも少し寂しそうな表情をしている。

「来るぞー！」

ツナは死ぬ気丸を飲みこんで超死ぬ気モードになる。彼の“超直感”が敵の悪意を感じ取ったのだ。その声を聞いた耀も身構える。

「そこかー！」

ツナは目に見えない何かをその手で掴む。姿かたちは見えなくとも悪意を感じ取るボンゴレの“超直感”と骸や幻騎士、トリカブトといった凶悪な幻術使いと戦った経験は“ハデスの兜”のオリジナルであつても彼を欺くことはできない。

「ツナ、そのまま逃がさないで」

まるで気がついていなかった耀は一瞬驚いていたが、すぐに気を引き締め顔とかわしき部分を殴り飛ばした。手応えはある。耀に殴り飛ばされた敵は壁に叩きつけられた。

「くつ、”ハデスの兜”を見破ることができてる者が何故”ノーネーム”に……」

「姿を消すことができる敵とは何度か戦ったことがあつた。そのお陰でお前に気がつくことができた」

「見事だ……」

敵の騎士はそう言って気を失つた。姿を消していたから故の慢心だったのかもしれない。普通に戦えば苦戦は避けられなかっただろう。

「ツナ凄い。私、全然気がつかなかつた」

「まさかお前のいた世界つてここ箱庭みたくヤバイのがうじゃうじゃしてるんじゃないだろうな？ 羨ましいぜ」

「話は後だ。これで兜は二つ、少なくとも十六夜とジンはルイオスと戦うことができる」
ツナは騎士が落とした兜を広い、木箱に隠れているジんに手渡す。

「沢田はどうする？」

「ここに残って敵を迎え撃つ。オレは敵に姿を見られているからルイオスとは戦えない」

「安心しろ、お前のリングをみすみすあいつに渡させやしねえさ」
「任せた」

二人はそう言葉を交わし、十六夜は先を急ぐため宮殿の奥へと進んでいったのであった。足音からしてジンは十六夜の後を追いかけていっただろう。この場に残ったのはツナと耀だけだ。

「ここは私だけでも大丈夫」

「二人で戦った方が早い」

ツナは耀の申し出を却下。十六夜達が先へ向かってから直ぐに敵の団体がやってきた。姿が見えていることから敵は「ハデスの兜」のレプリカを持っている様子。向こうも不可視のギフトをいくつも奪われたらたまらないのだろう。

ツナと耀はこの敵軍をどう捌こうかと考えながら戦うのであった。



「これで最後」

耀が最後の敵を蹴り飛ばして相手方はほぼ全滅。不可視のギフトを持っている敵はあれから現れることはなかった。ツナはそれでも警戒して死ぬ気モードを解いていない。

「……そういえば、ツナのリングについて聞いてない。十六夜と黒ウサギは何か知っているみたいだった」

耀は少し恨めしそうな目でツナを睨んでいる。ツナとしてはマフィアについて等はあまり話したくないのだが。

「……終わったら話す。今は警戒しよう。それに罠をやってる久遠のことも気になる」

いつもの無表情がブスツとなる。捌ねているのだ。そのことがおかしくて少し笑ってしまう。仲間や自分の大切なリングを賭けた戦いだということを忘れてしまっただ。十六夜はもうルイオスの元へ辿り着いただろうか、もう戦いは始まったのだろうか。

——ツナは背筋が凍る感覚に襲われる。

「(何だ今のは!?) 春日部!!」

ツナは嫌な予感を感じ取って大急ぎで耀の元へと駆け寄る。そして耀を抱き寄せて大空の炎を最大出力にして自分自身と耀を包み込んだのだ。未来でスクアーロが雨の炎を盾にしてザクロの嵐の炎を防いでいたのを思い出し、直感でそれを行ったのだ。大空の炎の特性は調和、これであれば外からのどんな攻撃であつても調和して無効化することができる。しかしその分消耗も激しい。

「大丈夫か?」

「う、うん。急にどうし……嘘っ!」

顔を真っ赤にしていた耀だったが、何かに気がついて愕然とする。

「これは……」

ツナも周囲を見渡すと、先ほどまで神秘的な白い宮殿が灰色一色の死の世界と化しているのだ。”ペルセウス”の騎士達も、植物や水でさえも時が止まったこのように石となっている。

「……さつきまで聞こえてた声が聞こえなくなってる」

死の世界を見た耀は顔を真っ青にして震えている。ツナが気転をきかせなければ自分もこの仲間入りだったのだ。おそらく飛鳥も石になっているだろう。今も奥の方が

ら禍々しい気配が感じられる。こんな恐ろしいことができる化け物に勝てるのだろうか。

「ナッツ、春日部を守っていてくれ」

「ガウ！」

リングがら相棒のナッツが飛び出してくる。今のナッツはツナに影響されてとても気高いライオンへと変わっていた。耀はそのことにも驚いたが、それを自分に託したことに何より驚いた。

「ナッツと一緒に久遠の様子を見てきてくれ」

「ツナは、どうするの？」

「十六夜達の元へ向かう。ルイオスとは戦えなくても何かできることがあるかもしれない」

ツナのオレンジ色の目は奥を見つめている。耀には今の彼が何よりも頼もしく見えた。

「分かった。でも、無茶しないで」

——無茶しないで。

一瞬だが、耀の姿と未来で自分を見送ってくれた京子の姿が重なって見えた。

「ああ」

オレンジ色の炎をグローブに灯してツナは最奥へと飛ぶ、ツナの姿はあつという間に暗い奥へと消えていった。

あの禍々しい気配がするのはてっぺんからだ。急いでいたツナは一度外へ出てそのまま最上階を目指す。外からだと思つかりやすく、格好の的になる上にルイオスがいるのが最上階だとは限らないのでこの手段は使われなかったが、今はその心配をする必要はない。

辿り着いたツナが見たのはそこには薄気味悪いが荒れまくった闘技場のような場所に軽薄な笑みを浮かべる十六夜と驚愕し過ぎて唾然としている黒ウサギにジン、そして、戦意が枯れ果てたルイオスが地面に膝をつけて立ち尽くしていた。ルイオスの後ろにいる灰色の翼に体中に拘束具と捕縛用のようなベルトを巻いており、乱れた灰色の髪を逆立たせている怪物は元・魔王のアルゴールだろうか。

(杞憂だったか)

「おっ、沢田。無事だったのか」

飛んできたツナに気がついた十六夜は明らかにテンションダウンしている。思っていたほどの相手ではなかったのだろう。彼はほぼ無傷であることからワンサイドゲームだったと予想できる。

「そんな、バカな……いや、まだだ。まだ終わってない」

戦意を失っていたかと思っていたルイオスだが、何かを思い出したかのように自分を奮い立たせる。そしてポケットから何かを取り出した。それは紫色の石がついた指輪と、少し大きめのサイコロのような箱であった。十六夜は不審に思う。ペルセウスの伝説と指輪や四角い箱の関連性がすぐに思いつかないからだ。黒ウサギも同様に、ルイオスがあんなギフトを持っているなどと聞いたことがない。

だがツナはあれが何なのかを知っている。

(あれは匣^{ボックス}兵器! 何故ルイオスが持っている!?)

ルイオスは指輪をつける。紫色の石から純度は低いが紫色の炎が噴出し始めた。

「さあ、アルゴール! お前に新しい力を与えてやる。名無し共を押しつぶせ!!」

ルイオスは匣^{ボックス}に紫色の炎を注入し、それによつて開口する。飛び出した炎は壁に叩きつけられて気を失っているアルゴール覆い、アルゴールはその姿を変える。ツナのように額に紫色の炎を灯し、上半身は鎧のようなものを身につけ、下半身は完全に蛇と同じになった。もう完全に別の生物となったアルゴール。名づけるとすれば、雲^{クラウド}ゴーゴンが適当だろう。

「いいなあオイ! 面白い展開になってきたぜ!!」

「待て! 十六夜!」

ツナの声に十六夜がブレーキをかける。

「……お前はあれが何か知ってんのか？」

「ああ、やつ額の額を見る。死ぬ気の炎が灯っている」

「？ 死ぬ気の炎つてのはお前のオレンジ色だけじゃないのか？」

「済まない、詳しくは後で話そう。協力してやつを倒すのが先だ」

「ならさっさと終わらせてやるさ」

十六夜は地面を蹴って猛スピードで接近しようとする。だが雲ゴーゴンは口から大
小様々な大きさの雲へびを口から大量に吐き出して十六夜に襲い掛からせる。この程
度は十六夜にとつてももの数ではない、片っ端から殴り、蹴り、千切り、踏み潰し、次々
と倒していく。だが雲の炎の特性は“増殖”、倒されたへびの肉片は全て新しいへびに
再生して数を増やし、また十六夜へと襲い掛かる。

「なんだこりゃ!? キリがねえ!!」

このへびには、いや死ぬ気の炎には十六夜のギフトが通用しない。十六夜が保有して
いるギフト”コト・アンノウ正体不明”にはあらゆるギフトを無効化するという能力があるが、死ぬ
気の炎はギフトに類するが、明確に言えば生体エネルギーだ。いくら十六夜でも生命
力まで無効化することはできない。

このままではジリ貧だと悔しがりながら十六夜は後退する。だがへびの動きは止ま
らずにそのまま前進する。

その中でツナが十六夜の前に出た。

（何だ？ ツナの炎が消えた）

ツナの額に灯った炎とXグロブの炎が消える。その手で雲へビの大群に触れた。

「死ぬ気の零地点突破・初代エディション」
フエアスト

かつてジョットが使っていたとされる。死ぬ気の炎を正反対の力である“冷氣”によつて封じるボンゴレの奥義だ。雲へビの大群は徐々に凍つていき、その動きを完全に封じられる。

ルイオスは十六夜を手古摺らせたへビの大群をこうもあつさりと攻略したことに驚きを隠せなかったが、同時にツナのルール違反に気がついて指摘する。

「おい黒ウサギ！ 規約違反だ！ やつには僕への挑戦権はない」

そう、ツナは敵に見つかつてしまったことでルイオスへの挑戦権はないのだ。この状況にあつけにとられていた黒ウサギはルイオスの声にハツと我に返る。

「そうですね、確かにルイオス様とツナさんが戦うことはできません……」

黒ウサギは言葉を一端切る。見落としをしているのはルイオスの方であつたのだ。

「ですが、今ツナさんが戦っているのは元・魔王アルゴールが変質した敵とみなされません。よつてルイオス様の部下とみなされますので規約違反ではありません」

ツナはルイオスと戦いさえしなければいいのだ。十六夜や黒ウサギもこれに気がつ

X BURNER来る!

『了解シマシタ、ボス。』^{イクスバーナー} BURNER” 発射シークエンスヲ開始シマス』

ツナの声に連動してヘッドホンから機械音声が発せられた。そして右手を後ろへと向けて、柔の炎を少しずつ出す。ツナの目についているコンタクトディスプレイには上下に二つのゲージが見えている。その中心が捉えているのは雲^{スモーク} ゴーゴンだ。

ジンはツナが何をやるうとしてしているのかは分からない。黒ウサギにも分からない。だが彼が行おうとしているのは単純に強い炎を前へと噴出させることだ。

(成程、作用反作用の法則か。チツ、まだこんなモン隠してやがったのかよ)

ニュートンが見つけたとされる。ある物体が他の物体に作用を及ぼすとき、それとは逆向きで大きさの等しい反作用が常に働くというものだ。摩擦のない床でキャスター付き椅子に座ったまま前に向かってバスケツトボールを投げると椅子が逆の方向に進むという話が有名だ。

十六夜は炎を後ろへと噴出させることが支えの役割を果たすことを見抜いていた。それもあれ程の炎を後ろへ噴出するのであれば前へと放出する炎の量は計り知れない。

「はっ、真っ向勝負というわけか、無駄な足掻きを！」

ルイオスには目もくれず、ある程度柔の炎を出した辺りから、今度は左手の甲に剛の炎を充填し始めていた。

雲ゴーゴンも負けじとより砲撃を大きくするためさらにエネルギーを収束している。ここでルイオスは自分の力が急速に減っていくことに今更気がつく。雲ゴーゴンはルイオスがリングから発している炎を勝手に吸収しているのだ。

「お、おい！ 何をやっている！ 止めろ！」

雲ゴーゴンはルイオスの言葉に反応していない。やつはもう誰の制御も受け付けなくなっていてしまっている。ルイオスは恐くなってリングを引き抜いてそのままリングを投げ捨てた。

ツナは左手を前に出して剛の炎の出力をさらに上昇させていった。

（あれ、これはちよつと拙いのは……？）

ツナの後ろにいるジンや色々規格外の十六夜はまだしも黒ウサギは離れているとはいえツナと雲ゴーゴンの中間辺りにいる。直撃はせずともその余波は確実に喰らうこととなるだろう。それに気がついた黒ウサギは冷や汗を滝のように流し始める。

「た、退避——！」

黒ウサギも審判の仕事を放り投げてジンと同じくツナの後ろへと隠れる。それはきつとツナが勝つという願望の現われなのだろう。

「あががが……」

ルイオスは削り取られた闘技場と大穴が開いた観客席を見て、開いた口が塞がらない。雲ゴーゴンに力の大半を吸い取られ、さらにこの有様を目撃したこの男は完全に戦意喪失していた。

”ノーネーム”が”ペルセウス”に勝利した瞬間である。



「ふむ、よきかなよきかな」

傘下である”ペルセウス”が”ノーネーム”に倒されたというのに白夜又はご機嫌だった。それもその筈、ルイオスの行動には少々どころではないレベルでやりすぎている部分があったからだ。これを期に心を入れ替えて真面目に働くようになるだろう。

レティシアは無事”ノーネーム”へと正式に戻ることが決定。恩義を感じたレティシアは”ノーネーム”メンバー達のメイドとなることを買って出てしまったのだった。ちなみに十六夜：ツナ：飛鳥：耀：黒ウサギⅡ 2：2：3：2：1の取り分となつている。飛鳥の取り分だけ微妙に多いのはジャンケンの結果だ（ツナは最初から辞退していた）。黒ウサギはレティシアが戻って嬉しい反面、箱庭の騎士がメイドにジョブチェン

ジしたことを嘆いていたのだった。

「久しぶりに面白いものが見れたぞ。まさかおんしが死ぬ気の零地点突破ジヨツトの奥義を会得していたとおもわなんだ」

友人であるジヨツトは死んだが、その意思は生きてツナへと受け継がれていた。白夜叉にとつてそれを視認できたことほど嬉しいことはなかったのだ。彼女の今の気分は成長した孫を見ているようなものかもしれない。

ツナ本来の零地点突破はあれではないのだが、これはまたいずれ語られることがあるだろう。

雑談もそこそこにツナは本題に入るように促す。

「あはは……とこころで」

「ああ、おんしの言っていたリングと匣についてだな」

白夜叉は扇子を閉じて顔を引き締めてツナへ向き直る。

ツナが白夜叉の元を訪れたのはこのためだ。ルイオスは何故リングと匣を持っていったのかを彼女に調べて貰っていたのだ。リングも匣も使い捨て仕様だったのか砕けていて、もう使い物にならない状態だった。

「ルイオスに問い詰めたところ、ギフトゲームの三日前にローブを被った何者かに渡されたそうさ。声は女の者だったらしいが、音声変更のギフトや術でどうにでもなるから

宛てにはならん。何でも『アルゴールを最強の魔物へと変える最新式の兵器』だとか言われていたらしい。事実アルゴールは凶悪化して使い手でさえも制御できない状態であつたからその部分は間違いではなかつたのだろうな」

ローブを被つた何者か、もしくはそいつらを操っている者。そいつらがリングと匣をここへと持ち込んだ可能性が高い。

(「ここ」でやらなきゃいけないことが増えたな)

”ノーネーム”を立て直すだけでなく、自分の世界の技術を持ち込んだ黒幕を突き止める。そしてそいつがそれを悪用しようとしているのであれば全力で止めよう。

不安はあつたが、仲間がいる。それだけでも自分を奮い立たせるのには充分だつた。沢田綱吉とは元来からそういう男だ。

その日の夕方から、黒ウサギの提案で”ペルセウス”戦の祝勝会とレティシアが帰つてきた記念にパーティーが行われることになった。

”ノーネーム”もあまり食糧が潤沢にあるわけでもない。実際少し無理をしている方だとは思われるが、めでたいことだし、こういうのもたまにはいいことなのかもしれない。

黒ウサギが乾杯の音頭に子ども達が歓声を上げてパーティーが始まつた。

「さーて、説明してもらおうじゃねーか。ルイオスがアルゴールを強化したあれは何な

んだ?」

「ツナのリングのことも聞きたい」

「終わった話すつて約束だったわよね?」

「ちよつと待って! 順番に話すから!」

ツナは問題児三人から詰め寄られた。

「ガウ♪」

『おじよおおおおおおおおおおおおお!!』

耀はあれからナッツのことが気に入ってしまい今も撫で回している。ナッツも最初は怯えていたものの、だんだん気を許すようになった。そして三毛猫はいつもの定位置をナッツに奪われて泣いていた。

「どうやら耀の”生命の目録”^{ゲノム・ツリー}をもってしてもナッツの言葉を理解することはできなかった模様。あれはあくまで生物限定で匣アニマルには通じなかったようだ。

ツナは自分のリングのことから匣兵器のことについて、マフィアについてはできる限り避けながらも知っている限りのことを三人へと話す。

「地球をつくった基盤の石……スケールが大きすぎてちよつと……」

「一体どういう仕組みなんだこれは?」

「欲しいわね、その辺に落ちてないかしら?」

耀は流石にそこまで凄いものだと思っただけはいいなかつたようで、逆に戸惑っている。十六夜と飛鳥は匣兵器にとっても興味心身のようだ。それもその筈、天才と呼ばれたケーンツヒ、イノチエンテイ、そして元アルコバレーノのヴェルデの技術と偶然に偶然が重なって生まれた理論がきっかけとなつて作られたものなのだから。ここでもそれを欲しがりそうな輩はこの夜空にある星の数ほどいることだろう。

「問題は何でルイオスがそれを持つていたのか、なんだけど……」
「分からない、つてか」

十六夜の言葉にツナは頷いた。現状では手掛かりが少なすぎる。

四人で話していると、黒ウサギが大きな声を上げて注目を促した。

「それでは本日の大イベントが始まります！ みなさん、箱庭の天幕に注目してくださいー」

その場の全員が料理に手を伸ばす手や談笑する口を止めて満天の星空を見上げる。都市部ではお目にかかることはまずない綺麗な夜空だ。

空に輝く星々に異変が起きたのは、注目を促してから数秒後だった。

一つ星が流れた。

それは次第に連続し、すぐに全員が流星群だと気が付いて、歓声を上げた。

「凄い、流れ星だ！」

ツナも見事な流星群に歓声を上げる。

「この流星群を起こしたのは他でもありません。我々の新たな同士、異世界からの四人がこの流星群の切っ掛けを作ったのです」

「「え？」」

「どうやら今回“ノーネーム”に敗北したことで、“ペルセウス”は“サウザンドアイズ”から追放され、夜空に浮かぶあの旗印ペルセウス座も星々から降ろすことになったらしい。旗にはああいった種類のものもあるようだ。

とてつもなく大掛かりな事柄にツナ達は絶句する。ここ数日で様々な奇跡を目の当たりにした彼らだが、今度の奇跡は規模が違う。

「今夜の流星群は“サウザンドアイズ”から“ノーネーム”への、コミュニティ再出発に対する祝福も兼ねております。星に願いをかけるもよし、皆で鑑賞するもよし、今日は一杯騒ぎましょう♪」

ツナはこの見事な流星群を仲間達にも見せてあげたかっと思ふ。獄寺隼人、山本武、笹川了平、笹川京子、古里炎真、三浦ハル、ランボ、イーピン、クローム、そしてリボン。

周りの皆が笑いあっている中で、皆は今頃どうしているだろうか、それを思ったツナは少しセンチな気分になる。他三人と違ってツナは元の世界に残したものがあつたのだ。

「ふっふーん。驚きました？」

黒ウサギがピヨンと跳んで十六夜たちの元に来る。黒ウサギはしてやったりなドヤ顔をしていた。

「やられた、とは思ってる。世界の果てといい、水平に廻る太陽といい……色々と馬鹿げたモノを見たつもりだったが、まだこれだけのシシヨーが残ってたなんてな。おかげ様、いい個人的な目標も出来た」

「おや？なんでございます？」

「あそこに、俺達の旗を飾る。……どうだ？面白そうだろ？」

ペルセウス座が消えた夜空を指差し、十六夜は笑う。

黒ウサギも弾けるような笑顔でそれに賛同した。

（うん、寂しがつてなんていられないな……）

これからこの世界とは長い付き合いになるだろう。

ツナは自分に気合を入れ直すのであった。

『……………ツ……………どう……………ボン……………』

あら、魔王襲来のお知らせ？

火龍誕生祭来る！

あの”ペルセウス”とのゲームから約一ヶ月が経過。

あれから飛鳥がツナから奪った死ぬ気丸を飲んで筋肉痛で二週間程寝込んだことや、三毛猫がナッツを強襲して返り討ちにあつたこと、十六夜に暇つぶしにと模擬戦を挑まれることを除けば何事もない日々が続いていた。

十六夜たちはあれからもギフトゲームをしていたが、あの時のような刺激はしばらく味わっていない。ツナは刺激を求めているわけではなかったが、リングと匣を持ち込んだ者の手掛かりもなかなか掴めない。

そんな日々も今日この瞬間で終わりを告げた。

「北側の祭典の招待状？」

「ああ、そうだよ。俺もさつきお嬢様から聞いたんだけどよ。酷いよな。俺達頑張ってるのによ？ こんな楽しそうなこと秘密にされてただけぞ？」

ツナがヘッドホンの手入れをしていると、十六夜が突然現れて北と東の”階層支配者”フロアマスターが共同で行われる祭典。”火龍誕生祭”に一緒に行かないかと誘われたのだ。他二

人も既にこととは知っているらしい。

十六夜から手渡された手紙の内容を見ると、『北側の鬼種や精霊達が作り出した美術工芸品の展覧会及び批評会に加え、様々な主催者がギフトゲームを開催。メインは“階層支配者”が主催する大祭を予定しております』と記載されている。

「確かに楽しそうだけど、勝手に行くのはちよつと拙いんじゃない……」

勿論ツナだって祭りは好きだし、異世界の工芸品というのにも興味がある。彼だってまだ中学二年生なのだから当たり前だろう。

「その辺は問題ねーよ。うちのリーダーも快く同伴を引き受けてくれたからな。それにお前の知リたがっていることの手掛かりを北のフロアマスターが知ってるかもしれないだろ?」

十六夜はものすごくいい笑顔でそう言っていたが、皆とカフェテラスで合流して、実際にツナが見たのは拉致されて半泣き状態のジンだった。今回はいつもと違ってリリという狐の少女もついてきている。

「ツナさん、三人を止めてください」

「……………ごめん、無理」

「そんな……!!?」

今頃黒ウサギも問題児達の行動に気がついて、怒りのあまり絶叫していることだろ

う。

「それで、何かいいプランはねーのか？ 我らがリーダー」

「はあ、予想はしてましたけど……北側までの距離をご存知ないのですか？」

ジンはここから北側まで行くのに98万kmくらいの距離があると説明する。とても一日で行ける距離じゃない。ツナが休みなしで飛んでいつてもどれくらいかかるか分かったものではない。そこまで行くための“境界線”アストラル・ゲートを使おうにもそんな資金はどこにもない。

そんな中でツナはふと思いつく。

「白夜叉さんなら……」

とツナが言いかけるとジンの顔が青ざめて、その反対に十六夜、飛鳥、耀が「その手があった」みたいな顔をしている。

「ツ、ツナさん！ 何て余計なことを！」

「そうよね。主催者なんだし送ってつてくれてもいいわよね！」

「ツナ、賢い」

「そうと決まれば早速行こうぜ！」

一行はジンを引きずりながら「サウザンドアイズ」支店を目指すのであった。



「とういわけで招待者として北側まで連れてけやコラ」

「ちよつと十六夜君、それ人にモノを頼む態度じゃないでしょ!」

一行は“サウザンドアイズ”の支部まで来ていた。途中で割烹着の女性に阻まれたり、白夜叉がまたもやダイナミックな登場をしたりと色々あったが、無事に店内へと通された。

現在は十六夜が仁王立ちで喧嘩腰に頼み込んでいるのをツナが注意している。

「よいよい、まあ座れ。招待者としてそれぐらいはやるが少し話したいことがある」

「話したいこと?」

「本題の前に一つ聞く。”フォレス・ガロ”の一件以降、おんしらが魔王のトラブルを引き受けるとは真か?」

ジンを含んだ全員がその言葉に首を縦に振った。リスクは覚悟の上、無関係な魔王を引き付けても逆に隷属させてやると十六夜は言う。

それに対して白夜叉はしばし瞑想した後に、呆れたように笑いながら本題へと入る。

「うむ。実はその“打倒魔王”を掲げたコミュニテイに、東のフロアマスターから正式に頼みたい事がある。此度の共同祭典についてだ。よろしいかな、ジン殿?」

「は、はい！謹んで承ります！」

白夜叉はどこから話そうか迷いながらキセルで赤塗りの灰吹きをカンと叩く。

「北のフロアマスターの一角が世代交代したのを知っておるかの？」

——”階級支配者”とは箱庭の秩序の守護者であり、下位のコミュニティの成長を促す為に設けられた制度である。そして秩序を乱す天災・魔王が現れた際には率先して戦う義務があるのだ。

北のフロアマスターの一角”サラマンドラ”の頭首が急病によって引退。そしてその後を継ぐのが末の娘のサンドラだそうだ。ジンはまだ11歳の彼女が頭首の座についていたことに驚きを隠せないでいる。彼が”ノーネーム”のリーダーをやっているのは人材不足だったことが大きいから仕方ないが、”サラマンドラ”が”ノーネーム”と同じだとは到底思えない。

ここまで来て十六夜とツナはピンとくる。幼い少女がリーダーになることに反発する勢力もきつとあることだろう。だから同じ北のフロアマスターではなく東の白夜叉に協力を要請することになったのだろう。

「そう、神仏が集う箱庭の長でも思考回路は人間並みなのね」

白夜叉の言葉を聞き、飛鳥が不満そうに言った。

「うう、手厳しい。……共同でやる理由は他にもあるのじゃが」

その言葉を聞き、耀が口を開く。

「その話って長くなる?」

「ん? そうだな……短くとも後、一時間はかかるかの?」

「それまじいかも。黒ウサギに追いつかれるかも」

「え? 黒ウサギがどうかしたの?」

ツナは知らない。問題児三人が黒ウサギと追いかけてっことをしていることを。ツナを含めた全員を捕まえないと”ノーネーム”から出て行くという手紙を黒ウサギに渡したことを。

そしてジンが何か言おうとしたら飛鳥が”威光”を使って黙らせる。

「白夜叉、このまま北に向かってくれ。事情は追々話す。何よりその方が面白い。俺たちが保証する」

「ちよ、ちよつと待って!」「沢田もちよつと黙ってなさい」……!? ……!?」

ツナもジンと同じく飛鳥によって黙らされてしまった。何もかもがもう遅い。白夜叉も既に乗り気の状態で笑っている。

「そうか、面白いのか。ジンと綱吉には悪いが面白いなら仕方ないの?」

彼らを尻目に白夜叉は両手を前に出して二度拍手を打つ。

「ふむ。これで望み通り北側に着いたぞ」

「「はっ」」

「……は!? あ、やっと喋れるようになった」



外に出て、高台から町を一望する。

まず目に飛び込んできたのは北と東を隔てる天にまで届くような巨大な赤壁。そして遠目でも分かる色彩鮮やかなカットガラス。数多の巨大なランプが炎を灯し、挙句キャンドルが二足歩行で街を闊歩しているのが見える。昼間でありながらもまるで夕暮れのような色合いに染まった街並み。

東は和風な街並みであったが、北はどちらかというと中世ヨーロッパのそれに近い。

特に飛鳥は子どものように目を輝かせていた。

「今すぐ降りましょう！ あの歩廊に行ってみたいわ」

「ああ、構わんよ。続きは夜にでもしよう。暇ならこのギフトゲームにでも参加していい」

白夜叉が袖から取り出したチラシを全員に見せる。

それを覗き込んでいたら、何かが爆音と共に落ちてきた。

「ふ、ふふ、フフフフ……! ようおおおやく見つけたのですよ、問題児様方! そして見損ないましたよツナさん!」

そこには悪鬼羅刹の如き表情で怒る黒ウサギの姿があった。

「何!?! どういうことなの!?! 何か勝手に見損なわれてるし……!!」

「逃げるぞ」

「逃がすか!」

突然の事態にオロオロするツナ。飛鳥を抱き上げて逃走する十六夜。耀は逃げようとしたが一手遅れて黒ウサギにブーツを掴まれる。

今回ばかりはトサカにきた黒ウサギ。耀も身の危険を感じて怯えながら黒ウサギが耳元で囁いた言葉に頷いた。

着地した黒ウサギはそのままツナに向かって耀を投げつけた。

「きゃー!」

「うわっ!?!」

ツナは反射的に受け止めたが、勢い余ってそのまま後ろに倒れこむ。

「白夜叉様、そこのお二人の事をお願いします! 黒ウサギは他の問題児様をとらえて参ります」

「お、おお……よく分からんが頑張れ黒ウサギ」

白夜又は黒ウサギの勢いに負けておぼろげと頷く。そしてそれを確認した黒ウサギは十六夜達を追って全速力で走っていった。

「イテテ……大丈夫？」

「うん、ありがとう」

（柔らかかったな……って何考えてんだよオレ!?)

二人は今の状況に気がついて慌てて離れる。それを白夜又はニヤニヤと見つめていた。

「若いっていいの。私もあと10年若ければ……あんま変わらんか」

「茶化さないでくださいよ!」

「カカカツ、まあそう怒るでない。少し話したいこともあるし中へ入れ。茶くらい出すぞ」

白夜又に促されて先程までいたサウザンドアイズ旧支店まで戻る。

そこで耀は出された茶を啜りながらこの経緯を二人へと説明した。

（脱退とか聞いてないんですけどー!?!?)

「ふむ、なるほど。しかし脱退とは穏やかではない。ちよいと悪質ではないか?」

「一言、言えば良かったんじゃないかな? 黒ウサギだつてきつと分かってくれたと思っけど」

「ツナまで……で、でも黒ウサギもお金がないことを説明してくれたら、私達だってこんな強硬手段に出たりしなかった」

耀は珍しく拗ねたような口調で話す。要は信頼の問題なのだ。

「でもごめん、ツナにはちゃんと言わなきゃだつたかも」

「……うん、せめて次からはそうして」

ツナは乾いた笑いを浮かべてお茶菓子を取ろうとしたが、既に耀の胃の中に全て収まっていたようだ。

そんな談笑が続く中で白夜叉が爆弾を落とした。

「さっきから思つとつたが、おんしら付き合っておるのか?」

白夜叉の言葉に場が一瞬凍りつく。

そして真つ先に我に返つたツナが顔を真つ赤にしながら反論した。

「いや、何でそういう話になるんですか!？」

「仲が良いからもしやと思つておつたが、違つたか?」

「当たり前でしょう!」

「……そんな風に言われると傷つく」

耀はムスツとしながら残りのお茶をがぶ飲みしている。

「春日部さんも否定してよ!？」

「ほう……して？ 元の世界に女はいたのか？ ん？」

「それ凄く気になる」

「ちよつと！ 何でそんな話になつてるの!？」

ツナは女二人の迫力に圧倒されている。女二人と男一人で嫩るといふか。

ツナには彼女はいるが、想い人である笹川京子がいる。過去に二度死ぬ気弾を受けて告白しようとしたが失敗。昔と比べれば大分見直されているが、今もなお告白できずにいた。それに一方的ではあるものの三浦ハルという少女にも好意を持たれている。ダメとか言われつつも結構人気はあつたりするのだ。

焦つたツナはとりあえず話を変えようとする。

「そ、そういえば大きなギフトゲームがあるつてさつき言つてましたよね？」

「……まあ綱吉の女関係については今度改めて暴かせて貰うとして、そういえばまだ説明しておらんかったの」

そう言つて白夜叉は先程のチラシとそれとは別のチラシ。合計二枚のチラシを出してきた。

耀の前に出されたのは「造物主達の決闘」というギフトゲームについて記載されているチラシ。参加資格は創作系のギフトを所持していること。

ツナの前に出されたのは「生命の炎」というギフトゲームについて記載されている

チラシ。参加資格は炎系のギフトを所持していること。

戦いの内容はどちらもその都度決まるといふものだった。

「耀の”生命の目録”に綱吉の”死ぬ気の炎”。この二つの恩恵であれば力試しのゲー

ムも勝ち抜けると思うのだが……」

勿論勝者への恩恵は強力なものを用意していると付け足す。

ツナは白夜叉には普段からお世話になっているからと二つ返事で了承したが、耀はあまり興味なさそうであつた。

——だが、ふと何かに思い立ったようだ。

「ね、白夜叉」

「なにかな？」

「その恩恵で……黒ウサギと仲直りできるかな？」

幼くも端正な顔を、小動物の様に小首を傾げる耀。それを見たツナと白夜叉はやや驚いた顔を見せたが、次の瞬間暖かな笑みで白夜叉が答える。

「出来るとも。おんしがそのつもりがあるのならの」

「……そつか。それなら、頑張らなきや」

「うん」

ツナも優しい顔で耀の言葉に頷いた。

生命の炎と造物主の決闘来る！

十六夜と黒ウサギが追いかけてつこをして時計塔を盛大に破壊（主に十六夜が）して騒ぎを起こしている間にツナと耀は別の場所にいた。

メインイベントである二つのギフトゲーム“造物主の決闘”と“生命の炎”は同時進行で行われるようになっていて、現在は予選の真つ最中。景品のギフトが強力なものであるが故に主催の“サラマンドラ”や本拠を北の六桁の門に構える“ウィル・オ・ウイスプ”、その他多くの名のあるコミユニティの猛者達が互いのギフトを競い合っていた。

予選内容はゲーム盤の上を逃げ回るキャンドル（“ウィル・オ・ウイスプ”の提供）を、灯している火を消さずに相手より先に捕獲すること。ちなみに殺害さえしなければ相手への妨害も認められているので、相手の攻撃を避けながらキャンドル捕獲に専念するか、相手を倒してから悠々とキャンドルを捕獲するかの二つに一つ。

ツナは持ち前のスピードで相手を翻弄しながら着々に勝ち進んでいき、最終予選へとコマを進めていた。これに勝つことができれば明日は決勝戦だ。

「うわ〜、緊張するなあ」

コロッセオ内の隣では耀が自分の10倍は裕にあるゴーレムを蹴り倒して観客の歓声を浴びていた。決勝進出を決めたのは彼女の方が先であった。これはプレッシャーがかかる。

ツナの方は最初こそスピードでゴリ押しして勝つことはできたものの、徐々に苦しくなってきた感は否めない。向こうも伊達に場数はこなしてはいないのだ。

「始めよう」

死ぬ気丸を飲んでツナは戦闘態勢になる。

「でやっ！」

相手は炎を纏ったブーメランを飛ばしてきた。向こうは先にツナを倒してからキャンドルを捕まえる戦法の様だ。

ブーメランは速いが、ツナはXグローブでそれを容易く弾いた。

「掛かったな」

「何?！」

相手のブーメランがクンと曲がって戻ってくる。投げたブーメランが手元に戻ってくるのは別段おかしなことではない。異常なのは弾いたブーメランが回転力を取り戻して再びツナへと襲いかかってくること。

「くっ」

ツナは空へ逃げるもブーメランはあらぬ曲がり方をしてまたツナへと向かってきた。
(追尾してくるのか！)

ツナは避けても避けても追いかけて続けるブーメランを振り切ろうにもそれに集中してしまえば敵の思う壺。できる限り最小限の動きでブーメランを回避しつつ敵の動向も見なければならぬ。おまけにブーメランのスピードがだんだん上がってきていた。
「それじゃあそろそろ追加といこうか」

敵の手には今度は二つのブーメラン。形状からして先程の物と一緒だと考えていい。
「さあ、踊れ踊れ！」

炎のブーメラン二つはターンして戻ってきたブーメランを避けたタイミングでツナへと投擲される。一つ目は避けることに成功するも、もう一つは間に合わずに手刀で叩き落した。

「チツ」

相手は今ので仕留めるつもりだったのだろうか、舌打ちをしている。

今度は戻ってきた二つのブーメランがツナの方へ戻ってくる。

(二つ？ もう一つは何処へ？)

ツナが避けた方はそのまま敵の元へと戻っている。ツナはこれに疑問を覚えた。三つの内一つを手元に戻すことに意味があるとは思えない。

（何だ。何故あいつはそんなことを……？）

ツナは必死に頭を働かせる。そうして最初にブーメランを弾いた時に敵は「掛かったな」と言っていたのを思い出した。今自分を追尾しているのは弾いたブーメラン。それにはよく目を凝らすとツナのおレンジの炎が僅かにくっついてるのが見える。

「そうか！ オレの炎か！」

「チツ、もう気づきやがった」

ツナは敵の武器はブーメランに相手の炎を付着させてマーキングにする。そしてその主を延々と追尾するという特性を持っていることを暴いた。だから最初に避けた二つ目はそのまま敵の手元に戻ったのだ。

以前にも太猿が使っていた黒手裏剣ダークスライサーと少し似ていたのでそこまで辿り着くのにそれ程時間はかからない。

「まあ、もう遅いけどね」

今度は手元のブーメランを含めて合計6つ。それをツナを狙っているブーメランに向かって投げつけた。ぶつかって6つ全てにオレンジ色の炎が付着して計8つが全方向から取り囲むようにツナに向かって飛んでいき、衝突した。

「ヤってと……」

敵はゆっくりとキャンドルへ歩みを進めようと背を向ける。刺激さえしなければ捕獲は簡単なのだ。

「……何処へ行く気だ」

敵はギョツとして振り向いた。今のをそう簡単に避けられるわけがない。仮に幾つか避けられたとしても相当なダメージになった筈。

そう当たっていさえすれば。

「ナツツ、ありがとう助かった」

「ガウ♪」

ツナの肩に乗っているのは相棒のナツツ。そして下にポトポトと落ちていくのは石化した7つのブーメラン。最後の一つはツナが掴み、そして今握り潰した。

ブーメランを大空属性の特徴である“調和”で石にして炎ごと封じ込めたのだ。ちなみに石化は炎の効果なのでルール違反ではない。

動きを封じていたブーメランがなくなつたことでツナは思う存分に動くことができ。敵もこれは拙いと新しいブーメランを取り出したが一手遅かった。その頃にはツナの手にキャンドルがあつた。

その瞬間、観客席から歓声が上がらる。

「ふう」

ツナが一息つくくと、バルコニーの白夜叉が拍手を打って歓声がピタリと止まる。

「最後の決勝枠が今決まった。」造物主の決闘は、「ノーネーム」の春日部耀、そして「生命の炎」は同じく「ノーネーム」の沢田綱吉。決勝のゲームは明日以降の日取りとなる。明日以降のゲームルールは……もう一人の「主催者」にして今回の祭典の「主賓」から説明願おう」

そう言つて白夜叉はバルコニーの中心を譲る。

出てきたのは深紅の髪を頭上で結び、色彩鮮やかな衣装を幾重にも身に纏つた少女。まだ幼いと侮ること無かれ、彼女こそ此度新たに「階級支配者」として任命された者なのだから。

しかし年相応に緊張しているのだろう。白夜叉は先輩らしく優しく笑いかけて彼女の緊張を解していた。

「ご紹介に与りました、北のフロアマスター・サンドラードトレイクです。以降のゲームにつきましてはお手持ちの招待状をご覧ください」

(あの子が例の)

小さな少女の権力者。死を運命付けられていた大空のアルコバレーノである少女、ユ

二を彷彿とさせて複雑な気分だ。

「ツナ、おめでとう」

「あ、春日部さん。そつちもおめでとう」

二人は互いに決勝進出を祝いあう。これにて本日の大祭はお開き。

耀はナツツとじやれながら、ツナはそれを微笑ましく見つめながら、そして置いてきた筈なのに何故かいる三毛猫は男泣きしながら、二人と二匹は帰路に着いた。



サウザンドアイズの支店に戻ったツナ達は本日の疲れと汚れを洗い流すべく風呂に入った。そこはやはり男なだけに女性よりも入浴時間は短く、女性陣が出てくるまで男性陣は歓談している。ついさつき十六夜が女性店員に『この店はどうやって移動してきたのか』を聞いていたが、ツナは1%も理解できなかった。

「十六夜君つてもしかして学者とか目指してたりする？」

「……いや。というかそれ以前に将来の夢とか考えたことねーしな」

十六夜は確か高校生くらいの年齢だった筈だ。一体何処でここまで知識を得たのかをツナはとても気になった。

雑談をしていると湯殿から女性陣が上がってきた。

振り向くと皆、備えの薄い布の浴衣を着ており、ほんのり湯気が立っていて、髪は軽く拭いただけなのかまだ濡れてしっとりとしていた。

ツナは顔を少し赤くして目を背けたが、その反対に十六夜はマジマジと眺めている。

「……それにしても、コレはなかなかいい眺めだ。そうは思わないか沢田、御チビ様？」
「え？」

「（）つちに振らないでよ!？」

「黒ウサギやお嬢様の薄い布の上からでも分かる二の腕から乳房にかけての豊かな発育は扇情的だが相対的にスレンダーながらも健康的な素肌の耀やレティシアの髪から滴る水が鎖骨のラインをスウツと流れ落ちる様は視線を自然に慎ましい胸の方へと誘導するのは確定的にあ」

言い終わる前に二つの風呂桶が十六夜の顔に直撃してスコーンといい音を立てる。風呂桶を投げたのは顔を真っ赤にしている黒ウサギと飛鳥だ。そしてそれを受けてなお不敵な表情を崩さない十六夜には流石の一言を送る。

その中で耀はじつとツナを見ている。

「えつと、どうかした？」

ツナは直視こそしてないが、それでも気になるのかチラチラ見ている。

「……ツナも変態？」

「違うよ!!」



「さて、皆が揃ったところで第一回黒ウサギの審判衣装をエロ可愛くする会議を」

「始めません」

「始めます」

「断固始めません!!」

白夜叉の提案に悪乗りする十六夜。これでは話が全く進まないジンとツナは頭を抱えた。

「まあ黒ウサギの衣装の件についてはさて置いてだな。実は明日から始まる決勝戦の審判を黒ウサギに依頼したいのだ」

白夜叉が言うには、何でもツナ達が予選を行っている間の騒ぎのせいで月の兎がここに来ていえることが公になってしまい。皆が『明日のギフトゲームで“箱庭の貴族”を見ることができるとは？』と期待してしまっているらしい。ここまで期待されては出さないわけにもいなくなってしまうのだ。

別途の料金も支払うとのことで黒ウサギは快く承諾したが、新しい衣装については却下した。

「あ、そういうえば明日戦うコミュニティって何処なんですか？」

「それ、私も知りたい」

ツナと耀はふと思いい出したように白夜叉に明日の対戦相手を聞くが、詳しく説明するのは不公平だと言って指をパチンと鳴らす。すると空中に羊皮紙が現れ、そこに文字が浮かび上がる。

そこには決勝参加コミュニティが記されていた。それを見た飛鳥が驚きの声を上げる。

ゲームマスターに”サラマンドラ”。参加コミュニティに”ウイル・オ・ウイスプ”と”ラッテン・フェンガー”、そして”ノーネーム”。上二つはともかく”ラッテン・フェンガー”についてはツナもよく知らない。だが、どれも格上のコミュニティで油断は禁物。

羊皮紙を見ていた十六夜は何かについで笑った。

「へえ……」ラッテン・フェンガー”？ 成程、”ラッテン・フェンガー”ネズミ捕りの道化”のコミュニティか。

なら二人の相手はさしずめハーメルンの笛吹きつてところか？」

（ハーメルンの笛吹き？ 何だっけ……動物が音楽を奏でる話だったかな？）

ハーメルンの笛吹きは正式名称「ハーメルンの笛吹き男」。グリム兄弟等の複数の作者によってドイツの街、ハーメルンの災厄を記した民間伝承のことである。ちなみに現在ツナが想像しているのは「ハーメルンの笛吹き男」では無く「ブレーメンの音楽隊」。同じグリム童話の話ではあるものの話の内容は全く違う面白おかしい話だ。

「ハ、ハーメルンの笛吹きですか!?!」

「どいうことだ小僧。詳しく聞かせろ」

ツナが見当違いのことを暢気に考えていると突然黒ウサギと白夜叉が声を荒げた。

何でも「ハーメルンの笛吹き」という魔王コミュニティ傘下のコミュニティが実際にあつたそうで、そのコミュニティ自体は魔王が敗れたことでこの世から消え去つた筈だったのだ。だが、もし十六夜の話が正しいのであればまだ残党が残っているということになる。しかもその残党はこの祭りに潜んでいる可能性が高い。

明日の決勝で「ラッテン・フェンガー」が何か仕掛けてくるのではと皆が心配になつたが、白夜叉が前もって「参加者以外はゲーム内に入れない」や「参加者が主催者権限を使うことができない」といった決まりをつけていたのでとりあえずゲームの最中に魔王が襲つてきても「主催者権限を使うことはできない。だが、ツナは一抹の不安を感じ取っていた。

◆

次の日、日が昇りきり、開催宣言の為に黒ウサギが舞台中央に立つ。黒ウサギは胸一杯に息を吸うと、円状に分かれた観客席に向かって満面の笑みを向ける。流石にメインイベントである決勝戦を同時進行にするわけにはいかないのでツナの決勝戦は“造物主の決闘”の後に行われることになっていた。

『長らくお待ちいたしました！ 火龍誕生祭のメインギフトゲーム・”造物主達の決闘”の決勝を始めたいと思います！ 進行及び審判は“サウザンドアイズ”の専属ジャッジでお馴染み、黒ウサギがお務めさせていただきます♪』

「うおおおおおおお月の兎が本当にきたああああああああああああ!!」

「黒ウサギいいいいいい！ お前に会うため此処まできたぞおおおおおおお!!」

「今日こそスカートの中を見てみせるぞおおおおおおお!!」

観客（主に男）は喉が壊れんばかりの熱裂な声援を発して、地震でも起こったかのような揺れを引き起こす。中には『L・O・V・E 黒ウサギ♥』と書かれた旗を持っている者もいた。

そんな男達を社会のゴミでも見るような冷めた目で観客を見下ろす飛鳥。彼女はただ娯楽の少ない戦後であったが故のギャップを感じ取っていた。

リリを挟んだ隣では黒ウサギのスカートの中身について熱く語り合っている十六夜と白夜叉がいる。馬鹿二人は顔を見合わせ領きあった。そして何処に隠していて、何時持っていたか分からない双眼鏡を取り出し黒ウサギのスカートの裾を目で追う。

「あ、あの〜?」

「見るな、サンドラ。馬鹿がうつる」

「はあく。もうすぐ春日部さんと沢田の試合が始まるっていうのに……」

飛鳥は呆れながら馬鹿二人を空気と思うことにしたのだった。

ここにいないツナと耀は観客席から見えない舞台袖にいる。レティシアやジン、そして三毛猫も一緒だ。耀はジンから対戦相手の情報を聞いている。

「——ウイル・オ・ウイスプ」に関して、僕が知っている事は以上です。参考になればいいのですが……」

「大丈夫。ケースバイケースで臨機応変に対応する」

どこかで聞いたような返答に苦笑するジン。

本当であればパートナーを一人まで参加させても良いのだが、耀はそれを拒否。ツナも別の戦いがあるのでパートナーとして参加することは出来ず、かといってナッツを貸

そうにもナッツはギフト扱い。登録されていないギフトは使用することはできないので
×。

「あんまり無理はしないでね」

「……うん、いつてきます」

耀の決勝戦が始まった。

ハーメルンの笛吹き来る！

”造物主の決闘”の決勝戦の舞台に用意されたのは巨大な樹木の根に囲まれた迷路。ギフトゲーム名“アンダーウッドの迷宮”が開始された。

耀の対戦相手は“ウイル・オ・ウイスプ”のプレイヤー、アーシャ・イグニファトウスと彼女の作品と思しきジャック・オー・ランタン。

耀は相手の攻撃が天然ガスを発火させたモノだと素早く見抜き、そして持ち前の鋭い五感でゴールを見抜くこともできて途中までは有利に進めることができた。

しかし、先程まで彼女の付き従っていたジャック・オー・ランタンが喋り出す。てつきりアーシャが操っていたものかと思えばそういうわけではなかった。やつは先行していた耀の目の前に突然現れて行く手を遮る。そして敵プレイヤーであるアーシャに先を越されたしまった。

実はこのジャック・オー・ランタンこそ耀が警戒していた“ウイル・オ・ウイスプ”リーダーであるウィラザイグニファトウス製の大傑作。世界最古のカボチャ悪魔、ジャック・オー・ランタンだったのだ。

ジャックは耀のギフトの正体すら見破り、おまけに不死の怪物。

耀は今の自分に勝ち目はないと悟ってリタイヤを宣言した。

「一つお聞きしても?」

割れんばかりの歓声の中で、ジャックは穏やかな声音で耀に問う。

「このゲームは一人だけ補佐が認められています。同士に手を借りようとは思わなかったのですか?」

耀はその問いに一瞬戸惑って、そしてステージの端っこにいるツナに目を向けた。

最初は頼りなさそうに見えたあの少年に前回のギフトゲームで二回も助けられたが、自分は彼に対して何か助けになるようなことは何もできなかった。

「……私一人で勝ちたかったから」

「それが悪いことであるとは言いません。しかしこうは思いませんか? 『今回誰かがサポートに居ればその誰かに私の手をさせて自分が先へ行くことができ、勝つことができました』……と」

(確かに、ツナだったら)

彼なら例え不死の怪物相手だったとしても耀がゴールするまでの時間を稼ぐくらいきつとやってのける。

「今回の様に、コミュニケーションで生きていくうえで誰かと協力するシチュエーションというのは多く発生するものですよ」

「……助けられてばかりで辛いつて思ったら？」

「ならその分だけ助けておあげなさい。どれ程強くても、どれ程賢くても、一人で物事を行うのには限界があるのです。例えば愛しの彼だつてそうでしょう」

ジャックが顔を向けたのはツナ。向けられた本人は少しビビっている。

顔がカボチャをくり抜いただけにしか見えないが、もしジャックが人間であればきつとニヤニヤ笑っていることだろう。

「くっつ!? ツ、ツナとは別にそういう関係じゃ」

「おやおや? 別に誰かとは言っておりませんけどね……つと少々下世話が過ぎましたか。何せカボチャなもので、ヤホホ!」

「おい、オマエ! ……何で顔真つ赤にしてんだ?」

アーシャの指摘に穴が入ったら入りたい気分になった耀であった。



「えっと、お疲れ。残念だったね」

戻ってきた耀に対して労いの言葉を掛けるツナ。耀は冷静さを取り戻すのに少しかかったがとりあえず顔色は普通の筈だ。

「ごめん、負けちゃった」

「仕方ないよ二対一だし」

ジンとレイシアも労いの言葉を掛けようとしたが、空気を読んで一步さがった。

「お疲れ様でした耀さん」

審判をやっていた黒ウサギは舞台を降りて様子を見に来たようだ。

「次はツナの番、頑張って」

「うん……うん?」

気づいたのはツナだけではない。上空から雨のように降ってくる黒い契約書類ギアスロールに顧客も徐々に気がつき始める。

「こ、これって!」

ギフトゲーム名” The P I E D P I P E R o f H A M E L I N ”

プレイヤー一覧、現時点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇外門・境界壁の舞台
区画に存在する参加者・主催者の全コミニティ。

プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター、太陽の運行者・星霊、白夜叉。ホストマスター側勝利条件、全プレイヤーの屈服・及び殺害。

プレイヤー側勝利条件、一、ゲームマスターを打倒。二、偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。

宣誓、上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

”グリムグリモワール・ハーメルン”印

何気なく手に取った書類の内容、これに書かれていた内容に5人は驚愕した。

——いや、4人だけではない。

「魔王が……魔王が現れたぞオオオオオオオ!!」

爆弾が弾けたような叫び声は連鎖してさらなる恐怖と混乱を呼び込み、会場内は大混乱に陥った。さらにバルコニーでは白夜叉が黒い風に包み込まれて近くにいた者達は吹き飛ばされる。

飛鳥を抱えて舞台上に着地した十六夜も神妙な顔つきをしている。

「魔王が現れた……そういうことでもいいんだな?」

「はい」

十六夜の問いに対して真剣な表情でそれに答える黒ウサギ。

「白夜叉の”主催者権限”が破られた様子は？」

「ありません」

魔王の襲来を知っていた彼女は己の”主催者権限”を用いて防衛策をとっていた。内容は『主催者権限を持つ者は参加者となる際に身分を明かさなければならぬ』『参加者は主催者権限を使用することが出来ない』『参加者でない者は祭典区域に侵入出来ない』の三つ。

黒ウサギがいる限り誤魔化しはきかない。となると、魔王はこのルールに則った上でゲーム盤に出現しているということだ。

「さすがは本物の魔王様、期待を裏切らねえぜ」

軽薄に笑ってはいるものの、言葉の内容とは裏腹にその目にいつもの余裕を感じられない。

「ここで迎え撃つ？」

「ああ……だが全員で迎え撃つのは具合が悪い。」サラマンドラ”の連中も気になる」

十六夜は守勢に回るような性格ではないが、相手にこうも先手を打たれた以上、どうしても後手に回るしかない。

ここは役割分担をすることとなった。

十六夜、ツナ、レティシアで魔王に備え、黒ウサギはサンドラを始めとした”サラマンドラ”の者達を探しに、そして残りのメンバーで白夜叉の所へ向かうこととなった。

「ねえ見て！」

耀が指を差した先には上空から三つの人影が会場内に降りているのが見える。

「準備はいいか？ 俺が黒いのと白いの。二人はデカイのと小さいのを任せる」

「え!? ちょ、十六夜君!!」

十六夜は言い終わるとツナの答えを待たずに地面を砕く勢いで人影へ跳躍して行った。

「……大丈夫かなあ？」

「主殿なら問題なからう。こちらも行こうか主殿」

レティシアはメイドになったことでツナ達のことを主殿と呼ぶようになっていた。ツナは止めてくれと言っても彼女には彼女の矜持があるようだ。

ツナは死ぬ気丸を飲んで超^{ハイパー}化し、レティシアは羽を広げて猛スピードで十六夜の後を追った。

そこにいたのはあまり趣味が良いとは言えない黒い斑模様のワンピースを着た少女と白い陶器の巨兵。

「BRUUUUUUUUUUUM!!」

巨兵は空気を吸い込んで奇声を上げながら暴風を巻き起こした。

「ナッツ頼む!」

「ガウ! G Y A A A A A A A A!!」

ナッツの咆哮によって白い陶器の巨兵は周りと同じ石となった。しかしそれでも構わずまた空気を吸い込んでいる。

「へえ」

その様子を感じしたように見つめるワンピースの少女。巨兵は石化した際に脆くなり、空気の圧力に耐え切れず、ポロポロと崩れ出す。

「やるじゃない、こっちはもうあっさりとしゅトロムを倒すなんて。良い手駒になりそう……ああ、やっぱりそのオレンジ色の炎は気に食わないから要らないわ」

仲間をやられてもその無表情は微笑へと変化しました無表情へと戻る。少女への不気味さだけが増していった。

「嵐か。気をつける主殿、あの少女も天災に関連する悪魔かもしれない!」

「ああ」

神格を失ったレティシアだが、彼女も幾度のギフトゲームを乗り越えてきた経験がある。敵の名前が勝利の鍵となりえることも心得ていた。

「お前がハーメルンの魔王か?」

「いいえ、違うわ。私のギフトネームの正式名称は、ブラック・パーチャー黒死斑の魔王^よ」

つまり目の前の少女を含めて魔王が二人いる。それは十六夜が戦っている二人のどちらかかもしれないし、先程破壊したシウトロムかもしれない。最悪のケースは今ここにハーメルンの魔王がいないことだ。

「中々強いようだけど、これはどうかしら?」

少女から発せられる白夜叉を閉じ込めたのと同じ黒い風。

——これはダメだ。触れてはいけない。

「X BURNER!!」

危険を感じ取ったツナが放つチャージ無しのX BURNER。威力は高くなくともそれは黒い風を大空の炎の特性である”調和”で飲み込んで消し去った。

「黒い風あれを消し去った? ——チツ!」

黒死斑の少女は後ろから来た紅い閃光に気がついてそれを回避する。この閃光の正体を少女は容易に察していた。これは彼女が待ち望んだ北のフロアマスター、サンドラの一撃だと。ただ、予測していたのにツナの炎に気を取られたせいで反応に一瞬遅れてしまった。

「名前を聞いてもいいかしら? ああ、その男のことよ」

少女は気になった。自分を不愉快にさせるオレンジ色の炎を使う少年のことを。

「沢田綱吉」

「そう」

「オレからも一つ聞きたい。何でこんなことをするんだ？」

黒ウサギは『魔王は天災のようなもの』だと言っていた。もしかしたらこの少女も何の理由もなくここを襲っているのかもしれない。

「その二人は予想がついてるだろうし、隠すことでもないから教えてあげる。太陽の主権者である白夜叉の身柄と、星海龍王の遺骨。つまりその”サラマンドラ”の頭領がつけてる龍角が欲しいのよ」

「成程、流石に魔王を名乗るだけあってふてぶてしい」

雑談は終わり、黒死斑の少女は再び正体不明の黒い風を噴出させ、ツナ、サンドラ、レティシアは身構える。

この一触即発の空気を一つの雷鳴が制した。

『ジャッジ・マスター審判権限』

D P I P E R of H A M E L I N”は一時中断し、審議決議を執り行います。プレイヤー側、ホスト側は共に交戦を中断し、速やかに交渉テーブルの準備に移行してください！ 繰り返しします』

拡張された黒ウサギの声が全域に響き渡る。

その本人は宮殿の屋根のてっぺんで金剛杯ヴァージュラを掲げていた。

「フン、悪あがきね。まあいいわ」

少女はそう吐き捨てて先に行ってしまう。

「ふう。レティシア、こういった場合はどうなるんだ？」

ツナはゲーム経験が浅いのもあり、こういった不測の事態にはそれ程詳しくないというのが痛い。

「黒ウサギの指示に従って中断し審議が行われる。向こうに違反があればこのゲームを即刻終わらせることもできるが、ヤツの自信を見る限りそう容易くいくとは思えない」



「あの、大丈夫ですか白夜叉さん？」

「大丈夫に見えるか？」

「……すいません」

十六夜達が”ハーメルンの笛吹き”との審議の最中、ツナは白夜叉の様子を見に行っていた。白夜叉は黒死斑の少女が見せた黒い風と全く同じものに囲まれてそこを動けないでいる。現在は暇そうにバルコニーで寝転がっていた。

「おんしのX BURNERとかいうやつでバーンと壊せないか？」

「いやいやいや白夜叉さんも一緒にバーンってなっちゃうでしょ!？」

そもそもこの封印が力任せで壊せるのなら白夜叉自身がそうしている筈だろう。

白夜叉は伸びをしながら身体を起こした。

「私を封印した方法に検討はついているが、どうやら言動にまで制限が掛けられているようだ。何とまあ用意周到なやつらだよ」

白夜叉が言い残すことができたのは『故意に説明不備を行っている可能性が高いこと』そして『敵は新興のコミュニティであること』の二つ。

「私のことはいいからお前は休んでいろ、いつこのゲームが再開されるか分からないのだからな」

「でも……」

「ふふっ、異様なくらい御人好しなのもヤツジョット譲りか」

昔を思い出した白夜叉は懐かしむように笑う。

だが、直ぐに真剣な表情になった。

「綱吉。おんしと十六夜、そしてサンドラが戦力の要だ。それを忘れるな」

「はいー!」

（良い目をしている。逆境でも諦めずに立ち向かう男の目だ。さてはこういつた状況を

何度か経験しているな。いつか酒でも飲みながら話を聞きたいものだ。

そんなことを考えながら白夜又はまた寝転がる。

「……早く行かんか」

「え？ あ、はい。……絶対に助けます」

「期待しておるよ」

ツナの本質来る！

交渉はハーメルン側に優位に働いている。黒ウサギが確認したところ、今回のギフトゲームに何の不備もないことが発覚したのだ。勝利条件も参加者でありながら封印された白夜叉についても何も不当なことはなかったのだ。

この異議申し立ては魔王側にとつて予想通り。そしてこの審判決議が彼女等にさらに有利な条件を整える材料となった。

必要条件を揃えた上で有利に進めていたゲームを不当に中断されたのだ。当然である。

「ここにいる人達が参加者側の主力と考えていいかしら？」

言葉を発したのは黒死斑ブラックバードの魔王のペスト。十六夜とジンは既に彼女の正体を見破っていた。

軍服の男ヴェーザー、布の面積が少ない白装束を身に纏う女ラッテン、そしてツナが倒した巨兵シウトロム。

”ハーメルンの笛吹き男”の伝承で子ども達が亡くなった原因にはヴェーザー川で溺れ死んだ、嵐による土砂崩れにより死亡、そして当時、鼠が原因で起こった流行り病

である黒死病^{ペスト}で死んだという説がある。

彼女のギフトが黒死病を発生させるものであれば早くて二日で発病してしまい、再開の日取りの最長である一ヶ月など待っていたら全滅は免れない。

「いや？ 生憎もう一人は白夜叉が心配だつていうのと話し合いには向いていないつていう理由でここには来ていないぜ」

ペストの疑問に答えたのは十六夜であつた。

「沢田綱吉……ね」

「へえ、そいつはどうだったんだ。マスター？」

「シウトロムが一撃で破壊されたわ」

ヴェーザーは「ほう」と感心したような顔を見せて、ラッテンは笑いながら指先で銀色の笛を回している。彼女の能力からして操り人形にでもしようと企んでいるのだろう。

「それなら提案しやすいわね。この場のメンバー全員……それと白夜叉が”グリムグリモワール・ハーメルン”の傘下に降るのであれば他のコミュニティは見逃してあげてもいいわ」

「あら？ そのサワダつて子はいいの、マスター？」

シウトロムを破壊した。それなら逸材としては申し分ないのではないかと疑問に

思ったラッテン。ヴェーザーも特に何も言っていないが、内心ではそう思っているだろう。

「いらないわ、不要よ」

「そ、そう？」

ラッテンの意見をあつさり却下するベスト。

黒死病の死の怨念すらも飲み込んで調和してしまったあの炎を彼女は嫌う。彼女は彼を見たことがないがあのおレンジ色の炎を知っていた。それは彼女を召喚しようとしていた者の禍根なのかもしれない。

ギフトゲーム名 The PIED PIPER of HAMELIN”

プレイヤー一覧、現時点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇〇〇・境界壁の舞台区画に存在する参加者・主催者の全コミュニティ（箱庭の貴族）（今回は黒ウサギのことを含む）。

プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター、太陽の運行者・星霊、白夜叉（現在非参戦のため、中断時の接触禁止）。

プレイヤー側・禁止事項、自決及び同士討ちによる討ち死に。休止期間中にゲームテ

リトリリー（舞台区画）からの脱出を禁ず。休止期間の自由行動範囲は本祭本陣営より五百メートル四方に限る。

ホストマスター側勝利条件、全プレイヤーの屈服・及び殺害。八日後の時間制限を迎えると無条件勝利。

プレイヤー側勝利条件、一、ゲームマスターを打倒。二、偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。

休止期間、一週間を相互不可侵の時間として設ける。

宣誓、上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

”グリムグリモワール・ハーメルン”印

以上が改正の内容である。

一週間後にすべては決まる。



交渉から二日が経過し、黒死病を発病した者が徐々に増えて来ている。発病した者や発病の疑いのある者は感染者を増やさないために施設に隔離する等の対応を取っているが、このペースで増え続ければ施設は足りなくなってしまうだろう。

昔は不治の病と言われた黒死病だが、現在では特效薬が開発されている。しかし、人数分の薬があるわけでもなく、ここがゲーム盤の上になってしまっている以上、外界から薬を仕入れることもできない。

ツナは現在、レティシアや耀と共に病人の看病を行っている。感染を避けるために直接の接触は避けているが、医療品の配達や食品の配給のようにできることは幾らでもあ

る。
飛鳥はこの場にはいない。ラッテンとの戦いの際にジンや耀を逃すために囷になり、攫われてしまったからだ。向こうが新興のコミユニティ故に新しい人材を欲しがっていることから殺されることはまずないだろうがツナや耀は樂觀視できなかった。

特に耀はあの場にいたのにまた守られてしまったと後悔している。

「ねえ、少し休んだら？」

「だ……大丈夫」

耀の様子がおかしい。彼女も十六夜や黒ウサギ程ではないにせよ体力がある方だ。なのにさつきから顔を真っ赤にしながら変な汗をかき、肩で息をしている。昨日はそう

でもなかったが。

「……ちよつとごめん」

「な、何を」

ツナは自分の掌を彼女の額に当てる。

——酷い熱だ。

「レティシア！」

「分かった、すぐに部屋を用意する！ すまないが主殿は耀を頼むぞ！」

ツナは頷き、レティシアは駆け出していった。

「大丈夫……だから」

「全然大丈夫じゃないでしょ。ホラ、横になって」

ツナは半ば無理矢理耀を寝かせることにした。

「私も……戦いたい。……皆の力になりたい」

確かに耀はまだ動けるが、ゲーム再開まで後5日もある。これから悪化していくことを考えると到底参加できるとは思えない。

「ダメだ、そんな状態で戦えないよ。病気を治すのが先だ」

ツナは頭が良い方ではないが、それくらいのことには容易に想像がついた。だから彼も譲らない。

「それでも戦いたい」

「ふざけるな!!」

ツナの一喝に耀は身体をビクリと震わせる。戦い以外でこのように大きな声を出すのは始めてみるかもしれない。

「何のために戦うと思ってるんだよ!」

「え——」

今の耀は嵐の守護者戦で何が何でも勝とうとしていた獄寺に良く似ていた。確かにまだ付き合いは浅いけれど、十六夜も飛鳥も耀も黒ウサギもジンもレティシアも、そして”ノーネーム”の子ども達もツナの大切な仲間だ。

「また皆で笑っていたのに、君が死んだら意味ないじゃないか!!」

ツナの真剣な顔に気圧されて耀は何も言えない。

「ごめん……なさい」

やっと彼女が搾り出した言葉は彼への謝罪の言葉だった。



ゲーム再開前日になっても十六夜はゲーム攻略の目処が立っていない。

気晴らしにと彼は耀が休んでいる個室に来ていた。

『偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ』。つまり偽りの伝承が描かれたステンドグラスを砕いて真実の伝承が描かれたステンドグラスを掲げる。ここまでは彼も辿り着いた。

”ハーメルンの笛吹き”は展示物を通してこの祭りに参加していたのだ。

問題は神隠しラッテン、暴風シュトロム、地災ヴェーザー、黒死病のどれが偽りの伝承か、だ

「十六夜はどれが偽者だと思ってる？」

十六夜は「黒死病だ」と即答した。

『《ラッテン》、暴風シュトロム、地災ヴェーザー、どれもが刹那的な死因だが、黒死病だけが長期的な死因として描かれている。』ハーメルンの笛吹き”は1284年6月26日という限られた時間で130人の生贄が死ななければならぬんだ」

発病にばらつきのある黒死病で一度に130人も人間が死ぬなんてまずありえない。だからペストは”ハーメルンの笛吹き”ではない。

なら彼女を倒してしまえばいいのだが、それだともう一つの勝利条件とかぶってしま

う。

「そっさいえばツナはどうしてるの？」

自分のことを論してくれた彼が気になつてきり気なく十六夜に尋ねてみた。でも十

六夜は見抜いていたようで一瞬ニヤツと笑う。

「沢田か？ あいつならそこら辺の手伝いと、白夜叉をどうにかして助けられないかを考えてるぜ」

「そういえばどうやって封印したんだろうね。夜叉を封印するような一文がハーメルンにあるのかな？」

「まさか。夜叉はどつちかついていや仏神側だ。それに白夜叉は正しい意味の夜叉じゃないらしい。本来持つてる白夜の星霊の力を封印するために仏門に下つて霊格を落とすてるんだと」

「本来の力？」

「ああ。なんでも白夜叉は太陽の主権を持つているらしい。太陽そのものの属性と、太陽の運行を司る使命を——」

そこで急に十六夜の言葉が途切れる。手にしていた本を物凄いスピードで読み返すと、今度は顎に手を当てて数分黙り込む。

「そうか、これが白夜叉を封印したルールの正体か。なら連中は1284年のハーメルンじゃなく……ああ、くそ。完全に騙されたぜ」

独り呟いては納得していく十六夜。

「ナイスだ春日部。おかげで謎が解けた。あとは任せて枕高くして寝てな！」

「そう。頑張つてね」

耀はよく分からなかったが、あの様子だと十六夜は何かヒントを掴んだようだ。本当にどんな頭の構造をしているのだろうかと気になりながらベッドの中に潜り込む。

『あの小僧……本当に信用して大丈夫なんかなあ、お嬢』

「大丈夫だよ。彼はああ見えて仲間想いみたいだし」

ツナが言っていたように、きつとまた皆で笑っていられるだろう。自分が今できることは病気を治すことだ。

「ナッツ、元気にしてるかな……」

『おじよおおおおおおお!!?』

かりいいいいいい!!』

病気が治つたら思いっきりナッツと遊ぼうと思う耀と男泣きする三毛猫であったとさ。



ついにあれから一週間。この夕暮れ時にまもなくゲームが開始される。

ここに集められたのは参加資格を持ち、かつ黒死病が発病していない者。僅か500

名ほどで全体の二割にもならなかった。

ざわつく観衆の前に、やや緊張した面持ちのサンドラが毅然を装い声を張り上げる。

「今回のゲームの行動方針が決まりました。サンドラ兄様、お願いします」

傍に控えていたマンドラが読み上げたのは簡単に言うのと、「サラマンドラ」とジンが率いる「ノーネーム」がペスト、ヴェーザー、ラッテンの相手をして、その他はステンドグラスを搜索し、指揮者の指示に従って破壊、もしくはは保護するという内容であった。その一方で、黒ウサギと十六夜はその様子を宮殿の上から見下ろしていた。

黒ウサギは後悔していた。

魔王に襲われ、もしくははコミュニケーション存続を賭けたゲームに負けて、親を失い雖も全滅することなど箱庭ではざらだ。だから彼女がそれ以上に悔んでいるのは十六夜達のこと。

以前白夜又は飛鳥と耀に『魔王のゲームの前に、力をつける。お前達の力では——
—魔王のゲームを生き残れない』と忠告をしていた。

黒ウサギはその忠告を軽んじた結果、飛鳥は敵に捕まり、耀は病に侵されてしまった。自分はその責任を取るべきだと。

「十六夜さんお願いがございます。聞いていただけますか？」

「聞くだけなら」

「魔王の相手はこの黒ウサギに任せていただけないでしょうか」

彼がどれほど魔王との対決を望んでいたかは知っている。その上で譲って欲しいと彼女は口にした。

「勝算は？」

「あります。いえ、たとえ無くても、相討つてでも」

「それ、あの底抜けの御人好しが聞いたらブチ切れるだろうぜ」

「え？ ツナさ」

黒ウサギが喋ろうとしたのを唇を押さえて止めて、呆れたように笑う。

例え黒ウサギが犠牲にならずとも勝てる算段は充分ある。今回のゲームはタイムリミットつきだ。そして向こうの目的は人材の確保。であればタイムオーバーを狙って消極的な動きをせざるを得なくなる。

「黒ウサギ。まずサンドラと黒ウサギ、それとツナの三人で確実にペストを抑える。その間に俺とレイシアでラッテンとヴェーザーを倒す。主力が集まったら黒ウサギの切り札でペストを倒す。——これがまあ最善だな」

十六夜の具体的な作戦案に目を輝かせる黒ウサギ。

「ですが、十六夜さんはそれでいいのですか？」

「別に構わねえよ。魔王と戦う機会はまたある。帝釈天の眷属の力つてやつを今回は楽

しませてもらうさ」

「YES! 帝釈天様によって月に導かれた”月の兎”の力。とくと御覧くださいまし。……とここで」

「?」

「ツナさんはどちらに? そろそろゲームが始まる頃ですが」

「トイレだつてよ」

ニヤツと笑いながら答える十六夜。それを聞いた黒ウサギは思わず笑ってしまった。

凶悪化した元・魔王であるアルゴールや魔王であるペストを相手に一步も引かなかつた彼でも緊張をするのだと思つて少し安心してしまったのだ。

彼女もまた彼の非凡な平凡さが少し分かつて来たのかもしれない。

黒死蝶来る！

ゲームが開始されたと同時に突然、地鳴りと共に黒い光に包み込まれる。

次の瞬間、街はその姿を全く別のものへと変えていた。天を衝くような境界壁は消え、黄昏時を髣髴とさせるようなキャンドルやランプはなくなった。その代わりにパステルカラーの木造建築物が、一帯を作り変えている。

ハーメルン側も謎が解かれた時の対策は怠ってはいなかったのだ。

「これって前に白夜叉さんがやってた」

「いえ、これはおそらくここに直接ハーメルンの街を召喚したのでしよう」

黒ウサギはツナの疑問に対して答える。

突然街が変貌したことで少なからず動揺してる者も多いが、ジンやマンドラが指揮をとってなんとか落ち着かせている。

「サンドラ様、ツナさん。とにかくペストを探しましょう」

「その必要はないわ」

その声に三人は足を止めて上を見上げる。斑模様のワンピースにその身を包んだ少女、”魔王ペスト”がフワフワと空中に浮いている。

「あなた達の様子を見る限り、こちらが出題した謎は解けたようね」

そう言いながら他の参加者をチラリと目で追うペスト。勝利条件が明かされたというのにどこまでも余裕の態度だ。

「ええ。ですがここであなただを倒せばこちらの勝ちです」

どこまでも強気なペストに対して黒ウサギも悠然とした態度をとる。ペストは鼻で笑い、黒い風を巻き起こした。

「一つだけ忠告してあげる。以前の私達と同じだと思わない方がいいわよ？」

ここはハーメルンの街。ここがホームタウンであるハーメルン側は以前よりも力が増している。前回はツナ一人でもどうにかなるレベルであったが今回はそう簡単にいかないだろう。

「まずは私が先陣を切る。二人とも、サポートを頼むぞ！」

「はい！」

「うん！」

サンドラの幼くも雄々しい声にツナと黒ウサギは強く頷き、ツナは死ぬ気丸を服用した。

ツナの額と両手から噴出するオレンジ色の炎にペストは顔をしかめる。

「何処を見ている！」

ツナの炎に気を取られていたペストをサンドラは側面から球体の炎を吐いて狙う。しかしペストは悠々と避けていった。黒ウサギも飛び交いながら「疑似神格・金剛杵から雷撃を放つのも黒い風に阻まれて攻撃を当てる事ができない。」

「くっ」

「言つたでしょう、以前の私達と同じだと思ふなつて」

サンドラの炎も黒ウサギの雷撃も神格級のギフト。しかしペストにはそれがまるで通用しない。攻撃をしてこないのはタイムオーバーを狙つてのことだろう。

「Xカノン！」

イクス
カンビオ・フォルマ

ツナは形態変化したXグローブから超高速で死ぬ気の炎の弾丸を連続で発射し、ペストを狙う。

ペストはサンドラの炎と同じように黒い風で打ち消そうとする。

だが、そうはいかなかった。

ツナのXカノンが黒い風のガードを破りかけている。それを確信したペストは黒い風を操作してXカノンを逸らした。

「やつぱりこの中で一番やつかいなのはあなたね、沢田綱吉」

ペストは軽く深呼吸をする。今まで余裕を崩さなかったペストがここで始めてペストを乱した。ツナの力は力を増したペストにも通用する。

黒ウサギが横を見ると、サンドラの息が上がってきている。オがあるとはいえ、この中で最も実戦経験が不足している彼女は慣れない戦いに民の命を預かっているというプレッシャーも相まって疲弊してきていた。

「ブラック・パーチャ黒死斑の魔王」、貴女の正体は神霊の類ですね」

「え?」

「そうよ」

「えっ!?!」

二人のやり取りに思わずサンドラは声を上げる。ツナも声こそ上げなかったが驚いていた。目の前にいる魔王は白夜叉と同レベルの霊格の持ち主だということになる。

「貴女の持つ霊格は『百三十人の子供の死の功績』ではなく、十四世紀から十七世紀にかけて吹き荒れた黒死病の死者——『八千万人も死の功績を持つ悪魔』」

「それだけの功績があれば神霊に転生することも」

「無理です」

「無理よ」

黒ウサギとペストにキツパリと否定されてしまい歳相応の子どもらしくシユンと落ち込んでしまった。

神霊となるには一定以上の”信仰”が必要。つまりはその神の存在を信じること。

”信仰”は恐怖という形でも構わないのだが、当時は不死の病と恐れられた黒死病も現在の医学では治療法が見つかり、神霊に至るまでの信仰は集められなかった。

「だから貴女は、最も貴女を恐怖する対象として完成されている形骸として”グリム・グリモワール幻想魔道書群”の魔道書に記述された”斑模様の死神”を選んだ——」

「残念ながら所々違うわ」

元々ツナ達の役目はペストを引きつけることであり倒すこと自体が目的ではない。ペストの方も時間稼ぎは望むところだとあえて策に乗り、真相を語り始める。

「私は自分の力でこの箱庭にきたわけではない。私を召喚したのは魔王軍：グリム・グリモワール幻想魔道書群”を率いた男よ」

一気に黒ウサギの顔に驚愕が浮かぶ。

「八千万もの死の功績を積み上げた悪魔……いいえ、八千万の悪霊群である私を死神に据えれば神霊として開花出来ると踏んだのでしょね」

彼女は黒死病が具現化したのではなく、黒死病の死者達の霊群だったのだ。

「でも、私を召喚しようとした魔王は儀式の途中で何者かに敗北してこの世を去った。そう……」

ペストはツナを見る。

「かの魔王を倒した男もそのオレンジ色の炎を額に灯していたわ。顔は良く覚えてない

けどね」

ツナと黒ウサギは息を飲む。まさかここでもジョットが関連していたなどと誰が予想できていただろうか。そしてサンドラだけが話しについていけない。

「私……いいえ、私達が”主催者権限”を得るに至った功績。この功績には死の時代に生きてきた全ての人の怨嗟を叶える特殊ルールを敷ける権利があった。黒死病を世界中に蔓延させ、飢餓や貧困を呼んだ諸悪の根源——怠惰な太陽に復讐する権限が！」

今まで無表情だった彼女が始めて怒りの表情を見せる。八千万のもの怨嗟に応えるべく彼女はこの神々の箱庭で太陽に復讐をするのだ。

「お前はそのためにもその力で誰かを殺すのか」

今まで黙っていたツナがここで口を開いた。

「……何が言いたいのかしら？」

「お前は復讐のために関係ない誰かを巻き込むのか」

太陽に復讐するという大それた発言に戦慄した黒ウサギとサンドラであったが、ツナはまるで泣きそうな子どもを見ているかのように悲しそうな目でペストを見ていた。

「何よ……その目は」

「自分一人の願いじゃないから自分で自分を止められないんだな」

ペストは身体を怒りで振るわせていた。

何も知らなくせに知った風な口を利くな、と表情が物語っている。

「そんな目で、そんな哀れむような目で私を見るなアアア!!」

彼女の怒りに応じるかのように死を与える黒い風は勢いを増して荒れ狂う。

「はい、ペスト!!」

ペストの黒い風とツナの大空の炎、まるで闇と光がぶつかり合うような光景だ。

「これが、魔王とのギフトゲーム……」

二人の次元が違う戦い振りを見てサンドラは落ちこんだ表情で呟いた。

「はは、情けないな。これではフロアマスター失格だ」

こうも他所のコミュニティに頼りっぱなしだと長としてもフロアマスターとしても面目が立たないだろうとサンドラは落ち込んでいる

「サンドラ様。今、私達にできるのは戦っている皆を信じて待つこと。そして時が来た時に瞬時に動ける体力を残しておくことです」

黒ウサギはサンドラを元氣付けているが、彼女自身もツナや十六夜にまかせつきりなことに歯がゆさを感じている。

黒い風はツナの手刀で切り裂かれ、それでも調和しきれずに攻撃を防がれてしまう。

しかしペストもツナの炎を防ぐのにかなりの労力が必要になり一進一退の攻防が繰り

広げられていた。

魔王ペストは沢田綱吉が気に入らない。

最初は自分を召喚しようとした魔王の怨念だと思っただが、そうではなかった。

死を与えるものと死から救おうとするもの。相反するものが相手だったのだ。気に入るわけがない。

そして極めつけはその人を哀れむような目。

彼女にとつて敵に哀れまれるなど屈辱以外の何ものでもない。

ペストの操る死の風がより毒々しい色へと変わっていく。

「さつきまで余興とは違うわ、これは触れただけで死ぬわよ」

「や、やはり”与える側”の力！死の恩恵を与える神霊の御業ですか……！」

触れただけで死をもたらす風がツナへと迫る。

それに対してツナは、拳に死ぬ気の炎を集中させる。そして死の風に真正面からぶつかって行った。

「バーニングアクセル!!」

X BURNERと同等とも言える一撃で死の風を殴りつける。

「そんな……!?!」

触れた者に死を与える最悪の恩恵をツナのバーニングアクセルが貫いていくことに

ペストは驚きを隠せない。

だが、その一撃も死の風を進むたびに勢いが殺されていき、ペストの目の前でツナの拳が止まった。

今の一撃が通っていたらさしものペストも拙かっただろう。しかしこれでツナの勝ち目はなくなつた。

——そう、ペストは安心して、一瞬行動が遅れてしまった。

気がつけばペストの目の前で止まった拳は広げられて手のひらはペストに向いている。そして反対の手からはツナを支える柔の炎が噴出していた。

「X……」

「しまっ」

「BURNER!!」

時は既に遅し。零距离からのX BURNERがペストに炸裂する。

「や、やった!」

「いえ、まだです」

黒ウサギの言う通り、ペストはまだ倒れていない。X BURNERで全身を焼か

れ、着ていた斑模様のワンピースもほとんどなくなり上半身はほとんど露出してしまっている。

そして、

「——つ、それは……何故、お前がそれを……」

目に飛び込んで来たものにツナは絶句した。

「ああ、これの……ことを言っていて……ハア……いるのかしら?」

ペストは息も絶え絶えになりながら己の胸に埋まっている四角い箱に目線を落とす。

——修羅開匣。

未来でトリカブトと戦った時のことを思い出す。

「い、これは!」

一際大きく響いた震動。

「十六夜、勝ったのか」

主であったペストはヴェーザーとラッテンが消えたことを直感で感じ取った。

時間稼ぎのために戦力を分散させてしまったことが一番の失敗。もし最初から纏まってかかれば、あるいは目的のために敵の被害を最小限に抑えようなどと欲張らなければ、ここまで戦況を悪くすることはなかったかもしれない。

残りのステンドグラスも60枚をきった。その上自分もここまで追い詰められても

う後がない。

「……止めた」

ペストはどこに隠し持っていたのか、藍色の宝石がついたリングを右手の中指に嵌める。

「時間稼ぎは止めた。白夜叉だけ手に入れて——皆殺しよ」

「な、何だ!? 奴はいったい何をするつもりだ!?!」

「これは、まさかルイオス様と同じ……」

リングから間欠泉のように噴出するインディゴの炎にサンドラはわけも分からず動揺し、黒ウサギは警戒の色を強める。

リングは彼女、いや彼女達八千万人分の波動に耐え切れずひび割れながら壊れていくが、ペストはそれに構わず——胸に埋め込まれた匣に炎を注入した。

その瞬間、彼女は球体状の霧の炎に包み込まれる。



「何だ、まだ倒してなかったのか」

「十六夜さん。ツナさんがペストを追い詰めたのですけど」

黒ウサギはそう言つてツナと、藍色の炎に包まれたペストに目を向ける。ツナの方は大技の連続使用で息を切らしていた。

「あれが修羅開匣つてヤツか」

「十六夜さんはあれについてご存知なんですか!？」

「いや、俺もツナから聞いた程度にしか知らねえよ」

「え、黒ウサギは聞いてないんですけど!？」

黒ウサギは軽くシヨックを受けた。ツナが十六夜達に喋つたのはあの流れ星の夜だけだったので黒ウサギは聞いていない。

修羅開匣とは白蘭率いるミルフィオーレの技術によって実現した力。人体に匣兵器を埋め込むことで匣アニマルの特殊能力を人間自身が発動することができるというものである。

もしそれを魔王であるペストが使つたのだとしたら一体どれほどのものになるのか。そう思うだけで十六夜はゾクゾクした。

しばらくすると霧の炎が消えてそこからペストが現れる。

修羅開匣によって先程までの傷は癒えて、燃えたワンピースも霧の炎の特性である「構築」によって修復されている。そして彼女の背には蝶々のような形の霧の炎でできた羽根が生えていて、彼女の幼い容姿も相まって何も知らない人が見れば妖精のように

も見えるだろう。

「ふくん、貰い物だしあんまり期待してなかったけど。悪くないわね」

「一体どこでその力を……？」

「そうね、このゲームに勝てたら教えてあげてもいいわよ」

ツナの問いに対して不気味な笑みを浮かべながらベストは答える。自分が追い込まれ、仲間がやられ、そして相手を滅する算段がついたペストには先程までの怒りも恐怖もない。その代わりに、憎しみだけが残った。

「さあ、第二ラウンドを始めましょう」

皆はここが踏ん張り所だと身構えた。

太陽と大空来る！

ペストが不敵に笑った直後に、すぐ後ろから大きな炎が迫ってくる。ペストの後方にサンドラが回り込んで放った出来る限り最高の炎。

それに対してペストは避ける動作も、防ぐ動作もない。何もしなかったのだ。

「かゆいわ」

「そ、そんな……」

ペストは炎が直撃した首筋を蚊にでも刺されたように掻いている。今の彼女にとってあの程度の攻撃に何かする必要などなかったのだ。

「さあ、まずは試運転させて貰おうかしら」

ペストが発生させた死を運ぶ黒い風に霧の炎が加わって形を成していく。

蝶だ。黒と藍色の斑模様が特徴の蝶々がペストの周りを飛びまわる。

「へえ、中々洒落てるじゃねえかよ、斑口リ」

「随分と余裕ね。一匹一匹が死を運ぶ蝶だというのに」

十六夜が軽口を叩くと、ペストは周りの蝶を解き放った。ペストの元から解き放たれた蝶は一斉にこの場にいる仲間達へと襲い掛かる。

「へっ、しゃらくせえ!!」

十六夜は飛んで来た蝶、数匹を蹴り飛ばす。触れるだけで死をもたらず蝶でも十六夜の正体の分からないギフトであれば無効化は可能ではあるが、死ぬ気の炎までは無力化は出来ない。

「熱っっ!」

十六夜は炎の高熱により足の裏を負傷してしまうが、まだ動けるようだ。

大空の7属性の中では攻撃力の低い霧の炎であっても、密度を高めれば鉄を焼き切るくらいは可能である。特殊なギフトでもない限り迂闊に触れることすらままならない。

「死ぬ気の零地点突破・初代エデイション」
ファースト

残りの蝶もツナが死の恩恵ごと凍らせて砕け散った。

「やっぱり直接殴ったほうが速そうね」

「なっ!?! グハッ」

蝶を凍らせた直後にペストの拳がツナの腹部に炸裂する。その細く小さな腕からは予想できないような破壊力のある一撃に、消耗しているツナは耐え切れず吹き飛ばされてしまった。

「ツナさん!!」

黒ウサギは己の耳のお陰でゲームの進行具合を理解している。

だから知っていた。ツナの吹き飛ばされた先には――

「受けとめなさい、ディーン」

「DEEEEEEEeeeeEEEEEN!!」

紅き鋼の巨人、ディーンを従えて帰ってきた久遠飛鳥がいると。

ツナはディーンの左手に受け止められてそれ以上吹き飛ばされずに済んだ。

「く……………どう……………?」

「ええ、そうよ」

彼女はラツテンに連れ去られた後、「ラツテンフェンガー」とのギフトゲームでディーンを入手。そして先程ラツテンと戦い、勝利したのだ。

「あれが魔王ペスト? 蝶々みたいな羽が生えているのね」

「ツ……………ハア……………。あれはペストが修羅開匣した姿だ」

「修羅開匣って沢田が前に言ってたアレ?」

飛鳥の問いにツナはへろへろになりながら立ち上がって首を縦に振る。

「畜生、全然効いてねえぞ!」

悪態をつきながら十六夜や黒ウサギ達も飛鳥のところまで退がってきた。元魔王のアルゴールを殴り飛ばした攻撃すら修羅開匣したペストにはまるで通用しない。もっと強力な一撃が必要だ。

前の方ではペストが更なる攻撃のために黒と藍色の混ざった巨大な陣風を起こそうとしている。この町全てを飲み込まんとする大きさだ。先程いった皆殺しというのを実行するつもりだろう。

「十六夜、頼みがある。お前のギフトであれを叩いて欲しい」

「あん？ さつき見てただろ。俺じゃあまだ死ぬ気の炎は……」

打ち消せないと言い掛けた十六夜はツナの確信めいた目を見て口を止める。そして口を吊り上げた。

「おもしれえ、何か考えでもありそうだな。黒ウサギ、後どんだけかかりそうだ？」

「もう少々お待ち下さい。あの炎のせいか発動が邪魔されてるみたいなんです」

これについては黒ウサギも計算外であった。とにかくあのペストの巨大な攻撃をどうにかしなければ全滅もありえる。

「さあ、死になさい」

巨大な陣風が解き放たれ、右腕と左足を負傷した十六夜を、消耗しきったツナを、ジャミングを押しつけようとしている黒ウサギを、冷や汗をかいているサンドラを、街の盾になろうとしている飛鳥とデーンを包み込まんと襲い掛かる。

十六夜とツナはそれに真正面からぶつかって行った。

「そらよつとお!!」

十六夜の残りの力全てを注ぎ込んだ渾身の一撃。ヴェーザーを倒した時程ではなくとも、死の風を払うには充分過ぎる威力があった。

「あら、死の恩恵が消えてしまったわ」

ペストが無表情でわざとらしく呟く。彼女にとってはこれくらい何も痛手ではない。この密度の霧の炎であれば、この場にいる者全てを焼き殺す位は容易いからだ。

十六夜は殴りつけた直後にバックステップでツナの後方まで退避した。そして退がる瞬間にツナの額の炎が不規則にノッキングしているのを視認した。

(あの凍らせる技か? だがあの手の形は何だ……)

ツナは胸の前で両手の甲と掌の部分を向けて親指と人差し指で菱形つくるような構えを取り、霧の炎を受け止めた。

そう、死の恩恵という不純物がない今であればツナのあの奥義を使用することが出来る。

「炎が……小さくなっている……?」

誰かの呟きの通りだった。

ペストが解き放った巨大な霧の炎がツナの目の前で徐々に小さくなっている。

無論、ペストが力を緩めた訳でもなければ、炎が霧散した訳でもない。

炎がツナの手に吸い込まれているのだ。

「死ぬ気の零地点突破・改」

XANXUSとの戦いでツナが見出した自分自身の零の境地。死ぬ気の炎を凍らせて無力化するのではなく、吸収して更に自分の力に変えることでパワーアップする。

額や両手から吹き出る炎は標準時の倍以上になるまで上昇している。

「クツ、私の炎を利用するなんて」

ペストはまたもツナに余裕の表情を歪まされることになる。

「何処を見ている？」

「へ？」

ほとんど瞬間移動に近いスピードでツナはペストの真横へと移動し手刀を繰り出す。それに対してペストは反射的に腕を上げてガードをする。

そう、ペストは修羅開匣してから相手の攻撃に対して初めてガードをした。

「ツナさんが押し返しました！」

「ああ、だけどまたさつきみたいなのが来たらやべーかもな」

ツナの“死ぬ気の零地点突破・改”を知った以上、ペストはもつと工夫した攻撃をしてくる可能性がある。下手すれば住民達を盾に取られるかもしれない。

「心配ご無用！ やつと準備が整いました。今から魔王とここにいる主力————まとめて月にご案内しますよ」

黒ウサギの宣告と共に、景色が一転した。



まず最初に皆の肌を感じ取った急激な気温の低下。地面はそこかしこにクレーターがあり、周囲には石碑のような白い彫像が乱立している。周囲は数多の星が輝いて、天には箱庭の世界が逆様になって浮かんでいた。

今、ツナ達はアポロロー号が初めて降り立ったとされる月にいる。

「チャ……」チャンドラ・マハール 月界神殿イन्द्रラ！ 軍神ではなく月神の神格を持つギフト……」

「YES。このギフトこそ我々月の兎が招かれた神殿。帝釈天様と月神様から譲り受けた月界神殿でございます」

ギフトゲームの中でもかなり難易度の高いゲーム盤の移動。ペストが無意識に行っていた霧の炎によるジャミングで手間取っていたが、今ようやく成功した。

「そ、そんな！」

ペストは自身の力が急激に弱まっていることに気がつく。ハーメルンの街から離れてしまったことでフィールドからのブーストを受けられなくなってしまうのだ。

「そうだ。貴方さえ倒せば……」

ペストは黒ウサギに標的を変更し、死ぬ気の炎で強化された死の風巻き起こした。「太陽に復讐を、ですか？　ならこの輝きを乗り越えてごらんなさい」

黒ウサギがギフトカードを掲げると、太陽にも似た黄金の輝きが黒ウサギを包み込んで黄金の鎧となつて死の風を消し去り、弱体化した炎を弾いた。

インドの叙事録『マハーバーラタ』の不死身の英雄カルナが着ていたとされる太陽の輝きを放つ強力な鎧だ。

寒冷期に猛威を振るつた黒死病には効果適面のギフトと言える。

ペストは軍神、月神だけでなく太陽神まで操れる黒ウサギに驚愕した。

「今です！　飛鳥さん」

黒ウサギはツナと十六夜がペストの相手をしている間に、飛鳥にとあるギフトを渡していた。

「こちらも黄金の鎧と同じくカルナが持っていたとされる”インドラの槍”。その破壊力故に、ギフトゲーム中に使用できるのは一回のみという制限があるものの、穿てば勝利をもたらす槍。

それを黒ウサギの合図で今、発動する。

「撃ちなさい、デイン」

「DEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

デインが撃ち出した黄金の槍は千の天雷を束ねてペストへと襲い掛かる。

ペストはこれは拙いと判断したのか、この場を離れようとする。

「なッ!？」

「一矢、報いてやったぞ」

ペストを炎の鎖が拘束する。それをやったのは歯牙にもかからないと侮っていたサンドラであった。弱体化している今なら、数瞬であればサンドラでも拘束する程度のこと
は出来る。

そしてそれだけの時間があれば充分だった。

太陽の槍はペストに突き刺さり、圧倒的な熱量で内側から焼かれていく。

「負・け・て・た・ま・る・かアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

8千もの怨念と彼女自身の勝利への執念が彼女を突き動かしたのか、拘束を解かれた彼女はインドラの槍を押し返そうともがき出す。彼女の死ぬ気に羽根が呼応するかの
ように羽根が巨大化した。

「嘘、あれを押し返していると言うの……?」

飛鳥はインドラの槍の威力を十二分に発揮させていた。タイミングも完璧であった。
しかし、死ぬ気というものはそういう計算の上を行ってしまう力だ。

「こんな……一本の槍如きで……まだ……」

「そう、一本じゃ貴女を倒すのは無理だったのね」

飛鳥は肩を落とした。

「——じゃあ二本ならどうかしら？ デイーン！」

飛鳥はデイーンに横へずれろと命ずる。

巨体が横へ動けば、そこには後方へ柔の炎を放ち、もう片方の手に剛の炎を充填しているツナがいた。

ペストはここで自分が過ちを犯していたことに気がつく。ゲーム盤が移動したことで気が動転し、標的を黒ウサギに変えたことでツナを見失ったこと。あの時点でツナから目を離すべきではなかったのかもしれない。

「おいしいところをくれてやるのはちよつと癪だけど……決めなさい！」

飛鳥はダメ押しにと己のギフトでツナにブーストをかける。

インドラの槍を押し返すだけで精一杯のペストに避ける術などなかった。

「X BURNER ハイパー・イクスプロージョン 超 爆 発 !!」

最大出力を超えたX BURNERの勢いがインドラの槍にプラスされ、ペストにより深く突き刺さり、ツナの大空の炎が全身を包み込んだ。

「そ……………ん……………」

皆が見上げる中、激しい雷光とオレンジ色の炎が月面を満たし、魔王と共に爆ぜた。

（か……………身体が焼ける……………。あ……………つい……………え？ 違う……………温か……………い……………？）

爆発の中、己の身体が消滅していく中で、ペストは身体を焼く痛みではなく、母親に包み込まれているような温かさを感じた。

（さわだ……………つなよし。何て顔……………してるのよ……………）

消え行く中で見えた彼女を倒した少年の顔は、悲しそうな顔をしていた。



ハーメルンとのゲームに勝利してから二日後、多くの人々が活気を取り戻して祝勝会が開催された。

つい先日まで黒死病に苦しんでいた耀も、病み上がりだというのに料理に釣られて布

団から這い出てきた。現在も病み上がりとは思えない勢いで出される料理をパクついている。

横では三毛猫がナツツにリベンジマツチを挑んでいた。

十六夜と飛鳥は用事があるらしく、何処かへ行ってしまった。

そんな中で、ツナは一人ブルーな気分だった。

「ツナ、これ美味しいよ?」

「へ? あ、ありがとう」

皆に声をかけられても上の空で心配されていた。

「どうしたの?」

ツナは少し悩んで、耀に打ち明ける事にした。

「……これで良かったのかなって思ってた。ペストだって叶えたい願いがあつて戦つた。なのに……」

彼女だつて悪意だけで戦つてたわけではない。そんな彼女の思いを潰してしまつた良かつたのか。ツナはずつと悩んでいたのだ。

「綱吉、それがギフトゲームというものだ」

「白夜叉(さん)」

「どうじゃ? やつてるか?」

白夜叉は酒瓶を片手に二人の近くへ座る。貴賓席から降りてきて二人の様子を見に来たようだ。

「綱吉、お前は戦うのには少し優しすぎるのかもしれない」

白夜叉は神妙な顔をして話す。きつとコップに酒を注いでなければもつと真剣に見えたことだろう。

そしてツナは、以前九代目にも同じような言葉を言われたことを思い出す。

”「コミュニケーション」は皆、夢と目標を込めて旗を掲げる。負けてしまえば全てを奪われて何もかもを失う。今の”ノーネーム”だってそうじゃろう?”

「白夜叉さん」

「綱吉。優しいことは悪い事ではない。だが、その優しさは仲間達に向けるものだ。敵に情けをかけることが必ずしも正解ではないということ覚えておけ」

今回のギフトゲームは今までで一番シビアなものだったのかもしれないが、『打倒、魔王』を掲げる”ノーネーム”はきつと今回のようなシビアなゲームが増えていくことだろう。ここで立ち止まってはいけないのだ。

「さて、堅つ苦しいことは置いておいてツナの女性関係でも暴いてやろうかの」

「色々台無しだー!!!」

「ここに来た時に白夜叉がそんなことを言っていたことを思い出す。」

「そういえばまだ聞いてなかった」

「何で春日部さんも乗り気なの!!？」

シリアスが持たない面子だったとき。



一週間が経過し、皆が”ノーネーム”の本拠地に帰って最初に始めたのは農地の復興であった。

新しい加入メンバーである地精メルンであれば土地の修復に目処が立つかと思っていたのだが。

「むり」

「そんなあつさり!？」

荒れ果てた農地を見て、メルンはばつさりと言い捨てた。

「ど、どうしても無理かしら？」

「むーり」

可愛い見た目と舌足らずな喋り方の割りに厳しい性格をしているようだ。

メルンの発言で”ノーネーム”の子ども達は肩を落とす。

「き、期待させるような真似してごめんなさい」

しよんぼりする飛鳥を黒ウサギと耀が励ます。

そんな中、十六夜は土を見て、あることを思いついた。

「おい、極チビ」

「くちび?」

「土壌の肥やしになるものがあつたら、それを分解して土地を復活させることは出来るか?」

その言葉を聞き、少し考え込むメルン。

「……できる!」

「ホント!?!」

「かも」

その言葉にやや右肩下がりにガクつと気が抜ける飛鳥だが、試してみる価値はあるらしい。

皆は早速肥料になりそうなものを集めだし、飛鳥はデインを召喚して土地を耕し始める。

「あ、じゃあオレは貝殻とか拾ってくるよ」

以前どこかで貝殻を砕いて肥料にするような話を思い出したツナは海の方へと走っ

ていった。

『綱よ……君……聞こ……かい』
「えっ？」

ボンゴレサイド来る！

ツナが”箱庭”で戦っている頃、ボンゴレファミリーは突如行方を晦ませてしまったツナを探し続けている。

自称右腕の獄寺隼人、友人の山本武、先輩である笹川了平は古里炎真を始めとしたシモンファミリーと共に毎日近隣の捜索にあたっていて、九代目も少なくない数の人員を用いて世界中を探させている。勿論その中には彼の父、沢田家光をボスとする門外顧問機関”CEDEF”もいた。

他にもツナに縁のあるマフィア達がこぞって探しているものの、彼に誰も辿りつけてはいない。沢田奈々には『家光が世界中の工事現場に連れまわしている』と誤魔化しているが、それもいつまで持つか分からない。

最初は誘拐の線を疑う者もいたが、それであればすぐ近くにいたりボーンが気づかないわけがないのだ。

そのリボーンはというと、ツナが持つていったと思われる通信機に繋がられないかと思ひ、入江正一やスパナと共に試行錯誤を続けている。

「どうだ入江。繋がりそうか？」

「も、もうちよつと待つて」

「正一、こつちのダイヤルにしてみたらどう？」

つい先程、一瞬だけだがツナのヘッドホンに接続することに成功していた。正一もスパナも未来での出来事のお陰で本来であればありえないような技術や知識を持っている。それでも今回の作業には骨が折れた。当たり前だろう。何せ異世界へ通信を繋げる作業なのだから。

「——よし！ 繋がった！」

少々雑音混じりではあるが、話すこと自体に問題はないだろう。

「綱吉君、聞こえるかい！」

『こ、この声……もしかして正一君!?!』

「ウチもいる」

『スパナ!?!』

「や、やった……」

久しぶりに聞いたツナの声に正一は安堵した。そして今までの疲れがどつと出たのか、くたびれたようにそのまま椅子の背にもたれ掛かっている。

「ウチはとりあえず守護者達に知らせてくる」

スパナはそう言うのと立ち上がって別の通信機を取った。何か進展があれば獄寺達に

知らせる手筈になつてゐるのだ。きつとすぐにこちらへ来るだろう。

「おいツナ、お前今何処にいやがる?」

『リボーン!? いや……それはその……説明に困るといふか』

通信機越しのツナは言いよんどんでいるように思える。彼とて今の状況をどう説明すればいいのかよく分かつていないからだ。

「なら説明しやが——」

リボーンの声を遮るように大きな音を立ててドアが開く。その音に驚いて正一は椅子から転げ落ちた。

ドアを開けたのは汗だくになつてゐる獄寺。後ろにいる山本と了平も同じく汗まみれだ。きつとここまで走つてきたのだろう。

「おいスパナ。さっきの話は本当だろうな?」

「ああ。今はリボーンが話してる」

三人はすぐさまリボーンの元へ駆け寄つた。

「ご無事ですか十代目!」

『獄寺君。心配かけてごめん』

「ハハッ、元気そうで良かったぜ」

「沢田! 今一体何処にゐるのだ!」

友人である三人はツナが無事であることに安堵している。今まで何も手掛かりを残さずに消えたなど、未来に行つた時以来だ。きつと嫌な予感がしていたに違いない。

『リボン。俺、こつちでやらなきやいけないことが出来た』

ツナは机に置いてあつた手紙を読んだことで”箱庭”と呼ばれる世界に連れてこられた事、そこで”ノーネーム”が助けを求めていた事、ボンゴレI世がプリモこの世界と関わっていた事、そして何者かがこの世界にリングと匣を持ち込んだ可能性がある事を皆へと話した。

「……何ていうか、夢物語みたいな話つすね」

「でもよ。未来にも行つたし、異世界があつてもおかしくないかもな」

「よ、良く分からんが、沢田はその”コミュニティ”とかいうものを助けているというこ
とでいいの？」

「さつき十代目がそう仰つてたろうが芝生！」

「何だとタコヘッド！」

「お前らちよつと黙つてろ」

リボンは言い争いを始めた獄寺と了平を蹴り飛ばして黙らせる。その光景に山本と正一は冷や汗を垂らしている。

「そうか、ならとことんやってみやがれ」

リボーンは口元を緩ませずにはいられない。いつもなら受身のツナが自分から何かをすると言いつことは少ない。それに”箱庭”での戦いはきつとツナにとつて大きなプラスになることだろう。虹の代理戦争が終わってからは大きな戦いもなかったのだ、今回の件についてはちようどいい。

「ボンゴレ^{フリーモ}I世や、リングと匣を持ち込んだ奴についてはこつちでも調べておいてやる」

I世^{フリーモ}の件は過去の文献を漁ればもしかしたら出てくるかもしれないだろう。リングと匣もこの時代はまだ持っている者は限られている。リボーンとしては気が進まないがヴェルデ辺りに連絡を取らなければならないかもしれない。

「イテテ……しかし十代目を一人にしておくわけには」

「なら君達も行けばいいんじゃない? ”箱庭”つて所へさ♪」

いつの間にか白髪少年がドアの傍に背中を預けている。彼こそが十年後の未来でツナ達を苦しめたミルフィオーレファミリーのボス、白蘭である。

今回は彼も並行世界の技術を提供していた。

『もしかして白蘭?!?!』

「正解♪ 虹の代理戦争以来だね綱吉くん♪」

「おい、さっきの言葉はどういう意味だ?」

獄寺は怪訝そうな顔で白蘭を睨む。白蘭は睨まれてもその笑みを崩すことなく、相

変わらず不気味さが漂っていた。

「言葉通りの意味だよ♪ そんなに心配なら君達も行けばいいじゃないか♪」

簡単に言ってくれる。そもそもツナをここへ導いた手紙は役割を果たしたと同時に消滅。おまけにその手紙を出した人物も誰か分からないのに——と普通なら思うだろうが、未来ではあらゆる並行世界での情報を駆使してほとんどの世界をその手に収めたこの男ならその方法を知っているかもしれない。

「まあ、流石に今すぐっていうのは無理だけどね♪」

『あ、あは……れ……』

ツナとの会話に徐々に雑音が混ざりだす。正一とスパナは慌てて調整しようとするも雑音は大きくなる一方でツナの声も聞こえなくなってくる。まだ安定にはほど遠い状態だったようだ。

そして通信はプツツリと途絶えた。

「お前ら、このことを他の奴らにも伝える。オレは九代目に会いに行く」
今、ボンゴレサイドが動き出した。



ツナの方は、突然の通信に驚いていたものの仲間達に今の自分の状況を伝えることが出来て幸いだった。

「あの、どうでしたか?」

心配そうに声をかける黒ウサギ。

「いや、寧ろとことんやってこいってオレの家庭教師が言っていました」

「へー、お前家庭教師がいるのか?」

「……まあ、そうだよ」

ツナは十六夜の質問に曖昧に頷く事しか出来なかった。『自分の家庭教師が世界最強の殺し屋ヒットマンで赤ん坊でもある』等と一体誰が信じることだろう。

「それと、オレの友達も何人か来るかもしれない」

「えっ、ツナさんの友達がですか!?!」

ツナは皆がここへ来るのもそう遠くないような気がしてくる。

ランボの持つ十年バズーカであったり、白蘭の能力であったり、ボンゴレリングの縦の時間軸であったりと世界や時間に関するイレギュラーな出来事が多数起こっている。今更そんなこと出来っこない等とは思わない。

黒ウサギは黒ウサギでツナの世界なら出来てしまいそうな気がして逆に恐かった。

「ツナの」

「友達……」

十六夜は二丁拳銃をぶっ放す強面の男を、飛鳥はメガネをかけた文系のひよろい少年を、耀は気の良さそうな好青年をそれぞれ思い浮かべている。

「おい黒ウサギ、俺達をこっちへ連れてきたみたいだにツナの世界の奴を連れてくることって出来ないのか？」

「そうですね……私が召喚を行っているわけではないので詳しくは分かりませんが、あの手紙はランダムに貴方方のように自分の世界に退屈している人物に届けられますか。またツナさんの世界に届けられるかどうかまでは……」

「チエ」

十六夜はツナの世界に俄然興味が湧いてきた。

問題児達とボンゴレファミリーが合流する日も近い。

そう・・・巨龍召喚

収穫祭来る！

”ハーメルンの笛吹き”とのギフトゲームから早一ヶ月。一同はこれからの活動方針を話し合うために本拠の大広間に集まっていた。

大広間の長机には、上座からジン、十六夜、ツナ、飛鳥、耀、レティシア、そして年長組の代表としてリリが座っている。この席順はジンと黒ウサギを除けば、”ノーネーム”への貢献度を示していた。十六夜は水神を倒しての水源の確保、レティシアの奪還、ついこの間のゲームでは謎解きだけでなく神格保持者となった悪魔、ヴェーザーをも倒した。十六夜が次席に座っている理由はこれだ。

「どうした？俺よりいい位置に座ってるのに随分と気分悪そうな顔してるじゃねえか、御チビ」

「やめなよ、十六夜君」

十六夜はガチガチに緊張しているジンを笑い、からかっている。隣で座っているツナはそれを諷めているが、当然十六夜は聞く耳を持たない。

ツナの頭の上ではナッツがスヤスヤと寝息を立てている。

ツナもレティシア奪還には大きく貢献したし、生誕祭のギフトゲームでは決勝進出（中止にはなったものの、決勝進出分の報酬はキツチリ出た）、そして実質一人でペストを追い詰めたという功績がある。

本人は末端の席で良いと遠慮していたが、皆に押し切られて十六夜の次席に納まっている。

「だ、だって旗本の席ですよ？ 緊張して当たり前じゃないですか」

ジンはローブを掴みながら反論している。彼はリーダーとはいえ他数名ほど功績を挙げている訳ではないので上座にいることに引け目を感じているのだ。

しかし、そういうわけにもいかない。彼はこの“ノーネーム”の顔であり、今まで入手したギフトもジンⅡラッセンの名義で届いているのだ。

そしてそれだけではない。

「苦節三年……。とうとう私たちのコミュニティにも招待状が届くようになりました。それもジン坊ちゃんの名前で！」

黒ウサギは大事そうに胸に抱いていた三枚の封筒を見せると、いつも以上のテンションではしゃぎ出す。無理も無い、今まで名無しと蔑まれてきた事を考えれば、それは大きな進歩だ。

「ところで今日集まった理由はその招待状の事かしら？」

ツナの次の席に座っている飛鳥が話を急かす。十六夜やツナには劣るものの、彼女も相棒のメルンやディーンと農園区復興に大きく貢献している。ツナに十六夜の次席を譲られたが、それは彼女のプライドが許さなかったようで、不満はあるものの納得して四番目についている。

「はい、そうですがその前に報告が……」

黒ウサギとリリから「ノーネーム」の現状が伝えられた。

ペスト討伐のお陰で多額の報奨金が出たことで備蓄はしばらく問題ないこと、メルンとディーンのお陰で農園の四分の一が使えるようになったことだ。

「——つまりだ」

そして話は先程の招待状にと戻る。

「主達には特区にふさわしい苗や牧畜を手に入れて欲しいのだ」

「牧畜って、山羊や牛のような？」

そう、この居住区にはそういった動物が全くいない。

「そうだ。都合のいいことに、南側の“龍角ドラコグを持つ驚獅子ライフ”、連盟から収穫祭の招待状が届いている。連盟主催とあって収穫物の持ち寄りやギフトゲームも多い」

「へー、北側のとは違うんだ」

「ああ、火龍生誕祭は工芸関係の方が多いからな。こちらは収穫祭と銘打つだけあって、

きつと希少な種や苗、牧畜を賭けてくる者が多いだろう」

ツナの関心した眩きにレティシアは補足を付け加えながら答える。

「方針については一通り説明は終わりました。……ですが、一つ問題があります」
「問題？」

黒ウサギはとても言い難そうに目を泳がせて、

「この収穫祭ですが、二十日間ほど開催される予定で、前夜祭を含めれば二十五日。約一ヶ月行われることとなります。この規模のゲームはそう無いですし、出来れば最後まで参加したいのですが、コミュニティの主力が長期間不在なのはよくありません。なのでレティシア様と一緒にせめて御一人残って欲し——」

「嫌だ」

「やっぱりだった——！！」

この展開はジンも黒ウサギもツナも予想していた。生誕祭での前科があるお祭りごとと大好きな問題児達が留守番なんてするわけがない。

「あーじゃあオレが残るよ」

ツナが名乗り出る。確かに彼も祭りには行きたいが、そのために”ノーネーム”の子ども達を危険に晒すわけにはいかない。第一、話が進まない。

「——えっ?」

ツナの言葉に真っ先に反応したのは耀だった。今の彼女は雨に濡れた捨て犬のような悲しい顔をしている。そして問題児他二人は冷めた目つきでツナを見ていた。

「えっ、何で皆そんな顔でオレを見るのさ!？」

「いや……だってなあ？」

「ねえ？」

「ツナ、行かないの……?」

飲み会で皆がビールを頼んだのに一人だけカシスオレンジを頼んでしまったような空気になってしまった。

お酒は二十歳になってから。

この何とも言えない空気をジンが無理やりぶった切る。

「わ、分かりました! せめて前夜祭を三人、オープニングセレモニーから一週間を全員で、残りの日数を三人と人数を絞らせて下さい!」

ジンもこうなることを見越してキツチリ対策は立てていたようだ。しかしこれだと内二人は全部の日数参加が可能なのだ。普通は席順で決まるのだが、問題児達がそんなことで納得する筈がない。ツナも名乗り出たらまた変な空気になると思っただけで今度はやしやりに出るのはやめた。

決定方法は十六夜の提案で『期日まで最も多くの戦果を挙げた者が勝者』と決まった。



「ギフトゲームっていつてもな〜」

三人はやる気マンマンで早速ギフトゲームを探しに行ったが、ツナは今回の件に関して、それ程勝利に執着してはいなかったので、ただその辺をぶらついているだけだった。

第一、彼は今まで一度も自分からギフトゲームをしにいったことがないのだ。

「とりあえず……あれ?」

気が付いたら霧の深い森の中にいた。

「ここ、ここ何処だろう?」

ツナは引き返そうかと考えたが、あまりに霧が濃くて元来た道すらも見失ってしまった。

(まさか幻術?!)

そう思つてキョロキョロ周りを見るが誰も見当たらない。

そもそも幻術をかけておいて術者がすぐ近くにゐるわけが無いと思ひ出してツナはこれからどうするか考え出した。

「フオツフオツフオツ、まあ落ち着きなされ」

「あなたは!？」

先程周りを見回した時にはいなかった老人が切り株に腰掛けている。足元には老人の持ち物であろうバスケットが置いてあった。

「これはあなたの仕業ですか?」

「いや、これはこの森の特徴なんじゃよ。ワシもここで迷ってしまっているの、疲れて休んでいるところじゃ」

ツナは超直感でこの老人が嘘をついていないと判断した。

「フウム……君、ワシとギフトゲームをせんか?」

「へ?」

何故ここから出ることを考えているのにギフトゲームになるんだろうと疑問に思う。

「何、ルールは簡単じゃ。ワシをこの森の向こう側まで連れて行ってくれるだけでいい。時間制限も敗北条件も無い。良いと思わんかね?」

裏を返せばこの老人を森の向こう側まで連れて行けなければツナはこの森の中を永久に彷徨うはめになる。しかし、どちらにしろツナはこの森から脱出しなければならぬ。この老人をこのまま放置しておく訳にもいかない。

ツナはそのギフトゲーム? の条件を飲んだ。

『ギフトゲーム名“迷いの森”』

プレイヤー 沢田綱吉

ゲームマスター 老人

クリア条件 老人を連れて森の向こう側まで到達する

敗北条件 無し

宣誓、上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

”謎の老人”印』

ツナは、契約書類^{ギアスロール}に記入をした後、老人の希望で彼をおぶって歩を進めた。途中で拾った小石を一つずつ置きながら迷わないように、さながらヘンゼルとグレーテルのように森の向こう側を目指す。

「重くないかの？」

「ええ、大丈夫です」

彼も老人をおぶった位ではあるような柔な鍛えられ方はしていない。ボンゴレ式の教育はいつだってスパルタなのだ。

三十分くらい歩いただろうか、そうすると目の前にさつき置いていった小石が等間隔で置いてある。自分と同じように石を置いてこの森を脱出しようとしていたのかと考

え、小石を辿ってまた進もうとする。

「いや、ちよつと待って。これって……」

置いてある石には見覚えがあった。ツナがさつき置いておいた筈の石だ。全て覚えていたわけではないが、いくつかの形はうろ覚えだが分かる。

「そうなんじゃよ、どれだけ進んでも元の場所に戻って来てしまいうんじゃ」

「それ先に言ってくれませんか!？」

この三十分間は一体なんだったのかとツナは老人にツッコんだ。

(これって……前にも似たようなことがあったような……)

ツナは思い出す。チヨイスでトリカブトに幻術の世界に閉じ込められた時にそっくりだ。これが森の特徴なら術者を倒して術を解くなんて真似は出来っこない。

骸やマーモン（ヴァイパー）のような術師ならどうにかする手段を持っていたかもしれないが、ツナはこの二名ではない。

「あー、こういうのは十六夜君の専売特許なのに……。お爺さん、ちよつと退がってください」

老人を下に降ろして安全な場所まで非難させた後、ツナは超死ぬ気モードになる。

ツナはあの時と同じ事をするつもりだ。

この空間に捕らえられてしまっているのであれば、空間ごと破壊してしまえばいい。

「X BURNER!!!」

深い霧はツナの炎圧によって森ごと吹き飛ばされていく。

そしてなんとという偶然だろうか。奇しくも同時刻、十六夜が別の森で湖をつくつていた。

「た、たまげたわい」

老人は腰を抜かして座り込んでしまった。かなり強引ではあったものの、森の向こう側までの道は拓いた。

「さあ、行きましよう」

ツナは再度老人をおぶって歩き出す。今度は何の妨害も無く真っ直ぐ進むことが出来た。

辿りついた森の向こう側あったのは、花畑。遠い所にあったお陰でこちらに被害はなかったようで、ツナは胸を撫で下ろした。

花畑の中央に十字架が立てられている。

「お墓……?」

「ああ、ありがとう。やっとここまでこれたわい。ギフトゲームは君の勝ちだ」

老人はギフトゲームに負けたというのに心底嬉しそうに笑い、手に持っていたバスケットをツナに手渡した。

一人目は地域支配者レギオンマスターの証である外門の権利証を手に入れた十六夜。彼はトリトンの滝の主である白雪（水樹の持ち主だった蛇）の身柄を白夜叉に引き渡したことでこれを手に入れた。これで「ノーネーム」は恒久的な、それも莫大な収入源を得たと同時に、名実共に七層東区の筆頭となったわけである。

掲げる旗やコミュニティの名が無くてもジン・ラツセルの率いるコミュニティとして名が広まっていくことだろう。

二人目は「宝樹の苗」を手に入れたツナである。

その夜に小さな宴が設けられた。十六夜の白ける一言があつたものの、とても楽しい宴となった。

だが、その中で一人、耀は浮かない顔をしている。

彼女は気分転換に三毛猫を連れて居住区の外れまで来ていた。

「三毛猫。私は収穫祭が始まってからの参加になつたよ。残念だけど、前夜祭はお預けだね」

『……そうか。残念やつたなお嬢』

耀は膝の上に乗っている三毛猫に向かって話している。彼女は今まで取り立てて「ノーネーム」復興に手柄を立てて来た訳ではない。しかし、他の三人は違う。十六夜も飛鳥も、気になっているツナだって目に見える活躍をしているのに、自分だけ大したこ

とが出来ていない。"ペルセウス"や"ハーメルンの笛吹き"とのギフトゲームだつて肝心なところで何も出来ていないのだ。

「ツナ達は凄いやね」

『……せやな』

「でも、私あんまり凄くないね」

「そんなことないよ」

耀は、この場にいる筈のない第三者の声に反応して慌てて後ろを振り向いた。そこにはツナが料理の皿を持って立っている。耀は驚きのあまり、目をパチクリしていた

「そんなことない。春日部さんは凄いや」

「違う、私だけ足手纏い。流される感じでコミュニケーションに入ったのが駄目だったんだよ。偶然素敵な友達が出来ただけで、私にはその関係を維持するだけの力が……無い」

これが耀の本音だった。彼女の膝の上にいる三毛猫は痛ましそうに耀を見ている。

そんな悲しそうな彼女を見た後、ツナは前を向いて独り言のように喋り出した。

「オレさ、ちよつと前まで『ダメツナ』って呼ばれてたんだ……って今も呼ばれてるけどね。運動も勉強もダメダメでクラスの皆からバカにされて、全然友達もいなくて。それでついたあだ名が『ダメツナ』」

ツナは少し恥ずかしそうに自分の過去を喋る。耀はそれが信じられなかった。確か

に普段頼りない部分もあるけれど、ここぞという時はとても頼もしい。それが彼女にとつての沢田綱吉だからだ。

かといって、ツナが嘘をついているようにも見えない。

「でも、リボーンのお陰でオレは変わったんだ」

「リボーンって前に話してた人？」

「うん。今だつて死ぬ気にならないと何も出来ないけど、それでもオレには一緒に笑ってくれるみんながいる。いざとなれば力を貸してくれる仲間がいる。友達になるのに力なんて要らないよ」

ずつと一人ぼっちで友達の作り方を知らなかった彼女にとつて、ツナの言葉は目から鱗が落ちる気分だった。

「……………かな？」

「へ？」

「ずつと動物以外の友達がいなかった私でも友達、作れるかな？」

耀の不安そうな言葉に、ツナは優しく笑いかける。

「大丈夫だよ、ダメなオレにも出来たんだ。それに、もうここに一人友達がいるよ」

ツナの言葉には不思議と安心感がある。耀の今までの劣等感から出たどうにもならないネガティブな気持ちは何処かへ行ってしまうくらいに。

「春日部さ「耀でいい」春日べ「耀でいい」あ、うん……耀」
「うん、そっちの方が良い」

耀は満足そうに頷いた。

アンダーウッド来る！

収穫祭へ出発する前夜、十六夜のヘッドホンが紛失するという事態が発生した。皆が夜通しで探したが、一向に見つかるとは無く、結局彼は耀と順番を交代して、レティシアと共に本拠に残ることになった。

現在彼の頭にはヘッドホンの代わりにヘアーバンドが載っている。ヘッドホン一つで楽しみにしていた前夜祭を諦めるなんてとても意外なことだ。

耀は少し申し訳なさそうだったが、十六夜の最後の言葉で罪悪感が消し飛んだ。

「愛しの沢田と一緒に楽しんでこいよ」

思わず蹴りを入れてしまった耀は悪くない。もともと、蹴りは右腕で受け止められてしまったのだが。

何はともあれ、ツナ達は境界門を通過して七七五九一七五外門”アンダーウッドの大瀑布”、フィル・ボルグの丘陵に着いた。

それと同時に一行は、多分に水分を含んだ冷たい風を浴びる。

「わ……………」

「きや……………」

「うわっ……!」

その冷たさにツナ、耀、飛鳥は驚きの声を上げる。まるで滝のすぐ近くで水飛沫でも浴びているようだった。

眼下には距離感がおかしくなるほど大きな水樹、そしてその根が網目状に張り巡らされた地下都市という壮観な風景が飛び込んできた。

「すごい……」

「飛鳥、ツナ、下! 水樹から流れた滝の先に、水晶の水路がある!」

「あつ、ホントだ!」

耀の、今まで見たことのないようなはしやぎつぶりにツナと飛鳥は少し驚きながらも彼女が指を差した方を見る。その先には網目状に張り巡らされた根の隙間を潜るようにして翠色の水晶の水路が作られている。

(確か北でも同じようなのを見たような……)

「二人とも、上!」

飛鳥は水路について思うところがあつたが、耀の声を聞いてすぐに考えを変え、ツナと共に上を見た。

「つ、角が生えてる……!?!」

ツナは空を飛んでいる角の生えた鳥を見て驚きの声を上げた。飛鳥も啞然とした表

情でそれを見ていた。

「聞いたことも見たこともない鳥だよ。やっぱり幻獣なのかな？　黒ウサギは知ってる？」

「え、ええ。まあ……」

耀の言葉に黒ウサギが困ったような顔で答える。

「ちよつと見て来てもいい？」

「ちよ、ちよつと落ち着いて！」

思わず身を乗り出そうとした耀をツナは慌てて止めた。ここに着てから彼女の興奮振りが半端ではない。

すると懐かしい声が聞こえてきた。

『友よ、待っていたぞ。ようこそわが故郷に』

以前白夜叉とのギフトゲームの際に耀に乗ったグリフォンだ。ちなみに飛鳥とツナにはグリフォンが何と言っているのかは分からない。

「久しぶり。ここが故郷だったんだ」

その後も耀はグリフォン、名をグリーというらしいが、友人の好で送って行ってくれ
ることになった。

自らの力で飛べる耀とツナは、全員が乗り込むまで角の生えた鳥についてグリーに聞

いていた。

グリーが言うには、あの鳥はペリユドンといい、人間を殺す殺人種の鳥。伝説の大陸アトランティスから来たときれていて影に呪いを持つているそうで、それを解呪するためには人間を殺さなくてははいけないある意味哀れな怪物なのだ。

『それでは行くぞ』

グリーがそう言うとう翼を羽ばたかせて旋風を巻き起こし、巨大な鉤爪を振り上げて獅子の足で大地を蹴った。

その空を走るかのようなスピードで瞬く間に外門から離れていく。

『やるな。半分足らずの力で飛行しているとはいえ、二か月足らずで私に付いてくるとは』

本気ではないとはいえグリフォンのスピードに何とかついていく耀にグリーは賞賛の言葉を投げかけた。

耀の反対側ではツナが皆のスピードに合わせて大空の炎の推進力で飛んでいる。いつもより気流は安定しないものの、炎真の重力操作やブラックホールに比べれば、これくらいはまるで大した事無い。

『やるな小僧。おまけにまだ余力を残していると見える』

「ツナ。グリーが凄いつて言ってる」

グリーはツナの飛行センスを感嘆し、耀はその言葉を通訳する。果たして本気のグリーとツナが競争したら一体どちらが勝つのやら。

空からの”アンダーウッド”もまた絶景。まさに”水の都”という言葉がしつくりくる。

ツナ達を送り届けた後、グリーはペリユドンを追い払う仕事があるとのことで再び空へ舞上がり、飛んでいった。

グリーを見送った後、宿舎の上から知った声がかかる。

「あー！ 誰かと思ったらお前耀じゃん！ お前らも収穫祭に」
「アーシャ、そんな言葉遣いは教えていませんよ」

耀が”火龍誕生祭”でのギフトゲーム、”アンダーウッドの迷路”で戦った”ウィル・オ・ウイスプ”のカボチャのお化けのジャック・オ・ランタンとゴスロリ衣装を着た少女アーシャだった。

耀はあれからまたアーシャとギフトゲームをして友人でもあり良きライバルでもある間柄になっていて、今も親しげに話している。

「それよりさ、耀は出場するギフトゲームは決めたか？」

「ううん。今来たばかり」

「それなら”ヒツポカンプの騎手”には出るよ！」

ヒツポカンブとは別名「海馬^{シーホース}」という幻獣で、それに乗ってレースをするのだろう。「おい、お前はどうすんだ?」

アーシヤは今度はツナにさも親しげに話しかける。別のゲームではあったものの、同誕生日のゲームで決勝にまで駒を進めたのだからそれなりに注目しているのだろう。

「オ、オレ!?! 特に考えてないけど……」

「ああ? 男らしくねえな。つーか試合の時と性格違い過ぎだろ!」

「ちよ! 痛いって!」

アーシヤは笑いながらツナの背中を叩く。しかし、耀にとっては全く面白くない。

「アーシヤ」

「ん?」

「負けないから」

「お、おう。望むところだぜ」

勘違いによって急に闘志を燃やし始めた耀に少し戸惑いながらも彼女がやる気になって気を良くしたアーシヤだった。

(ふふっ。十六夜くんじゃないけど、あの二人は見てて面白いわね)

それを見て飛鳥は少しだけ羨ましくなった。



”主^ホ催^{スト}者”ががいる本陣營があるのは大樹の中腹。そこまでは水式エレベーターがあり、ものの数分で本陣に到着し、木造の通路へ降り立つ。

通路を歩いていけると、収穫祭の主催者である”龍^ド角^ラを持つ鷲^ゾ獅子^フ”の旗印が見えた。
「旗が七枚？ 七つのコミュニティが主催してるの？」

”一本角”、“二翼”、“三本の尾”、“四本足”、“五爪”、“六本傷”、そしてその六つの旗に囲まれるように真ん中には龍の角が生えたグリフォンが描かれた旗がある。

「残念ながらNOですね。”龍角を持つ鷲獅子”は六つのコミュニティが一つの連盟を組んでいると聞きます。中心の大きな旗はおそらく連盟旗ですね」

連盟、ツナもその言葉にはピンときた。

ボンゴレファミリーもディーノをボスとしたキャバツローネファミリーや炎真をボスとしたシモンファミリー、その他にも数多くのファミリーと同盟を結んでいる。そのほとんどの理由として『勢力を拡大するため』もしくは『大きな敵に対抗するため』がある。おそらくこの連盟は後者、つまり魔王に対抗することを目的としたものだろう。

耀が黒ウサギに連盟旗について尋ねている間に、他のメンバーは本陣入り口にある受

付で入場届けを出していた。

受付をしている樹霊コダマの少女はメンバーの顔を確認していき、その視線を飛鳥で留めた。

「もしや”ノーネーム”の久遠飛鳥様でしょうか？」

「そうだけど、貴女は？」

「私は火龍生誕祭に参加していた”アンダーウッド”の樹霊です。飛鳥様には弟を助けていただいたと聞きました……」

ああ、と飛鳥は思い出す。ペストとの戦闘中に逃げ遅れた少年を飛鳥はデインを使って助けていた。

「その節はどうもありがとうございます！ おかげでコミュニティ一同、誰一人欠けることなく帰ってくる事が出来ました！」

「それはよかったわ。なら招待状は貴女達が送ってくださいたのかしら？」

「はい。大精霊かあさんは眠っていますので私達が送らせていただきました。他には”一本角”の新頭首にして”龍角を持つ鷲獅子”の議長であらせられるサラッドルトレイク様からの招待状と明記しております」

その名前に一同は顔を見合わせる。そう、現在”サラマンドラ”で頭領をやっているサンドラと同じ家名なのだ。

「それってもしかして……」

「え、ええ。サンドラの姉の、長女のサラ様です。まさか南側に来ていたなんて……もしかしたら北の技術を流出させたのも——」

「流出とは人聞きが悪いな、ジン＝ラツセル殿」

聞き覚えの無い女性の声が背後から聞こえて、一同はすぐさま振り返った。途端、ここに来た冷たい風とは真逆の熱風が吹き抜ける。

「これって……炎!？」

この熱風の発生源は、空から現れた褐色肌の女性の背に生えた二枚の炎翼だった。

彼女こそ、本来であればサンドラに代わって“サラマンドラ”の頭首になる筈だったサンドラの姉、サラ＝ドルトレイク。

「サ、サラ様!」

「久しいなジン。会える日 wait っていた。そして——」

サラはジンを確認した後、強い意志を感じさせる瞳でツナを見る。サンドラと同じくユニを彷彿とさせる真っ直ぐな瞳に思わず気圧されそうになった。

「初めまして、ジョットの子孫よ。会えて光栄だ」

「へ? あ、ああ、どうも……」

ツナは、サラが差し出した手をおずおずと握った。性格や立ち振る舞いはどちらかと

いえばラル・ミルチに似ているかもしれない。あちらの方がかなり厳しめだろうが。
 「あの、もしかしてI世ジョットのことを知ってるんですか?」

「ああ。だがこんなところで立ち話も何だ。皆、中に入れ。茶の一つくらい出そう」

両コミユニティへの挨拶もそこそこにサラは皆を中へと招き入れる。



ツナ達は貴賓室へと通されてそれぞれ席に付く。

「それでは、両コミユニティの代表者に自己紹介を求めたいのだが……ジャック、やはり彼女は来ていないのか?」

「はい。ウィラは滅多なことでは領地を離れませんので」

ジャックの言葉にサラは肩を落とす。

「そうか。北側の下層で最強と謳われる参加者プレイヤーを、是非とも招いてみたかったのだがな」

『最強』というフレーズに耀と飛鳥は白夜叉の時と同じく反応する。ツナは苦笑いしか出来ない。

コミユニティ“ウイル・オ・ウィスプ”のリーダー、ウィラザイグニファトウス。別名“蒼炎の悪魔”とも呼ばれている。生死の境界を行き来し、外界の扉にも干渉出来

るといふ大悪魔で”マクスウエルの魔王”を封印したといふ噂もある。本当であれば六桁どころか五桁でも最上級の実力者だそうだ。

最も、ツナにそんな事言われてもほとんど分かる訳が無い。

その後は耀がサラの立派な二本角に興味を示したり、そこから”龍角を持つ鷲獅子”連盟の成り立ちについてまで発展したり、対黒ウサギ型ラビットイーターとかいう謎の植物が発注されていることを黒ウサギが知っていじけてしまったり。

「あの……」

「ああ、君の先祖の事だったな」

黒ウサギはラビットイーターなる植物を燃やしに最下層にすつとんでいった後、ツナはジョットについて尋ねてみた。

「といっても、私も母上から話を聞かされただけで直接会った事は無い。彼の事ならば夜叉様の方が詳しいだろう」

「そう……なんですか」

また新しい情報が得られるかと思っていたが宛が外れてしまった。

「ツナのご先祖様ってどういう人なの？」

「どういう人って言われても……仲間を大切にする優しい人かな？」

リングに刻まれている記憶、そしてシモンファミリーとの戦いの最中に見た過去の記

憶でツナがジョットを見た率直な印象であった。彼がボンゴレの原型である自警団を設立したのも住民を守ろうとした優しさ故だったし、友であるコザアートの危機にはい

の一番に駆けつけようとしていた。
「ヤホホ……そうでしたか、彼が。ああ、確かにあのオレンジ色の炎は彼と瓜二つでした」

ジャックは何か思い当てることがあったのか、今まで気がつかなかったことに可笑しそうに笑い、まだ若いアーシヤは何のことか分からずに首を傾げる。

一方その頃、黒ウサギはブラックラビットイーターのある最下層の展示保管庫で暴れていた。

巨人来る！

その後、ツナ達は収穫祭を見て廻った。

珍しい植物（ラビットイーターではない）を眺めたり、屋台の食べ物を買
いまくったり。勿論、農園に植えるための苗や種なんかも物色していた。

現在は見たこともない動物の毛皮を使った製品やこの地域特有の民族衣装の試着を
している。どれもが元の世界には無かった色合いや模様をしていて、女性陣は楽しそう
に着ている。

ツナは皆が楽しそうにしているのを見てしみじみと思う。

（皆も、連れて来たかったな……）

こういうイベント事はいつだって友人達と過ごしてきた。そして、すぐ近くにはあの
家庭教師かてきょうしがいた。

「ツナ。これ、どうかかな？」

耀はツナの目の前でクルリと回った。現在の彼女は牧場でミルクの缶を運んでい
うな純朴な格好をしている。それが元のイメージとマッチしてとても似合ってい
る。

「うん、凄く似合ってると思うよ」

飛鳥は色は控えめだがヒラヒラがついたドレスタイプの衣装を着ている。髪を結ぶリボンもそれに合ったものを着けていた。

黒ウサギはいつもと違って露出度は控えめなワンピースのような衣装を着て、長い耳の間には帽子がちよこんと乗っかっている。あの長い耳は帽子を被るのには不便そう
だ。

「沢田。アナタ、もうちよつと気の利いたこと言えないの？」

「ええっ!? そんなこと言われても！」

今の対応に見かねた飛鳥はツナに抗議をするが、これは仕方ない。何せ、ツナに女性用の服の良し悪しなど分かるわけもないのだから。

ある程度廻った後は、ヒツポカンプの騎手やその他もろもろのギフトゲームの登録を済ませ、宿舎に戻って談話室で談笑していた。

「ねえ、黒ウサギ。もしかして前からアンダーウッドに来たかったの？」

アンダーウッドに着てから、黒ウサギのテンションが高めなことに疑問を持っていた耀は、談笑の最中にそれとなく聞いてみた。

「え? ええと、そうですね。黒ウサギがお世話になっていた同士が南側の生まれだったので興味がありました」

同士。きっとレティシアのように魔王に連れ去られてしまった者の一人なのだろう。ツナの予想は当たっていた。黒ウサギは幼い頃、絶大な力を持つ魔王に一族が散り散りにされて、一人放浪していたところ、その人物に“ノーネーム”へと誘われたと本人は語っている。

黒ウサギが“ノーネーム”の生まれでないことに一同は驚いている。

「黒ウサギを同士として受け入れてくれた恩を返すため……絶対に”ノーネーム”の居場所を守るのです。そして皆さんのような素敵な同士が出来たと帰ってきた皆に紹介するのですよ」

彼女の言葉には熱が籠っていた。弱体化してしまった“ノーネーム”を今日まで見捨てずに、ずっと支えていたのだ。一体どれほどの思い入れがあるのか。

耀と飛鳥は優しく微笑み、ツナは力強く頷いた。

「そう。ならその日、とても楽しみにしてる」

「オレも。また皆が揃うまで頑張ろう！」

「私もよ。ところでその……黒ウサギの恩人ってどんな人だったの？」

飛鳥に問われて、黒ウサギは遠くを見つめる。その口には笑みが浮かんでいた。遠い昔の出来事を思い出しているのだろうか。

「——彼女の名前は、金系雀様。我々のコミュニテイの参謀を務めた方でした」

◆

ツナは自室に戻ると自分のヘッドホンの手入れを始める。最初はリボーンにやらされていたことだが、大分こなれてきた。

(そういえば十六夜君のヘッドホンは見つかったかな?)

やることなすこと滅茶苦茶な男だが、悪人ではない。一緒に過ごした時間は短くとも、友達であり、共に戦った仲間だ。

「ガウー!」

「ん? ナッツも心配?」

ツナがナッツに笑いかけっていると近くで大きな破壊音、そしてそれが原因で起こった地震のような揺れに驚かされる。

「な、何?!」

ツナは超ハイパーモードになって、ナッツと共に窓から外に出る。

「あれは……?」

外では仮面をつけた巨人が長刀を片手に宿舎を襲っている。その大きさは以前戦ったGHOSTの比ではない。

そして巨人が襲っているのは皆が泊まっている部屋の近くだった筈。

しかし、あそこまで大きいと並みの攻撃ではグラつかせるのも難しいだろう。

「ナッツ、カシミア・フォルマ形態変化、モッド・アタック攻撃形態」

ナッツはその形を手甲へと変化させXグローブと一体化した。

「バーニングアクセル!!!」

X BURNERと同等の一撃は巨人に炸裂し、吹き飛ばされる。

「皆、無事か!？」

「YES! ありがとうございますツナさん」

「う、うん。ありがとう」

「感謝するわ」

皆の無事な姿を見て、ほっと胸を撫で下ろす。しかし、間髪いれずに三体の巨人が落下してきた。

飛鳥がそれを見てギフトカードを取り出す。ディーンのパワーであればあの巨人にも対抗できるだろう。

だが、黒ウサギはそれと止めた。こんなところでディーンと巨人が暴れまわったら都市が目茶目茶になってしまう。

「皆さんは地表へ! ここは黒ウサギにお任せ下さい!」

ヴァジュラ・レブリカ
疑似神格・金剛杵を振りかざし、巨人の方へかけて行った。

「……耀、どうした？」

さつきから上の空だった耀に疑問を持ったツナは彼女に話しかける。

「あ、うん。大丈夫……」

耀は飛鳥を抱えてツナと一緒に地下都市から地上へ上がる。

地上はすでに乱戦状態であった。敵の数は約200体ほどだが、その体格差故に巨人に対してその十倍程の人数でやっと足止めが出来ている状況だ。

「おかしい」

ツナは気がつく。周りで飛び交っている声を聞く限りでは混乱しているようにしか思えない。数では勝っていても連携が取れていないのだ。

理由はすぐに分かった。長であるサラが別な三体の巨人に釘付けにされている。それも他の巨人とは違って装飾をつけ、武器も違う。おそらく主力だろう。

「沢田。あなたはサラの方に加勢してちょうだい」

普通、無理にあそこに割り込めば大打撃を喰らい、サラも危険な目に遭わせてしまうかもしれない。長がやられてしまえばこちらの勢いも一気に削がれてしまうだろう。

それは攻撃範囲の広い飛鳥のデーンやまだ空中戦になれてない耀ならそうなっていただろう。しかし、他二人と比べてこういった乱戦を何度も経験しているツナであれ

ば話は変わってくる。

「ああ、そつちは任せた」

二人と別れてツナはサラの元へ向かう。その前には別の巨人二体が立ちほだかる。一人は槌を、もう一人は槍を持っている。巨大な槌はツナを押し潰さんと振り上げられた。

そこでツナは加速し巨人の顎に蹴りを入れる。槌を振り上げれば当然重心は後ろへ移動する。そこに前か押されればそのまま仰向けに倒れていくのは自明の理。

もう一体が槍で突き刺そうとしたところで切り替えてそれを避ける。槍は勢い余つてそのまま転倒中の巨人の脇に突き刺さった。

巨人を切り抜けたツナは今度こそサラの元へ到着する。そのままサラの後ろに迫っていた巨人の足元にXカノンを撃つ。

バランスが崩れたところで顎に拳を叩きこんだ。

「すまない、助かった！」

「気にするな。ここを守りたいのはオレも同じだ」

サラは先程のツナとの差異に驚きながらも気を取り直す。そして彼女は他二体の巨人を押し返すと翼を広げて戦場の上空へ立った。

「主催者がゲストに守られては末代までの名折れ！」 龍角を持つ驚獅子の旗本に生

きるものは己の領分を全うし、戦況を立て直せ！」

サラの一喝で我に返った各コミュニティは高らかに声を上げ、各々自分の役割に就く。これが本来の”龍角を持つ驚獅子”であった。

向こうの方でも飛鳥が操るディーンや耀の活躍もあつて押し返している。

「そこにいる一体を任せても平気か？」

「分かった」

刹那、琴線を弾く音がすると、唐突に発生した濃霧が戦場を覆った。この巨人達の作業かと思つたが、そうであれば何故今更になつて使つたのかという疑問が生じる。

ツナは辺りを警戒して見回す。ツナやサラの炎は向こうからすれば格好の的になつてしまう。

「はあっ！」

真横から薙ぎ払うように振り回された腕を軽く避けて手刀を御見舞した。例え視界が悪くともツナには超直感がある。

サラの方もツナほどではなくても直感には自信があるようで巨人の攻撃を避けている。

霧が出てから一分も経たない頃に突風が吹きく。

「グリフォンか!？」

グリーンやその仲間達がやってくれたのだろう。その突風により霧は晴れていく。霧が無くなり……—そこには先程まで戦っていた巨人の死体が転がっていた。

「これは、一体……？」

他の巨人達も同様に頭、首、心臓を刺されて息絶えている。驚くことに全て同じ殺し方なのだ。

その人物はすぐに見つかった。純白の髪を頭上で黒い髪飾りで纏め、白いドレススカートに美しい装飾を施された白銀の鎧。顔の上半分は白黒の舞踏仮面で隠されていて正体は分からない。それらを巨人の血で真っ赤に染めている女性が飛鳥と耀に何やら話しかけている。

巨人だけを殺しているのだから敵ではないだろうが、それでもツナは警戒せずにはいられなかった。

ツナが二人の元に駆けつけた時には謎の女性は姿を消していた。

「二人とも、無事か？」

「ええ」

「うん」

二人は苦い顔をしながら頷く。ああも圧倒的な実力差を見せられれば耀だけでなくプライドの高い飛鳥でも認めざるを得ない。『あの仮面の女性は自分達より遥かに強

い』と。



「気分はどう？ 春日部さん」

宿舎の有様を見るなり気を失ってしまった耀を担いでツナと飛鳥は緊急の救護施設として設けられた区画に来ている。そして今、目を覚ましたところだ。

「一体何があったの？ それにそれって……」

ツナは耀が大事そうに抱えている残骸。ツナはこれに見覚えがあった。十六夜が探している筈のヘッドホン、炎のシンボルマークが何よりの証拠だ。

「説明してくれるわよね？」

彼女が寝ている間にツナも飛鳥から大体の事情は聞いている。耀が己の無力さに悩んでおり今回の収穫祭に強い意気込みを持っていたこと。飛鳥と共に”ウィル・オ・ウィスプ”のゲームをクリアして、それを飛鳥の承諾のもと彼女個人の戦果として申告していたこと。

ツナは耀がそこまで思いつめていたなんて、あの夜に励ました時には知る由もなかった。

「もしかして、オレって余計なこと言ったかな？」

今思えば無責任なことを言ったかもしれないと不安になってくる。

「そ、そんなことない！ ツナに『私にだって出来ることがある』って言って貰えて凄く元気付けられた！」

それを耀は強く否定した。耀は父親がいなくなつて自分の事を親身に思つてくれる人がいなかった。だからこそツナの優しさが温かく、身に染みだ。

耀は自分の事とヘッドホンは無関係だと言っているが、それでも事実十六夜のヘッドフォンは彼女の荷物に紛れ込んでいた。とても彼女が嘘をついているとは思えない。

「あ、耀のギフトを使えば……」

「あー！」

ツナの提案で耀はエンブレムの匂いを嗅ぐと、やがて複雑そうな表情を浮かべた。どうやら犯人に心当たりがあるようだが、彼女はこうしてこの臭いの持ち主が犯人なのかわからないようだった。

そんなとき、カーテンの向こうから声がかかる。

「えつとつと、”ノーネーム”の春日部耀さんと。ここでいいですか、三毛猫の旦那さん」

声の主は三毛猫と、三毛猫行きつけのカフェテラスの店員女性だった。声を聞いた途

端に顔を擧めた耀を見て、察しの悪いツナでもなんとなく犯人は分かった。

「どうして……?」

『いや、その……お嬢があまりにも不憫やったから……仕返しにして……』

だから耀のことを気にかけてくれているツナではなく十六夜を狙ったのだが、三毛猫もまさか耀を悲しませることになるとは思っていなかったのだ。

三毛猫を十六夜に突き出すのは簡単なことだが、果たしてそれでいいのかと、自分に責任は全く無いのかという気持ちになる。

「やっぱり犯人がわかっただけじゃ駄目だ。何とかしてヘッドフォンを直さないといけない。……手伝ってくれる?」

「ええ、喜んで」

「あはは、こういうのは苦手だけど出来ることがあつたら言つてよ」

その後、皆に事情を話して残骸の回収を手伝って貰ったのだが。

「諦めましょう」

「早いよ!」

フエイス・レス来る！

ヘッドホンは外装がほとんど粉々になっていて、飛鳥が匙を投げるのも無理は無い。おそらくスペインや入江でも『一から作った方が早い』と諦めてしまうだろう。

その後、黒ウサギ達とも合流してヘッドフォンを直すより代わりの品を用意しようという相談が行われる。

しかしその時、緊急を知らせる鐘の音が“アンダーウッド”中に響き渡り、その直後に巨人の来襲を知らせる地響きが地下都市を揺らした。

地表へ出たツナ達が見たのは、既に半ば壊滅状態の“一本角”と“五爪”の同志達。鐘が鳴つてからまだそれ程時間は経過していない筈だというのに、一体何があつたのかと一同は驚いた。

すると一頭のグリフォンがこちらへ向かつて飛んできた。

『耀……！ 丁度良い、今すぐ仲間を連れて逃げる！』

グリーはこちらの軍勢が巨人の大群と豎琴の音色によつて瓦解していると行って、東の白夜叉に救援をと叫んだ。豎琴の音色はここから音源がかなり離れている耀達でさえ意識が飛びそうになる。ツナは音で気を失わないように気を強く持った。

目の前でバタバタと倒れていく幻獣や獣人達を見て、ツナは我慢の限界だった。

「行つてくる!」

「ちよ、ツナさん!」

黒ウサギの制止の声を振り切ったツナは濃霧の中をオレンジ色の炎で照らしながら前線まで飛んでいく。その間にも巨人を転倒させ、殴り飛ばし、ナッツの咆哮で石化させる。

「——こつちか!」

音がする方目掛けてツナは加速する。案の定だが、音に近づくとつれて巨人は増えていった。音色を放つ人物はきつとこの奥にいる。

霧の先に人型のシルエツトが見える。ツナはそれに手刀を叩き付けた。

「くつ、誰ですか!」

手刀は声の主が持つ剣によって受け止められた。白銀の鎧に顔の上半分を覆う仮面、つい先程飛鳥達を救ってくれた人物だった。

「あつ、すまない。竖琴の音色の主かと」

「構いませんが、次からは気をつけて——」

彼女は言いながらも迫り来る巨人を切り捨てた。

「気をつけてください。こうなりたくなければ」

「ああ、——ナッツ！」

「GYAAAAAAAAA!!」

ナッツの咆哮によって後ろの巨人は石化してそのまま仰向きに倒れる。

「やりますね。流石は『ジヨットの血を引く者』といったところででしょうか」

「お前は……」

その名前が出たということは彼女もジヨットを知る人物の一人ということになる。

「コミュニケーション”クイーン・ハロウイン”のフェイス・レスといいます」

「コミュニケーション”ノーネーム”の沢田綱吉だ」

直後にフェイス・レスは巨人を真つ二つに切り裂き。ツナはXカノンで巨人の顔にぶつけた。自己紹介をしている間にも二人は全く隙を見せていない。

『——どこに逃げたの白夜叉あああああああああああああッ!!!』

突如、戦場に響き渡る少女の大声。ツナはこの声をついこの前聞いている。

「まさか……ペストツ?!」

そう、皆と共に戦い、最後は飛鳥との連携で倒した黒死斑の魔王ペストの声だ。そして彼女は今、白夜叉をもの凄い剣幕になりながらも探している。どうやら彼女は白夜叉に煮え湯を飲まされたらしい。

「成程、黒死病を操る魔王を隷属させましたか。これなら……」

フェイス・レスが感心しているのは二つある。一つ目は巨人と黒死病の相性、ケルト神話の一説では黒死病を操ることで巨人を支配していたというのがある。二つ目は怒り狂うペストを上手く使役出来ていることだ。ツナは知らないことだが、これはジンのギフト”精霊使役者”によるものだ。

”精霊使役者”とはその名の通り精霊を使役すること。一度隷属させれば、己の霊格に関わらず、例えば相手が魔王であっても十全に支配することが出来るのだ。

ペストが巨人をバツタバツタと薙ぎ倒していく中で、霧はより濃くなっていく。豎琴の音色の主は戦況が不利になったことで逃げ出そうとしているのだろう。

しかし、ジンもここでペストを投下した時点で敵が姿を晦まそうとするくらい予想はついている筈だ。

この深い霧の中であつても、彼女であればそれを探すことが出来る。

耀が”黄金の豎琴”を奪い取ったことで、こちら側の勝利は確定した。

霧が晴れた後にツナが見たのは嬉しそうに”黄金の豎琴”を握り締めた耀と憤怒の表情で巨人の残党を片付けていく——何故か白いフリフリのメイド服を着たペストであつた。

超^{ハイパー}化を解いたツナは耀に駆け寄った。今回のMVPは間違いなく彼女だろう。

「ツナ、私やったよ!」

「うん……—つてそういうえば何でペストがいるの？ それにあの格好は……」

「黙りなさい沢田綱吉!!」

「ヒイ!?!」

巨人を狩りながらもツナの声はしつかりと聞き取っていたようだ。何という地獄耳。何処かで見えたことがあると思っただらレティシアが着ているメイド服に似ている。あの格好は白夜叉に無理矢理着せられたのだろうか。ジョットが関係したらそうでもないが、それ以外ではやっぱり駄神だった。

「ああ、また新しい被害者が……」

黒ウサギは似たような境遇だけに同情の涙を流している。

ペストが最後の巨人を倒したことでこの戦いは終結した。



次の日の朝、ツナ達を迎えたのはフェイス・レスであった。

「どうやらフェイス・レスの力を借りて十六夜のヘッドホンの代わりになるものを”箱庭”に持つてくるそうだ。」

「しかし、厳密には”クイーン・ハロウイン”の力で召喚するのではなく。星の巡りを

操って因果を変えるので、耀さんがヘッドホンを持っていないと成立しないのですが……」

「つまり過去を変えるってこと？」

「はい」

ジンは心配そうに頷いた。

「それは大丈夫。十六夜のヘッドホンの同じメーカーのが家にある」

「そうなの!？」

話を聞けば、耀は十六夜やツナよりも未来の世界から来たらしい。もしかしたら十六夜の世界の未来から耀が来たのかもしれないなど、ツナは何とも言えない気持ちになった。

「うん。父さんがビンテージ物だって言ってた。あれなら十六夜もきつと許してくれると思う」

「でもお父様の物なんでしょう？ 勝手に持って行っていいのかしら？」

「それも大丈夫。父さんも母さんも行方不明のままだから」

さつくりと述べる耀に対して両親を亡くしている飛鳥は俯き、ツナは押し黙ってしまった。

(オレって、恵まれてるんだな……)

よく家を開けて、しかも実はボンゴレのNo. 2だとか言われて文句を言っていたあの頃の自分を殴りたい気分になった。

未来の世界で自分の両親が行方不明になってることを知って自分の身体が張り裂けるような気持ちになった。耀はそれをもっと長い間その痛みに耐えてきたのだ。

「……ツナ？」

「あ、うん。何でもない。ちょっとボーっとしてただけだから」

「嘘」

ツナは笑顔を取り繕ったが、明らかに不出来で飛鳥ですらツナが暗い気分になっていることに気がついている。

「確かに、父さんと母さんがいなくなったのは辛かった。けど、私にも一緒に笑ってくれる友達が出来た。力を貸してくれる仲間が出来た。だから、そんなに辛くないよ。それに、これからは待つてるだけじゃなくてもっと歩み寄ろうって」

耀は周りの人達を見て、最後にツナに微笑みかける。ツナは要らない同情だったと今度こそ本当に笑い飛ばした。

——もし、機会があったらオレの友達をたくさん紹介しよう。

ツナは心にそう決めた。

一同は“アンダーウッド”の螺旋階段を登って地表に出る。そこにはフェイス・レスが用意した“黄道の十二宮”を描いた陣があった。

耀はその中心で座ったまま、必死にヘッドホンへの想いを高めている。このまま半日ヘッドホンについて考え続けければ後はフェイス・レスがどうにかしてくれるらしい。”クイーン・ハロウイン”の力を借りているとはいえ、人間がそれだけのことを可能に出来るというのは黒ウサギも驚きであった。

そしてヘッドホンは届いたのだが……。

「猫耳?」

「可愛い! それ凄く可愛いわ!」

飛鳥には好評のようだが、ツナを含め他は微妙な顔をして見ている。

外装は十六夜のヘッドホンとほぼ同じなのに何故か猫耳がついている。耀が着ける分には問題ないだろうが、これは十六夜に渡すものだ。とても男が着けるようなものじゃあない。最も、十六夜ならもしかしたら喜ぶかもしれないが。

フウと息をついたフェイス・レスは召喚が失敗したことに驚き、その原因と思われる耀のペンダントを確認させて欲しいと言った。

耀は戸惑いながらもペンダントを渡す。

フェイス・レスは耀に2，3質問をした後にペンダントを返した。

「――召喚に失敗した代わりと言っては何ですが……一つご忠告を」

フェイス・レス曰く、耀のペンダントは他種族からギフトを貰うだけでなく、進化させたり合成させたり出来る代物らしい。

「気をつけて、そのギフトは本来であれば人間の領域を大きく逸脱したものですから。もつとも……」

フェイス・レスは次にツナのリングを見た。

「おそらくアレ程ではないでしょうが」

フェイス・レスはそう言って崖を跳び下りて姿を消した。

修繕を諦めた一同は、何か代わりのものと店を回ったが、結局何も見つからず、猫耳ヘッドホンを十六夜に渡すことになった。

そしてツナが宿舎に戻った時、また通信が回復した。

『やつほー久しぶり♪一週間ぶりくらいだね♪』

「びゃ、白蘭!?!」

外して仕舞おうとしたヘッドホンから流れた少しおどけた声は紛れも無く白蘭の声だった。

『転送装置だけどね♪まだ未完成なんだけどさ、とりあえず一人くらいは送れるくらいになったよ♪でも十年バズーカみたく制限時間が来たら強制送還だけどさ♪』

『おい、代わりやがれ! 十代目、待っててくださいね! 十代目の右腕獄寺隼人がジャンケンで勝つてみせますんで』

(ジャンケンoooooooooo!?)

結構大事なことなのだが、どうやらジャンケンでここに来る一人を決めるらしい。

『ちやおつす。ツナ、そつちはどうだ?』

獄寺は他のメンバーとジャンケンでもしているのか、リボンが出た。

「とりあえず今は大丈夫だけど」

『あれから9代目に聞いたところ、一時期、I世が行方不明になったことがあるそうだぞ。騒ぎになるからGやコザアートのような一部の信用の置ける者達しかしらされなかつたらしいけどな』

その期間の間にジョットはこの“箱庭”に来ていたことになる。

『リングと匣兵器の不自然な流出については今のところさっぱりだ。新しい情報が入たらまた回線を繋げて連絡してやる。おい、スパナ』

『ああ、ボンゴレ、ヘッドホンとコンタクトレンズの調子はどう?』

次はスパナ。自分の作成したものの調子を聞く辺りがメカニックである彼らしい。

「うん、大丈夫」

『そうか。また新しいアイディアを思いついたから今度改良——』

ツナが聞いたのは“箱庭”全土に響くとすら思える明らかに人ではないモノの咆哮。慌てて外へ飛び出せば、上空には巨大な龍。白蘭が従えていたのとは比べ物にならない程大きい。

それに拍車をかけるように鐘がなる。龍だけでなく巨人までここを攻めて来ている。

『ボンゴレ、どうした！ 今の音は!?!』

「ごめんスパナ！ また後で！」

ツナは通信を切って空へ飛んだ。

十三番目の太陽を撃て

巨龍来る!

外へ飛び出したツナの目に入ってきたものは空からヒラヒラと落ちてくる黒い封筒。
ツナはそれを迷わず手に取った。

「これは……まさか!」

火龍誕生祭でペストがギフトゲームを仕掛けてきた時の状況に似ている。つまりこの中には契約書類ギアスロールが入っている筈。

封を開けるとツナの思った通りのものが入っていた。

『ギフトゲーム』 SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMPIR
E KING

・プレイヤー一覧

・獣の帯に巻かれた全ての生命体

※ただし獣の帯が消失した場合、無期限でゲームを一時中断する

・プレイヤー側敗北条件

・なし（死亡も敗北と認めず）

・プレイヤー側禁止事項

・なし

・プレイヤー側ペナルティ条項

・ゲームマスターと交戦した全てのプレイヤーは時間制限を設ける。

・時間制限は十日毎にリセットされ繰り返される。

・ペナルティは“串刺し刑” “磔刑” “焚刑” からランダムに選出。

・解除方法はゲームクリア及び中断された際にのみ適用。

※プレイヤーの死亡は解除条件に含まず、永続的にペナルティが課せられる。

・ホストマスター側 勝利条件

・なし

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスター：“魔王ドラキュラ”の殺害。

二、ゲームマスター：“レイシールドラクレア”の殺害。

三、砕かれた星空を集め、獣の帯を玉座に捧げよ。

四、玉座に正された獣の帯を導に、鎖に繋がれた革命主導者の心臓を撃て。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

” ” 印』

「何だこれは……?」

ツナが困惑するのも無理は無い。こちらの敗北条件が無いことや向こうの勝利条件が無いこと、ペナルティについても不明な点が多いが、何よりも「ノーネーム」の同士である筈のレティシアがゲームマスターであることが不可解だ。

——レティシアが裏切った?

否、今までそんな素振りは見せなかった。裏切るところか彼女は「ノーネーム」のことを人一倍心配しているのだ。そんな優しい彼女が進んで敵に回るとは思えない。

考えられるのは第三者の介入だろう。この名前を記載されていない何者か、もしくは「コミュニケーション」がレティシアに何かしたのだ。

「————GYEEEEEEEEEEYAAAAAEEEEEEEEEEYAAAA

AAAAAAAAAAAAAAAAaaaaaa!!

巨龍は雄叫びを上げながら己の鱗を散弾のごとく“アンダーウッド”中に撒き散らす。やがてその鱗は形状を変化させ大蛇、火蜥蜴、大蠍といった魔獣となって“アンダーウッド”を襲う。

最前線には巨人、内部には魔獣、空には巨龍と敵が多すぎる。

(巨人の方にも向かいたい……)

まずは魔獣を殲滅する方が先だ。内部には非戦闘要員もいるのだから彼らの安全確保をしなければ。

そう思い、ツナは魔獣の群れに飛び込んだ。

ここで問題が出てくる。ツナの技は一对一で本領を発揮するものが多く、この数が相手となるとX BURNERや死ぬ気の零地点突破のように時間が必要な技は使いにくい。

現時点では徒手空拳で魔獣を退けることは出来ても、彼一人でこの流れを変えることは出来ない。

そう反撃の狼煙となるきつかけが必要だ。

それは盛大な破壊音と共にやってきた。

「あれは……」

大樹を揺らした衝撃と爆音、巨人が最前線から吹き飛ばされて大樹に突き刺さったのだ。

巨人が自分の意思で空を飛んで突っ込んで来たとは考えにくい。

ツナはこんな出鱈目なことをする男に一人、心当たりがある。

「そういえば、そろそろ十六夜が来る頃だったな」

「ガウ？」

十六夜の強さはツナもよく知っている。単純な攻撃力ならとてつもない。そして楽しみにしていた祭りを邪魔されたとあればその心中は穏やかではない筈。

彼が暴れまわっているのなら前線の方は問題無さそうだ。

『審判権限』の発動が受理されました！ 只今から”SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMPIRE KING”は一時休戦し、審判決議を執り行います！ プレイヤー側、ホスト側は共に交戦を中止し、速やかに交渉テーブルの準備に移行してください！ 繰り返し——』

黒ウサギのアナウンスは途中で遮られてしまう。

巨龍にとってはただ動いただけ。たったそれだけのことで吹き荒れた暴風は”アンダーウッド”全土の人々全てを吹き飛ばし、震撼させた。

ツナでさえ柔の炎で飛ばされるのを堪えるだけで精一杯だ。

「グツ……アツ……!!」

「ガ、ガウ!」

(何だ……ナッツは何を見て……?)

巨龍に隠れて今まで見えなかった上空に浮かぶ古城。そこへ魔獣が向かっている。しかも「アンダーウッド」の住人と思しき子ども達を捕まえながらだ。

「マズイ!」

幸いなことにあの古城周辺の風はそれ程乱れてはいない。

一か八か、柔の炎を剛の炎に変換し、城へと一直線に飛んだ。

「——っ、はっ! ここまでは暴風も届かないな」

少し消耗しながらも暴風を抜けたツナは柔の炎に切り替えて城へと到着する。

ここは恐らく敵の本拠地だ。

目立たないように死ぬ気モードを解いて城へ潜入する。

「まずは子ども達を捜さない」と

メローネ基地での潜入を思い出す。

ラル・ミルチに気配の消し方や息の殺し方、足音を立てない動き、その他諸々を獄寺や山本達と一緒にスパルタで叩き込まれている。

「あれは……」

敵の本拠地だけあって警戒は強い。水気を含む不快な音を立てて血塊と苔の集合体のような赤黒い怪物がそこかしこに跋扈している。

驚くことに薄っすらだが黄色に光っているのだ。

(あれは、まさか晴れの炎!?)

晴れの炎で強化されているのであろうが、動きはそれ程素早くない。しかし、こう数が多いと正面突破は難しい。

ツナは怪物達を通り過ぎるのをひたすら待った。

——そして、怪物達の足音が一斉に止まった。

(何だ……?)

見つかったのかと思ひ、警戒しながら死ぬ気丸を片手に持つ。

しかし、ツナの考えは外れていた。

『キヤーーー!!』

少し離れた先で子ども達の悲鳴。足音が止まったのはあの怪物が他の侵入者に気づいたからだった。

ツナは再度死ぬ気化し、悲鳴が聞こえた方へと飛ぶ。怪物の後ろから素早く奇襲をかけ、手で怪物を切り裂いた。

手応えで言えば生き物というより硬質化した何かを切り裂いたという感覚だ。

いたのは子ども達だけではない。

「ツナ!？」

怪物が真つ二つに割れた先には子ども達と一緒に耀もいる。

「お嬢ちゃん、お仲間かい……!？」

「うん!」

共にいた猫のような老齡の獸人に聞かれた耀は赤黒い怪物を素手で打ち砕きながら頷く。耀も以前共に戦つてペルセウス戦の時と比べて格段に強くなっていた。その証拠に赤黒い怪物、正式名称「冬獸夏草」十数匹を難なく倒している。

「ん? これは……」

耀が砕いた怪物から黄色の鉱石の破片のようなものが出てきたのをツナは手に取つた。純度は大して高くないにせよ、まだ黄色の炎を薄つすらと出している。

(まさか、これを核にして死ぬ気の炎を……?)

『きやああ!!』

子ども達が逃げた方でまた新しい悲鳴が響く。待ち伏せをされていたのだ。

その事に気がついた耀は舌打ちをし、ツナも焦る。悲鳴がしたということは最悪子ども達が……。

耀は子どもを、ツナは老齡の獸人を抱えて大急ぎで子ども達の下へ飛んだ。

そこで見たのは、地獄の業火で焼かれる怪物達。

そしてその業火を操るのはいつもの陽気な道化声を上げる悪魔ジャック・オ・ランタン。

燃え上がる炎は怪物を燃やすだけに留まらず、城下町全てを燃やしつくさんとする勢いで広がる。彼による一方的な殲滅の光景がそこにあった。

これは拙いと耀とツナも慌てて上空へと非難する。ジャックが子どもごと燃やし尽くすなんて非道な真似はする筈もないから、子どもについては心配いらないだろう。

「すごい……」

全てを燃やしつくすこの光景はまるでXANXASや二世セコンドが使う憤怒の炎のようである。

炎が鎮火した時には怪物の影も形も残っておらず、文字通り『骨も残らない』というやつだ。もし巻き込まれたらと思うと想像するだけで恐ろしい。

二人がゆっくりと降りてきたとき、ジャックとその頭に乗っているアーシャはようやく二人の存在に気づいた。

「おや？」

「あ、何だお前らいたのか！　もしかしてお前らも子ども達と一緒に捕まってたとか？」

「……違う。捕まった人達を助けに来ただけ」

ツナは抱えてた老齢の獣人をゆっくりと降ろす。敵がいなくなったことでツナももうやく一息ついた。

「フー、大丈夫ですか？」

「わりいな坊主」

「何はともあれ、ここは危険です。他の参加者とも合流しましょう」

ジャックが指をパチンと鳴らすと、キャンドルスタンドとランタンをぶら提げた小さな人形、総勢15体が現れて、隠れていた子ども達を連れてくる。

全員無事なようで、ツナと耀もほっとした。

それから皆で今後の方針を話し合いをすることとなった。ジャックが敵を殲滅したからといって敵の本拠地と思しき場所での油断は禁物だ。

「お二人とも、ギフトカードはお持ちですか？ 持っていたら出してください」

「わ、わかった」

ツナはオレンジのカードを、耀はパールエメラルドのカードをそれぞれ取り出した。その二枚とも奇妙な紋章が浮かんでいる。

「変な紋章が浮かんでる……？」

「これは“ペナルティ宣告”です。主催者側から提示されたペナルティ条件を満たして

しまった対象者には、招待状とギフトカードに主催者の旗印が刻まれるのです」
ツナは慌てて持っていた”契約書類”^{ギアス・ロール}を広げる。

『ギフトゲーム名』 SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMPIRE KING”

*プレイヤー側ペナルティ条項

- ・ゲームマスターと交戦した全てのプレイヤーは時間制限を設ける。
- ・ペナルティは”串刺し刑” ”磔刑” ”焚刑” からランダムに選出。
- ・解除方法はゲームクリア及び中断された際にのみ適応。

※プレイヤーの死亡は解除条件に含まず、永続的にペナルティが課される』

「ゲームマスターってレティシアの事ですよね？ オレはレティシアと戦ってないのに……」

「私も、あの巨龍の鱗の魔獣と冬獣夏草くらいとしか戦ってない」

「ですが事実、我々はペナルティ条件を満たしてしまった。ならば考えられる可能性は一つでしょう」

二人はハツとした。

あの巨龍レレイシアだとしたら。その分身である魔獣と戦ってしまえばペナルティ条件を満たしてしまうのではないだろうか。

吸血鬼で有名なドラキュラとはルーマニア語で竜の子を意味する言葉。

ペストの時もそうであったことから、今回も何かの伝承に準えていると考えていいだろう。

「じゃ、じゃあオレ達皆処刑されちゃうんですか!？」

「どちらにしろ”魔王ドラキュラ”を倒さない限り……十日後には、血の雨が降ることになるでしょう。伝説の如く、串刺し刑に処されてね」

ジャックのカボチャ頭の中で揺れる炎の瞳が、古城を囲む雷雲に移る。

砕かれた星座来る!

あれから一夜明けて、ツナ達も一息つくこととなった。

食料や水に関しては、ガロロやジャックがギフトカードに常備していた保存食と水樹でどうにかなった。ギフトカードは、ただギフトを入れておくだけでなく、緊急時のための備えにもなるのだとツナと耀は学んだのだ。

耀は食事の味に少し不満はあったものの、それでも今後のためにガンガン食べている。

一通り食事を終えた皆は今後のことを話し合うことになった。

「さて、今後の活動だが……まずは意見を募りたい。誰か案はあるか?」

ガロロの言葉に、耀はここに残り、謎解きを行うことを提案した。耀もツナもペナルティを受けることは確定している身。であれば、合流するよりも敵陣内で少しでも多くの手掛かりを見つけてゲームクリアを目指した方が良い。

審議決議の間は戦闘行為が禁止されてるので、非戦闘員である子ども達も絶対とは言えなくても襲われる危険性は低い。それにこの場にいる50人の内40人が子どもだ。散策するのであれば頭数は多いに越したことは無い。

子ども達も少しでも役に立ちたいとその意見に賛成であった。

「……おし、分かった。若い連中がそこまで言うからにや俺も腹を括ろう。しかし具体的にはどうする？ 無闇に探索するんじや骨折り損だ。もし無策なら、許可は出せないぜ」

「うん。それについては私から提案……というか、勝利条件について暫定的な解答があるというか……」

「それ本当!?!」

耀は少々自信無さ気ではあるが、あの難解な勝利条件を解き明かしたことにツナだけでない、他の4名も驚き、賞賛している。

耀が自分の予想を確信にするためにガロ口達に吸血鬼の歴史について尋ねた。

吸血鬼は先日攻めて来た巨人と同じく本来の故郷を追われて”箱庭”へとやってきた一族である。

彼らにとつて太陽の光を浴びることが出来る箱庭は夢のような居場所だっただろう。そして、当時は各地域で独裁状態だった箱庭に秩序を齎そうと彼らは”箱庭の騎士”として立ち上がった。彼らは持ち前の力、知恵、そして勇気で凶悪な魔王を倒していき、中下層の魔王はあらかた駆逐され箱庭には安定期が訪れた。その後下層では”箱庭の騎士”を中心に規定を設けて、”階層支配者”フロアマスターや”地域支配者”レギオンマスターの制度が出来上がった。

(レティシアあってそんなに凄い人だったんだー!!!?)

今の話聞いたツナは、「ノーネーム」で雑務を行っている人物がそんな大物である事を再確認する。そんな人物を支配下に置いた先代のリーダーはどれ程の実力者だったのだろうか。

「……それで、めでたしめでたし?」

「そんなわきやねえ」

その後、間もなくして吸血鬼の一族は吸血鬼の王によって惨殺されることとなる。

「それを行ったのが”串刺しの女王”———僅か十二歳で”ドラク龍の騎士”にまで登り詰めた最強の吸血鬼。レティシア”ドラクレアさ”

二人は絶句した。

「そ、そんな……」

「あん? お前ら同じコミュニティだろ。聞いてないのか?」

ガロ口は怪訝な表情をするも、話を続けた。

初代”アンダーエリアマスタ全権階層支配者”となったレティシアはその権力と利権を手に、上層の修羅神

仏に戦争をしかけ、それを阻止しようとして革命を起こした吸血鬼達と殺し合い———

—その結果滅んだ。

耀はガロ口から聞いた吸血鬼の歴史を頭の中で何度も反芻しながら、そして契約書類

を何度も見返している。

ツナも少しでも助けになればと考えてはいるものの、何一つ実になることが思いつかない。ならばとまた契約書類ギアスロールに目を落とす。

一番上に記してあるゲーム名に最初に目があった。

「SUNは太陽、SYNCHRONOUSは同時、ORBITは人工衛星とかの軌道だったかな？　つて人工衛星……？」

古い歴史を持つ吸血鬼にそぐわない人が生み出した文明の利器。何か関係があるとは思えない。しかし耀はツナの眩きにコクリと頷いた。

「そう。人工衛星」

「じ、人工衛星ですか！　まさかこの城が……？」

ジャックも今の一言で耀と同じく答えに辿り着いた。

今ツナ達がいるこの城を人工……否、神造衛星だと仮定すればこのゲームに太陽と軌道が関係することが明らかになる。

そして第三の勝利条件である『砕かれた星空を集め、獣の帯を導に、鎖に繋がれた革命主導者の心臓を撃て』にある獣の帯は”獣帯ソディンツク”、つまり黄道十二宮を示すことになる。

砕かれた星空、つまり天球分割法によって十二に分けられた星座を玉座に捧げると見

解出来る。

ここまで来れば頭脳労働担当でないツナでも分かった。

「つまり、十二星座に関係のあるものを集めてこの城の何処かにある玉座に持っていけばこのゲームはクリアってこと?」

「私の考えが正しければ多分……そう、だと思う。でもその星座に関係あるものっていうのがまだよくわからないし。玉座の場所も『捧げる』っていうのもまだ……」
それでもこのギフトゲームを攻略する上での方針を決めるには充分であった。



十二に分かれた城下町の探索はこの広さから二手に分かれてすることになった。何かあったときのたもと一方にはジャックとアーシャが、もう一方にはツナと耀、そしてガロロが引率している。子ども達にはジャックの案でゲーム感覚で楽しく探索して貰えるように景品を出すといったふうにしていた。

「そういえば……」

「?」

「よく分かったよね、星座とか。ゾディアック……だっけ? オレ、さっぱり分からな

かったよ。というか今でもほとんど分かってないし」

年齢ならツナと耀はほぼ同年。それでも、十六夜ほどではないにしろ有している知識が彼とは桁違いだ。

「……父さんが、そういう話が好きでよく聞かせてくれたから」

「父さんって確かその凄いペンダントをつくった人だよね？」

ツナは箱庭に来たばかりの頃に白夜叉の元で彼女が言っていたことを思い出す。

「心配とかってしてないのかな」

ツナがそうであったように、他の三人達にも残してきた家族や友人がいたのではないか？ 今まで言葉にこそだしてはいなかったものの、それは今になってポツリと吐き出される。

耀は小さく、そして少し悲しそうな顔をして首を横に振った。

「父さん、行方不明だから……」

「えっ、あ……ごめん！」

「別にいいよ。あんまり気にしてないし。……そうだ。ツナの父さんはどんな人なの？」

耀は空気を変えようと、ツナの方に話を振ってきた。気遣いもあるのだろうが、純粹にツナのことをもつと知りたいという気持ちもあつたのかもしれない。

「オレの父さん? うくん……なんというかちやらんぼらんでいい加減なダメ親父で、二年くらい前に石油を掘りに行くとか言い出して——」

「に……ねん……? それで、ツナの父さんは?」

「へ? 突然帰って来て色々勝手なことを言い出して……」

丁度ヴァリアーが襲いかかってきた頃の話である。ディーノと共にハーフボンゴレリングを持って帰国したのだ。

「そうなんだ……羨ましいな」

二年後に帰ってくると約束してついぞ帰ってくることはなかった耀の父、春日部孝明。

妻子に詳細を話さず家を出て、それでも二年後に帰ってきたツナの父、沢田家光。

共通点はあれども全く正反対の結果になったこの境遇を耀は羨んだ。彼女は父の言う通り多くの動物達と友達になり父を待った。

けれどもそれは叶うことは無かった。

(でも、もし父さんが戻ってきていたら)

一瞬だけ過ぎたその考えをすぐに捨て去る。たればを考えても仕方が無いし、そうなっていたらこの箱庭で“ノーネーム”の皆と出会うことが出来なかつたかもしれない。

「良いところ取りって出来ないものだよね……」

「えっ、何か言った？」

「ううん、なんでもない」

子ども達も手伝ってくれたお陰で城下町の探索は考えていたよりも早く終わり、皆は
”黄道十二宮”に関連するものを持ち寄った。

全て合わせると黄道十二宮の星座が刻まれた何かの欠片が計12個と、別の星座が刻
まれたものが計14個。黄道十二宮の星座が刻まれた欠片はともかく他の14の欠片
が見つかったのは彼らにとって想定外だった。

「……キリノ。この欠片はどんな建物の下にあったの？」

「えっと、十二宮は神殿のような大きな廃墟に。その他は瓦礫の下から出てきました」
十二宮のものだけ扱いが違っている。しかしそれさえも時間稼ぎのためのミスリー
ドだという可能性は捨て切れなかった。耀は欠片を手にとって完成形を予想しながら
弄っていた。

「なんかパズルみたいだ……」

ツナも適当な欠片を二つ手に持った。それには牡羊座と牡牛座が刻まれている。

それを耀はふと何かを閃いた。

「っ！……めん、それ貸して！」

ツナは慌てて耀に二つの欠片を手渡す。牡羊座と牡牛座は黄道十二星座で隣り合う組み合わせ。彼女の考えが正しければ――。

「嵌まった」

二つの欠片はカチリと組み合った。

それから双子座、蟹座、獅子座と十二星座を時計回りに組み合わせていき……一つの半球体が完成した。

「解けた」

「「は?」」

「え? じゃあこれが!」

「うん。これが、この欠片が玉座に捧げる最後のカギだ!」

耀は今までにない歓声を上げながらツナとアーシャに抱きついて喜んだ。



耀が思わず謎を解いてしまった頃、下の方ではレティシアの偽物がゲーム中断中にも関わらず攻撃を開始。その際にサラを庇った十六夜が負傷。

それを開始の合図にでもするかのように巨人の軍勢がアンダーウッドに攻め込んで

きた。

レティシアの偽物を十六夜とグリーンが、巨人の軍勢を他のメンバーで相手をする事となる。

そして黒ウサギは大樹の天辺で突如現れた謎の少女と対峙していた。

「……貴女は、我々の敵ですか？」

「うん、そうだよ」

目の前の少女を敵と判断した黒ウサギは即座に雷光を放つ。熱と火花を散らした一撃は水樹の葉を一瞬にして燃え上がらせた。

しかしそれは少女を倒すには至らず、ナイフの投擲による反撃をされる。”
擬似神格・金剛杯^{ヴァージュラ レブリカ} による一撃を耐えた上に反撃までしたこの少女の能力の高さに彼女は戦慄した。

「ちなみに私の仕事は、ウサギさんの足止めです。だってウザギさんに”バロールの魔眼”を撃ち抜かれたら私達が困るもの」

少女が告白した直後により重厚な地響きが平野を揺らす。黒ウサギは一つの答えに辿り着いて一気に血の気が引いた。彼女は自身の情報収集能力でそれを確信にした。平野でレティシアを攫ったローブの女が召喚の儀式を行っている。

相手は死の呪を持つ魔眼の持ち主である魔王バロールをこの平野に召喚するつもり

なのだ。

(これ以上あの子にばかり構ってはいただけません!)

あの巨龍だけでも絶望的なのに魔王バロールまで出されたら参加者側に勝ち目は無い。

黒ウサギは決心し、^{ヴァジュラ}「擬似神格・金剛杯」^{レプリカ}を掲げる。^{ヴァジュラ}「擬似神格・金剛杯」^{レプリカ}を掲げた

黒ウサギの髪は燃え上がるような紅蓮に染まる。

青い稲妻は炎を纏った紅い稲妻と姿を変える。

「擬似神格解放……！ 穿て、^{ヴァ}軍神槍・金剛杯」^{ジュ}——!!!」

平野を燃やしつくさんとする勢いを秘めた炎と雷を少女へと投擲した。本体が燃え尽きる代わりに一度だけ神格を解放することが出来る黒ウサギの切り札。

少女のギフトの詳細は不明であったが、これだけの一撃であれば、

「——平野ごと吹き飛ばすつもりだったなんて、過激だねウサギさんは」

確かに直撃した筈だった。しかし少女は無傷な上に黒ウサギが予想していたよりも地表が荒れていない。同等の一撃で相殺するか、壁を囲って押さえ込むかしなければこんな結果にはならないだろう。

黒ウサギの武器は「マハーバーラタの紙幣」が二枚のみ。インドラの槍と黄金の鎧の使用には制限がかかっていることもあってかここで使用することには危険が伴う。

彼女の任務はあくまでバロールの魔眼を撃ち抜く事だ。それが出来なくなってしまうば詰んでしまう。

その時、様々な戦いが繰り広げられる中で、一つの雷が大樹の上へと落ちた。

激しき雷電来る!

一つの雷は激しい衝撃を生みながら黒ウサギと謎の少女——リンとの間に落ちた。

「こ、これは……」

黒ウサギは焦っている。ただでさえもうじき魔王パロールが召喚されてしまうかもしれないのに、新しい厄介事が舞い込んで来るのは勘弁したい。

リンも想定外の出来事に雷の落下地点を静かに見つめている。

雷によって立ち込めていた黒い煙は吹きすさぶ風によって払われ、露となった。

——そこにいたのは、

「ガハハー! ランボさん参上だもんね!」

50cmにも満たない小さな身体。

牛模様のタイツ。

そしてもじやもじや頭に牛のような角。

齢5にして雷の守護者であるランボがそこにいた。

「あ、赤ん坊ですか……?」

「あははは、ウサギさんの次は牛さんだー! おもしろーい!」

黒ウサギは拍子抜けし、リンは大笑いしている。

その一方でランボとはぼけた表情をしながら周囲を見回していた。

「あれ〜ツナは〜？ ツナー!! どーこだー!!」

「えっ?」

黒ウサギはその呼ばれ方に心当たりがある。というより自分も普段から彼の事をそう呼んでいた。

（あの子はもしかしてツナさんの関係者ですか!?）

彼は「もしかしたらオレの友達が来るかもしれない」と言っていた。あんな子どもだというのは計算外であったが、ノーネームの恩人の一人である人物の関係を巻き込む訳にはいかない。ましてやジンやリリよりも幼い子どもがこの戦いに巻き込まれて生き残れる訳が無い。

「君! 早くここから離れてください!」

「あ! ウサギさんだもんね〜!」

黒ウサギのとつた対処はランボに対して逆効果になる。ランボは腕白で好奇心旺盛な子ども。ウサギの耳をつけた黒ウサギに興味を持つのは別段おかしな事でもない。

ただ、現状で『そのおかしくない行動』は仇となる。

「でも、ウサギさんと遊ぶのに邪魔だから消えてね」

無情にもリンは後ろを向いているランボに、一本のナイフを投げた。

黒ウサギはランボを抱きかかえて瞬時にそのナイフを回避。そしてリンを怒りの形相で睨み付けた。

「あなたの狙いは黒ウサギなのでしょう？ この子は関係ありません」

「えーだってウサギさんと遊ぶのに邪魔だったんだもん！」

黒ウサギは抱きかかえていたランボを静かに降ろす。

「ランボちゃんでしたか？ ここは危険です。終わるまでここから出来るだけ離れていてくださいね？ 終わり次第この黒ウサギが責任持つてツナさんの所まで送り届けます」

リンの目的はあくまで黒ウサギの足止め。ならばランボは邪魔をしなければきつと被害は出ない筈。無理にランボに固執すれば黒ウサギに逃げ出すチャンスのみすみすを与えてしまうことになるのだから。

黒ウサギはその認識が甘かったことに気が付いていなかった。

次の瞬間、ランボの身体はリンに蹴り飛ばされて宙に放り出される。黒ウサギが手を伸ばしても届かなかった。ランボは小さな身体は無情にも地面へと叩きつけられる。

黒ウサギが逃げる隙を与えずとも子ども一人を排除する程度、彼女にとつて造作も無かつたし躊躇う必要もなかつた。

「さっ、続きしようよ」

「あ……」

しかし、黒ウサギが心配するほどランボも柔ではなかった。

「が・ま・ん……うわああああああん!!」

ランボは普通に起き上がったものの、痛みを我慢出来ずにその場で大泣きしてしまった。そして泣きながらもじやもじや頭から一つのバズーカを取り出している。

（な、なんでそんな物騒な武器を……ってちよ！ 何故それを自分に向けてるんですか!?)

ランボはあろうことがバズーカの発射口を敵であるリンではなく自分に向けている。知らないのも無理は無い。このバズーカの名称を10年バズーカといって現在の自分と10年後の自分を5分間だけ入れ替えることが出来るのだ。

「？」

当たり前だがそれを知らないリンもランボの行動が理解出来なかった。どちらにしろ止めようにもリンも黒ウサギも間に合わない。

ランボはバズーカの弾に零距离で被弾し、爆破の煙でランボの姿は掻き消された。



「やっぱり納得出来ません! 何故オレじゃなくてアホ牛なんですか!!」

「ま、ジャンケンに負けちゃったから仕方ねーよな」

選ばれずに機嫌を悪くしている獄寺、それを苦笑いしながら宥めている山本、そして未知の世界へ行けなくて残念そうにしている了平がいる。

「しかし赤ん坊、幾らなんでもランボ一人を行かせるのは危険過ぎるのではないか?

今回はミルフィオーレとの決戦のように暗示をかけてはおらんのだろう?」

「ランボもそれなりに修羅場を潜ってる。おまけに初代雷の守護者ランポウは常に最前線で戦ってたと聞くぞ。これくらいこなさねえとあいつも成長できねえだろ」

了平の意見に対してリボーンは己の思惑を述べた。ランボに眠っている潜在能力は守護者の中でもトップクラスだ。それを今回の戦いで伸ばそうというのだ。

「それに、ボンゴレとボヴィーノが共同で開発した新しい十年バズーカの弾を持たしてるから問題ねえだろ」

「10年バズーカの新しい弾……ですか?」

「ああ、ヴァリアーとの勝負から密かに開発してたらしいけどな。この前成功したらしく、一発だけランボに送られてきたんだぞ」

リボーンはニヤリと笑う。

「その名も20年弾」



煙が晴れ、そこにいたのは筋骨隆々で茶色いツギハギのコートを着た一人の青年だった。しかし、その天然パーマの髪型と頭の両サイドについている角にはランボの面影がある。

20年弾によって20年後のランボが現れたのだった。

「どちら様ですかー！ー！？」

何も知らない黒ウサギからしたら『ランボがバズーカを自分に撃つたらそこにいたのは見ず知らずの大柄な青年』ということになる。既に訳が分からない。

そんな黒ウサギでも分かる事が一つある。

この青年は強い。

「この感覚……そうか、オレはまた10年バズーカで呼び出されたのか。だが、若きボンゴレがいないな。若いオレはここで何をしてたん……おつとお嬢ちゃん、ナイフはおも

「ちやにするには危険な代物だ」

突如現れた20年後のランボは現状を分析する暇も無くナイフを投げつけられる。それをいとも容易く人差し指と中指で受け止めた。

「ねえお兄ちゃん。今のは一体どんな手品なんですか?」

「手品というのは種が分かれば下らないものだ。なら知らない方がいいんじゃないか?」

リンは20年後のランボが放つ威圧感に警戒の色を強める。

「あ、あの、もしかしてツナさん……沢田綱吉さんのお知り合いでしょうか?」

黒ウサギは意を決して20年後のランボに話しかけた。

「若きボンゴレを知っているのか?」

「はい。ツナさんは——っと」

黒ウサギは投げられたナイフを身体をずらして避ける。

「んもう! 私のこと無視しないでください!」

「ふうん、仕方ない。若きボンゴレについて聞くのはあの凶暴そうなお嬢さんをどうかしてからにしよう」

「助かります!」

早速ランボは前に出た。

「サンダーセット!」

ランボは自ら雷を呼び寄せ、その雷を浴びて角に帯電させた。

「これこそランボお得意の

エレットウリコ・コルナータプラス

「電撃 角 +!!」

二本の角をリンへと向けて突進していく。電撃 角の最大の弱点であったリ-

チの短さを雷を自在に操って電撃を伸ばす事で克服したランボの必殺技だ。

(神格も無いのに雷をあかも自在に操れるなんて……でも)

そう。自分がそうであったように、リンにはどんな攻撃も通用しない。

事実、リンは怪我一つ無くその場に立っている。

「成程、そういうことか」

「えくつと、今ので一体何か分かったんですか?」

「どういう原理かは知らないが、どうやらお嬢ちゃんには時間もしくは空間を操る能力があるらしい」

傍から見ていた黒ウサギもそしてたった一度のやり取りでギフトをほぼ看破されたリンも驚いていた。

「先程、ウサギのお嬢さんに投げられたナイフがウサギのお嬢さんのすぐ後ろに落ちていた。これはおかしなことだと考えて、それで試しに回避の難しい電撃 角 +を

使った。この技をあのを至近距離で外すのはまずありえない。そう、時間を操って電撃を避けるか距離感を操って外すように仕向けるかしなければ、だ」

しかし、種が分かったところでこのような規格外の能力に対抗する術がないのも事実。しかしランボは不敵に笑った。

「だが、強力であつても無敵ではないようだがな」

ランボは指で髪の毛を数本摘んでいるのを見せた。その色は黒、しかもストレートだ。丁度リンの髪の毛と同じで髪質もほぼ同じものに見える。

「嘘っ!？」

「電撃に気を取られすぎていたようだな」

ランボはリンのギフトを破りかけていた。ランボの言う通りリンのギフトは無敵では無いのかもしれない。

「どうする。続けるか?」

「うくん。やっぱいいいです」

「ふうん、何故だ?」

「いえ、お兄さんには興味あるんですけどウサギさんと同時に相手するのは難しそうです。それに三人目も着ちやっつし」

「おや、気づかれましたか」

仮面をつけた騎士フェイス・レスが黒ウサギの隣に降り立った。

「もう充分時間も稼げたし」

「時間？ 何のことだ」

気がついたときにはリンの気配は完全に消え去っていた。

「ふう、そろそろ時間か……？ 仕方ない……またボンゴレに会いたかつ——」

きつかり5分で20年後のランボは消え、元のウザイ5歳児のランボは現れた。

「さっきの青年が子どもに……？ 彼は年齢操作のギフトでも持っているのでしょうか？」

「さ、さあ？ ってそんな場合ではありませんでした！」

今こうしているうちにも魔王バロールが召喚されようとしている。あれを貫けるのは現状で黒ウサギの持つ”インドラの槍”のみだ。

「おわっ!? たかいたかーいだもんね！」

黒ウサギはランボを抱き上げて（置いていくわけにもいかないから）すぐさまこの場を去っていった。



—— 吸血鬼の古城・黄道の玉座

ツナ達はとうとう玉座、つまり砕かれた星座を捧げる場所まで辿り着いた。

玉座には鎖で繋がれ、疲労しきっているレティシアが座っている。

「レティシア!」

ツナと耀はすぐさま彼女の下まで走っていく。道行で妨害するものは何も無く、すんなりとレティシアまで辿り着くことができた。

「レティシア、しっかりして!」

「レティシア!」

声が聞こえたのか、それとも別の原因があつたのか、レティシアは小さな身体をビクリと跳ねさせて起き上がる。大分体力を消耗しているのか、全身汗まみれで頬は紅潮しあまり余力は残されていない用に見える。

「ここは……黄道の間……?!? 何故此処に——」

レティシアが起きたことに二人は一安心し、心置きなくこの攻略に挑むことが出来る。

一見この部屋に十二星座の欠片を埋め込むような場所が無いように見える。そこで耀は床や壁を丹念に調べる。

石壁を調べていると何か窪みを見つげる。ここに星座の欠片をはめる。

「どうやらこの部屋は円形になっていて、円形を12等分してそれぞれの窪みに欠片をはめ込むことで”砕かれた星座を捧げる”は完了する筈である。」

皆同様レティシアも耀を賞賛した。ツナの支えがあったとはいえ、どこか危なっかしかった彼女が自分が開催したギフトゲームを解き明かしたとは考えもしなかったからだ。

そして最後の欠片が窪みへと詰め込んだ。

.....

.....

.....

しかし、何も起こらなかった。

「.....あれ?」

「ど、どういふこと?」

耀としてはあれだけ自慢げに解説した答えが間違っていたとは思いたくない。皆が顔を合わせる中でレティシアは冷や汗を流している。

「レティシア.....?」

「.....始まった」

「え?」

『GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
!!!!!!』

古城に轟音が響き渡り、雷雲の稲光が差し込む。

”アンダーウッド”を滅ぼしかけたあの巨龍がまた現れてしまったのだ。

「しししっ、面白くなってきたじゃん」

十三番目の太陽来る！

「ゲームが再開!?　だってゲームはしばらく休戦中の筈じゃ……」

それに耀の考えが正しければこれでゲームのクリア条件を満たしていることになる。

回廊で待っていたキリノは巨龍の雄叫びを聞いて恐怖に駆られながら黄道の間へと駆け込んだ。

「み、皆さん。今のはまさか巨龍が……!」

「もしかして……」

耀はハツとなつて最悪の考えに行き着いた。『無理矢理ゲームクリアしようとして間違えたことでゲームが再開してしまつたのではないか?』と。

しかしレティシアは耀を落ち着けようとその考えを否定する。

「いいか、耀。お前の考えは正しい。だからこそ再開された。……分かるか?　ゲームクリアに近づいたからこそ休戦期間が終わつたんだ」

「え?　それってどういう……」

何かが足りないのだ。ゲームクリアのための決定的な何かが足りない。

耀はもう一度契約書類ギアス・ロールに記されている勝利条件の三、四の内容を読み直した。

三、砕かれた星空を集め、獣の帯を玉座に捧げよ。

四、玉座に正された獣の帯を導に、鎖に繋がれた革命主導者の心臓を撃て。

耀は「分からない」と心の中で呟いた。

この局面でそんな弱音を吐けるわけがない。こうしている内にも巨龍が暴れている。レティシアが抑えるといっても限度がある筈だ。

一秒でも早く回答を、という焦燥感が耀を襲った。

「大丈夫だ。冷静になればきつと解ける。嬢ちゃんにはゲームを理解する才能がある。俺が保障する。だから諦めるな……」

ガロ口は耀の肩を強く握りしめて激励した。

それが返って彼女に重圧を与えてしまった。自分の見落としが合ったせいで仲間達を危険に晒してしまう結果になってしまうと。

(それに助けに来てくれたツナも……)

恐い……。その感情が耀を震えさせた。

「落ち着け、春日部耀!!! それでもお前は……春日部孝明の娘かツ!!!」

一瞬、耀の頭の中が真っ白になった。それを共に聞いたツナも絶句している。

「春日部……？ 何で耀のお父さんが……」

二人と違い、レティシアは酷くシヨックを受けたような顔をしている。どうやら孝明という人物は知っていても耀の父親だということまでは知らなかったらしい。

それからガロロは耀の父、春日部孝明のことを熱く語り出した。それは自分が孝明に助けられたことであつたり、十年前にアンダーウッドを魔王から守つたことであつたり、人物像であつたり。

「そんな孝明の娘である嬢ちゃんが、こんなチンケなゲームをクリア出来ない筈がねえ。自信を持って、春日部耀……」

耀はその言葉に勇気付けられた。そしてガロロからもっと父親のことを聞きたい……であればこんなところで躓いてはいられない。

「頑張つて！」

「……っ！ うん！」

ツナからの声援も貰つて仕切りなおした耀は改めて先程の項目に目を通す。不思議とさつきよりもすつきりした頭で様々な観点からその意味を考える。

「——正された、獣の帯？」

耀はそこへ注目した。そう、正されたということは誤りがあつたということ。

耀は一度、十二星座の欠片を取り外してもう一度繋げ直した。

「やっぱりだ。あの時はどこかが欠けてたせいかとも思ったけど、蠍座と射手座が繋がらない」

天体分割法は遙か昔に考案されたもの。この城の古さのせいで見落としていたことだが、もし吸血鬼達が天体分割法よりも遙かに近代的な天文学を学んでいたら、話は変わってくる。

であれば太陽の通る道、黄道は十二星座だけではない。蠍座と射手座の間にヨハネ・ケプラーが発見したとされる『蛇使い座』が入る筈である。

耀はもしやと思い、キリノが持っている残りの欠片に蛇使い座がないかどうか調べてみた。しかしこの中には蠍座と射手座の間に当てはまる欠片は無い。きっとまだ見つかっていない欠片なのだろう。

「みんな、今すぐ蠍座と射手座の間にある星座を探して！　もしも城下町がそのまま大球儀を示しているならその中間地点に——！」

『——其処までだ小娘ツ!!』

出鼻を挫く様に黄道の間窓をぶち破る大きな影。傍に控えていたジャックはすぐにその敵の強大きさを悟り、ランタンにありつたけの業火を召喚し、その敵へとぶつけた。『ヌルイワツ、木っ端悪魔がア!!』

しかし敵はその業火をあつさりとは振り払い。逆にジャックの頭を鉤爪で鷲掴みにし

て回廊へ続く階段へ叩き付けた。

その光景を目の当りにしたキリノは腰が抜けて、その場にへたり込んでいる。

「く……黒い、グリフォン……？」

驚の頭も、獅子の身体も、全てが黒く塗りつぶされているグリフォン。驚くべきは、頭に聳える巨大な龍角と胸元に刻まれた“生命の目録”だ。

「あいつは一体!？」

「生きてやがったのか……グライア」

『久しいな、ガロロ殿。だが、今はお前に構っている暇は無いッ!!』

グライアと呼ばれた黒いグリフォンは黒い翼で突風を巻き起こしてガロロを吹き飛ばす。ツナは死ぬ気化し、壁に叩きつけられる直前にそれを受け止めた。

「無事か？」

「ああ……すまねえな坊主」

『フンツ、まあいい。今はこちらの方を優先させて貰おう』

ガロロが無事だったことに多少不機嫌になったものの、グライアは嬉々として耀の方を見た。

『嬉しいぞ、コウメイの娘。よもや解答に辿り着くのが本当に貴様であつたとは……!』

「な、何を言っ……」

『我が名はグライアⅡグライフ！ 兄・ドラコⅡグライフを打ち破った血筋よ！ 今一度、血族の誇りに決着を着けようぞ——！！』

グライアは雄叫びを上げて耀に襲い掛かる。それを辛うじて避けた耀は他のメンバーに言い放つ。

「この人の狙いは私だ！ 皆は十三番目の星座を探して！」

「オレも残る——」

「ここは私一人でもいい！ ツナはみんなを守って！」

確かにここでツナと耀が残れば、ジャックがやられてしまった以上、戦えるのは子どもを守るために残ったアーシャだけになってしまう。その状況で子ども達を守りながら欠片探しをするのは危険だ。

かといって敵は強大なのは目に見えている。

「大丈夫だから！ 私を信じて！」

「……分かった！ すぐに十三番目の星座を探してくる！ ガロロ、キリノ、ここを離れるぞ！」

耀はツナが二人を連れてここから離れたのを見て安心した。レティシアはゲームマスターだ。ゲームマスターを殺してゲームそのものをダメにしてしまうなんてことはしないだろう。

耀は室内だと不利だと悟り、旋風を巻き上げて外へと出た。



ツナはガロロ、キリノを安全な場所へと残し、全速力で城下町へと飛ぶ。こうしている間にもみんなが戦っている。ツナがすべきことは最後の欠片を見つけてこのゲームを終わらせることだ。

場所は分かっているのだ。逆にツナ一人の方が足手まといもなく早く終わるだろうとガロロは判断した。

「蠍座と射手座の間……この辺か？」

町の壁には蠍のマークとケンタウロスのマークがある。間違いないだろう。

「しししっ、()で張ってれば……来るだろうと思ってたぜ」

「この笑い声……ベルフェゴールと同じ……」

ツナの上には人の影が見えた。そいつは玉座のような形状をした椅子に座りながらも浮いている。椅子の足からFシューズと同じ要領で赤い嵐属性の炎が噴出していた。

「ああ？ ベルフェゴールだと？ しししつ、そんな準天才の弟と間違われるのは心外だぜ、ボンゴレX世^{デーデモ}。オレは——」

ツナは思い出した。メローネ基地で正一が言っていた言葉を。

——ベルフェゴールには双子の兄がいる。

「ジル様だ！」

ジル。ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアー幹部ベルフェゴールの双子の兄で本名をラジエルという。

ミルフィオーレファミリーのホワイトスベルで嵐の六弔花を務めた男であった。しかしイタリアでの戦いでXANXASに破れ、石となって砕け散った。

「何故お前が……。それにお前は」

『「死んだ筈だ」って言いたいんだろう？ 確かにオレは本意にもXANXASに負けて死んだ」

ジルはそのことを思い出して椅子の取っ手を壊さんとばかりに握り締めている。

「だが、神は……いやあの方は正統王子であるオレを見放さなかった。新しい命だけでなく新しい力も与えてくださった。白蘭なんかとは比べ物にならない力をなあ！ し

ししっ」

屈辱から一転して歓喜の顔を見せるジル。そしてジルはツナにあるものを見せ付けた。

「これ……何だか分かるか？」

「それは……まさか」

「しししっ、お前が探してる蛇使い座の欠片だ」

最悪だ。最後のピースが敵の手に渡ってしまった。

「ぶっ壊してやろうかとも思ったがなかなか壊れねえでやんの。まあ、お前をおびき出すための良い餌にはなったけどな。しししっ」

「何が目的だ！」

「目的？ そんなもんボンゴレのカス共に復讐するに決まってるんだろ！ 特に天才であり真の王子であるこのオレをコケにしやがったXANXASや真・六甲花なんてモンをつくってオレを前座扱いした白蘭にはなあ！」

ジルは人差し指に嵌めた赤いリングに死ぬ気の炎を灯し、匣を開口した。そこから出て来たのは嵐属性の蝙蝠。

ビビストレットロ・テンベスタ
「嵐 蝙蝠 蝙蝠」

ツナも話には聞いていた匣アニマル。超音波のように目に見えない嵐の炎で相手を

「——修羅開口か」

「ご名答！ しししつ」

ジルは着ているシャツをはだける。すると胸に埋め込まれた赤い匣があった。

「それが『あの方』というやつから貰った力か？」

「しししつ、またまたご名答う！ だが真・六弔花共のような現代種や古代種じゃねえ。

もうワンランク上の修羅開口だ！」

嵐の炎が注入され、赤い匣が開くと、ジルは嵐の炎に包まれた。

「ひゃつはあ!! 力が漲ってきやがるぜえ!!」

身体中の筋肉が膨れ上がって黄土色の毛が生え、両手には肉食獣の持つ鋭い爪、口からは鋭利な牙が見える。そして背には蝙蝠のような翼に蠍のような尻尾。

「これが最強の、幻獣種の修羅開口」嵐マンティイコラ・テンベスタマンティイコアだ！ 王子プリンスは今、王キングへと進化したんだよ！」

マンティイコア。古いペルシア語に由来し、『人食い』という意味を持つ怪物。

ツナは単独で行った方が良いというガロロの判断は間違っていないかつたと彼に感謝する。

「ナッツ、カンレオ・フォルマ形態変化」

ナッツはXグロブと合体しボンゴレの紋章が刻まれたガントレットとなった。両

腕のガントレットから絶対に負けれないという覚悟の現れである死ぬ気の炎を吹き出す。

この古城で大きな二つの戦いの火蓋が切つて落とされた。

四人の勇者来る！

——少し前、東南の平野では黒いローブに身を包んだ女、アウラが掲げた”バロールの死眼”の力でペストの黒死病が解呪され、巨人が復活してしまい。大混乱に陥っていた。

そんな中で——

「ガハハー！ いっけー！ ギゅーどーん！」

「ブモオオオオオオオ！！！」

鎧と緑色の雷に身を包んだ黒牛とそれに乗るランボが先陣を切る様に巨人に攻撃を仕掛けている。牛丼の突進力に雷の炎の特徴である”硬化”が追加され、その一撃は計り知れない。

赤ん坊が戦っている。

その事実に関連の皆はランボの勇士に負けじとも士気を取り戻した。

一方で”バロールの死眼”を持つアウラと対峙している飛鳥とティーン、そしてペスト。

ペストなら死眼を乗っ取る事が出来るのではないかというジンの提案に飛鳥はペス

トのための道を拓く為、デイーンとともにアウラが発生させた雷を掻い潜りながら突っ込んでいった。

「ええい鬱陶しい……! ならば先にマスターから始末してやるわ!」

アウラは標的を飛鳥に絞り、”バロールの死眼”による恩恵を集中し黒い光を放つ。もうペストの制止も間に合わずに、飛鳥はとっさに右手を掲げた。

——すると、

「ばっ……馬鹿な! 人間が神霊の御業を中和するなんて……!」

アウラの言う通り、”バロールの死眼”による死の恩恵を飛鳥の右手から発している炎が焼き尽くしているのだ。

そうしている間にもペストは”バロールの死眼”を奪いアウラに向けようとするも、アウラは己の手で”バロールの死眼”を半分に破壊してその内の半分を持ち去つてリオンと共に逃走されてしまう。

しかしこれで”バロールの死眼”による脅威は去った。

——と思つたペストは上空を見上げて固まった。

「……飛鳥。ゲームの再開って今日からだつたかしら?」

「え? ……え?」

上空では”アンダーウッド”で猛威を奮っていた巨龍が蠢いていたのだった。



「しししっ」

玉座から降りて巨大な蝙蝠の翼をバタつかせながらジルは空中を飛び、その巨大な爪でツナを引き裂かんと向かってきた。

ただの大振りの攻撃にツナは右に飛んで難なく爪を避けた。

（隙だらけだー）

攻撃を避けたツナはがら空きになった背中に手刀を叩き込む。

「しししっ、王っていうのは常にゆとりを持って物事に挑むんだよ」

ツナの手刀は蠍の尻尾に阻まれた。そしてそのまま蠍の尻尾に薙ぎ払われて吹き飛ばされる。

「うっ……くうー！」

壁に激突する前に後ろに柔の炎を噴射してそれを逃れる。

しかしジルは攻撃の手を緩めることなく蠍の尻尾から嵐の炎を連続で射出してきた。それはまるで獄寺が以前使っていたフレイムアローのようだ。

ツナは剛の炎と柔の炎の切り替えを上手く使って射出された嵐の炎を巧みに回避し

ていく。

「チツ、ちよろちよろ動きやがって。ならこいつはどうだ！」

ジルは蠍の尾へと嵐の炎をチャージしていく。

(何だ……何か拙い)

「紅蓮テラベスタ・スカララフタの嵐！」

蠍の尾へとチャージされた嵐の炎が無数の針のように射出されてツナを襲う。

「ナツツ！ 形態変化カンレオ・フォルマ。モード防御デフエンス！」

直前に危機を察知したツナは手の甲にあるボンゴレの紋章がIへと変化させ、かつてボンゴレI世が身に纏っていたマントがその姿を現す。

無数の針と化した嵐の炎を大空のマントは次々にガードしていく。針は調和によって石となり下へと落ちていった。

「Xカノン！」

攻撃が終わった直後にツナも反撃に出る。しかしジルもまた蠍の尾から炎を射出して相殺させた。

「なら、オペレーション——」

「おっとそうはさせねえぜ？」

次は嵐レピストレッロ・テンベスタ 蝙蝠テンベスタのような超音波による見えない攻撃。I世のマントであれば防ぐの

も難しくはないが、これではX BURNERを撃つ隙がない。

「X BURNERは撃たせねえよ。しししっ」

様々な特性を持つが故に可能な多種多様な攻撃。おまけに先程の超音波攻撃のせいでX BURNERは封じられてしまった。

「あん？」

「何だ？」

この城下町に黒い巨大な何かが大きな音を立てて降りてきた。その姿はまるで地獄の番犬とも言われる三つ首の怪物ケルベロスそのものだ。

『むっ、貴様は先程小娘と共にいた小童か』

少し前に聞いたことのある声。姿かたちには面影は残っていないくともこの唸るような声を聞き間違える筈はない。そして決定的なのは頭に生えるその龍角。

「グライア……!!」

「テメエ、グライア。何しにきやがった。オレらの邪魔はしないっていう取り決めだったろ？」

『フンツ、ラジエル。我は私の目的のために動いているだけだ。その小童に用はない。用があるのは……小娘、貴様だア!!』

グライアは犬の嗅覚で城下町に隠れていた耀を見つけ出し、龍角を輝かせて炎を吐い

た。

耀はすぐさま上空へ逃げ出した。

「耀!」

ツナが城下町で戦っているのは耀にとつては計算外のことであつた。最初こそ城外でグライアに空中戦を挑んでいたものの、不利だと悟つて城下町でゲリラ戦を仕掛ける手筈であつたが、そこではツナが別の敵に遭遇していた。

(まただ……また私は足を引つ張つてる)

「何処を見ているツ!!」

既に目の前にはグライアの牙が迫っていた。耀は瞬間的に避けようとしたが、避けきることが出来ずに左足から鮮血が舞う。

「耀!」

「おっとボンゴレ、お前の相手はこつちだろ?」

ジルは蠍の尾をツナへと振り降ろした。ツナはそれを即座にマントで受け止める。

「しっかし生命の目録ねえ……しししっ」

「何が可笑しい」

「あ? あいつのこと知らねえで一緒にいたのかよ。さっきのグライアの変わりよう見てただろ。生命の目録は持ち主を合成獣にするための生物兵器なのさ。滑稽だろ?」

しししっ、あいつもその内あんな化け物になるんだぜ。もつとも、化け物になる前にグライアに殺されるだろうけどな」

グライアはいまや巨大な四肢を持つ黒龍へとその姿を変化させていた。

「違う」

「……違う？ 何が違うってんだよ」

「耀は死なない。化け物にもならない」

ツナは剛の炎を噴射してジルへと突っ込んで行った。

「無駄だと言ってんだろ！」

ジルはそれを蠍の尾で迎え撃つ。蠍の尾は高速で動くツナに対して狙いを定めて、正確に振り下ろされる。

（そうだ。これ待っていた）

ツナは片手で蠍の尾をキャッチし、離さないように力強く掴んだ。

「何のつも……」

言いかけて蠍の尾が凍っていく様を見てそれを止めた。

「死ぬ気零地点突破・初代エディション^{フリースト}」

凍らされた尾はそのままツナが握り潰して破壊する。

遠距離攻撃、そして防御の要であった蠍の尾をボンゴレの奥義によって凍らせる。そ

り向けば、そこにグライアの姿は無く、気を失った耀と彼女を介抱するキリノの姿があった。避難したはずのキリノが何故いるのかは今は置いておいて、耀を安全な場所へと連れて行くことが先だろう。

「——仲間を第一に考えるのが悪いとは言わねえけど、此処へきた目的をほっぽり出すのはどうなんだ？」

「この声、十六夜か？」

”ノーネーム”で留守番していた十六夜、そういえばもう此処へ来ていても可笑しくない頃だった。彼はグリーに乗ってこの古城まで来たようだ。いつもの学ランはもうボロボロで左肩は何かに貫かれて負傷している。

「十六夜。その傷は……」

「ちよつとしくじつてな。そんなことよりこいつを忘れんな。ホレ」

十六夜は手に持っていたガラスの欠片のようなものをツナへと投げ渡す。

それは紛れもない十三番目の欠片であった。

「……あつ」

ツナは思い出す。持っていたジルをそのまま城壁に吹き飛ばしてしまったのだ。

「あー、それとこれを持ってたやつはその辺に放り投げちまったけど。もしかしてお前が言ってた仲間だったりする？」

「いや、違う」

「そうか。んじやこのギフトゲームを終わらせに行くか」

気を失った耀とキリノを連れて、二人は黄道の間へと急いだ。



「ん……んんん」

耀の目が覚めたのは黄道の玉座に到着してからだった。耀の手当ては途中で合流したガロロの所有しているギフトでもう済んでいる。

最後に蛇遣い座の欠片を正しい場所へと嵌め込む、このゲームの第3クリア条件をクリアした。

「これで、終わりなんだよね」

「ああ、巨龍も間もなく消える。私も無力化されてゲームセットだ」

しかしツナ、そして耀には何処か不安だった。ツナは己の直感から、そして耀は『あの巨龍をどう無力化するのか』そして『巨龍がレティシアの分身ならレティシア自身はどうなってしまうのか』だ。

それを考えているうちに全ての契約書類ギアスロールに勝利宣言の通達が行き渡った。

『ギフトゲーム名』 SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMPI
RE KING”

勝者 参加者側コミュニティ ” ノーネーム”

敗者 主催者側コミュニティ ” ”

*上記の結果をもちまして、今ゲームは終了とします

尚、第三勝利条件達成に伴って十二分後、大幕の開放を行います

それまではロスタイムとさせていただきますので、何卒ご了承ください

夜行種の死の恐れがありますので七七五九一七五外門より退避してください

参加者の皆様お疲れ様

でした』

『十二分後に大幕の解放』!? 『夜行種は死の恐れ』!?

「これってどういふこと?」

吸血鬼は太陽の光を浴びると灰になって死ぬ。

これはツナでも知っていることだ。そしてレティシアは吸血鬼。これが現しているものとは、このゲームではどうやって最終的にレティシアが死ぬ結末が待っていたということだ。

「そんな……そんなことって……!」

「三人とも……濟まない。私はもう同士を……仲間を殺したくないのだ」

彼女自身も、もう自分の運命を受け入れていた。仲間を傷つけるくらいなら自分が死ぬ道を選んだのだ。それがどんなに不条理なことだとしても。

しかし、この場に諦めていない者がいたことも確かであった。

「要するに大天幕が開く前に、あの巨龍の心臓を撃てばいいんだよね?」

「……はっ?」

滅茶苦茶な理論だが、耀の言ったことは何も間違っていない。巨龍がいなくなれば大天幕を開く必要も無くなるのだから。

しかしそれがどれだけ無謀なことか、レティシアが一番良く知っている。

「だ、誰か耀を止めろッ! あの子は本気で……本気で巨龍と戦うつもりだ!!」

己を縛る鎖さえなければ今にも耀を押さえ込みそうな勢いで暴れるレティシア。だが、誰も耀を止めようとはしない。

「レティシアもああ言ってるから一度だけ確認するが——本気なんだな?」

「うん」

「そうか、なら俺も手伝ってやる」

「十六夜ッ! お前まで何を!」

やれやれと肩を竦めている十六夜だが、目は真剣そのものだ。本気で巨龍を倒すつもりなのだ。

「馬鹿な……見損なつたぞ十六夜。お前はもつと聡明な男だと思つていた。コミュニケーションを任せられる男だと……！　なのに——」

「いい加減にしろ!!!」

古城中に響き渡りそうな大声にこの場にいる全員が身体を震わせた。声の主はさつきまで黙つていたツナである。

ツナは……怒つていた。

「な、何を……私はただ……」

「みんな……みんなレティシアを助け出そうつて……十六夜君も耀も久遠さんも黒ウサギもジン君も、みんな戦つてるんだ!!」　「ノーネーム」の子ども達だつて、みんなレティシアが帰つて来るのを待つてるんだ!!　なのに……なのに、何でレティシアが諦めてるんだよ!!　レティシアがみんなに死んで欲しくないのと同じくらいみんなだつてレティシアに死んで欲しくないんだよ!!」

レティシアはツナの剣幕に押されて何も言えない。何よりツナがこうも感情を剥き出しにして怒鳴りつける行為自体をレティシアは初めて見た。

「沢田の言う通りだ。俺は自己犠牲の出来る聖者よりも、物分かりの悪い勇者の方が好

ましいね」

たとえ無謀であっても、仲間を助ける手段があるのであれば彼らはそれをせずにはいられない。みんなで笑って明日を迎えることができるように。三人は走り出した。



三人は迅速に古城の先端へと到着した。

「さて、作戦のおさらいだ。沢田、手段は何でもいいからあの巨龍に隙をつくってくれ。その隙をつけて俺が巨龍を仕留める。春日部、其処まで運べるか？」

「うん……あ、ちょっと待って」

グライアとの勝負の際は無我夢中で発動させていた。その時のことを思い出して、今度は自分の意思でその力を発現させる。

(まだ合成獣とかまだ怖いけど、そんなことは言ってられない。今は十六夜を運びきるために空を飛んで尚且つ早い幻獣を模倣する)

”生命の目録”はグライアとの勝負の時と同じく杖に形を変え、耀が履いている革のブーツは白く輝く翼生えた白銀の装甲に覆われた。おそらく天馬をイメージしたのだろう。

「おおつ、沢田のガントレットみたいで滅茶苦茶カッコいいじゃねえか」

「うん、個人的にはもつと装飾とか凝りたかったけど時間がないからとりあえずこれで行く」

耀も彫刻家としての血が流れているということなのだろうか。こういった芸術にも秀でているのかもしれない。

「行ってくる。後は頼むぞ」

あれほどの巨大な敵。半端な攻撃では止まる事はないだろう。であればツナの最強の技で迎え撃つしかない。

ツナは両の腕を交差させて巨龍へと向ける。

「オペレーションX^{ダブルイクス}X^{ダブルイクス}」

『了解シマシタボス。XX発射シークエンスヲ開始シマス。腕ノNEWパーツヨリ柔ノ炎ヲ噴射』

肘側の噴射口から後ろへと柔の炎が噴射されていく。反対にツナの両手には剛の炎がチャージされていった。

(くっ、間に合うか?)

巨龍はもの凄い勢いで“アンダーウッド”へ突進をしかける。巨龍を止めるための一撃を放つにはもう少し時間がかかることを悟り、ツナは焦った。

” アンダーウッド” を覆っていた暗雲が大天幕の開放によつて太陽の光を受けて消えていく。

「間に合わなかったか……!?」

「それでもないぜ!!」

巨龍が光に照らされ透過し、その心臓が浮き彫りになった瞬間を待っていたかのように十六夜を抱えた耀は流星のごとく空を滑走する。

「見つけたぞ……十三番目の太陽——!!!」

十六夜は両手に抑えた光の柱を束ね、巨龍の心臓を撃ち抜いた。巨龍はそのまま光の中へと消えていき、巨龍から零れ落ちた十三番目の太陽、レティシアを日光から庇うように抱きとめて、耀は高らかに右腕を上げた。

” アンダーウッド” の長きに渡る戦いに決着が着いた瞬間である。

短編集

巨龍と巨人の襲来はアンダーウッドに多くの爪痕を残した。収穫祭はすぐには再開出来ず、後日に復興が終わり次第再開される予定だと発表された。

多くの怪我人や死人を出した中で、「ノーネーム」も大きな被害を出したかと思えば、そうでもない。

十六夜は肩を貫かれていたがもうピンピンしているし、耀は脚をやられていても”生命の目録”から動物の治癒力を引き出してもう松葉杖無しで歩けるようになり、ツナと飛鳥に至っては軽症で済んでいる。黒ウサギも本調子とまではいかなくとも日常生活に負担はかからない程度に回復していた。

問題はレティシアであった。

酷く衰弱していたせいも、もう丸一日眠り続けている。脈は正常であることから着々と調子が戻っているだろう。現在は「ノーネーム」のメンバーが交代で看病を続けている。

「ランボさんはねえ、あのおつきなのをビシッバシッビューン！　って」
「分かった分かった。もうそれ何回も聞いたから」

「ガハハハハ！」

ランボはツナと合流してから先程の戦いで巨人を倒したことを自慢気に触れ回っている。この話をツナにするのももう10回目だ。

(何で来たのがランボなんだよ)

心の中で溜息をついたツナであった。

現在は皆本陣營でのんびり過ごしている。

「あの、ツナさん」

そういえば、と黒ウサギはツナに声をかけた。黒ウサギは気になったのはランボが突然青年の姿に変わったことである。

「ああ、ランボ……お前また10年バズーカを」

「10年バズーカ？」

聞きなれない言葉に一番に興味を持った十六夜が読んでいた本から目を離してツナを見る。十六夜の目が怪しく光つたのをツナは気がついていなかった。

「撃たれた人は10年後の自分と5分間だけ入れ替わることが出来るんだ」

勿論未来での戦いのように人の手が入った場合は例外はある。

「な、成程……(あれ? この子が10年後にはあんな大男に!?)」

ツナも黒ウサギも知らないことだが、ランボは特殊な10年バズーカの弾によって2

0年後のランボと入れ替わっている。それは黒ウサギの勘違いを加速させていた。

「ほー10年バズーカってのはこれのことか？」

「そうそうそんな……何で十六夜君が持ってたの!？」

「いや、その牛坊主の頭からそれっぽいのがはみ出てたんでな」

十六夜の手にあるのは紛れもない10年バズーカ。彼はそれを興味深そうに調べている。

「おつ、スイッチ発見」

「ああ〜！ それランボさんのだもんね！」

今頃になって10年バズーカを取られた事に気がついたランボは十六夜から10年バズーカを取り戻そうと躍起になった。

「わっ！ ちょっと待ってろ。軽く見たらスグ返すつての！」

はてさて十六夜がこんな面白そうな玩具を見つけてそうあっさりと返すわけがない。身の危険を感じたこの場にいるツナ、耀、黒ウサギは身構える。

「返せ返せ〜！ それランボさんの〜！」

「ちよやめっ！ 撥った……」

ランボが十六夜のわき腹によじ登ったことでこそばゆくなった十六夜は————発射スイッチを押してしまった。

「わっ!」

「キャ!」

「うん」

皆、身の安全のために床へと伏せる。

10年バズーカの弾はこのままいけば扉に当たって誤爆しそうだ。

誰もがそう思っただけで安堵していた時だ。

「皆、交代の時間………何ちよつと待って誰よこんなところに待って止してイヤアア

アアアアアアアア!!」

扉に当たる直前、タイミング良く（悪く？）扉が開いて飛鳥が入ってきた。

いつも気丈な態度を取る彼女でもいきなりバズーカを撃たれたらそういう態度は取れなかったらしい。

「飛鳥!」

「飛鳥さん!?!」

「ちよ、ちよつと待って。久遠さんが10年バズーカで撃たれたってことは……」

煙が晴れて、そのぼやけた人影が顕わになっていく。

「10年後の久遠さん!?!」

「けほっ……けほっ……」

煙で咳き込む声に皆の目が注目を集める。

そこにいたのは見目麗しい黒髪の女性。その美貌は十六夜ですら息を飲んだ。しかし赤いドレスやその面影からその人物が久遠飛鳥だと分かる。

「ここ、”アンダーウッド”よね？」

当の本人は目をパチクリさせながら辺りを見渡している。その彼女に恐る恐る黒ウサギが近づいて話しかけてみた。

「えっと、飛鳥さん……ですよね？」

「急に何言い出すのよ。というより貴女、白夜叉のところに用事があるとか言っただけで、それじゃあ？」

「は？」

一方で耀は10年後の飛鳥のある一部分を凝視していた。

そう。胸部である。

現在の飛鳥も15歳にしては良いスタイルをしていた。そしてその成長はまだまだまだ続いていたようで、目の前にいる飛鳥は黒ウサギに匹敵する程の大きさにまで成長を遂げていた。

(だだだ大丈夫。私だってまだ成長期。まだ慌てるような年齢じゃない)

今の耀には必死に自分に言い聞かせることしか出来なかった。

「ヤハハハ。あのお嬢様が10年後にはこんなレディになるのか」
「あら、十六夜……? 随分背が縮んでるわね」

黒ウサギは状況がイマイチ掴めていない10年後の飛鳥に軽く現状を説明した。

「……つまりここは10年前に巨龍のギフトゲームがあつた“アンダーウッド”ということでもいいのかしら? だとしたら皆が縮んでることにも納得がいくけど」

「そ、そうだ飛鳥さん! 10年後に我々は、“ノーネーム”はどうなっているんでしょうか?」

飛鳥が生きているから大丈夫などと安心は出来ない。前の仲間達のように魔王のギフトゲームに敗れて“コミュニティ”がバラバラになっている危険性も無いわけではないのだ。黒ウサギはそれが最も心配だ。

「ああ、それなら——」

「おっとストツプだお嬢様!」

それに乗ったをかけたのは逆廻十六夜。

「なっ!?! 何故ですか十六夜さん! 未来を知ることが出来れば我々にとつてとても有利な……」

「おいおい黒ウサギ。もし俺達が未来なんて知っちゃったら」

「知って……しまったら?」

この場にいる全員が息を飲む。

「つままないだろうが！」

黒ウサギはズテツとこけた。

「ちよ、そんな理由ですか!？」

「あはは……十六夜君らしいけど」

しかしある意味では十六夜の判断は間違っていないとツナは思う。

未来には数え切れない可能性がある。例えばヴァリアーとの戦いで出てきた10年後のランボはリング争奪戦について知らなかったし、20年後のランボに至ってはツナや守護者達と死別している。

仮に未来を知っていてもちよつとした食い違いから別の未来に分岐する可能性も大いにありえのた。

もつとも十六夜はそこまで考えて言ったわけではないかもしれないが。

「ふふつ、10年経つても変わらないのね」

「変わらないんだ……あ、そろそろ5分くらいかな？」

「あらそう……まあこれからも結構色んなことがあると思うけど、皆くじけずに頑張るなさいね」

ポフンツという音と共に10年後の飛鳥は消えて元の15歳の飛鳥へと戻った。

「へ？　へ？　結局何だったの？」

何が何やら分からず仕舞いだった飛鳥は終始首をかしげたままだったという。

Chapter 1　10年後の威光来る！

10年バズーカの騒動から一時間後、特にやることもない耀は散歩している途中にガロロと出会い、家へと招待された。古城で言っていた自分の父親である春日部孝明のことをもっと聞きたいと思ったことがきっかけだ。

「ホレ。こいつがお前の親父さん、春日部孝明の肖像画だよ」

ガロロは幾つかある肖像画の中でポロポロの服を着たガタイの良い男のものを指差した。

「ホントだ……」

その画は耀の記憶にある父親のものとほぼ一致している。

間違いない、自分の父親は“箱庭”に来ていたのだ。

「お嬢ちゃん達のコミュニティが名無しになる前は、エース的存在だな。階級支配者よりも強いつて話だぞ」

「階級支配者つて、白夜叉よりも？」

「白夜叉……あの人は階級支配者でも別格だしなあ……おまけに神格を返上したつて話だし。うーん……」

ガロロは唸りながらも孝明と白夜叉の優劣について悩んでいる。階級支配者の中でも白夜叉は凄まじく強いというのがありありと伝わってくる。

「あれ？」

すぐ隣の肖像画には黒いマントを着た金髪の青年の肖像画があるのを耀は見つけた。その姿はどこと無く、自分が憧れている少年に少し似ている。

「ねえ、ガロロさん。この金髪の人つて」

「ん？ ああ。数百年前に10年前と同じように魔王の襲来があつてな。その時にこの“アンダーウッド”を守ってくれた“サウザンドアイズ”幹部のジョットつてヤツだ。

その時の記念に俺が描いたんだ」

（へえ……ええ？ ジョット……？）

——初めまして、ジョットの子孫よ。会えて光栄だ。

この「アンダーウッド」で最初にサラと出会った際に彼女が言った言葉を思い出す。そうだ。彼女はツナのことを指して言っていた。

「父さんもツナのご先祖様も」アンダーウッド」を守るために、戦ったんだ……」
耀はそのことに何か運命めいたものを感じた。

「ああ、そうだよ」

「っ!？」

本人は独り言のつもりだったがガロロに聞かれてしまったらしい。

「知ってたの？」

「知ってたも何もハーメルンの事件から」ノーネーム」は有名だしな。おまけにジョツトの再来だなんて噂も一部じゃ広まってる」

孝明とジョツトの肖像画を眺めながらガロロも嬉しそうに笑っている。

「ツナの御先祖様ってどういう人だったの？」

「ジョツト……もう大分昔になっちまうが、あいつはなんとというか真面目で、理不尽が嫌いなやつだったな。孝明とは違ってスラッとしてるわりに力もあって、ちよつと仏頂面で、いつだって弱い者達を背にして戦っている……そんな男だ」

ツナはジョツトほど頭が良いわけでも、経験を積んでいるわけでも、はたまた勇敢なわけでもない。きっと戦うことだって好きじゃない。

(でも、いつだって皆のために肩間に皺を寄せながら戦っている)

耀はツナのことをもつと知りたい。そして自分もいつかツナのような『優しい強さ』というものを手にしたい。そう思いながら目の前の肖像画を己の脳裏に焼きつける

その後、ガロロの話をずっと聞いていたのだった。

Chapter 2 過去の繋がりに来る！

「ここは『アンダーウッド』の外れ。

「……………こんなところまで飛ばされていたのか」

「クツ……………何の用だ」

男が見つめる先には全身泥だらけで無様な姿を晒しているジルであった。男はその姿を笑いもせず、かといつて目を背けもせず、平然とした態度で手を差し出した。

その手をジルは乱暴に振り払った。

「いらねえよ！　もう一人で立てる」

ジルは悪態をつきながらも己の脚で立つ。男は手を振り払われても特に何も感じなかったように平然とした態度を変えない。

「何故手を出した？」

様が命じたのは監視のみの筈だが？」

「ウツセーよ！　手を出すなどとも言われてないんなら命令違反じゃない筈だぜ。しっしっ」

「その結果、ボンゴレに無様に敗北したわけか」

ジルは言葉に詰まった。

「まだ3割程度しか力を発揮できていない修羅開匣でボンゴレに勝てるでも思ったか？　だから　様はお前に監視のみを命じた」

「そんでお前がその後始末つてわけかよ——幻騎士イ!!」

ジルは目の前の男、かつてボンゴレの敵として立ちはだかった最強の剣士である幻騎士を警戒してリングに炎を灯す。

「よせ、ラジエル。」

様がオレに命じたのはお前の回収のみだ。それとも……オ

レに勝てるでも思っているのか？」

幻騎士は戦闘態勢に入ろうとしたジルに待ったをかける。

「今は内輪もめをしている時ではない。ボンゴレは我々の想像を超えた力を手にしている。どうやら7トゥリニセツテ3を手に入れるのは容易ではないようだ」

そして二人は誰の目にも触れずにこの“アンダーウッド”からその姿を消した。

Chapter 3 死した吊いの花来る！

降臨、蒼海の覇者

ひとときの休息来る！

『どうだ？ ランボのやつは少しは役に立ったか？』

「もうびつくりしたよ！ というより何でランボなのさ!？」

ツナは現在、また元の世界と通信が繋がったことを機に今回あった出来事をリポーンに伝えていた。

元六甲花のジルに幻想種の修羅開匣。

これは無視できる問題ではない。

『だが、新たな謎が一つ増えたな』

「うん、どうやってジルがこっちに着たか、だよ」

『違げえぞ。少なくともこっちの世界のジルに動きはねえからな』

かつてのミルフィオーレファミリーの人員は、ボスである白蘭を始めとしてジンジャーのように行方の分からない人物を除けばボンゴレの嚴重な監視下に置かれていゝる。それは生存が確認されたジルもそうだ。

「それじゃあ一体……——」

『それについては私が説明しよう』

声が変わる。このどこか知的な声はツナにも聞き覚えがあった。

「もしかしてヴェルデ!？」

元アルコバレーノの一人であり世界一の頭脳を持つとされている科学者ヴェルデ。

『全く、アルコバレーノの呪も解けて新たな研究を始めようとしたらリボーンに見つかってしまおうとは』

『つべこべ言わずにさっさと言いやがれ』

『銃を向けるのを止めてくれ！ 大体私自身の戦闘力は大した事ないんだぞ……!』

ヘッドホン越しからでもヴェルデの焦った顔が容易に想像できる。どうやらヴェルデはリボーンに捕まって無理矢理連れてこられたのだろう。

流石は世界最強の殺し屋だ。
ヒットマン

『……順を追って説明しよう。まずは幻想種の匣アニマルについてだが……』

「いや、それも気になるけどまずは——」

『順を追って話すと言っただろう。黙って聞いている。幻想種の匣アニマルは、結論から言えば製作自体は別に不可能というわけではない』

ツナの言葉を無理矢理切ってヴェルデは話を進めた。

『匣アニマルに必要とされるのはその生物の遺伝子サンプル。最も、他にも必要なもの』

はあるが、一番はこれだ。逆にいえば遺伝子サンプルさえあれば古代種であろうが幻想種であろうが匣アニマルを作り出すことが可能なのだよ。それを考慮すれば、箱庭”は貴重なサンプルの宝庫だろう”

ミルフィオーレは並行世界の科学力を用いて恐竜を再現していたが、それでも種類は少ない。しかしここにはグリフォンにドラゴン、探せばペガサスや人魚のような幻の生物がいることだろう。

ヴェルデの言う通り技術さえあればそういった強力な匣アニマルもつくり放題だ。

『しかし匣アニマルを使うだけならまだしも修羅開匣となれば話は変わってくる。匣を身体へ埋め込み、自分自身を匣アニマル化するのに耐えられる人間はそれほど多くはない』

それを実用出来た真・六甲花は人間としてはそれだけずば抜けていたということだ。白蘭が自らに匣を埋め込まなかったのもそれが原因かもしれない。

『となると、手っ取り早いのが——そういった人間を造り出すことだ』

「造り……出す?」

『おそらく君が戦ったのは死んだジルの遺伝子を用いて造られた強化人間だろうと私は推測している』

「それってもしかしてクローン?」

『何者が造り出したかまでは知らないがね。……もういいかりボーン。いくら私でもこの程度の情報量ではこれ以上のことは分からん』

ヴェルデの話でなんとなくだが敵がとてつもなく強大たということとは理解できたツナであった。



巨龍との戦いから半月が経過。アンダーウッドの復興も大分進み、収穫祭は開催されて問題児三名とツナ、ランボは祭りに参加している。

十六夜は地下倉庫へ閲覧を、ツナ、ランボ、耀、飛鳥は狩猟際に参加している。

「うぎゃー！ こっち来たー!!」

「うわーん！ 助けてママーン！」

巨龍の襲撃後もペリユドンのような殺人種の幻獣はそこらにいて、”龍角を持つ鷲獅子”はそれを放置するわけにもいかず、駆除することになったのだが、十六夜の提案で駆除も祭りの行事として組込むことになったのだ。

耀と飛鳥が息のあったコンビプレイでペリユドンを仕留めているのに対して、ツナは弓矢など使ったことが無くさっぱり当たらない。

それどころかランボが投げた石が群れのボスらしき巨大魔獣に当たってしまった、魔獣の群れからランボと一緒に逃げていている真っ最中である。

今回の狩猟祭に参加するにあたって、ツナ達は制限を受けている。

耀はグリフォンのギフト限定。飛鳥はメルンとのコンビプレイ限定。ツナは死ぬ気モード使用禁止。その結果がこの有様だったりする。

ツナとランボはとにかく逃げていた。

——瞬間、一陣の風と共にツナ達を追いかけていた魔獣の群れは一斉に絶命した。

「……は？」

開いた口が塞がらないとはまさにこの事。ほんの一瞬、それはまるで芸術のような鮮やかさの殺戮であった。

それを行った人物はツナのすぐそばに降り立つ。

銀の仮面を被った純白の騎士、フェイス・レス。

「……何をやっているのですか貴方は？」

「あの、助けてくれてありがとうございます」

呆れた口調で尻餅をついたツナに手を貸すフェイス・レス。

「ふう」

彼女は溜息をつきながら次々に仕留めた魔獣やペリユドンを一箇所に集めている。

仮面に隠されているが明らかに億劫そうだ。彼女も本意で参加しているのではないの
だろう。

「て、手伝いましょうか？」

「……何故競争相手を手伝うのですか？」

「だって助けてくれたし」

「特にそのつもりは無かったのですが……それに」

フェイス・レスはギフトカードを取り出すとそこへ魔獣の群れを収納した。ギフト
カードにはこんな使い方もあるのかと感心したツナだった。

「それでは私はこれで」

彼女は次の獲物を探しにまた何処かへと行ってしまった。

(凄いけど、よく分からない人だったな)

結果、狩猟祭のトップは“ウィル・オ・ウィスプ”になり、耀と飛鳥は悔しがって
いた。



「ツナ！ ランボさんはあれが食べたいもんね」

狩猟祭の後、ツナはランボと一緒に屋台を見て周っている。耀と飛鳥は知らないうちに何処かへ行ってしまい。自動的にこの二人だけになってしまったのだ。

ランボは右手に綿あめ、左手には焼きとうもろこしを持っていながら、さらにたこ焼きやしきものを要求している。

「そんなに買っても食べきれないだろ。半分こな」

「ヘイラツシャイ！ ペリユドン焼き美味しいよ！」

「ペリユドン焼き!?!」

タコの代わりにペリユドンの砂肝が入ってるアンダーウツドの名物料理らしい。ツナが思っていたよりも珍味で美味だった。

広間の方では黒ウサギが壇上でマイクを片手に主催者と主賓の入場を呼びかけている。ツナは自然とそちらの方へ目をやった。

『それでは！ ”アンダーウツド”の収穫祭・主催者代表であるサラードレイク様！

最高主賓である”サウザンドアイズ”の白夜叉様！ 壇上にて、開会の言葉をお願いします！』

（白夜叉さんも来てるんだ）

壇上に上がったサラは以前のアマゾネスのような野生的な服装ではなく、特有の染色の衣装を纏っていて、髪も三つあみにし、頭上で髪留めと装飾で飾っていた。

しかし白夜叉が壇上に上がってくる気配が一向にない。すると大樹の天辺に轟々を火が焚かれているではないか。

——この後、ツナは白夜叉がどういう人物であったかを改めて思い知らされるのであった。

『——天が呼ぶツッ! 地が呼ぶツッ!! 人が呼ぶツッ!!! 少し落ち着くと人は言うツッ!!!』

「ブフオ!!」

「うわっ! バッチイもんね!」

派手な演出と共に颯爽と現れた白い髪の和服美人。白夜叉はもつと幼い姿をしていた筈だ。しかしこの特徴的な少ししやがれた声は聞き間違える筈もない。

白夜叉が(見た目的に)大人になっていたのだ。

それから白夜叉から、”龍角を持つ鷲獅子”へと至宝である”鷲龍の角”を授与する旨を伝えられ、次のサラの演説には心を打たれた。

彼女は故郷である北を出て行った。そんな自分を受け入れてくれたこの”アンダーウッド”を、そしてそんな自分を頭領として認めてくれた”龍角を持つ鷲獅子”の先代や同士達を心の底から愛しているのだというのは強く伝わってきたのだ。

「ツナか……」

「十六夜君?」

万来の拍手の中、いつになく真剣な表情をした十六夜に声をかけられる。十六夜は何故か大きな麻袋を背負っていて、その隣にはリリがいた。

「こいつは……強敵だな」

「うん」

彼女達の偉業は“ノーネーム”も見習うことが多いだろう。

「さてと、俺はこいつをグリーに届けに行くか。お前らはどうする?」

「うーん。オレは特に考えてないや」

「あ、だったら“六本傷”の名物料理がそろそろ焼き上がるそうなので年長組の皆と一緒にどうですか?」

「それ私も行く!!」

「!?!」

上空から颯爽と現れたのは耀。そして気絶した飛鳥。

耀は鬼気迫る勢いでリリに詰め寄るとその名物料理を売っている店を聞き出した。

「えっ、ちょよ!?!」

そしてそのままリリとツナを担いで旋風を巻き上げて颯爽と去っていった。ついでにツナにしがみついていたランボも一緒に。

「何で……!?!」

「が……ま……うわーん!」



そうして辿り着いたのは先程までいた最下層広場より一つ上の広場。リリがレティシアから聞いた名物料理はここで食べることが出来るらしい。

なんでも”斬る!”・”焼く!”・”齧る!”という単純な手法の豪快な肉料理。

まさに昔、漫画やアニメで見たような、所謂”マンガ肉”というものがツナ達の前に出されている。肉自体も良質なものだが、味付けも塩・胡椒で肉の旨味を最大限に引き出している。

「うう、ランボさんお腹一杯……」

ランボは既に屋台で色々食べているせいで二口でギブアップ。ツナも必死で食べているがまだ半分しか食べ切れていない。

成長期の食べ盛りでも食べ歩いていた身としては辛いものがある。

それをもの凄いいスピードで食べている人物がいた。

———とか耀だった。

耀は既に七皿目に手を伸ばしている。

しかもきちんと切り分けて食べているのだ。

料理人達や周りの屈強な男達もこの光景に戦慄している。

料理人達は雄叫びをあげてて料理を作る速度を上げ、他の男達も負けじと食べるペースを早めた。中には耀の食べっぷりに感激して応援する人々までいる始末。

(何これー!?)

この妙なノリに非常にツツコミたいツナではあるが、この盛り上がりようを見ると、何故かそれをするには無粋に思えてしまう。

(ツナさんー)

ツナは自分と同じくこの空気についていけないリリと目が合った。

二人はアイコンタクトを取って一つの決断をした。

「よ、耀様。頑張つてー!」

「が、頑張れー!」

——この空気に流されることにしたのだった。

ツナも夏祭りや獄寺や山本と一緒にバカ騒ぎしながらチョコバナナを売っていた時のことを思い出して少し懐かしい気持ちになった。

「……フン、なんだこの馬鹿騒ぎは。」ノーネームの屑が意地汚く食事をしているだけではないか」

この高まる歓声と熱気の中、ふと冷めた声が聞こえた。声の主は驚のような翼を生やした大男。しかも侮蔑と嘲笑を込めた声は一つだけではない。

「名無しである以上、一時の栄光ですから。収穫祭が終わる頃には奴らのことなど忘れていてでしょう」

「ああ、所詮屑は屑。名無し共の旗に降り注ぐ栄光などありはしないのだから」

「——そんなことありません！」

”ノーネーム”の侮辱に真つ先に反論したのはリリだった。その声に観衆や男達の視線はリリへと集中する。一心不乱に食べ続けていた耀でさえ手と口を止めた。

「……なんだこの狐耳の娘は」

「私は”ノーネーム”の同士です！ 貴方の仲間達への侮辱、たしかにこの耳で聞きました！ 直ちに謝罪と訂正を求めます！」

男達にギロリと睨みつけられて涙目になりながらもリリはキツと睨み返した。

「そうだそうだー！ ランボさんも怒ってるぞー！」

「ちよつとランボ！ リリちゃんも落ち着いて！」

男達はそんなリリを鼻で笑った。

「君が誰かなのはよくわかった。——しかし君もこの御方が誰かわかっているのか？ ”二翼”が長、幻獣ヒツポグリフのグリフィス様ですよ？」

「だ……だから何だっというんですか！ 謝罪を求めているのはこっちです！」

「ハッ、分をわきまえろ。グリフィス様は時期、龍角を持つ驚獅子、の長になられる御方。南の“階層支配者”だぞ。”ノーネーム”如きに下げる頭などないわ」

「……待つて。それどういうこと？」

男達の言葉に強く反応したのは耀であった。ツナもその言葉に疑問を持つ。

「耀の言う通りだ。”龍角を持つ驚獅子”の長つてサラさんですよ？ 何でグリフィスさんが……」

サラは長を引退するような年齢ではない筈だし、”アンダーウッド”の皆に愛されている彼女が長の座を下ろされるとも思えない。

「あの女から聞いていないのか。あの女は龍角を折ったことで靈格が縮小し、力を上手く扱えなくなった。元々龍の力を見込まれて凶々しくも議長の座についていたのだ。それを失えば退くのが道理だろうが。そんなこともわからんとは……つくづく低脳が揃っていると見える」

確かにサラは”アンダーウッド”を守るために龍角を折って飛鳥へと渡した。

しかしグリフィスと仲間達はそれを愚行と笑い捨てたのだ。

「なんなら本人にでも聞けばいい。龍種の誇りを無くし、栄光の未来を自ら手折った愚かな女にな！」

「そんな言い方——!」

「——訂正して」

「そんな言い方ないだろう」と言いかけたツナを遮ったのは耀の冷たい声だ。グリフィス達を見る目もとても冷たい。

彼女は明らかに怒っている。

「ひっ!」

ランボも彼女の姿に怯えてツナのズボンを掴んでいる。

「サラは愚かな女じゃない。彼女が龍角を折ったのは“アンダーウッド”を守るため……私の友達を守るためだ」

真っ直ぐグリフィスに近づいてくるようを遮ろうとした取り巻きの男は——上空へ吹き飛んだ。

「こ、これは……ッ!」

やったのは耀だ。脚にはペガサスを模したレッグアーマーが装備されており、ペガサスとグリフオンの力で取り巻きの男を蹴り飛ばしたのだ。

「ツナ、ちよつと待ってて。三分で全員土下座させるから」

「ちよ! 何笑顔で怖いこといつてるの!?!」

耀はツナに笑顔を向けた後にすぐ無表情でグリフィスを見た。グリフィスは人化を

解いて鷲の上半身と馬の下半身の幻獣ヒツポグリフとしての姿に戻る。

稲妻と暴風が荒れ狂い、観衆たちは我先にと逃げ出した。

残ったのはツナ達だけだ。

もう耀はツナの制止を聞くことはないだろう。仮に耀を止める事ができたとしてもグリフィスが止まらない。

雷と暴風を纏ったグリフィスと光と風を纏った耀。

二人がぶつかり合う刹那――

「はい、それまで」

――突如割り込んできた眼帯の男が二人同時にのしてしまった。

蚊劉来る!

「……アカンわ。加減間違えてしもた」

眼帯の男は氣を失っている耀とグリフィスを見て『やってしまった』といったふうな困った顔で立っている。

あの二人の喧嘩に割って入るなどと台風に突っ込むに等しい事だというのに目の前の男はそれをさも当然。おまけにグリフィスに氣を取られていたとはいえ耀は優れた直感の持ち主だ。それに気づかない程の早さ、この男が只者ではないことを物語っている。

「あー、そのの……髪が逆立った君」

「え? オレ……ですか?」

眼帯の男はツナに目を止めると彼を指名した。

その声に、あつけに取られていたツナも我に返る。

「君、彼女と同じコミュニケーションやろ? 一緒におつたし」

その問いに対しておぼおぼと頷くツナ。

「せやったらこの子、君に任せてもええか? 加減はしたけど念のため医者にも見せ

てやり。ほらお前らもや」

遠巻きに見ていた「二翼」の連中にも声をかける。グリフィスの取り巻き達は気絶しているグリフィスや耀が吹き飛ばした者達を担ぎ上げて次々に運んでいく。

「……あなたは一体」

「僕はこの喧嘩の仲裁に來ただけや。これ以上のことはせんから安心し。ジョットの子孫君」

「は!？」

ツナは聞き逃せない言葉を聞いた。

この男もジョットを知っている。

「ちよつと待つてください!」

ツナは眼帯の男を呼び止めようとしたが、男はすぐさま目の届かない場所まで行ってしまう。

最近ヒントめいたものを得ることが出来ても確信を得られないことの方が多いことを嘆くツナであった。

この場に留まっても仕方ない。とりあえず耀を医務室へ運ばなければとツナはリリに協力して貰って耀を負ぶさる。

気を失つてから肩を貸すだけでは安定せず、かといってお姫様抱っこは恥ずかしく

てへタレのツナに出来るわけも無い。消去法で負んぶになった。

「……あえ？」

「ランボちゃん？」

リリがランボの様子がおかしいことに気が付く。ランボの身体が緑色の光始めているのだ。

『ちやおつす、ツナ。そろそろタイムリミットだぞ。ランボのヤツはそこにいるか？』

ツナのヘッドホンから聴こえるリボーンの声。そういえば白蘭が時間制限があると
言っただのを今になって思い出す。

「うん、いるにはいるけど……」

「あれれれ？ ランボさんどうなっちゃうの!？」

突然の事態に混乱するランボ。

緑色の光に包まれたランボは宙に浮かび上がったかと思えば、もの凄いいスピードでいつの間にか空にある黒い穴へと消えていった。

あの黒い穴には見覚えがある。

「夜の炎のワープホール……？」

バミューダや新生 D^{デイモン}が使っていた第8属性の夜の炎。特徴は空間移動という桁外れな力を持つ代物だ。

『まだ研究中でバミューダのように自在にはいかねーし、準備に時間がかかるけどな』
(これでオレ帰れるんじや……)

そう思ったツナであつたが、「ノーネーム」再興や謎の勢力のこともあるのですぐ帰るわけにもいかない。

「あの、今のは一体……？ それにランボちゃんは……？」

ランボが消えて困惑するリリにツナは耀を運ぶ道則を歩きながらもランボの無事を伝えた。



検査して貰ったところ、腹部を殴られてはいるものの、内臓に損傷も無く内出血も無し。その内起きるだろうという診断結果が出た。

その言葉に嘘偽りは無く、耀は現在泊まっている貴賓室のベッドの上で目を覚ます。

「んう……(´▽｀)」

『気が付いたかお嬢！』

前回の戦いで怪我をした三毛猫はアンダーウッドで療養していたが、耀が倒れたと聞いて腹に包帯を巻いたまま駆けつけてくれた。

「良かった！ 気が付いたんだね」

「ツナ……っ!?」

ベッドから起き上がった瞬間に彼女の腹部に鈍痛が奔る。その痛みに一瞬顔を歪めたが、それを堪えて横の机に置いてあった水差しを取った。

「私は……負けたの?」

『いや? 喧嘩やったら眼帯の男がお嬢と相手を伸して納まったみたいやで?』

三毛猫はツナに聞いたことをそのまま耀へと伝えた。

「それで、ツナは?」

『坊主ならお嬢を伸した眼帯の男を捜しに行ったで。安心し、きっと敵を撃ってくれる』

「……多分違うと思う」

耀の目が覚めた頃、その一方でツナは三毛猫の言ったとおり眼帯の男を探し回っていた。もし、”二翼”とのいざこざで本陣營へと赴いていればすぐに見つかっただが、ツナはそれを知らない。知らずにアンダー・ウッド中を走り回っていた。

「——というわけでツ! 収穫祭のメインゲーム;”ヒツポカンプの騎手”の水馬貸し出しはツ!!! 全員水着の着用を義務とするツ!!! 当然男女問わずウウウウウ!!!」

「白夜叉さん……!!!?」

探し回ってる途中でもの凄いのを発見してしまった。壇上の上で暴走しているの

は大人の姿となった白夜叉。先程も思ったことだが、中身が全く変わっていない。そして観客席の人達は既にアルコールが回って出来上がっている。

「女性用水着は幼児用のスクール水着からマイクロビキニまでありとあらゆる水着全数百種類を取り揃えたッ!!!」

「ヒヤッツツッホオオオオオオオオオウイ!!!」

「そしてええええ!!! なんと専属審判の黒ウサギはアアアア!!! 審判中は常時セクシー黒ビキニ着用だああああああ!!!」

「オールハイル白夜叉ッ!! オールハイル」サウザンドアイズ”ッ!!!」

「フハハハハハ!!! 諸人よ、我を崇めよ! 我を称えよ! 神仏よ、我を恐れ敬うがい!! 我こそは沈まぬ太陽の具現にして遥かなる地平の支配者ッ!!! ”白き夜の魔王

”・白夜王也イイイイ!!!」

ツナはこの惨状に唾然とするばかり。もはやツッコむ気にすらならなかった。



「眼帯をした瘦身の男?」

白夜叉の悪ふざけという名のオンステージが終わった後、ツナは白夜叉に接触するこ

とに成功。白夜叉なら眼帯の男について詳しく知っているのではないかと、ツナにしては珍しく良いところをついた答えだ。

「心当たりがある……というより私が探してる男やもしれん。会いたいのであれば着いて来い。丁度その男に用があつてな」

ツナは白夜叉に言われるがまま、その後ろについていった。日が沈み、空には三日月が淡い光を放つてこのアンダーウッドを照らしている。

二人の足音と夜風の音が聞こえる。

「そういえば、この姿……どうだ？ ジョットにも見せたことがない私の白夜王としての姿は」

急な白夜叉の問いかけにツナは戸惑った。見た目は一級品の美女ではあるものの、中身はおっさんという概念が出来上がっていて、素直に彼女が美人だとは思えない。

言うなれば残念美人。

「なんや、随分懐かしい御方の登場やね。それに後ろのは昼間の子？」

「おっと。おんしと会うのは久しいな、蛟劉」

二人が辿り着いたのは大樹の天辺。そこで眼帯の男は杯を煽っている。白夜叉は蛟劉と呼んだ男に無遠慮に近づくと、断りもなく座り込んで虚空から酒瓶を取り出して、自らで酌をしてそれを飲んだ。

「まったく、何処ほつつき歩いてるかと思えば」

「あれ？ 僕のこと探してたん？」

蛟劉の白々しい物言いに白夜叉は睨みつける。失せ物の探索にはうつつけである。ラプラスの小悪魔^①が無ければ場所の特定すら困難だっただろう。

世間話もそこそこに、蛟劉は白夜叉に「平天大聖^②の封蝋がしてある封筒を白夜叉へと手渡した。

「平天大聖？」

ツナは馴染みのない言葉に首を傾げる。

「牛魔王って言えば分かる？」

「牛魔王……つての西遊記に出てくるあの牛魔王!？」

「ちなみにこいつはその牛魔王の義弟だ」

「ええっ!？」

そこまで言われればツナでも馴染みがある。孫悟空と戦って敗れた白牛の妖魔。しかも目の前にいる蛟劉はその弟だというのだから驚きも一入だ。そしてあの「斉天大齊^③・孫悟空とも義兄弟なのだが、ツナはそこまで頭が回っていない。

「何の手紙だ？」

「例の”階層支配者”襲撃事件について。北を襲った魔王とその主犯格らしい連中。そ

れと最近妙な力を使う連中がちよいちよい見られることについてや」

白夜又は顔を強張らせた。彼女が今一番欲しかった情報だ。牛魔王は情報を奪われる可能性を考慮して信頼できる義弟にこの封筒を託したのだろう。

そしてツナにとっては『妙な力』というのに引つかかった。

「あの、妙な力って」

「それは僕もよく知らん」

蛟劉は背筋を伸ばして肩を回す動作をした。

「やーっと終わった。百年ぶりに会ったと思つたら手紙の遣いやで？ ありえへんやろ？」

「仕方あるまい。この封書の中が真実であるなら連中に襲撃される危険もあった。だからこそ、信頼出来るおんしに任せただろうよ」

しかし、これが偶然だと白夜又は思えない。前回の戦いで“階層支配者”を解任された彼女はその後任を欲しがっていた。そこに現れたのが蛟劉。これが唯の偶然で済ませられる筈が無い。

(ジョットがいれば、奴に任せたかもしれんが……)

ジョットはもういない。今いるのは、その子孫のツナ。過小評価しているわけでは無いが彼ではまだ幼すぎるし、ツナにはジョットと同じく帰る場所があるのだ。

彼女は少し寂しい気持ちになりながら酒を煽り、話を変える事にした。

「今はどこぞでコミュニティの長をしておるのか？」

「はっ、まさか。柄じゃないの知ってるやろ？ このチンケな“覆海大聖”の旗下は一人しか入れんよ」

蛟劉は笑っていたが、その目あつたのは強い拒絶であつた。“ノーネーム”がそうであつたように蛟劉もまた戦いで多くの仲間を失つた。失つて失つて、そして戦うことに疲れてしまった。

——そうして彼は“覆海大聖”から“枯れ木の流木”になつた。

「……蛟魔王よ。もう一つ話がある」

白夜叉は腑抜けてしまつた彼を今一度奮い立たせようとある提案をした。頼みを聞いてくれたら彼の義姉である斉天大聖——孫悟空に会わせてやつても良いと言うのだ。

「……なんやと？」

蛟劉はその話に喰いついた。彼にとってそれだけ孫悟空の存在は大きいのだ。

白夜叉の出した条件は二つ。

- 1、サラ||ドルトレイクが“階層支配者”になれるように手を貸すこと。
- 2、“ヒツポカンプの騎手”で優勝すること。

「……ええんか? 僕が出たらゲームそのものが滅茶苦茶になるで?」

蛟劉も自分が乗せられていることに気が付いていないわけではない。それを知った上であえてその話に乗った。

「さて、それはどうかな? 私はむしろおんしが優勝する確率のほうが低く思えるがの」
「それはそこにいる君のお気に入りのことを言ってるん?」

「さあ、それだけでは限らんぞ?」

蛟劉はその隻眼で白夜叉を睨んだ。

「私の話は終わりだが、綱吉はこの男に聞きたいことがあったのではないか?」
「聞きたいこと?」

ほんの一瞬、蘇った魔王の覇気は瞬く間に霧散し、彼は怪訝な顔をする。

「はい。蛟劉さんがオレのことをジョットの子孫って」

「噂を聞いてただけや。纏ってる空気も似てたしな」

蛟劉は思いに耽るように三日月を見上げた。

「ジョットと最後に話したのは僕や」



『行つてしまふん？ 白夜王が悲しむで』

『ああ、オレにも帰らなければならぬ場所がある。待つている人達がいる』

あの日、白夜王は急な魔王の襲来でその討伐に行つていた。ジョットが箱庭を出るのはホンマに突然のことで知らせる暇すらもなかったらしいで。

『……そこまで言うなら止めんけど。待つてあげてもいいんやない？』

『オレの世界とここでは流れる時間が違う。それに彼も待つてはくれなんだ』

詳しく話してはくれんかったけど、元の世界に帰る最後のチャンスかもしれん言つてたな。

『白夜叉に伝えてくれ。』急になくなつてすまない』と』



「フン！ 何が『急にいなくなつてすまない』だ！」

白夜叉は機嫌が悪くなつたのか酒瓶を持ち上げると、杯に注ぐのではなくそのままラッパ飲みしました。

蛟劉はちよいちよいとツナを手招きする。ツナが彼の隣まで来ると蛟劉はツナの耳に口を近づけて

「今でこそ氣丈に振るまつとるけど、当時はショックで丸三日寝込んでたらしいで」
「おいそこ! 何をコソコソしておるか!」

様々な想いと企みが交錯する中で夜は更けていく。

ヒツポカンプの騎手開催まで約12時間前のことであった。

ヒツポカンプの騎手来る！

”ヒツポカンプの騎手” 開催当日、ツナ達はジンから昨夜の出来事を聞かされた。それはこの”ヒツポカンプの騎手”での勝者が次の”階層支配者”を決める事が出来るというものだった。

「サラもなかなか面白い面倒ごとを任せてくれたな」

「でもせめて一言欲しかったわ。本当に心配したのよ？」

「これはもう、サラには美味しいものを奢ってもらうしかないね」

「昨日散々食べたのに!？」

ツナのツツコミに皆は苦笑する。耀の胃袋に限界というものは存在するのかが怪しくなってきた今日この頃である。

「にしても……女性出場参加者は本当に全員水着なんだな」

ツナはそういえば白夜叉が酔っ払った観客達に向けてそんな事を声大にして言っていたのを思い出す。その時はただの悪ふざけかとも思っていたが、実際に規則に加えてしまったのか。

「ちよ、恥ずかしいからジロジロ見ないでよ」

十六夜に見られて顔を赤らめている飛鳥は、普段着ているドレスと同じ色をしたビキニタイプで腰にパレオを付けている。いつもドレスを着ているだけあって水着のよう露出度の高い格好はとても新鮮味がある。

「ねえ、ツナ。ど、どうかな?」

対する耀は飛鳥程起伏に乏しくはあってもストライプ柄のセパレートタイプの水着によつてスレンダーさが際立つて健康的だ。

「ど、どうつて言われても……」

ツナにそんな気の利いた言葉など出るわけも無く、顔を赤くしながら目を逸らすだけで精一杯だ。

「お……お待たせしました……」

テントの出口にはウサ耳だけが入っている。しかしその本体は一向に中へ入って来ない。痺れを切らした女性二人はウサ耳を掴んで思いつきり引つ張つて本体をテントの中へ引き摺り込んだ。

「フギャ!?!」

黒ウサギは——黒ビキニだった。

全ての男の憧れである黒ビキニ。フリルのような装飾も無いシンプルなタイプのものだったが、黒一色故に黒ウサギの白い肌がより強調されている。そして水着になった

事により顕わになつた黒ウサギの豊満な胸、無駄な肉付きの無いくびれた腰つき、引き締まつていながらも柔らかかそうな美脚。男を魅了し、女を嫉妬させる美しい肢体が目の前にあつた。

「……ブフツ！ 沢田、お前鼻血出てるぞ！」

「えつ、マジ!?!」

思わず噴出して指摘した十六夜の言う通り、鼻の下に触れると赤い血がついていた。

「……」

「い、痛いってば！ 何でオレ蹴られてんの!?!」

耀は無言で、しかし不機嫌に頬を膨らませながらツナの脛の部分でゲシゲシと蹴っている。勿論、彼女が思いつき蹴つたらツナの足は確実に押し折られてしまうので彼が軽く痛みを感じる程度の力しか籠ってはいない。

「これがラブコメってやつか。壁殴り代行は任せろー!」

「十六夜君が殴つたらどんな壁でも粉々に砕けるでしょうが」

「どうか私は放置ですか!?!」

それから間も無くして、参加者を集めるための鐘が鳴り響いた。



(耀の方が適任だよなあ……)

しかし今回のルールであれば死ぬ気の炎で加速が出来るツナの方が騎手に向いている。そして彼女の多種多様な能力は騎手よりもサポートの方が遺憾無く発揮できると十六夜は言っていた。

そして実況席へと上がってきた白夜叉は語り出す。

『えー、諸君！ゲーム開始前にまず一言——黒ウサギは実にエロいな！』

『さっさと開始してくださいこのお馬鹿様ツ!!』

壇上の中央からではないいつものハリセンが届かないのでその代わりに今回は投石を採用している黒ウサギ。いつもよりバイオレンスなツツコミである。

『それでは本当に一言——黒ウサギは本当にエ……』

黒ウサギが自分の顔位の大きさがある岩を持って振りかぶっていたのを見た白夜叉は流石にこれは拙いと口を止めた。

『うむ、流石に投岩は拙いので話を進めるとしようか』

白夜叉は今回の祭りで“サウザンドアイズ”がギフトゲームを開催する準備が出来なかった事を謝罪し、その代わりに“ヒツポカンプの騎手”の勝者には“サウザンドアイズ”から望みの品を進呈すると発言した。

白夜叉の言葉に騎手の飛鳥、そして大河の両岸にいるサポート役のツナ、十六夜、耀

が目配せし合つて、その装いを新たにす。

(そうだ。もし負けたら議長を辞めさせられるんだ! 自分の角を折つてまで”アンダーウッド”を守つたのに!)

その尊い行いをグリフィスは『馬鹿な真似』と侮辱した。彼が勝ちたいと思うのこれ以上の理由は要らない。いつの間にか手の震えも止まり、その目には覚悟が宿つてゐる。

「それでは参加者達よ。指定された物を手にいれ、誰よりも速く駆け抜けよ! 此処に、

”ヒッポカンブの騎手”の開催を宣言する!」

ツナは死ぬ気モードとなつて左手を後方へと向けた。

——レース開始直後。その刹那に事態は起こつた。

「きゃ……きゃあああああああああああああああ!!」

途端に広がる女性達の絶叫。その身を覆つている水着がバラバラに切り裂かれたのが原因だ。そしてそれを実行したのは——クイーン・ハロウインの寵愛を受けた騎士フェイス・レス。彼女はこのパニックの中で隙間を縫うように進みながら自分に近づく参加者の水着や衣類を蛇蝎の魔剣で切り裂いて素っ裸にしている。

誰もがフェイス・レスがトップに躍り出るだろうと考えていたその矢先、オレンジ色の炎がフェイス・レスの隣を超スピードで横切つた。

「くっ！　っ、これは……!?」

X　BURNERの剛の炎を後方へ噴射することで、その勢いを利用して凄まじいスタートダッシュを可能にした。

その名も『X・B・B』。
イクス・バック・ブーネスト

あまりの勢いにフェイス・レスの騎馬も一瞬体勢を崩すが、直ぐに持ち直してツナの後を追う。

「わ、私も負けてられないわー!」

飛鳥も負けじとヒツポカンブを加速させた。

開始直後にフェイス・レスの動きを察知した十六夜が小石を投げて剣を弾かなければ今頃は飛鳥も悲鳴を上げる女性陣の仲間入りをしていた事だろう。

「クッ、流石は我が仇敵が選んだ騎士ッ！　血も涙もないその判断力と、肌には傷を付かず水着だけを斬り捨てる剣技ッ！　宿敵の臣下なれど見事だと言わざるを得ないッつつうかもつとやれヤツホウウウウウウウ!!!」

「「ヤツホオオオオオオオオオオオ!!!」」

この状況に会場は大盛り上がり。司会の黒ウサギは今日ほどゲームに参加しなくて良かったと思わなかった事は無い。というかつながフェイス・レスを差し置いてトップに躍り出た事については言及しなくて良いのだろうか？

レースの方はといえば、フェイス・レスの手によって脱落者が続出し、参加者は既に十分の一にまで減ってしまっている。

”ノーネーム”側としても白雪が水着を切り裂かれてリタイヤ。序盤で水のギフトを扱うことが出来る彼女を失ったのは大きな痛手だ。

『現在のトップは炎の噴射で頭一つ抜きに出た”ノーネーム”より沢田綱吉! 二番手は”ウィル・オ・ウィスプ”よりフェイス・レス! 三番手には同じく”ノーネーム”より久遠飛鳥! 以下、四番手から七番手は”二翼”の騎手たちが猛追している状況……おや? トップのツナさ……じゃなくて沢田選手のスピードが弱まっています!』

X・B・BはX BURNERの剛の炎のみを後方に放つ技。つまり長時間放出し続けられただけ消耗も激しいし、片手で手綱を握らなければならぬからバランスも不十分だ。そして何より直線以外では使用出来ない。

(思っていたよりも流れがキツイ。そろそろ加速も限界か……う?)

フェイス・レスとの距離も段々縮まってくる。だが、一応トップは保ったままでアラサノ樹海の分岐点まで辿り着く事が出来た。

「沢田! お嬢様! こっち側の細い道を選べ!」

「分かったわ!」

ツナも飛鳥と同じ細い道へと進もうとする。

「おっと、そうはさせませんよ」

「なっ!？」

ツナの行く手をフェイス・レスとその騎馬が遮った。河の流れが強いこともあつてかルート変更をしなければ先に進むことが出来ない。

「しまった! ああの仮面の狙いは沢田か!？」おい春日部! ……春日部?」

耀にツナのサポートをさせようと指示を出そうとしたが、当の本人が何処にも見当たらない。疑問に思ったが、足を止めるわけにはいかなかった。



飛鳥が選んだルートと同じくツナとフェイス・レスが進むルートも樹海で死んでいった幻獣の亡霊”水霊馬^{ケルビ}”の縄張りであつたが――。

「ナッツ!」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

ナッツの咆哮によって襲い来る”水霊馬^{ケルビ}”を次々と周囲の河と同化させ消滅させていった。

その一方でフェイス・レスも”水霊馬^{ケルビ}”を火炎を灯した魔剣で焼失させていく。時折

流れてくる流木もその剣にかかれば一瞬で燃え尽きていく。

フェイス・レスは「水霊馬^{ケルビー}」を斬る合間にもツナへ蛇蝎の魔剣を伸ばす。そしてそれをツナが超直感で察知して回避、もしくはナッツが破壊する。

二人の戦いは拮抗していた。

(やりますね。貴重品で無いとはいえ魔剣が既に5本も駄目になっている)

(くっ、さつきまであった差がもうほとんどない。騎手としての技術は圧倒的に向こうが上だ。それにヒッポカンブも……抜かれるのは時間の問題か)

樹海を抜けると、目の前にあったのは大瀑布。辺り一面は水霧で覆われて目の前がほとんど見えはしない。滝の傾斜もほぼ垂直でとてもヒッポカンブで進むことが出来るようには思えなかった。

「この上が折り返し地点か」

「お先に失礼します」

通常であれば別のルートから登るであろうところを、何とフェイス・レスはそのまま滝を登り始めたのだ。彼女のヒッポカンブが特別だから出来るのか、それとも水のギフトで滝を登れるようにしたのかは不明だが、少なくともツナには到底真似できない芸当だ。

(よくあんな急な流れの滝に逆らって……滝?)

ツナはかつての戦いを思い出して、そしてある方法を思いついた。

「死ぬ気の零地点突破・初代エディション」
ファースト

かつてのシモンファミリーとの戦い。雲雀とアーデルハイトの腕章没収戦でアーデルハイトは氷河の炎の力を使って滝を凍らせて無敵ムロ・ディフェンザ・インウィンチーレの防御壁であるダイヤモンドキャッスルを作り出した。

ツナはそれと同じことをしようとしているのだ。

彼の掌が触れた部分から徐々に凍り付いていく。アーデルハイトのようにあつという間とまではいかなくとも、滝を一時的に凍らせることに成功した。

「ポツカ、行けるか?」

ツナのヒツポキャンプは凍りついた滝に出来た出っ張りを足場にしながら易々と登って行く。ツナが下に向けて支えの柔の炎を噴射していることもあって上に辿りつくのにそれ程時間はかからなかった。

山頂に辿りついたツナが見たのは巨大な海。

(潮の香り……?) (ここは山頂だぞ)

試しに水を軽く舐めたが、淡水ではない。このしょっぱさは海水のものだ。改めて“箱庭”の出鱈目さを思い知らされる。

「沢田く！ あなたも急ぎなさい！」

飛鳥の声にハッと我に返ったツナは海の中央に生えている大樹の実を取ってギフトカードへとしまう。後はゴールするだけだ。

その時足場が——否、大気が揺れ出した。

それはあのフェイス・レスさえも脅威を感じている。

「……まさか、こんなお遊びのようなゲームで、動くのですか？」枯れ木の流木”と擲揄された、あの男が……!」

——……ええんか? 僕が出たらゲームそのものが滅茶苦茶になるで?

ツナはレース開始時にあの男の姿が無かったことで安心していた。

「いやあ、参った参った! 寝坊したらこんな時間になってしもうた。無理矢理ねじ込ませてもらったのに、白夜王には悪いことしてもうたなあ」

しかしその認識は甘かったと今になって気づかされる。

「でもよかった。君らがこんなところでトロトロしてたおかげで、簡単においつけたわ。

——此れなら優勝も、容易そうやなあ」

最強の参加者、蛟魔王を加えてレースは後半戦へ突入する。

覆海大聖来る！

海樹の園の海岸沿い。

ここまで辿り着いたのはサポートの十六夜を除けば、飛鳥、ツナ、フェイス・レス、そして怒号の追い上げを見せた蛟劉であった。その中でも蛟劉は別格の空気を纏っている。皆が一番警戒しているのはこの男だろう。

「聞け、沢田にお嬢様。あいつはまだ果実を手に入れてない。俺が足止めしておくから先に行け」

「ここは沢田と一緒に足止めするべきじゃないかしら？」

蛟劉は元とはいえ魔王。いくら十六夜が規格外とはいえ容易く勝てる相手ではない。事実十六夜は『倒す』ではなく『足止め』と彼にしては珍しく弱気な姿勢を見せているのだ。

「それはお前一人であの手強い騎士様を相手にするってことだけ？ 俺が蛟劉を、沢田が騎士様を足止めする。悪く思うなよお嬢様。これが一番確実なんだよ」

もし十六夜が蛟劉に挑めば、場の均衡は崩れる。それを見逃すフェイス・レスではあるまい。傍から見れば危険から遠ざけるように思えるだろう。しかしそれと同時に、飛

鳥は二人が切り開く道を進んで逸早くゴールするという責任重大な役目を背負うのだ。

考え方によつては一番オイシイ役回りなのかもしれない。

「お〜い、作戦会議かどうかは知らへんけど、時間掛けすぎやで?」

蛟劉の突然の物言いに合わせたような地響き、否、これは準備が整つてしまつた彼からの警告だつた。彼の右手が掲げられると地響きはより一層強まつて巨大な津波を起こした。

「二人とも早く行け! このままじゃ失格だぞ!」

ルール上、馬から離れること自体は反則ではないが、水に沈んでしまえばその時点で失格となる。三名と同じく窮地を悟つたフェイス・レスは一目散に凍つた滝へと駆け出した。

「まだいけるか?」

ツナは耀と違つて動物と会話するための術を持つてはいない。けれどツナの乗るポツカの瞳は「任せろ!」と頼もしく語つているように見えた。

「もうどうにでもなれー!」

飛鳥も半ばやけくそになりながら、三名は滝を跳び下りた。その後ろでは樹海が津波によつて飲み込まれていく。

「はあああああ!!」

フェイス・レスは二本の剛槍を振り下ろすことで落下の衝撃を相殺した。飛鳥は自分の持てる力全てを最大限にまで生かすことで水面をまるでトランポリンに着地したかのように『垂直』に跳んだ。ツナにはそんな技術力は無い。彼にあるのは死ぬ気の炎と今までの戦いの経験だけだ。

彼が取った方法は下へ柔の炎を噴出しての着水。X BURNERの反動を支えることが出来る柔の炎だ。落下の衝撃を相殺できないわけが無い。

——だが、彼の馬はここまでだった。

飛鳥のようにブーストもない状態でツナによる無理な加速でポツカの疲労は限界にまで達していた。

「無理に走らせてすまない……ここからはオレ一人がいい」

ツナは馬を降りて、飛んだ。

「ナッツ、カンビオ・フォルマ形態変化」

『おーっとこれはどういうことでしょうか?! 沢田選手が馬から降りて一人で飛んで行きます! 馬から降りること自体は禁止事項には引っかけりませんが、騎馬と共にできればゴールとは認められません!』

『……おそらく綱吉の馬はもう動けんのだろう。であれば馬から降りて飛鳥の援護に向

かう方が良いと判断したのか。即座にその決断が出来る辺り、本当に欲の無い男だ』
空中での速さであればツナの独壇場だ。しかし、飛鳥も離されないようにピッタリと後ろについている。

「見つけた！」

フェイス・レスを捕捉するまでそれ程時間はかからなかった。彼女の騎馬は優れているが、飛鳥のギフトによって強化された騎馬程ではなかったようだ。

ツナが更に距離を縮めようとした刹那、剣閃が彼を襲う。

ツナはそれを弾くのでも避けるのでもなく——掴み取った。

「クッ！」

フェイス・レスは蛇腹の剣からあっさりと手を離した。

「手筈通りオレがフェイス・レスを押しさえ込む。飛鳥は先に行つててくれ」

「分かっているわ。そっちこそ『負けるんじゃないわよ』」

ツナはフェイス・レスへ、飛鳥はゴールへ向けてそれぞれ動き出す。飛鳥の去り際の一言は疲弊しているツナへのブーストとなつてある程度だが両手に燃える炎に勢いが戻る。

「……やはり貴方をどうにかしなければ先へは進めないようですね。ジョットの子孫よ」

「ああ、この先へ行かせるつもりは無い」

フェイス・レスの手に現れたのは、ヨーロッパで騎馬兵が用いた突撃槍と円形の盾。その身に纏う純白の鎧と合わせれば、これぞ正しく馬上の騎士と言える姿だろう。

先に仕掛けたのはフェイス・レスだった。

「ハア!!」

馬による突進、その速度に突撃槍の突きを乗せて放つ。

かつて、ミルファイオーレの基地で最初に戦闘をしたデンドロ・キラムという男がいたが、パワーならともかくスピードは奴の比ではない。

それに――

「スピードがさつきよりも上がっている……?」

回避することは出来たが、先程までとスピードも鋭さも格段に上なのだ。

「まさか……私が今まで100%の力量で戦っていたとお思いでしたか?」

ツナの眩きが聴こえたのか、それともツナの驚く顔を見て考えていることを察したのか。フェイス・レスは言い放つ。

今まで、彼女のやった攻撃は服だけを器用に切り裂いて参加者達を競技続行不能にしていただけ。手を抜いていた訳ではなくても、相手を殺さないように力をセーブしていたのだろうか。

(なら、これならどうだ?)

ツナは両手のXグロープから炎を噴出させながら超スピードで相手の周囲を螺旋状に駆け巡る。フェイス・レスは馬に乗っている以上、急な切り替えしが出来ない。であるから槍だけでなく盾も使用したのだろう。だが、この技は盾一つでどうにかなるものでもなかった。

「超Xストリーム!!」

ツナが噴出させる炎がフェイス・レスの周囲を取り囲んでく。顔を隠しているせいで正確な表情は分からないが、おそらく苦い顔をしているだろう。彼女を取り囲む炎の壁を突破出来なければもう先へ進むことは敵わない。

ただの足止めであればこれ以上のものは無い。

「くっ」

炎の壁を破ろうと槍をぶつけるも、それは焼失する。不用意に近づけば火傷では済まされないと理解した。この技は本来、炎で取り囲んで燃やすものだ。

一対一の真剣勝負であれば、ツナの体力が底を尽きるまで待てば良い。だが、これはレースであり、相手は目の前にいるツナだけではない。飛鳥も今から追ったとしても間に合うかどうか。

「……してやられましたね」

リユドン焼き20個入りのケース。そして両手首に吊るされている袋には他の屋台で買った食べ物の数個入っている。既に大分食べているというのにまだ食べる辺り彼女の底が知れない。

「ツナ、あれ見て! あつちでギフトゲームやってる!」

「手に持ってた食べ物が消えたー!?!」

ツナが一瞬目を離れた隙に耀の両手の食べ物が消滅しておいでおいでをしながらツナに呼びかけている。屋台の直ぐ横にはこんな紙が張ってあった。

『ギフトゲーム―型を抜きし者―』

・参加資格

・参加料 銅貨5枚

・勝利条件

・型を割らずに上手にくり抜く事(屋台主が公正な判断を下す)

・敗北条件

・型を割ってしまうこと

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催し

ます

” 屋台の

親父”印」

(要はただの型抜き屋だったー！?!?)

この屋台は昨今では珍しい型抜き屋だった。台の上では子どもだけでなく老若男女がこぞつて爪楊枝を使って型をくり抜いている。

「くっ……このっ、中々難しいの……」

「フンフーン♪」

その中には白夜叉と蛟劉の姿もあった。

(二人とも何やってんのー！?!?)

「ぬああアアしまったアアア！」

白夜叉が削っていた”一本角”の旗印のマークが力の加減を間違えたのか割れてしまったんだ。それに対して蛟劉は未だに”四本足”の旗印のマークを削り続けている。

「おい親父！ もう一回だ！」

「白夜王、もう諦めたらどうや？ これで25回目やで？」

「いやー！ 今日は勝つまで続けるぞ！ 何が何でもあの黒ウサギ10分の1スケールのフィギュアを……」

白夜叉は既に泥沼に嵌まってしまっている。蛟劉が止めても彼女は懐のがま口から銅貨を5枚取り出した。たかが銅貨5枚と侮っていればいつの間にか持ってきた小遣

いを使い果たしている。それが祭りの屋台が持つ恐ろしい魔力なのだ。

それと何やら不穏な単語が聞こえた気がするが、ツナと耀は聞かなかったことにしてその場をゆつくりと立ち去ったのだった。



最終日に行われたサラの階層支配者就任式では流石に一度中断されて荘厳な空気に包まれている。龍角を折ったことで失われた力も、白夜叉から賜った“驚龍の角”があれば問題ないだろう。

そして“二翼”の長であるグリフィスはというと、サラが階層支配者に就任すると決まるとコミュニケーションを去って行った。流石に階層支配者の候補者を侮辱しておいて、その挙句ゲームで負けたのだ。その後も連盟に居続けられるほど豪胆な性格はしていなかったのだろう。

「めでたしめでたし……なのかな？」

「俺としちゃ不完全燃焼甚だしいなんだがな」

就任式を斑梨のジュースを飲みながらツナと十六夜は喋っている。実際、十六夜と蛟劉の戦いは十六夜の勝ちではあったが、それはあくまで蛟劉がレースを辞退したから

だ。蛟劉に決定打を与えていない十六夜からすれば不満でも無理は無い。しかし、それと同時にいつか来るであろう蛟劉との真剣勝負はこの箱庭での一つの楽しみとなった。

「よく考えたらフェイス・レスさんや蛟劉さんが勝つてもサラさんが階層支配者になれたよね……？」

「分かってねえな。そんなチンケな理由で俺達が勝ちを譲るわけないだろうが」

それもそうかとツナは納得した。問題児三名にそんな殊勝な考えの持ち主などいるわけが無い。

「お疲れ様ですサラ様」

”ノーネーム”崩壊からずっとコミュニティを守り続けている黒ウサギには復興を成し遂げたサラは強い励みとなった。きつと旗印を取り戻して散り散りになった仲間達を連れ戻してみせる。そう、改めて心に誓いながら天高く上がった炎を眺めている。

「あの、黒ウサギお姉ちゃん」

「どうしたのですか？」

リリを中心とした年長組は今がそのタイミングだと黒ウサギに走り寄ってきた。黒ウサギはリリ達が神妙な顔をしていることに頭を捻る。

リリは頭に生えている狐耳を赤くしながら抱きしめていた小袋を黒ウサギへと差し出した。

「黒ウサギお姉ちゃんにプレゼントです。いつもお世話になつてるから、十六夜さん、ツナさん、飛鳥さん、耀さん、ジン君、それに私達皆で選びました」

「わ、私にですか!？」

耳をピンと逆立たせて驚く黒ウサギ。問題児達十 α を見るとそれぞれが別方向に、ツナだけその三人を見て微笑ましそうにしていた。

「……ま、こんな面白くて楽しい素敵な場所に招待してくれたからな」

「連盟も組んで、一つの節目ができたわけだし」

「何時もありがとう、黒ウサギ」

「これからもよろしくね」

十六夜と飛鳥は照れ臭そうに、そしてツナと耀はにこやかに、黒ウサギへと感謝の言葉を送った。その不器用ながらも温かな心遣いに黒ウサギは思わず涙を流す。

「あ、ありがとう……ごいいます。とても大切にするので……い！」

黒ウサギはそう言つて袋を開けようとする、問題児三名は慌ててそれを遮つて彼女を広場へと連れて走り出した。

「プレゼントの確認なんて後でいいだろ！」

「今夜は収穫祭の最終日なのよ!?! 遊ばないでどうするの!?!」

「さあ、行こう！」

「え、ちよ、ちよつと待つてくださいい！」

プレゼントをリリに預けて広場に出る四人。それをツナとリリは優しい目で眺めていた。

僅かに開いた小袋の中に、実はプレゼントとは別に手紙が入っている。

宛名にはこう書いてある。

『親愛なる同士・黒ウサギへ』と。

「皆、素直じゃないなあ」

「ふふつ、そうですね。」

「オレ達も行くかうか」

「はいー！」

ツナは年長組を連れて四人の後を笑顔で追いかけるのだった。こんな笑いに満ちた日々がもつと長く続けば良い、そんな優しいことを思いながら。

「はい……はい……かしこまりました」

「『あの方』はなんつってた？」

「やつらとの同盟は今のところは見送りだそうだ。こちらへの旨味が無い」

「しししつ、互いに不干渉のままってわけか」

「……グロは何処へ行った？」

「あ？ あのゲス野郎の行方なんて知ってるわけねえだろ。またどつかで女でも捌って遊んでんじやねえの？」

「まあ、放っておいても問題はあるまい。まだ、我ら^{ネオ}新・六甲花^{ネオ}が集まるような時期でもないのだからな」

問題児たちが並盛に行くそうですよ？

問題児たちが並盛を観光するようですよ？

「よつと。……へえ、俺がいたとこと大して変わらねえな」

「ここは神社かしら……」

「何だかレトロな空気」

「ここがツナさんが住んでいた世界ですか」

ここは並盛神社。

その何も無い空間から突如現れた5人組み。

金髪で学ランを気崩した不良のような風貌の少年、逆廻十六夜。

黒い長髪を赤いリボンで結び、ワインレッドのドレスを着こなすお嬢様、久遠飛鳥。

ノースリーブのコートに白いインナー、そして黄色いショートパンツと軽快な服装の

少女、春日部耀。

いつもと違い、サマードレスに大きめの帽子を被っている女性、黒ウサギ。

「帰って……来たんだ」

そして沢田綱吉。

本来であれば箱庭に居る筈のこの五名なのだが、何故この並盛の地に足を踏み入れているのか。それは数刻前に遡らねば分からない——

数刻前

「死ぬ気丸が無くなった……ですか」

「……うん」

黒ウサギの確認の問いに対して力なく頷くツナ。そう、彼が死ぬ気になるために必要な『死ぬ気丸』が前回のアンダーウッドでの戦いでとうとう底をついてしまったのだ。『死ぬ気丸』が無ければ死ぬ気にならない。つまりツナは戦えなくなってしまう。これは「ノーネーム」にとつても痛手になる。

「とりあえずリボン……オレの仲間に連絡して取りに行くからちよつとの間いなくなるけど……」

「そうですか、仕方ありませんね。……くれぐれも問題児様方には気づかれないよう

……」

「ん？ 俺達がどうかしたのか？」

「!?!」

全身をビクリと振るわせた二名が振り向くと、そこにはニヤツと笑う十六夜、満面の笑みを見せる飛鳥、期待に胸を膨らませる（膨らむほど大きくないと言ってはいけない）耀、三名の姿があつた。

黒ウサギは恐れていた。この箱庭にやってきた四名の中で一番戦闘経験があるのはツナだ。であればそのツナが育つた世界に他三名が興味を持つのは当然の事。確実に自分達も行くと言って聞かないだろう。

「沢田が一旦里帰りするって？　ならそのまま逃げないように俺もついて行ってやるよ」

「私からすれば未来になるのかしら。私はもう帰ることはないでしょうけど、日本が将来どうなるのかは単純に興味あるわね」

「ワクワク。ワクワク」

「もしかして聞かれてなかったのでは？」という淡い希望は粉々に打ち砕かれて頭を抱える黒ウサギ。ツナも当然がつくりと肩を落す。

ちなみに十六夜は口ではそんな事言っても欠片もそんな事思つてはいない。

「アンダーウッドの収穫祭の時も言いましたが、ただでさえ戦えるメンバーが少ない”ノーネーム”の主力四名がいきなり居なくなる事がどれだけ危険か分かつてるんですか！　その間に魔王に攻め込まれたら……」

「まあ、落ち着け黒ウサギ」

黒ウサギを制したのはレティシアであった。どうやら彼女も聞いていたらしい。しかし彼女自身はこの四名が一時的にとはいえ居なくなることによってそれ程否定的な態度を取っていない。

「収穫祭の時と違って精々2、3日程度だろう？ なら目くじらを立てるようなことでも

あるまい。それに以前と違ってペストに白雪、それに新しく加入したグリーンもいる」

「で、ですがツナさんにご迷惑が……」

「なら、お前もついていけばいいのではないか？」

「は、はあ？」

レティシアの返しが黒ウサギにとつても予想外で気の抜けた返事しか出来ない。先程戦力が少ないと言ったばかりだ。自分まで抜けるわけにはいかないだろう。

「この四名ではストッパーが主殿ツナしかいない。下手すればズルズルと滞在期間が延びる恐れもある。ならお前も行って監視すればその危険もなくなるだろう。早く帰ることが出来ればそれだけ「ノーネーム」の主力不在期間が減らせるぞ」

「うっ」

「私では箱庭の外へ出る事は出来ないし、ペストや白雪では監視に向かん。ツナの世界に幻獣の類はいないそうだからグリーンは問題外だ。黒ウサギが一番適任なんだよ」

レティシアの言う事に間違いは無い。ウサギ耳さえ隠せればその辺にいるコスプレ好きの女子大生と誤魔化しも効くだろう。

「収穫祭でも審判役だのなんだので忙しかっただろう。たまにはそういったことを忘れて羽根を伸ばして来たらどうだ？」

流石に今の格好はどうかというツナの意見から自分で適当な服をチョイスして着替えることになった。

これが冒頭に至るまでのあらまし。



ツナの箱庭組み四名はすぐにこの世界の人間に迎えられることとなった。

「お久しぶりです！0代目！お怪我はごきいませんでしたか!？」

「よっ、元気そうだな」

「極限に久しぶりだぞ沢田ー！」

「ボス、後ろの人達はお友達……?」

獄寺隼人、山本武、笹川了平、クローム髑髏。彼の友であり守護者でもある四名にそれぞれ声をかけられるツナ。

「どうだ? ちつとは強くなったか?」

その中でも異彩を放つのが黒スーツを着込んだ赤ん坊。彼こそ世界最強の殺し屋ヒットマンにしてツナツナの家庭教師。その名はリボン。

「そいつらが沢田の言ってた友達ってやつか?」

「あ? テメエ、何10代目に馴れ馴れしい態度取ってんだ!」

ツナに気軽に話しかけた十六夜の態度が気に入らなかつた獄寺は十六夜を睨みつけ、くつてかかる。すると山本はいつものように獄寺を宥めに入った。

「まあいいじゃねえか。そいつもツナのダチってことだろ? なら俺達のダチってことだろ?」

「テメエと一緒にすんじゃねえよ野球バカ!」

一方で耀はこの中で唯一の女性であるクロームを直視している。

(……私から見ても可愛い。パイナップルみたいな髪型と鬨髷の眼帯はちよつとセンスを疑うけど)

クロームという女友達がいるという話は白夜叉と一緒に聞いていた。しかし自分が思っていたよりも何十倍も可愛らしいのだ。

(あのヘアピンの人、ずつとこつち見てる)

見られてるクロームは何故初対面である筈の自分が直視されているか理解出来ない。

しかし口下手なこともあってか中々その理由を聞き出せないでいる。

全くと言っていいほど言葉を交わさない二人とは対照的に、こちらは煩かった。

「オレの名前は笹川了平！ 座右の銘は『極限』だアアアア!!」

「(う、うるさ!?) しばらく黙ってなさい!!」

「……!!? ……うおおおおお!! い、今のは一体何なのだ!？」

「嘘ッ!？」

飛鳥の“威光”による『黙っている』という制約を気合だけで振り払った了平に飛鳥は思わず声を上げて驚いてしまった。流石は常時死ぬ気男と感嘆せざるを得ない。

問題児と守護者達が交流をしている頃、黒ウサギとツナはリボンと話をしている。

「そっちのリーダーはお前でもいいのか？」

「“ノーネーム”のリーダーという点では私ではありませんね。引率者という点ではそうですね」

「立ち話も何だ。詳しいことは家で話すぞ」

「で、でも死ぬ気丸は？」

「後で良いだろ。それよりもママンに顔でも見せに行つてやれ」

一行は腰を落ち着けるためにツナの家に向かうこととなった。飛鳥は途中で見つけた自動販売機や売っているペットボトル飲料を物珍しそうに眺めたり、耀は散歩している

猫とお喋りして周囲の人から奇怪な目で見られたり、いつの間にか十六夜が行方不明になつたりと様々なトラブルがあつたが、無事辿り着く事が出来た。

「全然無事じゃありません！ 十六夜さんはどうするんですか!？」

「おい芝生！ ちゃんと見張つてろつて言つたじゃねえか!」

「そこまで言うなら貴様が見張つていれば良かったではないかタクヘツド!」

「別にいいだろ。今の並盛はそこまで治安は悪くねえ」

「今はつてどういうことですか!？」

最悪、黒ウサギが隠してる耳を使えば十六夜の居場所を探知出来るとは思うが、彼女が心配しているのは彼の大き過ぎる力でこの世界を壊してしまわないう点だ。もつとも、しばらくした後それが杞憂だと気が付くのだが。

そして一行が沢田家のインターホンを押そうと手をかけようとしたら、あのウザい笑い声が聞こえてきた。

「ガハハー！ 死ね！ 死ね！ リポーン!」

(久しぶりに自分の使命を思い出してゐるー!!!)

庭の茂みからニユつとランボが出てきた。そして手に持ったダイナマイトをリポーンへと投げつける。そう、元々ランボはリポーンを暗殺するために日本にやってきたのだ。

それをリボーンは呼吸するかのようになり、気なく相棒の形状記憶カメラオンのレオンが変形したバットで打ち返した。打ち返されたダイナマイトで爆破されたランボは「ぐびゃ!」と悲鳴を上げて何処かへと吹き飛んでいった。

「さっさと入るぞ」

「え? 今の一連の動作は一体何ですか?」

黒ウサギの質問に答える者は居なかった。

「あらリボーン!」

結局、インターホンを押す前に玄関のドアが開いたのだった。そこから現れたのは――

「んげえ!? 姉……ガハッ!」

沢田家から出てきたのは獄寺の姉でありリボーンの愛人でもある女性、ビアンキだった。獄寺は彼女の顔を見た直後、口から泡を吹いて倒れてしまう。

「わーっ、ビアンキ! ゴーグル! ゴーグルつけて!」

「あら、隼人もいたのね。うっかりしてたわ」

ビアンキは何処から取り出したゴーグルを身につける。しかし一度ビアンキを直視してしまった獄寺は当然回復することは無いだろう。

◆
「沢山食べていつてね」

飛鳥、耀、黒ウサギの前にはツナの母である奈々お手製のスパゲティ・ボンゴレが置かれていた。リボン達が根回ししたことで奈々は『ツナが家光に連れられて世界中の工事現場を見て回っている』と伝えられているのだ。この三名についても旅先の友人と認識しているのだ。

ちなみに獄寺はソファで横になっていて、山本と了平は部活の練習を抜け出していたらしくすぐに学校の方へ戻っていった。

「あ、このアサリのパスタ美味しいわね」

「おかわり！」

「耀さん食べるのはやつ！ 人様の家なんですからもうちよつと遠慮した方が……」

「遠慮なんてしなくていいのよ。えつと、確か月野さんだったかしら。あなたもおかわりはどう？」

流石に黒ウサギと名乗るわけにもいかないので、彼女だけ『月野 兎』と偽名を使っている。何分即興で考えたものなので捻りとか期待してはいけないのだ。

(ツナさんはお母さん似なのですね)

もうすぐ帰ってくるんじゃないかしら」

「「ブフツ!!」」

飛鳥、耀、黒ウサギが同時にパスタを噴出した。

「ツ、ツつ君……」

「ちよ、飛鳥さん失礼ですよ」

飛鳥は笑いを堪えるのに必死で振るえている。それを必死で咎める黒ウサギだが、彼女も少し笑っていた。そして耀は「ツつ君……ツつ君……いいかも」と誰にも聞こえないくらい小さい声で呟いていた。

「か、母さん！ 友達の前でその呼び方は止めてって言ってるじゃん！」

「いいじゃない。可愛いわよ、ツつ君」

「だーかーらー！」

傍から見れば、意地を張っている息子を微笑みながら優しく接する母親。ただそれだけの事。

ほとんど家族と会う事が無かった飛鳥、母親が行方不明の耀、そして幼い頃に生みの親と離れ離れになった黒ウサギにとって、その光景はとても羨ましいものだった。



ところ変わって、行方を晦ましていた十六夜は一人で並盛を散策している。彼の知識の中に『並盛』という地名は存在しない。であれば、ただ忘れているだけ。もしくは十六夜の世界とツナの世界は別のものということになる。

『探せばカナリアファアミリーホームもあるかもしれないのでは?』という疑問が一瞬頭の中に浮かんだが、それをすぐに振り払った。

仮にあったとしてもそこに金糸雀がいるとは限らないし、仮にいたとしても彼にとつての金糸雀はもう死んだのだ。

「アホらし。望郷の念にでも駆られたか?」

何とはなしに歩いていたら目の前には学校があつた。校門には『公立並盛中学校』と表札が付けられている。よくある地元の公立校だ。

「学校か……」

別に懐かしくなつたというわけではない。ただ、高い所からであれば探し物もし易いと思つただけ。『この世界に存在する自分を楽しませる者』という探し物を。

特に躊躇うこともなく彼は並盛中の屋上へと跳んだ。

「さてと……ん? あれは鳥か?」

普通の鳥ではない。まるで鶏の雛のように黄色で丸っこくてフワフワしている。だ

というのにあの鳥は空を飛んでいるのだ。

「ミードーリタナービクラーナーミーモリーノー♪」

「へえ、歌う鳥とは中々洒落てるじゃねえか」

グリフォンやペリユドンのような幻獣を見た十六夜としては歌う鳥くらい珍しくも何ともない。特に構う必要もないと背を向けようとしたその時だった。

「——騒がしいな」

静かに、淡々と喋る声。

「その制服……君、並盛の生徒じゃないね」

その鋭い相貌は獲物を狙っている狼そのもの。そして彼が羽織っている学ラン。その袖にあるのは『風紀』と書かれた腕章。

「教えてあげるよ。僕の眠りを妨げるとどうなるかを……ね」

最強の問題児——逆廻十六夜。

最恐の風紀委員——雲雀恭弥。

出遭つてはいけない二人が今、出遭いを果たしてしまった。

正体不明と孤高の浮雲が激突するそうですよ？

「あの、ツナさん。聞くタイミングが掴めなくてモヤモヤしてたのですが、あのスーツを着た赤ちゃんは一体何者なんでしょうか？ 纏ってるオーラというか殺気というか……とても赤ちゃんのものには思えません」

「そうね。そこんところはつきりして欲しいわツっ君」

「うん。教えてツっ君」

「その呼び方止めてよ！」

ツナは先程からその呼び名で二人から弄られている。ちなみに黒ウサギはいたって真剣に聞いているのだが、ツナが恥ずかしがって話にならない。

「当たり前……前だ……」

ソファの向こう側から唸るような声が聞こえてくる。そこから這い上がるように顔を見せるのは先程ビアンキを直視してダウンした獄寺だった。

未だに顔を青くしているも、話が出来るくらいには回復したと見える。

「リボーン、さんは……世界……最強の、殺し屋……だ……」

「赤ちゃんが殺し屋ヒットマンって……」

「ちよつと信じられな……あれ、リボーン？」

「春日部さん？」

耀はその名前を何処かで聞いたような気がして己の記憶を掘り起こす。そう、ツナは自分がいじけていた頃にその名前を出していた。

(そういえばツナはその人のお陰で変わったって……)

「えつと、リボーンちゃんは何故ツナさんのところに？」

「そいつの家庭教師だからだぞ」

黒ウサギの疑問に答えたのは食後にエスプレッソを飲んでいたりリボーンだ。コーヒークップを置いたりリボーンは椅子から降りてツナの隣に立つ。

「家庭教師？」

「ああ、ツナを立派なマフィアにするためにオレはボンゴレ九代目から要請を受けたんだぞ」

「ちよ！ リボーン！」

「何せこいつは次期ボンゴレファミリーのボスだからな」

何の躊躇いも無く事情を明かしたりリボーンに対して動揺を隠せないツナ。彼からすればマフィア云々は知られたくない秘密の一つ。ヴァリアーとのリング争奪戦や継承式などを終えて、もう取り返しのないところまで着ているような気はするが、彼は

マファイアになるつもりなどさらさら無いのだ。

(どうしよう!? 最悪の形で秘密がバレた!)

ツナはおそろおそろ三名の様子を見た。

「ふーん」

「へえ……」

「は、はあ……とここでマファイアって何ですか?」

「あ、あれ? リアクション薄っ」

耀と飛鳥はマファイアという言葉の意味は知っているが、特に大きなリアクションは無い。黒ウサギは『マファイア』という概念が箱庭に存在しないので聞き慣れない言葉にどうリアクションを取っていいか分からないでいる。

「マファイアっていうのは箱庭でいうところのコミュニティが近いわね」

「なっ!? ということはツナさんはこの世界のコミュニティの次期リーダー!?」

「しかも現状ボンゴレに敵対出来るような勢力は少ない位規模がでけえぞ」

以前敵対してたシモンファミリーはもう同盟ファミリーとなつたし、同じく格式あるジツリヨネロファミリーとの仲は良好。新進気鋭のジェツソファミリーも、マーレリングが封印された今、ボンゴレと敵対するようなことは無いだろう。

「ツ、ツナさんってそんなに凄い人だったんですか……」

「いや……だから、オレはマフィアになんかならないって！」

「今更何言ってやがる。もう継承式も済ませたじゃねえか」

「あ、あれは山本を襲った犯人を誘き出すために仕方なく……」

この三人、というより「ノーネーム」にはそんなことでツナの見方を変えるような物はいないのだ。既に元魔王二人をメンバーに加えているのだからマフィアくらいでガタガタ言う方がおかしいだろう。しかしツナはそれに気がつかなかった。

『ママンただいま〜！』

『タダイマ〜！』

玄関の方から子ども二人分の声が聞こえてくる。そして帰ってきた二人は急ぎ足でリビングへと現れた。茶髪でふわりとした髪型で縦縞のマフラーを首に巻いた少年、フウ太。そしてラー○ンマンのような独特な髪型にチャイナ服を着たランボと同じくらの背丈の子ども、イーピンだ。

「ツナ兄！ 靴があつたからもしかしてと思つたけど、帰つてたんだ！」

「ツナサン、オカエリ！」

二人はツナが帰ってきたことに歓喜してツナへと抱きついた。ツナはそれを少し困りながらも受け止めたのだった。

「ツナ兄って、ツッ君は兄弟がいたのね」

「いつまで引つ張るつもり!？」

飛鳥はイーピンの変わった髪形を観察しながらもツナを弄り続けるのを止めない。

「ツナ兄、この人達は?」

「オレの新しい友達だよ」

フウ太もイーピンも三人にしっかりと会釈をした。ツナの周りにいるだけに精神年齢は見た目よりも高い。

「ガハハー! これでも喰らえー!」

ランボはバズーカを構えてエスプレッソを飲むリボーンに攻撃を仕掛けようとしている。ちなみにリボーンはランボを視界に入れてすらいない。

「ランボ、ソレ危ナイ! 振り回シチャダメ!」

「イーピン邪魔だもんね!」

「二人ともやめろつて! というかランボ、それ10年バズーカじゃ……」

ランボを止めようとするイーピン。だが、そのくらいで考え直すランボではなく、バズーカの奪い合いが始まってしまった。

「あ」

バズーカの取り合いでランボは謝ってスイッチを押してしまい、中の弾が発射されてしまった。

そしてその弾に当たってしまったのはバズーカを取り合っていた二人。

「いい、今のつて10年バズーカだよね？」

「ということとは……！」

煙と共に現れたのは二つの人影。

牛柄のシャツを少し肌蹴た伊達男と、中華コートを着て、頭を白い布で覆い、『楽々軒』と書かれた岡持ちを両手に持つ美少女がその場に座っていた。

「やれやれ、これから健康ランドにでも行こうとしてたんだがな……」

そう言いながらタオルと石鹸を手を持っているのは10年後のランボ。もうこの状況にも慣れていいのか、『またか』と半ば諦めたような風だ。

「……何処なの？ 早く届けないと川平のおじさん煩いのよね」

と困り顔で腕時計を見ているのは10年後のイーピン。口振りからして、どうやら出前の途中だったようだ。

「ちよつと待って、その牛柄シャツ男は何となくランボって分かるけど……その白い女の子は誰よ?!」

「そいつはイーピンだぞ」

「イーピンって女の子だったの!?!」

飛鳥はてつきりイーピンも男の子だと思っていたので驚きを隠せない。さつき見て

いたイーピンと10年後のイーピンに共通して見られる点が全く見られないのだから無理もない。

「え？ 気づいてなかったの？」

「寧ろ何で春日部さんは分かったの!？」

「匂い」

「ああ、そういうことね」

黒ウサギは10年後のランボを見て首を傾げている。

（おかしいですね。以前見た方はもつとがっしりしてて『俺、歴戦の戦士』って風な人だったのですが。一体どういう事なんでしょうか？）

黒ウサギは20年弾について知らないせいで10年後のランボと20年後のランボが同一人物だと勘違いしてしまっている。そのせいで首を傾げていたのだ。

「お嬢さん、オレが何か？」

「い、いえ。何でもありません」

そして、この騒動はまだまだ終わらなかった。

「リポーン。食後に私が作ったデザート……を……」

キッチンから出てきたピアンキはリポーンのために作っていたクレームブリュレ風ポイズンクッキングの皿を持ったまま固まった。その視線が捉えていたのは10年後

のランボ。

「あ、やばっ!」

「ロオオオオオメエエエエオオオオオ!!」

10年後のランボを見た途端にビアンキは悪鬼羅刹の如く怒り出す。10年後のランボもこれが初めてというわけではないので一目散に外へと逃げ出した。

「逃がさないわよロメオオオオオオオ!!」

その後を追うビアンキの両手には毒々しい色の料理を載せた皿がある。それは匂いを嗅いだだけで吐き気を催すような代物だ。

「よ、耀さん!」

耀は鼻を押さえて苦しみながらしゃがみ込んでいる。常人の何倍も鼻が効く彼女がビアンキのポイズンクッキングの匂いを嗅いでしまったのだから無理もない。ツナの場合は少し吸っただけで意識を持つていかれるのに対して、ギリギリとはいえ意識を保っているのは「生命の目録」による恩恵だろうか。

「あの、ビアンキさんは何故急に怒り出したんでしょうか?」

「あゝ10年後のランボは昔ビアンキが毒殺したロメオっていう名前の元彼にそっくりらしくて」

「ロメオが死ぬ前の二人の仲は最悪だったらしいぞ」

だからビアンキは10年後のランボを見るたびにロメオだと勘違いして襲い掛かるようになったのだ。そして既に二回程やられている。

「どうしよう！ このままじゃ川平のおじさんのラーメン伸びちゃう！」

「の……伸びるくらいなら……私が……」

「私に縋ったって知らないわよ！ 大体川平のおじさんって誰?! それと耀さん。今食べたら絶対戻すから止めときなさい！」

10年後のイーピンは飛鳥に助けを求めている、その傍では体調を崩しながらも岡持ちの中に入っているラーメンの匂いに反応している耀がいた。

(な、何なんですかこの世界は……? この箱庭に引けを取らないカオスな世界は一体……?)

この常識外れな出来事が次々起きるツナの世界に対して、黒ウサギは戦慄している。「ぶぎや!」

10年後のランボとビアンキが出て行ったと同時に聞こえて来た聞き覚えのある少年の声。ツナはもしかしてと思いながら玄関の方へと急いだ。

「炎真君！」

ツナの友人でありシモンファミリーのボス、古里炎真が二人に吹き飛ばされたせいで仰向けになって倒れていた。

「いてて、ツナ君……久しぶり、って今はそんな場合じゃなかった！」

炎真はやけに慌てているように見える。

「並中が危ないんだ！」



「ふうん」

「へえ」

雲雀と十六夜は出遭ってそうそうトンファーと拳を交えていた。勿論相手を一撃で倒すための力を込めて攻撃を放ったつもりであった。

その結果、互いに動じてはいない。

「その辺の不良とは違うようだね」

「ハハッ、いきなり当たりに出遭えるとは、こいつはラッキーだ」

二人は地を蹴った。

そこから始まるのはトンファーと拳のぶつかり合い。受けては殴り、受けては殴りの繰り返し。しかし雲雀のトンファーは死ぬ気の炎を纏っていない。十六夜の拳を受け止める毎にトンファーは破損していった。

数度打ち合つたその時、雲雀は破損したトンファーを捨てつつ、無表情で後ろへと大きく跳んだ。その眼が見据えるのは先程十六夜が蹴つた屋上の床。そこは凹み、罅が入っている。

「君を咬み殺す理由がもう一つ出来た」

何故ただの踏み込みで凹みや亀裂が入つたという疑問が浮かぶ前に雲雀は怒りに燃えた。

——この男は並盛の校舎を破損させた、と。

並中をこよなく愛する彼からすれば校舎の破壊は度し難い行為。雲雀は先程まで十六夜を『並中にズカズカと入り込んできたただの不良』と見ていたが、『校舎を壊した忌むべき相手』と認識を改めて自分の武器を使うことにしたのだ。

彼が取り出したのは新しいトンファーとツナのリングと同じく輝く石の前で『VON GOLLA』の文字が交差しているデザインのブレスレット。ツナのリングと違う点が石の色が紫である事と、ライオンではなくハリネズミの装飾が施されていることだ。

「これこそが雲雀のボンゴレギア、”雲のブレスレットVerX”。

「ロール」

「クピイーーーーッ!!」

ブレスレットから飛び出したのは彼の相棒である”

ホルコスピロー・ヌーヴォアラ
雲ハリネズミ”

のロールだ。

「カンビオ・フォルマ
形態変化」

雲雀の一声でロールは消え、彼の服装はまるで特攻服のような改造学ランへと変化する。その裾には「漂雲咬殺」の文字が書かれていた。手に持ったトンファーも紫色の装飾が施され、紫色の炎を纏った。

「ここからが雲雀の全力と見えよう。」

（あれはルイオスと同じ”雲の炎”か。だが、大きさも色合いも全然違げえな。別格と判断した方がいいか……それにあれはおそらくツナと同じVGか……ん？あいつ何か持ってるやがる）

雲雀はビー玉程の大きさの何かを指と指の間に挟んで構えている。

「これはどうかかな？」

雲雀は不敵に笑いながらそれを十六夜へと投げつけた。

「なっ!？」

十六夜が驚くのも無理はない。雲雀が投げつけたビー玉は見る見る内に膨張していき全体に鋭い針が付いた球体になっていったのだ。

「球針態」

「チツ」

球針態は雲雀が上手く操作しているのか、校舎を破壊せずに十六夜だけを追ってきて

いる。それに気が付いた十六夜は舌打ちしながら校庭へと跳んだ。常人であれば不可能であっても十六夜であればやってのける。

「逃がすつもりはないよ」

宙に跳んだ十六夜を追う四つの球針態。

「ハッ、——しやらくせえ!!」

四つの球針態、その全てが十六夜の拳によつて撃ち砕かれた。その破片を見ながら満足そうに笑う十六夜。彼もまた“箱庭”での戦いで成長していた。

「ワオ」

そしてそれを眺めて喜ぶのは雲雀。彼も十六夜と同じく強い相手との戦いを求めて止まない者の一人。

二人の戦闘狂による戦いは未だ終わりが見えない。



「雲雀さんが他校の不良と喧嘩!?!」

ツナ一行は炎真と共に並盛中へと足を急がせていた。ちなみに黒ウサギの本来のスピードであれば五秒もあれば並盛中に辿り着くのは容易いのだが、確実に目立つので彼

女も自粛している。耀もビアンキのポイズンクッキングの毒がまだ抜けていないのか調子が悪そうだ。

「うん。雲雀さんもどんどんヒートアップしちゃって、アーデルでも手が付けられなくなってるんだ。取りあえず風紀委員と肅清委員が生徒を避難させてるんだよ。今はジュリーの幻術でどうにか誤魔化してるけどいつまで持つか……」

炎真の言葉にツナは嫌な予感を感じ取った。雲雀と互角に戦う不良に思い当たる節があつたからである。彼は外れてくれと心の中で祈りながら炎真へと投げかけた。

「……ねえ。ちなみにその不良って金髪でヘッドバンドを付けてたりする？」
「ツナ君、何でその不良の特徴を知ってるの？」

（確実に十六夜君だー！ー！！）
（あんの問題児様はアアアアアア！！）

どうやら並中で暴れている不良というのは十六夜で間違い無さそうだ。黒ウサギは十六夜に首輪を付けておかなかつた事を心底後悔している。

「丁度いいじゃねえか」

「何が丁度いいんだよ！」

ツナの肩の上で楽をしているリボーンは現状を聞いて、特に焦りを見せていない。その上それを好機などと意味不明な事を言っている。

「箱庭での成果をオレに見せて見やがれ」

リボーンのペットであるレオンは粘土のように形状が変化して、一丁の自動式拳銃となった。

「お、お前まさか……!」

「いつペン死んで来い」

問題児三名は目の前で起こっていることが理解出来ない。リボーンが撃った弾丸は吸い込まれるようにツナの額へと当たり、そのまま仰向けに倒れた。

「え……?」

「な、にこれ……」

「……ツナ?」

普通であれば即死。しかしツナの身体の中身が外へ出たがるようにモゴモゴと動き出している。

「復活!!!^{リ・ボーン} 死ぬ気で喧嘩を止める!!」

まるで殻を破るかの如く現れたのは、荒々しい表情で死ぬ気の炎を額に灯した——パ
ンツ一丁のツナであった。

初日が終わりを告げるそうですよ？

死ぬ気になったツナはレースマシンのようなスピードで皆を置いて走っていった。消え行く背中を唾然とした表情で見ていた箱庭組の三名。それもその筈、突然ツナの脳天が撃ち抜かれたと思えば、パンツ一丁になって復活し、今まで見たことも無い荒々しい表情で走っていったのだからあっけに取られるだろう。

「な、なんだありや!？」

「へ、変態だー!!」

道行く人々の声など気にもかけずにツナは並盛中へ向かって走り続け、ついに到着した。校門前には風紀委員や肅清委員の者達が集まっている。

「うおおおおおおおおおつ!!」

ツナはその人ごみをその勢いのまま跳び越えた。

「並中提到!!」

並中の校庭に叫びながら着地するツナ。その険しい顔が見据えるのは互いにぶつかり合っている雲雀と十六夜だ。

校舎は、アーデルハイトの氷河の炎でコーティングすることであれ以上の損傷は負つ

ていないが、校庭の木々は倒れ、そこかしこに小さなクレーターが出来ている。あの二人が本気で喧嘩を行った結果がこれだ。

「沢田？」

「小動物？」

喧嘩中の二人も乱入者を前にその手が止まる。その顔は喧嘩に水を差されたことで、とても不機嫌極まりない。

「喧嘩両成敗!!」

ツナの目的は二人の喧嘩を止めること。

「邪魔だよ、小動物」

「言った筈だぜ？ 俺の喧嘩に手え出したらお前から潰すってな」

二人はツナへと標的を変えた。

雲雀はV Gで作り出した手錠をツナに投げつける。

「う!?!」

手錠はツナの両足首を拘束して動きを封じてしまう。そして雲の炎の特性である“増殖”によってツナを拘束する手錠がどんどん増えていき、身動きがとれなくなった。

そして迫るのは拳を構えた十六夜。

「ガッ!!」

ツナは十六夜の拳に対して、首を動かして頭突きを当てた。

「か、硬てえ……」

死ぬ気の炎を額に集中させたことで、十六夜の一撃を相殺することが出来たのだ。

「ならもう一発!!」

しかし、その一撃は何かによって阻まれた。十六夜の目の前にあるのは、骨を模したパーツで構成されたリングフレーム。その中央に透明な障壁が張られている。障壁は嵐の炎と雷の炎でコーティングされていて、破るのは容易ではない。

「こ、これは……?」

驚愕する十六夜の横を何者かが過ぎる。それはツナの動きを封じていた拘束具を瞬く間に斬り裂いて彼を解き放った。

「お待たせしました十代目!」

「助っ人とーじょーっ!」



「おもしれえことになってんな」

リボン達が並中に到着した頃には、既に戦いは始まっていた。意外なことに、雲雀

や十六夜と戦ってたのはツナだけでなかった。彼をサポートする二人、獄寺と山本の姿があったのだ。

山本は和服を身に纏い、両手には二本の刀を握っている。獄寺は体中にダイナマイトを帯びたベルトを装着し、パイプ型の発火装置を口に咥えている。

「山本さんと、ダウンしていた獄寺さんまで……!」

「獄寺のヤツ、先回りしてツナに駆けつけたな」

リボン達の下へ、リーゼント頭が特徴の老け顔の男が走ってきた。男の名前は草壁哲矢、並盛中学校風紀副委員長。こんな顔をしてはいるが一応中学生だ。

右肩を抑えながらヨロヨロと走る背が高く、長い黒髪を後ろに縛った女性がその後続く。彼女は肅清委員長にしてシモンファミリー氷河の守護者である鈴木アーデルハイト。

「リボンさん!」

「草壁か」

「アーデルも!」

リボン達が話し合っている間、飛鳥と耀と視点はアーデルハイトのとある一部分を凝視していた。——そう、胸部だ。

(で、でかい……!!)

大きさでは黒ウサギにも劣らないと見た。それに加えて黒ウサギクラスの太腿に、自分達と頭一つ違いそうな長身。

「ええ、薫は魔球の特訓で山籠り中、らうじは相撲部の遠征、SHITTYP!はネットシーを見に行くと言ったきり三日前から連絡が取れないし、紅葉も入れ違いで笹川了平とランニングに行っちゃって……」

「ち、ちよつといいかしら?」

飛鳥は意を決してアーデルハイトへと話し掛けた。

「? ここは関係者以外立ち入り禁止です」

「問題無えぞ、オレが連れて来たんだ」

見慣れぬ三名を追い出そうとするアーデルを止めたのはリボンだ。

「私は久遠飛鳥。それでこっちか友人の春日部耀よ。よろしく」

「至門中学三年、鈴木アーデルハイト。こちらこそよろしく」

現在よりも遙か未来に生まれた耀は勿論、戦後に行われた学制改革によって単線型教育の6・3・3・4制の学校体系への変更が行われたのを知る飛鳥も分かってしまった。

鈴木アーデルハイトは自分達と同年代であると。

「そ……んな……こんな、ことって……」

「か、勝てない……」

絶望に打ちひしがれる二人。特に飛鳥はそれなりにスタイルに自信があっただけにそれが粉々に砕かれてシヨックが大きい。

「何をやってるんですかお二方！　今は十六夜さんを止めることの方が先決です！」

「ツナ達ももうやってるじゃない」

「逆に邪魔になりそう」

「いやあの……それだと何故私達がここまで着たのかって話に……」

「観光」

「もうやだこの問題児様方……あら？　イーピンちゃん？」

もう5分経ったことでイーピンは元の子どもの姿に戻っている。そしてイーピンは校庭での戦いをじっと眺めていた。正確には雲雀の方をよく見ていた。

「イーピンちゃん。ここは危険ですよ」

イーピンが黒ウサギの方へ振り向く。

「あら？　髪に芋けんぴが……っと、取れましたよ」

一体どのような経緯があつてイーピンの髪に芋けんぴが引つ付いていたのかは不明だが、その芋けんぴをみたイーピンは顔を真っ赤にしている

——額に九筒が浮かび上がってしまった。

「このマークは？」

「イーピンの筒子時限超爆ピンズじげんちようばくのカウントダウンが始まっちゃまったみてえだな」

「……何ですかそれ？ 黒ウサギの直感がとてつもなくやばいと察知したのですが」

「イーピンは極度の恥ずかしがり屋だな。恥ずかしさが頂点に達すると九筒が現れてカウントダウンが始まるんだ。額の筒子が最後の一つになった時、全身からギョウザガスを一気に噴出させ爆発するんだ。その威力は小さいクレーターが出来るくらいなんだぞ」

「はあああああ!!?!」

「最近は使ってなかったからそれ以上の破壊力かもしれないねえな」

「知りたくなかった驚愕の新事実。ちなみに筒子時限超爆はマフィアの大技ランキング816技中38位という結構とんでもない技だったりする。」

八筒になったイーピンは黒ウサギの足にしがみ付いてしまった。

「ちなみに、カウントダウン状態のイーピンは恥ずかしさのあまり近くにいるヤツにしがみついてくるぞ」

「えええ!!?!」

とはいえ幼児の力だ。黒ウサギなら簡単に引き剥がすことが出来る。

額を見れば筒子は残り5つ。

「えと……えと……飛鳥さんパス！」

「はあ!? 私にパスされても困るわよ! 春日部さん!」

「え?!? ……鈴木さん」

「なっ!?! ……お願いジュリー!」

「あ、ちよ! オレ今それどころじゃねーっつーの!」

アーデルハイトはあろうことか現在進行形で並中を幻術で覆っているジュリーに投げつけてしまった。彼女も咄嗟の判断だったので投げた後で「しまった」という顔をしている。

「畜生! これでも喰らえ!」

ジュリーは半ばやけくそになりながら乱戦状態の校庭へとイーピンを投げつけた。

大 爆 発



「ひ、酷い目にあった……」

「全くツスね。ジュリーの野郎。今度会ったらただじゃおかねえ」

「ま、いいじゃねえか。夏祭りの時みたいで楽しかったしよ」

「つたく。こちとらまた不完全燃焼で終わっちゃまったぜ」

その後、雲雀は「白けた」と言い残してそのまま帰ってしまい。十六夜との喧嘩はそのままお流れ。結果的にあの騒動は終わったのだが、今度は校庭に出来た大穴を埋めるはめになり、総勢で土を運んでいた。その際に山本からジャージを借りたのでツナは裸ではない。

「いきなり死ぬ気弾を撃つのやめろよ！」

「死ぬ気弾？　死ぬ気丸とは違うのか？」

「死ぬ気丸よりリスクはでけえが、死ぬ気度は死ぬ気弾の方が上だぞ。……まあ、ツナに死ぬ気弾を撃つのがこれで最後になるかもしれねえと思うと少し寂しいかもな」

「え？　それってどういう——」

「ツナ。それで箱庭ってどういうところだ？　野球ドームとかあったか？」

「んなもんあるわけねーだろ！」

夕方になる頃にはそれも終わり、解散となったのであった。

「イタタ、まさかデイン無しで土仕事させられるとは思わなかったわ」

「……大体十六夜のせい」

「おいおい、俺のせいだよ」

「十六夜さんは少し大人しくしててくださいい！」

黒ウサギは大きな溜息をついた。だが、周りを見回してみると、皆の顔には笑顔が絶えない。普段あまり笑わない耀すら満面とはいかずとも薄つすらと微笑んでいる。大きな騒ぎではあつたものの、皆の距離を縮めるのに一役買ってくれたようだ。

(どんな未知の力ギフトを持っていようととも周囲が受け入れてくれる。そんな世界に十六夜さん達が生まれていたら、箱庭に來ることは無かつたのでしようね)

そこでふと疑問が浮かび上がる。

(では何故ツナさんは箱庭へと招かれたのでしょうか？ ツナさんには他三名と違って世界に帰る場所がある筈なのに……考えれば考える程分らない。ツナさんの先祖が英雄ジョットであることと何か関係が?)

黒ウサギを現実に戻したのは二人の知らない女性の声であつた。

「あ、ツナ君だ！ 久しぶりー！」

「お久しぶりです！ もう帰つてたんですか？」

一行の目の前に現れたショートヘアの少女、笹川京子にポニーテールの少女、三浦ハル。二人はツナ達に笑顔で手を振っている。

「京子ちゃん！ ハル！」

「ツナ君。ツナ君のお父さんと国際相撲大会に出場してたってお兄ちゃんから聞いてたけど、もう終わったの？」

（何か変な風に伝わってるー！！！）

ツナがその二人と話しているのを耀は他の人達と話しながらもチラチラと見ていた。今までツナが女性と話すのを何度か見ている耀であったが、あの二人、特に京子と話している時のツナの態度が違う。

（何だろう？ 胸が苦しい）

耀がツナを見ているのを、察知している者がいた。ツナと話しているハルである。

（はひつ、あの女の子からツナさんにラブな目線を感じます！ ライバル登場ですかー！!?）



箱庭組みの宿は、沢田家となった。飛鳥と耀は空き部屋の一部屋を共同で使うことになり、黒ウサギはビアンキと同室。そして十六夜は同じ男であるツナと同室となった。

「ヤハハ、宜しく頼むぜ」

「あ、あんまり部屋もの壊さないでね？」

「お前、俺を破壊神か何かと勘違いしてねえか？」

火龍誕生祭で豪快に建物を壊しておいて何を言うかと心の中でツツコミを入れたツナであった。

「にしても……何だ。期待を裏切らない世界だな、ここは」

敷いた布団に仰向け倒れこみながら十六夜は天井を見上げる。何の変哲も無い男部屋、だというのに十六夜は何の不満も抱かない。

「オレもそろそろ寝るか。……起こすんじゃねえぞ」

「そ、そうだ。さつき帰り道で言った『死ぬ気弾を撃つのはこれで最後』ってどういう意味だよ？」

リボーンは何も答えずにいつものパジャマに着替えてハンモックに倒れこむ。

「ツナ。お前はもう死ぬ気弾無しで死ぬ気になれるんじゃないかねえのか？」

問題児たちが雨と嵐の話を書くそうですよ？

翌日の朝、ツナは難しい顔をしながら皆と食卓についていた。

リポーンはあの後寝付いてしまい、言葉の真意も聞けないままだ。モヤモヤしながら寝つきも悪かったし、家に帰ってきたというのに相変わらず休まる事が無い。

そのリポーンはツナの苦悩を知ってか知らずか、呑気に眠気覚ましのエスプレッソを飲んでる。その隣ではビアンキがリポーンのトーストにバターを塗っていた。

十六夜は器に入った納豆をこれでもかというくらいかき混ぜている。その胸中にあるのはツナと同じくリポーンが放った言葉だ。

飛鳥と耀は昨日の出来事が忘れられないのか、牛乳を飲み続けている。ちなみにもう三杯目だ。しかし、牛乳に直接豊胸について作用する成分は含まれていない。所詮は気休めの領域を出ないのだ。

黒ウサギはその光景に若干引きながら、バターを塗ったトーストの上にスクランブルエッグをのせて齧っている。

いつもの面々に問題児達を加えた二日目が始まるうとしていた。



「時間がねえ。さっさと始めるぞ」

「いきなり何を始めるつもりだよ！」

ツナがリボーンに連れて来られたのは、かつて死ぬ気モードの特訓をした山。

「昨日オレが言った事を忘れたわけじゃねえだろ？」

「というか朝からどういう意味だって聞いてただろ!？」

「……というか、死ぬ気丸や死ぬ気弾無しでも死ぬ気にはなれるのか？」

疑問に思つて口を開いたのは、ツナの死ぬ気の特訓に興味を持つて付いて来た十六夜だ。

「当たり前だぞ。初代ボンゴレの頃には死ぬ気弾なんて存在してねえ。それに、死ぬ気弾や死ぬ気丸はドーピングじゃねえからな」

ジョットやツナの父親である家光も実際に死ぬ気弾や死ぬ気丸を使わずに死ぬ気モードになっている。それはツナもその眼で見してきたことだ。

とはいえ、ツナは自分がそんなことが出来るとは思えなかった。

「本当なら後一年間みっちり鍛えてからこの修行に入るつもりだったけどな」

リボーンがその考えを変えたのは、昨日見たツナの死ぬ気によるものか、それとも急

遽次の段階に進まなければならないという焦りか。

「でも、居られる時間があんまり……」

「ツナ、お前は虹の代理戦争で歴代のボンゴレの誰も到達することが出来なかった『死ぬ気の到達点』へと辿り着いた。今のお前なら死ぬ気弾が無くても死ぬ気になれる筈ぞ」

「……」

リボーンの言葉にツナは黙り込んだ。

（死ぬ気の到達点……死ぬ気にはまだ先があるって事か？面白れえじゃねえかよ）

人知れず笑みを浮かべる十六夜。口振りからしていつでも到達出来る境地ではないとある程度理解したが、いずれ見してみたい。そして願わくばどちらが上か競い合いたい。であるならツナにはこれくらいハードルを越えてもらわなければ困る。

「忘れたのか？ お前は自分の意思で死ぬ気になったことがある筈だぞ」

「え？」

リボーンが言ってるのは、未来での戦いで的事だ。白蘭は圧倒的な力でツナの技を破つていき、ツナは力尽きて死ぬ気モードが解けてしまった。だが、リングに刻まれた初代ファミリーの意思がボンゴレリングの真の力を解き放つたことで白蘭に勝つことが出来たのだ。

ツナはその際、死ぬ気弾や死ぬ気丸を使わずに再度死ぬ気モードになっている。

「あれは、ボンゴレイ世が力を貸してくれたから……」

「ボンゴレイ世がやったのはボンゴレリングの封印を解いただけだ。死ぬ気になったのはお前自身の覚悟によるものぞ」

リボーンは一度言葉を切った。その眼は一直線にツナを見つめている。

彼も以前にキャバッローネファミリーのボスであるディーノの家庭教師をしていた。彼も立派なマフィアのボスへ成長したが、ツナはそれ以上の可能性を秘めていると確信している。

「ツナ、お前はあの時何を思ったか思い出してみろ」

「あの時……？」

白蘭との実力の差は途方もなく大きかった。

怯えもあった。

ランチアから貰ったリングが守ってくれなければ死んでいたかもしれない。

「……嫌な事が沢山あったけど。それでも……無くてよかったものなんて何一つ無いって。皆がいたからオレは戦うことが出来たんだって。全部がオレの宝だって……！」

ツナの両手に嵌めた手袋はXグロブへと変化し、その額には綺麗なオレンジ色の炎が灯る。

「やれば出来るじゃねえか」

今までのように特別な修行は必要無かった。ただ、自分の意思で死ぬ気に、彼にとつての仲間を想う強い気持ちを引き出すことさえ出来れば良かったのだ。

「へえ」

死ぬ気弾や死ぬ気丸によって引き出されたものではない、純粋なツナ自身の死ぬ気モード。十六夜も素直に感心している。

「……つはあ」

ツナは息を吐いて死ぬ気モードから元に戻った。

「勝手に死ぬ気モードを解いてんじゃねえ。持続出来なきや意味ねーぞ」

「ぶげっ!？」

そんなツナに蹴りを入れるリポーン。いくら死ぬ気になれるからといって短時間で解けてしまったら意味が無いのだ。

「時間がねえ。今日一日使って特訓するぞ」

「ちよー!」

「お？ 面白そうだな。俺も手伝うぜ」

「十六夜君まで!？」

ツナの今日の予定は『丸一日特訓』に決まってしまったのだった。

◆
一方その頃、他の箱庭組みは獄寺と山本が案内していた。

現在は山本の父親が経営してゐる寿司屋「竹寿司」に来てゐる。

「ええつと、タマゴとイクラとマグロとエンガワとウニとタイとネギトロとホタテとサーモンと穴子と海老とはまちとかんぱちとイワシとタコとイカと赤貝とつぶ貝とシメサバとカツパ巻きと鉄火巻きとかんぴよう巻きとそれから……」

「ちよ、ちよつと耀さん。一応お金は貰つてますけどあまり無駄遣いは……」

今回、箱庭組みの四名はボンゴレの客人という扱いで、少なくとも額の滞在費を受け取つてゐる。十六夜、飛鳥、耀は無一文で箱庭に来ていたし、箱庭での通貨はこの世界では使えない。

とてもありがたい反面、勝手に押しかけて滞在費まで貰つてゐるので黒ウサギはとも申し訳ない気持ちになつてゐる。出来ることならそのままそっくり返したいと思つてゐるのだが、それは叶うことやら。

「おいおい嬢ちゃん。注文するのはいいんだけどよ。食べ切れるのかい？」

「大丈夫、これくらいなら前菜にもならない」

「そ、そうかい」

山本の父、山本剛は心配そうな顔をしているが、耀はどうということはないと豪語。アンダーウッドでの彼女の食べっぷりを見なければ誰だつてこの質問をするだろう。

「私は……白身魚で何かオススメはあるかしら？」

「あ、ああ。コハダの生きのいいが入ってるぜ」

「じゃあそれと、シメサバをお願いするわ」

飛鳥は名家の生まれということもあり、寿司を食べる順番にも拘りがあるようだ。

「あいよ。そっちの嬢ちゃんは何にする？」

「あゝその……かんぴよう巻きとカツパ巻きをお願いします」

黒ウサギは生まれてこのかた魚肉を生のまま食べたことが無く、また無駄遣いするわけにもいかないために安いのを適当に注文したのだった。

……………

……………

……………

「ふう、美味しかった」

「お寿司なんて久しぶりに食べたわね」

（お、お寿司って結構お高いんですね……）

黒ウサギは財布の中身の減り具合に愕然としていた。飛鳥はそうでもなかったが、やはり耀の食べる量がもの凄いい。店主が息子の友人だからという理由でまけてくれたものの、貰った額の3分の1くらいが吹っ飛んだ。

「次は何処案内すつかな〜？」

「案内つっても並盛に観光名所みたいなものねえからな……」

(いやあの、初日のだけで結構お腹いっぱいなんですけど!!)

並盛は住んでいる人々のキャラが濃い。しかし並盛自体にはそれ程見て回る場所は多くなかったりする。所謂『何も無いが有る』というやつだ。

「そういえば……」と獄寺と山本を見た耀が言葉を漏らす。

「二人はどういう経緯でツナと友達になったの？」

アンダーウツドに行く前、ツナは自分で『昔は友達がいなかった』と言っていた。だからどういった経緯があつてツナと縁が無さそうな二人が友人になったのか気になったのだ。

「……オレは元々、十代目を倒すために日本ジャポーンに来た」

「え？ そうだったのか？」

「……何で山本君が驚くのかしら？」

「勿論、次期十代目候補として相応しくなけりや殺つちまうとも思ったがな」

「さ、殺伐としてますね……」

獄寺の言葉に皆、思い思いの感想を述べる。

当時の獄寺は東洋人とのクォーターであることなどの理由で、どこかのファミリーにも迎えられない一匹狼だったのだから、今よりも荒れていた。

「だが、十代目はそんなどうしようもないオレを温かく迎え入れてくれた。オレは救われたんだ。その時、オレはこう思ったんだ。「この方の右腕になつて生涯支え続けよう」つてな」

獄寺の言葉、一語一句に強い力が籠っている。

「次はオレか。オレは、ツナに命を救われたんだ」

「命を救われた？ どういうこと？」

「オレさ、野球をやつてただけだよ。スランプになつちまつて。スランプを脱出しようとして我武者羅に練習してたら今度は腕を怪我しちまつた」

そのことについてツナは自分が無責任なことを言つたと後悔していたが、山本は自分のミスだと笑つて許していた。

「それで、何かもうどうでもよくなつて……自殺しようとも思つたんだ」

「今の野球バカっぷりを見ると、とてもそうは思えねえな」

「まつ、今思えばオレらしくも無かつたな。……それで、オレを止めに来たツナにも八つ

当たり前みたいなこと言っちゃまって、なのにツナはオレを自分の身を呈して助けてくれたんだ」

「ふ〜ん」

飛鳥は、この二人がただの友人という括りでは到底考えられない信頼の強さを感じ取った。この二人はツナにとって親友であり信頼の置ける仲間でもあるのだ。

「むっ？ お前たちか」

フード付きのジャージを着てランニングしている笹川了平が一行の前で立ち止まる。

「ども、笹川先輩」

「何か用か芝生」

「あ、そうだ。笹川君はどうやってツナと知り合ったのかしら？」

飛鳥はこれ幸いにと了平にもツナと友人になった経緯を聞こうとした

「沢田とはパオパオ老師のお導きの下、ボクシングで極限に語り合った!!」

「……それだけ？」

「そうだ!!」

「ほ、他に何か無いんでしようか……？」

「無い！ 強いて言えばボクシング部に勧誘しているな！」

彼らしいと言えば彼らしい。直球で極限なものいいだった。

◆

ツナが死ぬ気モードを持続させる訓練は昼過ぎまでぶっ続けで行われていた。リボーンや十六夜との組手を中心に行っていて、ツナは疲労困憊状態になっている。特に十六夜は昨日の雲雀の件でフラストレーションが溜まっていたこともあつてかなり容赦が無い。

時間がないだけに特訓も厳しい。

「んぐっ……ふはあー！」

ツナは休憩時間に持ってきたスポーツドリンクで渴きを癒して大きく息を吐く。その隣で十六夜はスカツとした気分で汗を拭いていた。

「腹減ったな」

「リボーンが何か買ってくるって言ってたけど……」

休憩時間中にリボーンは山を降りて適当に何か持ってくると言っていた。つまりそれまでは自由行動という事になる。

——ふと、ツナは何かの気配を感じた。

（何だ？）

ほんの僅か。しかし確実にツナと十六夜へ向けたもの。
十六夜もそれを勘で察知したのか、警戒を強める。

「そっ、っ！」

ツナの目線の先——大岩の上には何も無い。しかし先程の気配は確かにあの大きから放たれたものだ。考えられるとすれば骸クラスの幻術使いが術を使って姿を消しているのか。

「……僅かに気配を洩らしただけで気づいたか」

声の主は突如としてその姿を現した。

ボサボサで灰色に近い白髪、度が合っているのか分からない小さな丸眼鏡、抹茶色の和服、右手の中指に嵌められたミミズを束ねたような霧属性のリング。

(何モンだ……？ 冴えない格好だが、ここまで近づいて沢田が気づけないってのは相当だぜ……というか何でラーメン食ってんだ？)

「……チエツカーフェイス」

「久しぶりだね、沢田綱吉君。虹の代理戦争以来か」

彼はその手に持ったラーメンを啜る。

チエツカーフェイス。未来では川平と名乗っていた男。その手に持つ気配セニヨのヘルリ
ングで真・六弔花のザク口をあつさりと欺いた。

その正体は7・^{トウリニセツテ}を管理している人物で、大昔からその時代の最強の7人を選出し、アルコバレーノにすることでおしやぶりに炎を灯し続けてきた。

しかしヴァミューダ達におしやぶりに炎を灯し続ける役目を引き継いでリボーン達アルコバレーノの呪いを解いてから消息を絶っていた。

「何故今更になって私が現れたか疑問に思っているようだね？」^{ヴァインディチエ} 復讐者におしやぶりを

託したとはいえ、私が7・^{トウリニセツテ}を管理する者であることに変わりはない。その一角に何か異常があれば確認くらいはするさ」

暇だからね、と力が抜けるような言葉を最後に付け足してチェッカーフェイスはツナを見る。異常というのはツナがボンゴレリングを持った状態でこの世界から姿を消したことを言っているのだろう。

「しかし、これも運命か。かつてジヨット君が行った箱庭に君が呼ばれるとは……」
「ちよ、ちよつと待って！」

初代ボンゴレ・ジヨットが箱庭に行ったことを知るのはリボーンと、ボンゴレでも一部の人間のみ。それにチェッカーフェイスの妙な言い方も気になる。

「何で……」

「何故知っているか？ 知っているも何も、^{ジヨット}彼を箱庭に行かせたのは私だからね」

問題児たちが未知と遭遇するそうですよ？

「チエツカーフェイスがI世を箱庭に送った!？」

「……」

チエツカーフェイスが二人に告げた内容にツナは驚きを隠せないでいる。

十六夜も声こそ上げてはいないが、内心では驚愕していた。

「ど、どうしてそんなことを!？」

「君は虹の代理戦争で私が言った7トゥリニセツテの成り立ちについて覚えているかな？」

7トゥリニセツテ・は元々、ボンゴリング・マーレリング・おしやぶりのようなものではなく、7つの石の珠であった。

しかしチエツカーフェイスの一族が一人、また一人とこの世を去り、とうとう5人だけになってしまった。残った人数では7トゥリニセツテを機能させることが出来ないと7つの石を分割しておしやぶりを作り出した。そしてそのおしやぶりの炎を灯し続けるためにアルコバレーノが誕生した。

「つてことは、リボーンとかいう赤ん坊が着けてた黄色のおしやぶりが……?」

「いや、確かにリボーン君もアルコバレーノだったが、今は違う」

「だったらそのおしやぶりは今何処に——」

「今はその話は関係の無いことだ」

むくれる十六夜を尻目にチエツカーフェイスは話を続ける。

だが、更にチエツカーフェイスの一族は減り、とうとう彼自身とユニの先祖、セピラの二人だけとなった。二人ではとても残りの石を制御することが出来ないと、今度は石を削り出し、後にボンゴレリング・マーレリングとなるリングを7つずつ作った。

「そしてマーレリングはセピラの家族が、ボンゴレリングは沢田綱吉君の先祖であるジョット君の家族が管理することになった。だが……」

ここまでは以前聞いた内容と合致している。ここからがあの時語られなかった新たな内容なのだ。ツナは理解した。

「正直に言えば、私には不安があった。セピラが選んだとはいえあの若い青年にボンゴレリングを任せて良いものかと。今思えば彼女と袂を分かった原因の一つかもしれないね」

悪しき者の手にリングが渡れば、世界のバランスの崩壊に繋がる。事実、白蘭は^{トウリニセツテ}7を悪用して世界の覇者になろうとしていた。

「私の不安が原因か、それともリングの意志かは定かではないが、ジョット君に大空属性のボンゴレリングを渡した時、彼はボンゴレリングが課した試練を受ける事となったの

だよ。君にもボンゴレリングにまつわる試練には覚えがあるだろう？」
ヴァリアーとのリング争奪戦。

ボンゴレの覚悟を受け継ぐ試練。

アルコバレーノの試練。

初代ボンゴレファミリーの認定試験。

思いついただけでも4つもある。

「おいおい、つまり初代ボンゴレにとつての試練が箱庭行きつてわけか？」

トウリニセツテ
「7・に認められるにはそれ相応の力を見せなければ駄目だということだよ」

未来の世界で消耗しきっていたツナが白蘭を追い詰めることが出来る程の力を秘めたボンゴレリング。特に大空のボンゴレリングはボンゴレの血筋以外が使おうとすれば、かつてのXANXUSと同じようにリングに拒絶される。

この仕組みは、ジョットがボンゴレリングに対して力を示して認められたからこそ生まれたものだった。

「……死んだらどうするつもりだったんだ？」

十六夜はチェッカーフェイスを睨みつける。

自分達は箱庭に呼ばれた後、すぐに“ノーネーム”という居場所があった。しかし、ジョットがもし自分達のように誰かに見つかることも無く、そのまま野垂れ死ぬという

可能性も高かった筈。

「その時はその時だ。また新しい適合者を探すだけだよ」

「そんな……」

白夜叉は以前、ジョットが行き倒れているのを拾ったと言っている。もし白夜叉に拾われていなければジョットは十六夜が考えていたようにそのまま死に、その子孫である家光やツナも生まれることは無かったことになる。

「既にアルコバレーノとなった多くの人間が犠牲になっている。今更一人二人の犠牲者を恐れて7・^{トウリニセツテ}の機能を停止するわけにもいかないのだよ」

「アルコバレーノが、犠牲？」

「十六夜君。アルコバレーノは、次の代に交代する時におしやぶりを抜かれて……死ぬんだ」

話についていけない十六夜にツナはアルコバレーノの結末を語った。

アルコバレーノはおしやぶりに死ぬ気の炎を灯し続けるための人柱であり、その役目を終えたアルコバレーノは死ぬ。仮に生き残ったとしても復讐者達ヴインディチエのようなゾンビ状態イ・プレシエル・テイ・セツテになってしまう。

「今は沢田綱吉君の提案やバミューダの協力のおかげで、選ばれし7人イ・プレシエル・テイ・セツテを決める必要も無くなったがね。では話を戻そうか。ジョット君は箱庭で大手コミュニティの幹部

に拾われて力をつけていき、数年後に私が迎に行つた頃にはボンゴレリングに相応しい人物へと成長していたよ」

チエツカーフェイスはここで一度話を区切つてスープを飲み干す。

「だが、彼はボンゴレリングに秘められた強大な力をその身を持つて知つたのだ。その力を心悪しき者に利用されないたため、そして己の後を継ぐ歴代ボス達の選定をより厳格にするために、彼はボンゴレリングの真の力を封印して二つに分けたのだ」

これがジョットがボンゴレリングを得た真相であつた。

(白夜叉さん……)

白夜叉はボンゴレリングの導きによつてジョットと出会う事が出来た。そしてそのボンゴレリングによつてジョットと別れることになつた。

そう考えるとツナは居た堪れない気持ちになる。

十六夜はこの地球と箱庭を行き来することが出来るチエツカーフェイスとは一体何者なのか。それが気になつて仕方が無い。白夜叉や蛟魔王と同格。下手をすればそれ以上の力を秘めているかもしれない。

「おい、チエツカーフェイスとかいつたか？ お前は何者だ？」

「生粋の地球人だよ。最も、普通の地球人とは違うが。私としては地球人としての容量キャパシティを遙かに超えている君の方こそ本当に人間かと疑いたくなるよ」

「生憎、生まれも育ちも地球だよ」

チエツカーフェイスは残っていたネギを口に入れて、十六夜はニヤリと笑った。

「なあ、ただ話すだけじゃつまんねえだろ！ ちよつと俺と遊んでいかねえか！」

（チエツカーフェイスに喧嘩売ってる……！！）

強者との戦闘を欲している彼らしいといえれば彼らしいのかもしれない。

「私は君のように戦闘狂というわけでもないのね。話も終わった。私はそろそろお暇させてもらうよ」

「あ、コラ！ 待ちやがれ！」

十六夜は岩の上に座っているチエツカーフェイスに跳びかかった。しかしその手は空を切って終わる。チエツカーフェイスの姿は煙のように消え去り、気配も無くなってしまった。

「あー！ チクショウ！」

十六夜は本気で悔しそうであつたとき。

「……っーか腹減った」



ところ変わって観光組。

ランニングの最中だった了平を加えた一行は、特に目的も無くその辺を歩いていた。

「……ふと気になったことがあるのだが、聞いていいか？」

了平が問いかけるのは箱庭組の三名。

「なんででしょうか？」

「何故チーム名が”名無し”ノーネームなのだ？ 名前が無ければつけられればいいではないか」

「ええ？」

了平の問いに対して黒ウサギが微妙な顔をして困った。彼は何かを勘違いしている。

”コミユニティ”を”チーム”と言っている時点で色々勘違いしているのは間違いないだろう。

「あー、名前はちゃんとあったのですが……魔王とのギフトゲームで旗印ごと奪われてしまいました」

「なら新しく作れば……」

「了平さん、旗印やコミユニティ名はそう簡単につけたり出来るものではないのですよ。

コミユニティにとつてそれは誇りと同じ、奪われたから新しいものを作るなんて考えは恥知らずもいところですよ」

「む……すまん」

黒ウサギの『誇り』という言葉に了平は自分の考えが間違っていたと気づく。彼にもボクサーや晴れの守護者としての誇りがあり、それは掛替えの無いものだ。

「そういえば聞いてなかったのだけど、私達のコミュニテイの元々の名前って何だったのかしら？」

「……私達のコミュニテイ本来の名前は、”アルカディア”。旗印には日の昇る丘と少女が描かれています」

黒ウサギがしみじみと語る自分達を取り戻さなければならぬコミュニテイの象徴。

「アルカディア——理想郷の代名詞か」

「日の昇る丘……中々悪くないわね。早く実物を見てみたいものだわ」

「旗印を奪った魔王の手掛かりはまだ——ッ!？」

耀は余所見をしていたせいか、歩行者達の中にいた男性とぶつかって尻餅をついてしまった。

「耀さん！」

「チツ、ちゃんと前見て歩きやがれバーロー」

「ちよつと！ レディを突き飛ばしておいてその言い草は何!？」

突き飛ばされた耀に文句を言いながら立ち去ろうとする男に対して、怒りを覚えた飛鳥は当然のように食って掛かる。

獄寺、山本、了平の三名はその男達を見てギョつとした。

「てめえら、何でここにいやがる……」

「ハハン。ボンゴレ嵐の守護者、我々がここにすることがそれ程意外ですか？」

女性と見間違えてしまいそうなくらい美しい男性——桔梗。

「あ？ 良く見りゃボンゴレ守護者達じゃねえか！」

ボサボサの髪と粗暴な口調の男性——ザクロ。

「本当だゝつてここ並盛だし別に遭遇してもおかしくないか」

腰まで伸びた水色の長髪が特徴の少女——ブルーベル。

かつてツナ達を未来で苦しめた真・六弔花リアルの面々が立っていたのだ。

ボンゴレ守護者三名と真・六弔花三名は睨み合うような形で対立する。

「何者ですか？」

「ミルフィオーレの真・六弔花だ」

「真・六弔花つていうとあの修羅開匣の？」

獄寺の言葉で、ツナの話聞いていた箱庭組もすぐさま理解した。現在、ミルフィオーレとは敵対しているわけではない。だが、気を許せるような相手というわけでもない。

「む、見慣れない顔がいますね。白蘭様が言っていた”箱庭”というものが関係してい

るのでしょうか？」

「んなこと話す必要……」

「そうよ。私達三名は箱庭から来たわ」

「テメツ！ 何で態々……」

「私は必要も無いのに正体を隠してコソコソするのは好きじゃないのよ」

真・六甲花の纏っている異質な空気を前にしても、臆さずにどうどうとした態度を取る飛鳥。

立ち上がった耀も自分を突き飛ばしたザクロを睨む。

「あん？ 何だその目は？ 喧嘩なら買うぜバーロー」

「にゆく生意気！ 頭蓋骨ひん剥くぞ！」

その二人に対して好戦的な態度を取るザクロとブルーベル。二人の指に嵌めたリングには死ぬ気の炎が灯っている。マーレリングの本来の能力は未来のユニによって封印されたものの、強力なリングであることに変わりはない。

「……ふう、よしなさい二人とも。白蘭様から勝手な私闘は禁じられてる筈です。それに今から喧嘩をしていたら白蘭様との待ち合わせの時間に間に合いませんよ」

臨戦態勢になった二人をヤレヤレといった態度で宥めるのはリーダーの桔梗だった。

「小娘二人を灰にするのに五秒も掛からねえぜバーロー！」

「彼女達はおそらくボンゴレの客人扱いでしょう。なら彼女達を襲えば守護者達も黙ってはいません。——でしよう?」

桔梗の目線の先にはダイナマイトを持つ獄寺、時雨金時を構える山本、ファイティングポーズをしている了平がいる。

「ケツ」

「にゅ、つまんないの」

二人は渋々とリングの炎を消した。

(やっぱミルフィオーレの奴等は油断ならねえ)

獄寺は未来の出来事を思い出して苦い顔をする。代理戦争で同盟で共に戦ったものの、白蘭率いるミルフィオーレは信用できない。いつまた敵として現れても不思議ではない集団だ。

「待って」

立ち去ろうとした真・六弔花三名を引き止める一人の声。その主は耀のものだった。

「何か?」

「真・六弔花は修羅開匣で匣アニマルの力を引き出せるって聞いた。それについて聞きたいことがある」

「ハハン、ボンゴレ側の人間にミルフィオーレの機密を話すほど、我々もお人好しではあ

りませんよ」

「違う、そうじゃない。……怖いって思わなかったの？」

「怖い？」

「修羅開匣で自分の身体が怪物になること……それは怖くないの？」

耀が生命の目録の真の力を知って、まるでツナの言っていた修羅開匣と似ていると思つた。アンダーウッドでは仲間のためにとその力を引き出すことが出来た。しかし、今でも自分がいずれ向き合わなければならぬであろう合成獣キメラになることへの恐怖を拭いたわけではない。

「ハハン、何かと思えばそんな事ですか」

桔梗は耀の言葉を鼻で笑っていた。

「そんな……事？」

「バーロー。力に怯えて力が使えないなんてド三流のやることだぜ」

「ダツサーイ。覚悟が足りてないんじゃない？」

ザクロとブルーベルも耀を笑っている。耀には笑われた事への苛立ちよりも、自分の疑問をさもおかしなものだと言われたことに戸惑っている。

「我々は白蘭様から人間離れした覚悟を買われ、そして我々の力を買って下さった白蘭様に忠誠を誓いました。白蘭様のためなら化け物になるくらいどうという事はありま

せん」

そう言つて真・六甲花はその場から去つて行つた。

「覚悟……か」

耀は首に掛けてある生命の目録を見て眩いた。

自分はブルーベルが言つていたようにまだ覚悟が足りていなかったのかもしれない。生命の目録と向き合うにしてもまだ先のことだと鷹を括つていたのかもしれない。グライアはこれを狙つてまた目の前に現れるだろう。

(強くなりたい)

彼女は心の中で強く願つた。

「……………ふう」

真・六甲花が去つて行つて黒ウサギは安堵の息を吐いた。飛鳥も強がつてはいてもかいた汗の量までは誤魔化せなかつた。

「黒ウサギ、あいつらは箱庭でいえばどれくらい?」

「修羅開匣での力の底上げが未知数なので正確には測れませんが、魔王を別として考えますと……おそらく五桁くらいでは相手にならないかもしれないかもしれません」

五桁だと、ルイオスの”ペルセウス”やサンドラの”サラマンドラ”、そしてペストの”グリムグリモワール・ハーメルン”がそれに該当する。

「思ってたよりヤバイ連中ね」

「マーレリングが封印されてるから前程じゃないだろうが、今オレ達が戦っても確実に勝てる相手じゃねえだろうな」

「リ、リボーンさん!？」

「ちやおっす」

ひよっこり現れてたのはツナと特訓していた筈のリボーンだった。意外な登場人物を前にして獄寺は驚きの声を上げる。

「ツナとの特訓はもういいのか？」

「ああ、思ってたよりも早く終わってな。全員揃ってるなら丁度いいだろ」

「丁度いい?」

黒ウサギは何故かその言葉に悪寒がした。まるで白夜叉が自分に着せるために作らせたやたらと露出度の高い服が完成した時と同じ気分だ。

「ボンゴレ式交流会を始めるぞ」